

# 鱗割れた夢

島ハブ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初代を舞台に、サカキ様が暗躍するところからレッド様に敗北するまでをゆっくり描  
いていくつもりです。

オリキヤラ、独自解釈、オリジナル設定が多数あります。

文体はハードボイルド系でポケモンっぽくないかもしれません。エセ北方です。

作中に進駐軍、同盟軍という単語が出てきますがこれは小説版ポケットモンスターに  
あるらしい設定をサカキ様の動機付けとして改変・転用したもので、実在の組織や作者

の思想等とは一切関係ありません。

目

次

第12話 第11話 第10話 第9話 第8話 第7話 第6話 第5話 第4話 第3話 第2話 第1話

167 148 132 118 103 87 70 55 44 29 16 1

蛇足 蛇足 蛇足 最終話 第21話 第20話 第19話 第18話 第17話 第16話 第15話 第14話 第13話

一年後 二週間後 二時間後

379 371 363 344 326 311 293 278 261 247 226 201 186

# 第1話

思慮深い、と思われていることが多いった。

目の前に座っている記者も、サカキのことを思慮深いと形容していた。ジムリーダー対四天王。つい先日行われたエキシビジョンマッチについての取材だった。

カンナとシバが二人ずつ、キクコが三人のジムリーダーを倒し、疲れ果てたキクコをサカキが一蹴した。

ワタルとサカキの対峙は二時間の長丁場となり、互いに最後の一本を繰り出す激戦の末にワタルが制した。

「世間じや、あれをチャンピオンの勝利とは思つてませんよ。キクコ氏との短い勝負。

あの僅かな消耗が、勝敗を別けたと、そう言われています」

記者の言葉に、サカキは微笑んで見せた。記者が頭を搔いた。  
「オーキドキクコ時代はオーキドの引退に幕を閉じ、ワタルサカキ時代は真っ当な直接対決なし。カントーのファンは不幸だと思いませんか？」

「チャンピオンと真っ当な勝負をするのはポケモンリーグを勝ち抜いたものだけです  
よ」

「勝つておられる。サカキさんの殿堂入りの表彰状は今でもセキエイに飾られています。しかしその時、ワタル氏はまだ無名の少年だった。そしてサカキさんは、チャンピオン就任を拒否された」

「故郷でなにかをしたくてね。幸い、トキワジムのジムリーダーが引退を公表していた  
「今から、というのは?」

「さて、今さらチャンピオンロードを抜ける体力が残っているかな」「これだよ。弱つたな。実は、編集長から刺激的なコメントを取つてこいと言われましてね」

「そういうのはワタル君に頼むんですな」

ワタルは、どこか挑発的なチャンピオンだと言われていた。実際にそういう振る舞いもしている。本来はもつと物静かな青年であることを知つてているのは、四天王とジムリーダー以外にほぼほぼいない。ワタル自身が、挑戦者を刺激するようなチャンピオン像を作ろうとしているのだ。

「別の記者が行きましたよ。会場など作るな、だそうです」

「先の試合は、途中から屋外競技場に場所を移しましたからね。まあ、地面とドラゴンの

試合を屋内でやろうと言ふのが土台無理な話だ」

「主催はウチのスポンサーですよ。あの物言いを記事にするのはちょっとね」

「じゃ、諦めるんですね」

「普段思慮深いサカキさんから、大きな発言が出てくる。そういうものの方が面白いんですけどね。どうです？ なにか、野望のようなものはお持ちでは？」

同席していた秘書の目が、一瞬揺れた。そのことに、サカキは気付かない振りをした。

「野望、ですか。ないこともないな」

「それはどんな？」

「トキワの、いや、カントーのトレーナーを世界最強に育て上げることですよ」

ジムリーダーとしては、模範的な解答だった。記者も苦笑いしている。秘書の表情だけが固い。サカキが本当のこと語つたと、理解しているからだ。

現在のトレーナー情勢についてしばらく雑談を交わして、記者は帰つていった。それなりに真っ当な記者なので、発言を誇張されたりすることもないだろう。

「コーヒーを淹れてくれないか。それと、午後の予定を」

「十三時に、挑戦者が来ることになっています。三名。ジムトレーナーを突破できそうな実力者はいません。しかし」

「勝負に絶対はない。私はここで、挑戦者を待つこととしよう」

「よろしくお願ひします。十六時に、ニビの博物館で仕事が一つ。新しく発掘された化石周辺の地層について、サカキ様の見解を訊きたいとのことで、博物館に足を運んでいただくことになります」

「オツキミ山のものか」

「詳細な研究はタマムシ大学から調査チームが来ることになつてているようです。サカキ様のコメントはあくまで館内の展示物としてのものだと」

「わかつた。精々、一般受けしそうなコメントを書くこととするよ」

「その後はしばらくフリーになつています。二十一時に、ポケモン協会のトキワ支部長と会食。トキワの未来についてということで、ジムトレーナーを何人か伴つていただくことになります」

「漠然とした話だ」

「協会本部から配分された資金を消費しつつ、実績を作ろうということでしょう」

「人選は任せる。たらふく食う人間を選んでくれ」

「昼食は抜くよう伝えておきます」

「コーヒーが差し出された。ブラツクだ。コーヒーなど本来は砂糖を入れて飲むものだと思うが、一度この味を覚えると、舌というより脳がこれを求めてしまう。口をつける。苦味が通り抜けた後は、頭の中がすつきりとしたような感覚になる。今

後もきっと、ブラツクを飲み続けるだろう。

「タマムシに行く」

人選を終え戻ってきた秘書に、サカキはそう言つた。彼女は僅かに周囲を気にする素振りを見せた。このムツキという秘書は、どこか神経質なところがあつた。神経質であり、鈍感なのだ。

ジム周辺ぐらいの範囲までならば、サカキは気配を読みきることができた。そのぐらいのことができなければチャンピオンロードを安全に抜けることはできないし、ハナダの洞窟などに行けば死ぬしかなくなる。殿堂入り後の一ヶ月を、サカキはハナダの洞窟で過ごした。地獄の特訓だつたが、今思うと余計なものに煩わされることもない甘美な時間だった氣もする。

「二ビの後になります。ピジョットを用意します」

「ガラルという国では航空網が発展しているらしいな。カントー、いや、この国全体であいうものを整備しなければならん」

「クチバが許さないでしよう」

ムツキが目を伏せた。

戦争に負けたのだつた。サカキの生まれるずっと前で、オーキドやキクコでも、まだ幼いと言われるぐらいの頃だ。

進駐軍が、クチバに入った。国内最大の港であるクチバは言つてしまえば口のようないもので、食事をするにも息を吸うにも進駐軍の顔色を伺わなければならないということだ。生殺与奪を握られているという意識は国民の多くに恐怖と反感を植え付けた。激しい抵抗運動が起こり、武力決起も視野にいれた活動すら進んでいた気配だった。

進駐軍も硬軟織り混ぜた対応を取り、懐柔を図った。最終的に繋がりを同盟に変え、いくつかの強硬な権利を手放すことで進駐軍は同盟軍となり、カントーに溶け込んでいくこととなる。それでもその影響力は大きく、国内の自由な航空網というのも、ムツキの言うとおり同盟軍からの承認が出ないことで難航していた。今、『そらをとぶ』の権利を持つ権利者と技マシンは全て協会に把握され、そのデータは同盟軍にも流れているようだ。無許可での『そらをとぶ』使用やその技マシン保持は固く禁じられていて、違反者の捕縛の権利は警察だけではなく同盟軍も持っている。外国の軍隊がカントーの人間を問答無用に拘束する権利を持つていても、馬鹿げた話だった。そんな有り様であるから、最盛期ほどの勢いはなくとも、いや、勢いのない分、反同盟軍の活動は地下で活発に動いているようだ。

サカキの父も、活動家の一人だつた。サカキが地面タイプを使い始めたのは父の影響だが、父が地面タイプを使い始めたのは、当時クチバの進駐軍の中核となっていたのが電気タイプのトレーナーだつたことに依るものが大きいようだつた。電力を用いて最

新銃機器や航空機などを動かし、ポケモンと連携するのが進駐軍のスタイルだった。ある。マチスなどは、その進駐軍の氣つ風が産み出したトレーナーと言えた。

「クチバカ。忌々しいものだ」

「サカキ様、そのようなことは」

「わかっている。あまり、口にはすまい。私は活動家ではないのだからな」

父は、活動家として大きな仕事をした。クチバ近郊にあつた小さな洞窟を拡げ、それからデイグダが住みやすいような環境に整備していった。かなりの時間をかけてだ。同盟軍が気付いた時には、二番道路まで開通したこの洞窟はデイグダの穴として一般に認知され、民間事業者なども活用する場となっていた。例えその成り立ちが同盟軍中核部隊との戦闘を見据えた、アンチ電気タイプとしての拠点作りであろうと、簡単に取り潰すことはできなくなつたのだ。

そして、父は死んだ。オツキミ山へ登山中に滑落したとのことで、遺体さえも帰つてこなかつた。捜索隊にはなぜか、ニビの救助隊だけではなく同盟軍の部隊も派遣されていた。まだ幼かつたサカキの手にチョコレートを一つ置いていつた軍人の表情を、サカキは忘れたことがない。

「とにかく、ピジョットは用意します。一度タマムシ大学の携帯獣学の学部棟へ顔を出してください。手の者がおります。トキワの出身です」

「わかつた。地元の若者に目を掛けていて、度々タマムシに足を運ぶ。そのついでにゲームセンターにでも寄つてくる。これでいいな?」

「しばらくは。新しい理由も、準備しておきます」

「愛人がいる、というのが楽な気もするがな」

「それなりに容姿が整つていなければ説得力がありません。そして、秘密を守れることも」

「君はどうだ、ムツキ君?」

サカキがからかうと、ムツキは顔を伏せた。僅かに見える頬は染まっている。

「サカキ様に愛人となりますと、その、マスコミの目を引きますので」

「そうだな。それに君には補佐をして貰わなければならない」

冷めたコーヒーを呷り、サカキは立ち上がった。

「どちらへ?」

「トレーニングだ。午後から挑戦者が来るのだろう?」

「はあ。サカキ様のお手を煩わせることはない、と思いますが」

「私はトレーナーなのだよ。来る、来ない、強い、弱い。そんなことは関係なく、勝負の前には昂つてしまう。トレーナーとはそういうものだ」

「今後は、影武者などを用意してジムを任せることもあるかと思います」

「その時はその時で構わん。今私の頭にあるのは、目の前のことだけでね」

偽りではなかつた。挑戦者の手持ちを、それに対する選択を、読みを外した際の対応を、サカキは頭に思い浮かべては消した。思考は固めず、かといって無策にはならない。ボールが震え、ニドキングの昂りが手のひらに伝わつた。

ジムリーダーという役職も、ロケット団総帥という立場も、今だけは忘れていた。



フミツキは、一つ息を吐いた。ゲームコーナー地下。アジトのトレーニング場である。

普段は、喫茶店でバイトをしている。

学生ということにしてあつた。実際、籍は残してある。タマムシ大学とは比べるもの鳥游がましいような専門学校だが、就職には太いパイプがある。ありがちな進路といつていいだろう。

秀才と言われてきた。ニビシティ東部の村の一つに生まれて、十歳頃までは敗北を知

らずに過ごした。ニビに出ると流石に負けたが、埋められないほどの差ではなかつた。はつきりと壁を感じたのはタケシだ。試合自体は勝つたが、それはジムチャレンジャーとジムリーダーだつたからである。

自分が長じても、彼に勝つような才能はない。そう悟つた。あるいは、そう悟つてしまうことこそが、才能の無さだつたのかもしれない。

バトルを専門とする学校は見ずに、就職率だけを考えてタマムシに出てきた。ロケット団と出会つたのはその頃だ。

汗を拭う。

「よろしく」

対面に立つた団員がズバットを繰り出してきた。フミツキの相棒はサンドパンである。相性は微妙だが、ポケモン自体の強さはこちらが上だ。

飛行タイプを仕留めるには、焦らないことだつた。機動戦には応じず、近寄つて来るのを待つ。特に、視覚に難を抱えるズバットは、動かない相手との戦闘が苦痛な筈だつた。

「『ちようおんぱ』

『まるくなる』

温い応酬だつた。自分がズバット側なら、リスクを冒してでも攻め込んだだろう。持

久力に欠けるズバットが『ちようおんぱ』などを飛ばしているのは、いかにも悠長だつた。その悠長さに付き合わざるを得ないのが、今の自分の力量であり才能だ。

『まるくなる』を幾度か繰り返してからは、特に指示も出さなかつた。相手の焦りがはつきりと伝わつてくる。ズバットの高度が下がつてきていた。今攻めかければ、押しきることもできるかも知れない。それでも、フミツキは待つた。

周囲が騒がしかつた。フミツキの試合運びは、同僚からも冷ややかな目で見られていた。陰口を叩かれたことも一度や二度ではない。臆病者、凡人。その通りだ、という思いしかなかつた。模擬戦の勝率は良い。それがまた、陰口を加速させているようだ。

『つばさでうつ』

「サンドパン、伏せて」

ズバットの翼が空を切つた。低い位置への降下は、ズバットには恐怖でしかないだろう。目が見えない上に足も発達していないのだ。よほどトレーナーとの信頼関係が出来上がつていなければ、地に伏せたサンドパンを打つことはできない。

相手が声を荒げて、再び『つばさでうつ』を指示した。先ほどよりは高度が下がつたが、やはりサンドパンに当たるほどではない。

『つばさでうつ』。もつと低くだ

怒鳴りながら、相手が細かい指示を出し始めた。ズバットが少しでも浮かび上がる度

に、怒声が飛ぶ。フミツキは意識を集中させた。ズバット。向かつてくる。唾を飲み込んだ。待つ。相手の怒声が、なんとかズバットの高度を抑えていた。サンドパンは伏せたままだ。もうしばらくだけ、耐えて。心の中で呟いた。

交錯する。不意に周囲が湧き、怒声も途切れた。ズバットの拳動が不安定になる。全て、フミツキの意識の外だつた。一瞬の機。

『きりさく』

サンドパンが跳ね上がつた。交錯したズバットが地に落ち、瀕死状態の特徴である躰の縮小を始めた。そこまで見届けて、周囲が静まり返つていてことに気付いた。

「何をやつている。ボスの前だぞ」

「ボス？」

トレーニング場の入口に、一人の男が立つていた。黒のハットにロングコート、それから仮面。襟元には、品の良い白のシャツが見えている。フミツキも、遠目に幾度か見たことのある、ロケット団総帥の姿だつた。

対戦していた相手は、直立でボスに向ついていた。最後にズバットへの怒声が途切れたのは、ボスへ挨拶することを優先したかららしい。遅れて、フミツキも頭を下げた。「なぜ、試合を止めなかつた？」

低い声だつた。

「君の相手はすぐに私に気付き、指示を中断した。君はなにも気付かずにズバットを切り裂いたな。トレーナーからの指示の途切れたズバットをだ」

「あの、すみません。試合の方に集中していくて」

「集中?なぜだね」

「えっと、サンドパン対ズバットは飛行と地面ですから、その、近付くことが難しくて、機会は僅かしかないと」

「なるほど。しかし私の見るところ、君のサンドパンにはまだ余力がある。次を待つても良かつたのではないか?」

「必要ならば、待ちます。ただ、無駄に待つことはしません」

口にしてから、何か失礼な物言いのような気がしたが、どうしようもなかつた。

「ふむ」

ボスが近付いてくる。大きな男だ、と思った。体格ではなく、存在感のようなものの話だ。圧倒されている自分を、フミツキは自覚した。厳重に顔を隠しているのも納得できた。一度見たら忘れられないタイプの人間だ。

「君は、正しい」

「え?」

「戦いの中で集中を切ることは死を意味する。自分が死ぬのならばそれも良いだろう。

しかし、戦っているのはポケモンだ。傷を負うのもな

ボスがズバットを見て、それから対戦相手に顔を向けた。呆けたような表情をしていた相手が、大慌てでズバットをボールに戻した。

「良いサンドパンだ」

「え？」

「ズバットが頭上を飛び回つても、決して頭を上げなかつた。君の指示で初めて、勇ましく飛び上がつた」

「昔から、よく私の言うことを聞いてくれます」

「信頼しているからだ。そして君も信頼に応えた。決して、勝負から目を離すことはしなかつた」

「気付かなかつただけです」

「名は？」

「フミツキと言います」

「視野は、広く持ちなさい。そして、最後の最後まで勝負を見続けなさい。例え私が入つてきたとしてもだ。私が、それを許す」

「はい」

「励みなさい、フミツキ君」

軽く肩を叩かれた。なにか、どうしようもないほど熱い物が触れたような気分に、フミツキはなつた。

タケシと戦つてから、ずっと冷めていた。ロケット団というヤクザ紛いの団体に飛び込んだのも、順風な進路を進んでいる自分がいる日突然つまらないものに思えたからだ。しかし飛び込んだ先で出会つたのは、冷めた自分にすら勝てず、陰口を叩くような連中だつた。

胸の中が熱かつた。経験はないが、あるいは恋というものはこんな感じなのかもしない。

最後の最後まで勝負を見続けなさい。呟いてみた。なにか、締め付けられるような気分に襲われて、訳もわからずフミツキはサンドパンを抱き締めた。

## 第2話

ノートを捲る。前のページは、余白すらないほどに書き込んでいて、サカキ以外の人間では読むことも困難だろう。構わなかつた。どの道、他人が読むことなどないのだ。

内容はジムトレーナーについてである。手持ちはもちろん、選出の傾向や交換のタイミング、指示の方向性、ボールを投げる際のコントロールと肩の力まで、バトルに関わる全てのことを網羅していた。僅かな変化がある度に、書き足している。

書き始めた当初は一冊のノートに全員の情報を書き込んでいたが、ほんの数年で一人一冊の状態になつた。サカキの着任時からいる古参に至つては三冊目も埋まる勢いだ。他のジムがこういう記録を取つているのかは知らない。やるべきだと思つたから、やつていいだけだ。

ふと思ひ付いて、一冊のノートを開いた。先ほどまで、ポケモン協会のトキワ支部長と机を囲んでいた。そこに同席していた一人のノートである。

料理は、流石に豪勢だつた。油ものが多くサカキはあまり箸をつけなかつたが、若い

ジムトレーナー達は搔き込むように食べていた。一人だけ、サカキと同じように食が進んでいない若者がいた。

パートナーのサイホーンのために、持つて帰つてやりたいんです。尋ねたサカキに、彼はそう答えた。

トキワ支部長は乗り気ではなかつた。余り物を包んで貰うなど意地汚い。その言葉に、サカキはかつとした。

ポケモンに旨い物を食わせてやりたい。トレーナーならば持つて当然の感情で、意地汚いことなどある筈がない。怒鳴りつけるのをこらえながら、サカキはそう言つた。

結局、いくつかの使い捨て容器に包んで貰うことになつた。当たり前のことをしたつもりだつたがジムトレーナー達はそうは思わなかつたようだ。特に、サイホーンの彼はいたく感動したようで、しきりに頭を下げていた。

ノートに、ポケモンを思いやれる者、と書き込んだ。その文字はサカキの胸に、気持ちのいい若者を見た晴れやかな想いと、微かな自嘲を同時に呼び起こした。良心が咎める、というのではない。真面目腐つた顔でこんな文言を書き綴れる自分が、滑稽なだけだ。

ポケモンを友とする、ポケモントレーナーのサカキと、道具や商品として扱うロケット団総帥のサカキ。二つの貌は、特に矛盾することなく同居していた。人間など、そん

なものだろう。

「入つてもよろしいでしようか？」

サカキが返答すると、ムツキが入つてきた。手には書類の束を抱えている。

夜分遅いが、サカキとムツキの間に色めいた事情はなかつた。ただ、ジムに出入りする人間の中には邪推する者もいる。殊更に否定もしていない。男と女というのは、根拠や過程を必要としない便利な方便だつた。

「ヤマブキからです。例の観測データの」

「三回目だな。結果は？」

「数値上はどれも上昇しています。ただ、やはり読み解ける者がおりません」

「まあ、わかつていたことだ」

差し出された資料にサカキは目を通した。可視化された状態にあるので、変動自体はサカキでも易く読み取れる。

「エスペータイプのポケモンの波長に符号する、と言った研究者がいるようです。ただし、数値の規模から懷疑的な見方をされているとのことです。前例がないと」

「ほう。抱き込んである研究者かね？」

「いえ、純粹なシルフカンパニー勤務の者です」

「気質は？」

「研究が第一でしょう」

「よし。こちら側に取り込むよう指示を。ロケット団とは無関係にな」「グループ内で孤立させるよう命じておきます。その後に引き込めば、あくまで研究グループを移つただけ、という格好を作れます」

「余計な情報は与えなくていい。ハナダの洞窟の観測データだけを渡しておくことだ。根っからの研究者ならば、それで事足りる」

再び資料に目を落としたサカキに、ムツキがおずおずと声をかけた。

「サカキ様、それでこのデータは、その、一体何のデータなのか尋ねても？」

「これかね。そうだな。神、のようなものさ」

「神、ですか？」

「並外れたエネルギーを神と称するならば、だがね」

「それほどに」

「もつとも、悲しい神だ。人の業に生まれている」

「サカキ様はどこでそれを？」

「殿堂入りをした直後に、ハナダの洞窟に入つた。そこで戦つたよ。なんとか退けたが、あそこで死んでいてもなんの不思議もなかつたな。いや、今生きている自分こそ不思議という気さえしてくる」

ミュウツー。その名は、父の書斎の隠し床にあつた手帳で知った。武力決起を目指した活動家達が目をつけ、詳細な調査をしたようだが、肝心のハナダの洞窟に入れるような力量を持つた者がいなかつた。

「とにかく、解析を進めるしかない。一つだけ当てがあるが、協力を得られるかは疑問だな」

「お聞きしてよろしいですか？ 必要と判断したら、私の方で手配します」

「いいだろう。シオンタウンのフジという老人だ。元々は研究者で、その神を造りだしたもの戦時中の彼らだ。今となつては、唯一の生き残りだな」

領いて、ムツキが手帳を開いた。とにかくメモを取る、というところがある。勿論、直接の名称は避け、いくつかの符丁を用いて読み解くタイプの暗号になつてゐる。

「タマムシはどうでしたか？」

一段落したらしいムツキが顔を上げた。

「資金ルートは、今のところ安全だろう。馬鹿馬鹿しいカラクリで、遊技場の経営者が一儲けしている、という形はできている」

ポケモンの売買は違法だが、譲渡については大して拘束力もない条例があるだけだつた。ある程度の年齢に達した子供にポケモンを譲渡して旅立たせるというのは、ほどんど文化となつてゐる。その文化と上手く折り合いをつけられなかつたために、有名無実

の条例だけで済ませたのだ。杜撰な仕事というべきで、穴はいくらでもあつた。

ゲームコーナーの隣に老婆が住んでいる。年老いて面倒を見切れなくなつたポケモンの引き取り手を探していく、たまたま通りがかつた青年にポケモンを譲渡する。青年は感激して、お礼の気持ちとして何らかの品物を置いて去る。

譲渡されるのがやたらと希少なポケモンで、置いていかれる品物がゲームコーナーのコインであることを除けば、ありがちな話といつていい。

「同種の遊技場を作ろうという動きもあるようです」

「タマムシならば潰せ。ヤマブキもだ。それ以外の場所ならば放置でいい」

「クチバは？」

「あそこでやる度胸があるなら支援してやつてもいい」

「同盟軍お膝元では阿漕なことはできませんね」

「やるだけならば簡単だ。ただ、揉めた時の收拾がつかない。鼻薬も効かないとあってはな」

ゲームコーナーの利益は莫大だつた。おしほりや花束などとは桁が違うのだ。しかも、曲がりなりにも正業としてそれができる。

ただ、そこで得た資金を口ケット団に動かすことには苦労した。今は、クチバに一つカラクリを仕掛けてある。ゲームコーナーの資金は一度クチバを通ることで、まったく

新しい金として口ケット団の手元に入るようになつていた。

いつかは、手繰られるだろう。その時はゲームコーナーを完全に切り離していく、とサカキは思つていた。資金があるに越したことはないが、金稼ぎを主眼にこんなことをやつている訳ではないのだ。

「ああ、そういえば、一つ拾い物があつた。フミツキというトレーナーだが、知つているかね？」

「彼女ですか。昨年に入団した者ですね。少々変わつた経歴をしていたので覚えております」

「経歴？」

「ニビの郊外に生まれています。幼少期から頭角を現し、将来について期待されていたようです。実際にニビの少年大会では複数回の優勝歴があります」

「華々しいことだ。それで？」

「十四歳で旅に出て、一度の挑戦でニビジムを破つています。続くハナダジムでは、タiap的に不利なサンドパンのみで突破したことで、ローカル誌に取り上げられたりもしたようです」

「その頃ならば、カスミ君のジムリーダー初年度か。大したものだ。彼女は、手加減が下手なのだがな」

「当然、電気タイプのジムであるクチバジムは易く突破するものと思われていました。しかし、クチバに挑戦することなく、彼女は地元に帰っています。それ以降は、そこそこ優秀な学生として暮らしていましたようです。正直なところ、トレーナーとしての力量がどれほどなのか私には読みきれませんでした。模擬戦の成績が優秀だという報告は受けていますが」

「優秀か。そうだろうな」

「拾い物、ということはやはり才が?」

「いや、ない」

「ない?」

「全く、ではない。部分的には人に先んずることもあるだろう。特に観察眼は、人よりも優れている。それだけに、哀れでもあるが」

タケシやカスミと戦つたというのならば、その力量をおおよそ理解できてしまつただろう。きわどく勝つ、あるいはきわどく負ける。ジムリーダーは、役職としてそういうことをするが、本来の能力は一般人とは隔絶したものがある。フミツキは、その本来の能力まで見通してしまつたに違いない。

オカサカは、サカキの見る限りなかつた。遺漏は、まつたくない試合運びだつた。それだけに、サカキが入ってきたことにすら気付かない異常さが際立つ。

『きりさく』のタイミング。あれほど優位な状況なら、二、三の意識配分でも捉えられた筈だ。彼女は、意識の全てをそこに注いでいた。才は、そういうところに現れる。

勘違いであつてくれ、と望んだことも一度や二度ではない。しかし、サカキが才がないと見た者で、トレーナーとして大成した人間はいなかつた。

「ハナダジムまで突破したのは、恐らく意地だろう。彼女の絶望はニビから始まっているはずだ」

「そういうのですか。しかし、拾い物だと」

「君も、トレーナーとして優秀ではあるまい。彼女も似たようなものだ」

ロケット団にいるうち、トレーナーとしての才に溢れている者が何人いるか。多くは、多少の得手不得手を抱えた凡人だ。そしてフミツキは、とりわけ優れた、凡人である。

「ハナダの洞窟の観測は続けなければならん。陽動の一つや二つは必要だろう」

「いくつか、事件を起こす計画をしています。警察が動かざるを得ず、かといって殊更遺恨の残らないもの。例えば、盗みとかを」

「もう一つだ。オツキミ山で一暴れさせる。名目は化石の収集でよからう。多少問題になるぐらい横暴にさせて、機を見て引けばいい」

「その機を見る役をフミツキに？」

「状況を、よく読む。その能力だけは私も感嘆するほどだ」

「わかりました。ハナダの桟橋の団員にも、観測の用意をさせます」

ムツキの言葉に、サカキは笑った。桟橋の名称はとかく女性受けが悪い。あれを恥ずかしげもなく口にするのは、カスミぐらいのものだろう。

何を笑われたのかは、ムツキにもはつきり伝わったようだつた。むつりとしたまま、顔を上げずに書類に没頭し始めた。

夜が更けていた。早朝にトレーニングをしよう、とサカキは考えていた。その時間だけ、サカキは煩わしい物事から解放される。あらゆるものを些事と思えるようになる。甘美というには程遠く、花の露でも吸つてているような僅かな時間だが、欠かせるものではなかつた。

仕方のないことだ。自分自身で、こんな道を選んだ。義侠心や道徳ではなく、ある種の狂気とともにだ。

サカキも書類に目を落とした。ゲームコーナーの支配人から、サファリゾーンのポケモンをもつと、という要望が出ている。幾度か検討したが、キョウの目を搔い潜れないという結論を動かしようがなかつた。サファリゾーンの密猟者に目を光らせるのが、キョウの仕事の一つでもある。実力はジムリーダーの中でもサカキの次に頭一つ抜けっていて、サファリゾーンのことさえなれば四天王になつていてもおかしくはなかつ

た。

書類には、カイロスやラツキー、ケンタロスを取り扱った時の利益予想まで、根拠やグラフとともに載せてある。思わず、検討したくなるような数字ではあった。実現は不可能と思つていても、サカキはしばらくその夢想に熱中した。

不意に、顔を上げた。気配。深夜に差し掛かつたジムの入り口に、誰かの気配が近付いてくる。やがて、インターホンが鳴った。

「誰でしよう、こんな夜更けに」

「私が出よう」

「いえ、サカキ様はそのままで。こちらの書類は、サカキ様でなければ判断できないものです」

「やれやれ、うんざりとしてくるな。大丈夫かね？」

「いざとなつたら声をあげます」

気配は一つで、不審な動きもなかつた。ムツキが応対している間、サカキは再びサファリゾーンの資料に向き合つた。やはり、防備に穴はない。正攻法の検討もしてみたが、サファリボールの捕獲率と、一度の入場に掛かる費用はどうしてもプラスに転じさせようがなかつた。ゲームコーナーのミニリュウは、全て竜の穴産である。気配が動いた。やがて、ムツキがサカキの部屋へと戻ってきた。

「子供でしたわ。どうも、ジムに挑戦する順番を知らなかつたようで」

ムツキが呆れたように言つた。そのどこかに、サカキは違和感を覚えた。

「バッジを賭けなくともいい、と言つていましたが

「野良でのバトルということか」

「そういうものは受け付けていないと教えたら、しぶしぶ帰つていきました」

「随分と時間がかかつたな」

「口下手というか、無口な少年でした。暗がりで姿もよく見えなくつて。赤い帽子と連

れているヒトカゲの尻尾だけが、やたらと明るかつた」

「熱意のある若者か。顔ぐらいは見てもよかつたかな」

「本当に、子供ですよ」

それきり、ムツキは資料に向かい始めた。サカキもまたサファリゾーンの資料を見ながら、しかし先ほどのようにのめり込めずにいた。

氣配が鋭かつたのだ。唐突に、サカキは違和感の正体に思い当たつた。鋭い気配で、バッジの二、三個は持つている実力者が来たと思つたのだ。挑戦の順番を知らないということは、まだバッジを持つていらないということである。

惜しいことをしたかもしれない。才あるトレーナーならば、引き入れてもよかつたし、それが叶わぬなら潰しておくのもありだつた。

しかし、気配はもう遠く過ぎ去っていた。もう一度書類に目を落とす。目を通すべきものはいくらでもあった。やがてサカキは、少年のことを忘れた。

### 第3話

ノックをすると、入室を促された。ゲームコーナーの店長とアルバイト、という風になりすましているが、ロケット団の実態はヤクザのようなものだ。気軽にドアを開ける訳にもいかない。

組織の実態ということについて、フミツキはあまり興味がなかつた。つまらない人生から脱出できるならなんでもよかつたのだ。そして今は別の理由から、組織について気にしなくなつた。最後まで勝負を見続けなさい。ボスの言葉を思い出しては、胸を熱くする。自分でも不思議なほどだ。カリスマ、というべきなのだろうか。あのボスがいるのなら、組織の実態などなんでもいい。

「来たな。喫茶店のバイトの方はいいのか？」

「大丈夫です、本部長」

「本部長はやめろ。ここはゲームコーナーだ。支配人でいい」

「失礼しました、支配人」

「呼び出してすまんが、少し待つてくれ。飲み物は好きに取つていいぞ」

支配人が、机の資料に視線を落とすのに釣られて、フミツキもちょっと目を向けた。呼び出された理由に関係するのなら気になるが、だからといって覗き込むほど軽率ではない。ボスの側近、という意味では秘書の女性がナンバーツーといつていいが、組織としての位置付けではこの支配人こそがナンバーツーである。機密書類なども当然扱っているだろう。

だが、フミツキの目線に気付いた支配人は、気安く書類をはためかせた。

「気になるか？」

「いいんですか？」

「大して重要な書類じやない。正確に言えば、重要になり損ねたつてところかな。却下されてな」

軽く流し見る。ケンタロスという名前が見えた辺りで、大体のことは察せた。サファリゾーンのポケモンを取り扱いたいというのは、支配人がよく言っていることだ。

「ま、頭じやわかつてるんだが、どうしても惜しくてな。挙げてみるだけは意見を挙げたつてとこだ」

「やっぱり無理ですよね、キヨウの腕前は四天王級だと言いますし。力づくではどうに

もできない」

「本当にどうにもできないなら惜しくもなんともないさ。やりようがあるからこそもどかしいんだ」

「キヨウを相手に、やりよう、ですか？」

「ボスにご出陣願うことになるがな。まあ、無理だ。ボスを今表に出す訳にはいかん」「ボスはそれほどに？」

「そういえば、お前が入ったのは去年だつたか。三年前の山吹組との抗争は知らんのだがな」

「二ユースで見たくらいです。三年前なら私はまだニビにいましたから」

「指揮は俺が執つていたんだが、一進一退だつた。ただ、ヤマブキに長年巢食つていた山吹組と新興のウチじや体力が段違いだつたんだ。負け戦だつた。それをあつさり覆したのがボスさ」

「確か、一晩で終わつたんですね」

「警察なんざハイエナみたいなもので、どつちかが負けるのを遠巻きに待つっていた。だからあの時、ボスは自由に動けた。奇襲作戦だが、俺達は包囲してるので良かつたよ。ボスが、喫茶店にでも立ち寄るように山吹組の本部に入つて行つて、出てきた時にはすべて終わつていた」

俄かには信じ難い話だつた。ヤマブキはカントー最大の都市で、そこを本拠地にしている山吹組の構成員は直系だけでも百は下らないだろう。その百人が、それぞれ別で部下を率いていて、カントー全土でどれほどの人数がいるのかは計り知れない。その本部に一人で襲撃をかけるなど、あり得るのだろうか。

しかし、三年前に山吹組壊滅のニュースが世間を賑わせたのも事実だつた。逮捕者の数も尋常ではなかつた記憶がある。

「半信半疑、という面だな」

「そんなことは」

「いいのさ。情報は、自分で選べ。聞いたことをそのまま受け取るような奴は好きじやない」

「山吹組の規模を考えると、少し」

「それでいい。ボスの戦いを見たこともない奴なら信じられなくて当然なんだ」

支配人はゲームコーナーについての書類を脇にどけると、茶封筒から別の書類を取り出した。開きつつ、セーラムに火を点けていた。メンソールの匂いが室内に広がつた。支配人はキュウコンを相棒としているが、煙草に火を点ける時は必ずライターを使う。ポケモンに火を点けさせようとする団員がいると、激しく怒鳴りつけるので、喫煙者全員がライターを持つようになった。

「ゲームコーナーの収益は絶大だが、いざれは目を付けられる。別の手段を講じておく必要がある。それも、いくつもだ。わかるな?」

「はい」

「それに、口ケット団の存在感が世間から消えても困る。自称口ケット団が下らない悪さをしてるだけの状態は避けたい」

「最近は多いそうですね」

「厳しく取り締まろうという気はないからな。俺達は正義の味方じやない。連中が暴れてこちらから目が逸れるなら大歓迎さ」

「ただ、チンピラの集団とは思われたくない、と」

「話が速いじやないか」

茶封筒ごと、書類を渡される。

「化石ですか。オツキミ山ですね」

「小金稼ぎだがな」

オツキミ山での化石採集は禁止されていない。あくまで、個人の範疇ならばだ。集団で動けばニビの自警団が出動することになるし、口ケット団だと知られれば警察も動き出すだろう。ニビ自警団の実働部隊トップは、あのタケシである。勝負にすらならないことは、誰よりも自分自身がよく知っている。ただ、支配人が相当の手練れだという話

も聞いていた。

「化石採集の部隊に参加すればいいんですか？」

「惜しいな。お前は、指揮さ」

「え？」

「戦闘要員十名、発掘運搬要員二十名、計三十名。アジトから好きに選抜して連れていけ。ハナダ近郊で待機、こちらからの指示が届き次第オツキミ山に突入し作戦行動を開始しろ。突入からハナダへの撤退までは全てお前の裁量でこなせ。作戦前後に關してはハナダの団員が受け持つ」

「冗談ですよね？」

「大真面目さ。俺はここに残つて通常業務と中継点を務める」

「そんな馬鹿な」

「書類の下までよく読め」

言られて、目を走らせた。簡素な書類である。下部には、作戦の総責任者として支配人の名前があり、現場指揮としてフミツキの名があつた。最下部には、円に鱗割れが走つたような印が捺してある。見間違える訳はない。ボスの印だ。

「ボスが、私を？」

「理由はボスにしかわからん。ただ、人の能力を見抜くということについてボスが間違

えた記憶はほぼないな

多幸感に似たものが、フミツキを襲つた。自分でも戸惑うほどで、フミツキは必死にタケシとの試合を思い出そうとした。圧倒的な才の隔たり。その壁を感じながら、機械的にジムリーダーを打ち倒す自分と抗わないタケシ。不甲斐なささえも、どこへ吐き出すこともできない絶望。今でも、寸分違わずに思い出せる。しかし、多幸感は消えなかつた。逆に、過去の影が光を際立たせるかのように、それは顕著になつていく。

なぜなのか。ボスに認められたからか。一人の上司に認められただけで舞い上がるほどに、承認欲求は肥大していたのか。あるいは、ボスのカリスマが自分を誑かしたのか。

想いは方々に伸びては消え、そして、たつた一つだけが残つた。自分の為すべきことだ。

「支配人。質問しても？」

「いくらでも」

「誰でも、と仰られましたが、階級の高い方は」

「俺以外なら好きにしろ。例え副支配人を連れていつたとしても、指揮はお前だ。好きに使え」

「オツキミ山周辺の、現在の情勢は？」

「悪いが、それはハナダで訊いてくれ。ただ、ニビの自警団には未だタケシが所属しているようだ。週に一度、オツキミ山にも顔を見せている」

タケシと聞いても、フミツキに動搖はなかつた。絶望は忘れていない。しかし、多幸感は治まつた今の状態でも、絶望がフミツキの身を切ることはなかつた。

「交戦はできませんね」

「当たり前だ。ジムリーダーと正面から切つた張つたをやる馬鹿がどこにいる」

「支配人ならできるのでは？」

「やらんよ、俺は」

できないと言わるのは、流石に口ケット団のナンバーツーだつた。

考える。集団での採掘が目撃されたら、ほぼ間違いなく自警団へ通報が飛ぶ。ということは、まず周辺のトレーナーのポケモンを瀕死に追い込み、ポケモンセンターに追い返した後に採掘場を囲む形がいいのか。

自警団がやってくるのは避けようがなかつた。しかし、時間は稼ぎたい。ただ、フミツキの記憶にある採掘場は、少人数で隔離できるようなものではなかつた。どう配置しても、隙間が空くはずだ。

「ズバットを使う団員がいましたね」

「悪くない。腕はへっぽこだが、地形と作戦次第では使い道があるはずだ。オツキミ山

なら尚更

ズバットの超音波ならば、広い範囲の人やポケモンをカバーできる。群れによつて超音波が微妙に違うので、野生のズバット達を煽動して暴れさせることもできるかもしない。

ほんやりとだが、形は見え始めた。しかし、一つだけ確認しておくべきことがあつた。

「この作戦、化石を捨てることは許可されますか？」

「おいおい。化石を売つて金を稼ごうつて作戦だぞ。それを捨てるつてことは失敗と一緒じやないか」

「ですでの、この質問は一度だけです」

「愚問だと思わなかいか？」

「あるいは」

じつと、支配人がフミツキを見つめてきた。セーラムの紫煙が揺れている。見当違いを言つたとは思わなかつた。見つめ返した瞳が閉じられ、ふと煙が途切れると、支配人はくつくつと笑つた。

「ボスがお前を指名した理由、なんとなく俺にもわかる気がしてきたぞ」

「それで」

「構わん。化石なんぞ適当に捨てていい」

「やはり、陽動ですか、私達は」

支配人が中繼点と言つたのが、なんとなく気になつたのだ。バスと現場との中継と聞こえなくもないが、現場の細かい事情に遠距離から指示を出せる訳がない。また、化石の収支なんぞをバスに逐一報告するとも思えなかつた。

オツキミ山以外にも動いてる作戦がある。そちらについては現場と支配人、バスでやり取りをする。その間、フミツキ達が陽動になる。それならば、話はわかる。「ハナダの方で一つ動きがある。お前達とは別に、ハナダの東部でも騒ぎを起すつもりでいる。俺は三ヶ所の情報をまとめなきやならん」

「東部でも」

「これ以上は言えん。お前の仕事は騒ぎを起こして、しばらく粘り、ハナダ側へ撤収すること。逮捕者を出さずにだ」

ニビの自警団から要請が入れば、ハナダ警察はある程度の人員をオツキミ山方面に割かざるをえなくなるだろう。東部でも騒ぎが起きるのなら、北から南へと手薄な線が出来上がる。口ケット団が活動している場所としてぱつと思ひ付くのはゴールデンボールブリッジだ。しかし、あそこに何があるのか。

そこで、思考を切つた。明らかにフミツキの領分を超えてる。

「どれほど、時間を頂けますか？」

「三日後の午後には発つてもらう」

「わかりました。できれば、名簿を頂きたいのですが。手持ちまで載つてあるものをですか？」

「ここにはゲームコーナーの名簿しかない。後で届けさせよう。念のため言つておくが、出立が三日後だぞ。人員の提出は」

支配人は突然言葉を切ると、キユウコンを繰り出した。炎が、フミツキの手に絡みつく。熱いとは感じなかつた。ただ、手の中で書類だけが燃えていく。書類が燃え尽きると同時に、キユウコンの火も消えた。凄まじい技量だつたが、それに感嘆する暇もないまま、フミツキは自分の意識をただの専門学生に切り替えた。外から、誰かが近づいている。

「おい、待てつてんだよおっさん」

「邪魔するよ」

扉から現れたのは、茶色のロングコートを羽織つた男性だつた。髪が全体的に白く、老齢に見えたが、顔を見るにそこまでの歳ではない。なんとか止めようとしているのは、カウンターを任せられているスタッフだ。

「君が、こここの店長さんかね？」

「お客様、ここは従業員以外立ち入りをお断りしています」

「ほう。私服の子もいるようだが」

男がフミツキを見て言つた。

「面接を受けに来た子でしてね。それより、お引き取りを」

「私はこういう者だよ」

男は懐に手を入れて、何かを取り出した。警察手帳<sup>パス</sup>。フミツキのところからもそれは見えた。

「これは、警察の方でしたか」

「旦那と呼べ。阿漕な商売をしている連中は、みんなそうする」

「真つ当だと？あちらこちらに賄賂を撒いて、グレーを見逃して貰っているだけだろう」

「それは、あんまりなお言葉ですよ」

「私が気に入らんのはな、私の元に賄賂が渡つてこないということさ」

男が言うと、支配人は苦笑いした。

「贈賄で挙げる。そういう手は勘弁して頂きたい」

「詳しいじやないか」

「多少の世の中は見てきました」

「名乗つておこう。タカギという」

「タマムシのタカギ警部。『老いぼれ犬』の。あ、いえ、失礼を」

「面接と言つたが、履歴書もないようだね」

状況はよくわからなかつた。そして、それを隠さずに顔に出した。今のフミツキは、バイトの面接を受けに来ただけの少女、ということになる。不安が顔に出て当然だろう。

「履歴書不要とは、求人チラシにも載せてますよ。ホールスタッフでしてね。若い女の子が回ってくれるだけでいいということになります」

「あの、私、帰りましょうか？」

「ああ、ちよつと待つてくれ。おい、どう思うかね？」

タカギが背後の誰かに呼び掛ける。現れた顔を見て、支配人の表情がはつきりと変わつた。

「そちらの女の子は、それほど。そこの男はできるな」

キヨウ。ジムリーダーのユニフォームではなく、ワイシャツに身を包んでいるが間違いなかつた。

「これは、お会いできて光榮です」

「私は君の顔に見覚えがない。バッジ五個程度の実力じゃなさそうだが」

「ジムチャレンジはタマムシで止めました。そのまま燻つていたら、こんな商売に行き

着いた身で。まさか、キヨウさんにセキチク以外でお会いできるとは」

「長男が長じてきて、サファリの仕事をさせても良さそうですね。ジムもいすれは娘に継ごうと思っているが」

「なるほど」

「今はちょっとした縁で、タカギ警部の捜査を手伝っている」

「それは何を、いえ、失礼しました」

支配人と二人は、それから話を始めた。タカギという刑事の質問に、支配人が当たり障りのないことを答えるだけの時間だった。フミツキは、なにも知らない少女として、時たま左右に視線を走らせながら終わるのを待っていた。

他愛ない話も交えながら、二人は事務所を観察しているようだつた。事務所はゲームコーナーカウンターの裏で、アジトの入口は全く別のところにある。見られて困るものは何も置いていない。

「もう、勘弁して頂けませんか。点数稼ぎなら、ジムの覗きでも捕まえればいいでしょ。仕事がありましてね」

「ま、今日のところはこの辺りにするか」

「それでは」

「邪魔をしたね。ああ、あの親父はジムリーダーの要望で放置しているのだよ。異性の

「目がないと、人間弛んでしまうようでね」

「お嬢様の考えることは、私どもにはわかりませんな」

「同感だ」

立ち上がり、出ていこうとしたタカギが、ちょっと振り返った。

「煙草は好きなのかね？メンソールの匂いがする」

「禁煙をとは思つております」

「なに、私もゴロワーズをやるよ」

それだけ言い残して、タカギとキヨウは出ていった。支配人に目をやると、もう帰つていいというように手を振った。微かな疲れが滲み出している。

「老いぼれ犬に、キヨウだと」

扉を閉める寸前、絞り出したような声がフミツキに届いた。

## 第4話

ランニングは、欠かしたことがない。

今でこそ人対人のスポーツと化した節があるが、トレーナーの本分はルールもなにもない野生の戦いの中にある。体力がないのは致命的だった。キクコでさえ、たまの帰省には歩いてイワヤマトンネルを抜けるという。

ジムの若者にも、体力で劣らないし劣るつもりもない。歳だから仕方ない、という考え方もある。しかしそれは、やがて負けることそのものすら肯定しかねないとサカキは思つていた。

トキワの森の手前で折り返す。コースはいつも決まっていた。走るペースはバラバラで、ダッシュをしばらく繰り返してみたり、小走り程度で数キロ進んだりする。ペースを変えることを繰り返すと、自分の余力がどれほどかを見誤つたりするのだ。ポケモンの余力を、どんな状況でも確実に見極める。それはトレーナーに必要な能力で、そのためにはまず自分の余力を見極められるようになるべきだつた。息も絶え絶えになる

ほど全力を尽くし、それでいてトキワジムに到着する時間を誤差三十秒以内に収める。いつ頃からか、サカキはそんなことができるようになつた。ポケモンの力を引き出せていると感じるようになつたのも同じ頃だ。

トキワシティに戻ってきた。ジムには向かわず、西へと走る。八割の力で走り続け、二十二番道路へと入つたところで、早歩き程度に速さを落とした。躰への負荷は軽くなつたが、直前の疾走で息は激しく乱れている。走りながら腕や脚の疲労を確かめた。呼吸の激しさがそのまま消耗に直結する訳ではないのだ。

思つたよりも、疲労は軽かつた。人工池まで全力で走つても保つだろう。

「あら、サカキさん」

ウォーキングをしていた中年女性が声をあげた。トキワの住民で、名前は思い出せない程度の間柄だ。ジムリーダーには、よくあることだつた。

「もう、暗くなりますよ」

「本当は走るつもりだつたんだけどねえ。疲れちやつて」

「なに、運動をしようというだけ立派なものです」

「そう言つてもらえると嬉しいですねえ」

「ところで、どの辺りまで？」

「道が左に曲がる辺りですよ。そこから折り返そーかと」

女性が答えた場所までは、まだ距離があつた。ウォーキングのペースでは、トキワに帰りつくのは夜中になるだろう。空の真ん中はもう暗く、遠くトキワの森の上に夕焼けの紅が走り抜けるのが見えていただけだ。セキエイ高原に遮られて、西日の当たらない二十二番道路は、既に方々が薄暗くなっている。

「私はそろそろペースを上げます。貴女はこの辺りで折り返した方がいいですね」

「そうですかねえ？」

「女性が出歩くには、些か危険な時間になりますよ」

「あらまあ。でも、ちょっと心配しすぎでは？ほら、カントーは治安がいいじゃないですか。同盟軍もいますし」

「良からぬ組織の噂も、最近は聞くようになりましたよ」

「口ケット団でしたかしら？うーん。でもやっぱり、平気だと思いますわ」

「まあ、お気をつけ下さい」

サカキが足を速めると、女性はあつという間に見えなくなつた。少しづつ速度を上げ、曲がり道を抜けたところで一気に回転を上げた。ほとんど全力疾走だ。目的の人工池まで、保てるのか。保てる。そう判断した。判断したのならば、後は実行するだけである。ポケモンに命令できて、自分の躰に命令できない筈がない。

呼吸を止めた。人工池。サカキがトレーニングのために作らせたもので、畔には休憩

スペースも取つてある。そこまで、駆け抜けた。到着した時には、顔を上げることさえ苦しくなつていた。それがどこか、快感でもある。

### 「ニドキング、行け」

呼吸が整つてくると、サカキはニドキングをボールから出した。ちょっと頷いたニドキングが、池の中央に向かつて進んでいく。広いが深さはなく、真ん中まで行つてようやくニドキングの顔が浸かる程度だ。

サカキはベンチに腰掛けると、グラスを拭ぐのに使われるクロスを取り出した。そつとモンスターーボールに当てる。乱暴に擦ることはしなかつた。少し当てるど、ベンライトで照らし、また別の場所を磨く。塗料や自動型のブラシは一度も使つたことがない。昔からできるだけ綺麗な布を用い、ジムリーダーとなつて生活に余裕がでけてからは、高品質のクロスを取り寄せている。

なぜモンスターーボールを磨くのか、サカキ自身にもはつきりとした答えはなかつた。汚れを落とすぐらいは誰でもやるが、ここまで拘るトレーナーは自分以外には知らない。綺麗に磨きすぎたからか、若年の時には新米と勘違いされることもあつたほどだ。

光沢が出始めた。ここから更に磨くと、どこかで光は鈍くなる。鈍く、しかし決して光が途切れることはない。そうなつたモンスターーボールには、どこか風格さえ漂うのだ。

不意に、水柱が上がった。ニドキングだ。

サカキやワタルは、時に災害級とも称された。この間のエキシビションでは、主催者が予算をかけて造り上げたという対戦会場をものの十分で壊滅させた。鍛え上げられたポケモンの技とは、そういうものである。

トキワジムは地下に衝撃吸収の構造を擁えることで、サカキのポケモン達の技にも耐えられるようになつていて。それでも『じしん』などを使えば表層は酷いことになるのだ。

再び水柱が上がった。一度目のものよりも高く、そしてサカキの足元にも揺れが来た。踏ん張りの効かない水中でなお、ニドキングの『じしん』はこれだけの力を持つ。

ボールにクロスを当てる。北の空には、もう紅は残つていなかつた。夜がもうそこまで来ている。

「カントーは治安がいい。だから大丈夫、か」

なんとなく、女性の言葉を思い出した。

平和である。それは、間違いがなかつた。山吹組のようなヤクザや、ロケット団のような犯罪組織があつても、人々の危機意識にはどこか漫然とした安心があつた。

同盟軍がいるからだ。その圧倒的な武力は、古くは恐怖と反発を呼んだ。しかし今、地下に潜んだ活動家達以外の多くの人間が、同盟軍を安心の素材としていた。そして、

同盟軍の存在する日常を受け入れた。自分達が無力な存在であることすらも、同盟軍がもたらす安寧とともに許容した。

カントーのトレーナーを世界最強にしたい。記者に語った言葉に、嘘はなかつた。そのために必要なのは、支配の下にある安寧ではなく、呼吸さえ苦しくなるほどの自由だ。同盟軍に拮抗するほどの、悪の組織。そんな存在があれば、人々は選択を強いられることになる。誰も守ってくれない世界で震えているか、それとも強くなるかだ。

強くなる。カントーの人間には、それだけの意思がある筈だ。そして、力を得た人間は戦いを始める。その相手が同盟軍ならば、ロケット団が先陣を切ればいい。ロケット団を相手にするというなら、カントーの人々と同盟軍を相手に国盗り戦でも始めればいい。どう転んでもいいと、サカキは本気で思つていた。戦いは、誰かを強くするからだ。

今日一番の高さの、水柱が上がつた。立ち上つた波と共に、強烈な揺れが陸地に届いた。サカキは、特に踏ん張ることもなく立つていた。地面タイプのエキスパートが、地震で慌てていては話にならない。揺れが収まつた頃、こちらに泳いでくるニドキングが見えた。

モンスター・ボールを月に翳してみた。鈍く、しかしあつきりと、月光を照り返している。



「もう一度、言つてみろ」

顔を真っ赤にしているのは、ズバットを使う団員だった。クリードという名前であることは、名簿で確認している。クリードの後ろにいる九人も、似たような表情をしていた。全員、フミツキが選んだオツキミ山部隊の戦闘要員である。

「ですから、走つてくださいと言いました。誰かが走れなくなるまでです」

フミツキの返答は、彼らを更に怒らせたようだつた。クリードが一步前へ出てくる。明らかに威圧しようという動きだつたが、誰も止めなかつた。

「俺達はポケモントレーナーだ。わかるか？馬車馬じやねえ」

「当然です」

「じゃあなんで、俺達が走らされなきやならねえ？」

「逮捕者を出さないよう、支配人に命令されています」

支配人の名前は効いたようで、彼らの勢いが一瞬衰えた。

「そのためには、全員が団結して動く必要があります。部隊の移動速度も統一しなけれ

ばなりません

「それで？」

「最も足が遅く、体力のない団員。その人に合わせないといけない、ということです」「おい、その間抜けは、まさかお前じゃないだろうな？」

「ですから、私も走ります」

そう言つて、フミツキは上着を脱いだ。運動用のノースリーブシャツに、短パンとレギンス。シユーズの紐を締め直し、ストレッチを始める。男達は、露骨に気勢を削がれていた。女相手に居丈高になることもあれば、奇妙に紳士を気取つたりする。フミツキの経験上、互いに詳しくない面子が集まると、取り敢えず表面を取り繕う人間が多かつた。

アジトのトレーニング場である。走り出したフミツキの後ろを男達はなんとなくと いう感じで付いてきた。十周する頃、一人が遅れ始めた。振り返ったフミツキと目が合う。クリード。フミツキがちょっと笑うと、顔を真つ赤にしながら速度を上げてきた。そのまま横に並んでくる。

「おい、今、何分だ？」

「二十分」

「馬鹿言うな。もう、三十分は、走ってる」

「まだまだですよ」

「クソが。鍛えて、やがつたな。お前」

「人並みには」

タマムシには、ほどほどの勉学とほどほどの就職を求めてやってきたのだ。それほど打ち込める訳もなく、空いた時間にするような趣味はトレーナーとしてのそれしか知らなかつた。目的などなくとも、走れば勝手に躰が体力を付ける。

クリードの呼吸が荒い。それでも、横並びの形は変わらなかつた。後続の方が遅れ出している。

「ペースを落とした方がいいと思います」

「お前の、貧相なケツなんぞ、見たかないね」

「そう悪くないと、自分では思つてるんですけどね」

ロケット団も大概、男所帯である。この程度の話題なら、顔色も変えずに返せるようになつた。

「ボスの秘書なんか、大したもんだつたさ。俺は、たまらなかつたね」

自分でも知らぬまま、フミツキはむつとしたらしかつた。クリードが笑みを深めるのを、フミツキは無視した。

「最前線には、私が立つことになります。私と並ぶなら、そういうことになりますよ」

「俺のズバットで、前線に立つ、っていうのかよ」

「怖いですか？」

言いながら、怖い、とフミツキは思った。タケシには勝てない。選抜した十名全てでかかるとも、勝負にもならないだろう。それほどに、ジムリーダーと一般トレーナーの間は隔絶していた。

「怖いに決まってるだろ」

思わず、横を見た。クリードは走ることに精一杯で、フミツキの視線に気付いた様子もなかつた。

「勝てる訳のない奴が、この世にはいくらでもいる。それが当たり前なんだ」「じゃ、なんで勝負するんですか？」

「馬鹿を言うな。勝てないからって逃げて、なにがトレーナーだ」

言つたきり、クリードは走ることに専念し始めた。

フミツキはまだ余裕があつた。ペースを上げる。後ろはさらに遅れたが、クリードはそれでも付いてきた。

ペースを上げる。それでも、クリードは振り切れない。苛立ちのようなものが、フミツキを襲つた。

「負けず嫌いなんだな、おい」

クリードの言葉は、はつきりとフミツキの琴線に触れた。駆ける。一瞬追い縋ろうとしたクリードが、あつという間に後方に遠ざかっていった。距離で言えば、タマムシから七番道路を抜けるぐらいの距離を走っている。ポケモンならともかく、トレーナーの体力としては圧巻だった。

負けず嫌いという顔を、している筈はなかつた。

精々苦しいか苦しくないかの瀬戸際だろう。それは、フミツキにはよくわかつた。今自分は、人に見せられる顔ではない。色々な意味でだ。鏡がない。それは、救いだつた。

誰かが転倒した。最後尾の人間で、フミツキだけなら気付きもしなかつただろう。気付いたのは、フミツキに追い付こうと必死だつたクリードである。ストップウォッチを、止めた。

「どうするんだ、おい」

「先頭に。撤退の際は、後続が入れ替わりに補佐します」

「つまり、俺達だな」

頷いた。遅れた団員を中心に、人が集まつてゐる。あそこが、実戦では主戦場になる。フミツキはもう一度、頒布の地図と目の前を見比べた。遅れたのが誰かということは、氣にしなかつた。

## 第5話

ハナダの町に来たのは、ジムチャレンジ以来だつた。もつとも、フミツキ自身はハナダに踏み入れはしなかつた。カスミをサンドパンのみで突破したことは、当時多少の話題になつたからだ。

ジムチャレンジを完遂しようという意思是、タケシとの試合で折れていた。それでもカスミに挑んだのは、タイプ相性から逃げ出したと思われたくないというつまらない意地だつた。巡りめぐつて自分の行動を制限されたと考えると、本当につまらない真似をしたものだ。

ハナダにもロケット団の団員が潜んでいる。最も、タマムシのようにアジトがある訳ではなく、それぞれで住居を見繕つて、連絡を密にしているだけだつた。オツキミ山での作戦をタマムシの団員であるフミツキ達がこなさなければならぬのは、その辺りが理由らしい。集団での行動など、指揮も実行もできないようだ。フミツキ達の支援を担当してくれたのも二人組の団員で、似たような少數のチームがハナダの方々に散らばつ

て いるらしいことを教えてくれた。

タマムシは、唯一のロケット団アジトである。組織としての集団行動を可能とするのは、タマムシの団員だけだろう。つまりロケット団の本部と言つて良いのだが、誰もタマムシを本営扱いはしない。ボスがいないからだ。

自分が、なぜボスに選ばれたのか。作戦を考える傍らで、常にその疑問はあつた。支配人が動けないとしても、幹部級の団員が何人かいる。中には、三年前の山吹組抗争で少なくない働きをした者もいるはずだった。

ハナダの団員は、指揮官であるということでフミツキとそれ以外の団員の扱いに差をつけ始めた。媚びなどではなく、組織の一員として当然の行動として、フミツキを上官扱いし始めたのだ。それも、苦痛だった。苦痛だが、訂正することもまた許されない。指揮官の役目を、果たさなければならぬのだ。指揮系統がいたずらに混乱するような言動はできなかつた。

「おい、買つてきたぜ」

クリードが、手に持つた袋をちよつと掲げた。

「私の分は？」

「ある。本当に男物で良かつたんだな？」

「大丈夫です。ありがとうございます」

「服屋をあんなに回つたのは初めてだぜ」

クリードが肩を竦めた。発掘、運搬担当まで含めた服の購入である。一店舗で購う訳にもいかず、ハナダの服屋を回らせてことになつた。

ロケット団の団服は使う。作戦の意味合いで考えればどうしても必要だからだ。それはそれとして、変装用の服が必要だとフミツキは考えた。逮捕者を出してはならないのだから、なにも最後まで団服を着用する必要もないだろう。

「クリードさんも、最初は私服にしてください。採掘場付近のトレーナーとの戦闘直前に団服に着替えるつもりで」

「ま、今回はてめえの言うことに従つてやるよ」

認められた、という感じはなかつた。ただ、今回連れてきた戦闘員は普段の模擬戦でもフミツキが勝ち越している面子で、幾度かの走り込みでも前を走らせることはしていな。流石に、あからさまな反抗を見せる者はいなくなつた。手並みを見る、ぐらいのつもりにはなつたのだろう。

「しかし、化石か。多少の金にはなるのかねえ」

「今までとは異なる地層で発見されたもの、らしいですよ。ニビ博物館で限定的に公開されますが、世間にはまだ流通していないようです」

「好事家つて奴に売り付ける訳か」

「あるいは、研究施設ですかね。グレンタウンなんかは、中央の目が届かないのをいいことにかなりグレーな実験をやっている所もあるようです」

「悪の組織に違法な研究施設か。そりやあいい」

化石は捨てよう、とフミツキは考えていた。撤退の際の負担が減るし、再度の陽動作戦が必要になった場合は名分にできる。化石を持ち帰つても小金稼ぎにしかならないことは、支配人もわかっているのだ。

フミツキだけが考えていいことで、クリードなどはきちんと化石を持ち帰るつもりでいる。わざわざ水を差す必要もなく、化石の使い途などについても、適当に話を合わせていた。

ハナダの団員が駆け込んできた。

「来ました。作戦開始は本日の夕刻からです。厳密な時刻は再度連絡が入るようですが、とりあえず夕刻を目処に準備をお願いします」

「夕刻？ 夜じやねえのか」

「はあ。どうもそうらしいです」

「なんだそりや。わざわざ日のあるうちに行動する理由があるか？」

「支配人の差配です。それ以上の理由が必要ですか？」

フミツキが言うと、クリードは横を向いた。

採掘場はタマムシ大学の研究チームが必要分の採集を行つた後に、保存されている。簡易なもので、クリードの言うとおり日が沈みきつた後ならば事はもつと易く進むだろう。夕刻というのは、本命の作戦に合わせた時間帯に違ひなかつた。

多少の不合理があるぐらい、最初からわかつていたことだ。

「全員を待機状態に入らせてから、次の指示を待ちます。それで構いませんね？」

「そうして頂けると」

連絡役の団員がほつと息を吐いた。クリードはまだ横を向いている。

「クリードさん」

「ちつ。わかつてるよ。通達してくる」

「ストレッヂを欠かさないよう言つておいてください。出動命令が来たら、オツキミ山までひた駆けます。街道を避けてです」

「そんぐらい、全員心得てる。アジトで、てめえにどんだけ走らされたと思つてるんだ」クリードが部屋を出る。フミツキは、改めて書類に向き合つた。周辺の地図から、ニビの自警団の情報までこと細かく書き留めてある。タマムシやヤマブキの団員は戦闘要員といつた色合いが強いが、ハナダは諜報的な側面を持つていてのかもしれない。そう考えてみれば、集団で密集するのではなくチーム毎にバラけているのも領ける。

「タケシが不在というのは確實な情報なのでですか？」

資料で一番気になつていたことだ。ジムリーダー同士の会合が行われるらしい。それに出席するため、タケシは不在。本當であれば随分とやり易くなる。

「ご存知ないんですか？その情報はタマムシから受け取つたものですよ？」

「支配人が？」

「私達は本部長とお呼びしていますがね。どうも、信頼できる筋の情報だそうで」

支配人がそう言うのなら、まず間違いはないだろう。バトルでは果斷と聞くが、普段の経営を見る限り実に手堅い人間だ。

「なんだ、ジムリーダーはいねえのか」

戻ってきたクリードが、横から覗き込みながら言つた。強気な物言いだが、安堵の響きもある。

「ただ、代理がいますよ。どうも、ニビジムのジムトレーナーらしいです」

「面倒だな」

クリードが渋面を作つた。

世界で最もポピュラーな娯楽は間違いなくポケモンバトルだが、日常的にバトルを行う人口がそれほど多い訳ではなかつた。スクールを出てからは一度もバトルをしていないという人間も、決して少なくない。

綿密なトレーニングを普段から行つて いるものなど、一握りだろう。そして、ジムト

レーナーはその一握りの一部だ。

「こいつが出てきたら、全員で叩くしかねえか」

「いえ、私がやります」

「お前が？ おい、お前バッジは？」

「二つ」

クリードだけでなく、ハナダの団員も渋面を浮かべた。ジムトレーナーなど、どう見積もってもバッジ三つ程度の腕前はあるだろう。カントー最精銳のトキワジムなどは、ほぼ全員がバッジ六つ以上を持つという。

自分の腕がバッジ二つ程度だと、フミツキは思つていなかつた。同時に、六つは無理だろうとも思う。四つか五つ。ジムトレーナーとの力量差は、際どいところだつた。

「万一私が敗れた場合は、クリードさんを隊長にして撤退してください」  
「本気で言つてるんだな？」

「ボスの顔に泥は塗れませんよ」

「よし。存分に見捨ててやる」

言いながら、クリードはにやりと笑つた。さつきよりも、どこか親しみを感じさせる

笑い方だ。

不意に、ドアが激しくノックされた。

「来ました。指令です。ハナダ駐留中のタマムシ部隊は作戦行動を開始してください」クリードと目が合う。まだ、にやけが浮かんでいた。

「出ます」

短く告げて、フミツキは腰のモンスター・ボールをちょっと触った。



入つて、おや、と思った。既に七人が、席についていたのである。

ヤマブキシティにある料理処だつた。金をかけて照明や壁に豪奢な装飾を施す店が、最近は多い。ムツキなどは、サカキをそういつた高級店へ行かせたがるが、どちらかと言えば落ち着いた暗色の室内がサカキは好きだつた。もつと正確に言えば、夜の森や洞窟の中などでポケモン達と食べる食事が一番好きだ。

大した器具もない中で、きのみを擂つて溶かし込んだ汁に、野草や薄く削いだ肉を入れる。米や餅があれば、一緒に煮込む。そうやって出来上がった料理を、ポケモン達と冷ましながら食う。

サカキもポケモン達も、最初の一杯だけは平等に同じ量を注ぐ。旅の間、一度も変えたことのないルールだった。もう何年前のことになるのか。今は、こうやつて会合に呼ばれれば、サカキだけ旨い飯を食う。

「どうやら、お待たせしてしまったようだな」

「いや、そんなことはありませんよ、サカキさん」

答えたのはタケシだった。律儀な性格で、ジムリーダーの会合にも大抵一番早く到着する。サカキは三番手辺りが多く、遠方のカツラなどは稀に大きな遅刻をする。

酷いのは女性陣で、特にナツメはヤマブキシティでの会合でさえ遅れてくることがあつた。花の多い町だと大抵エリカが遅れ、カスミは特に理由もなくどこでも遅れてくる。軍人上がりのマチスにはその辺りが耐えられないらしく、カスミと口論している姿を頻繁に見た。ただし、マチスも遅れてくることが多い。彼にとつて大事なのは、理由の有無なのだ。

「実は、エキシビションマッチで我々はあることを考えていてね。果たせなかつたので、反省会をしておる」

「カツラさん、それは？」

「君とワタル君を、全く五分五分の状態から闘わせたい、と思つておつた。四天王のうち三人を倒してワタル君を引き摺り出した後、降参し君にバトンを託す。無傷の君とワタ

ル君が向かい合うことになる。それがきっと、カントーの全てのトレーナーが見たい光景だと思った。しかし、為せなんだ」

順番は自由で、カツラが先鋒で次がタケシだつた。向こうはカンナである。氷と見れば有利だが、水と見ると不利になる難しい組み合わせだつた。結局は水タイプの良さを出されて、二枚抜きされることになつた。後続のマチスが破つたが、続くシバにエリカ共々突破された。

あの試合の一番の誤算が、イワークを残されたままエリカが突破されたことだと言つていい。続くキョウとシバの試合は壮絶な消耗戦となり、勝利したキョウにキクコと争う余力はなかつた。

キョウ、カスミ、ナツメを破つたキクコと、サカキが対峙することになつた。一発のシャドーパンチ。それで、万全の態勢でサカキとワタルが試合をする機会は失われることにになつた。

ことポケモンバトルに於いて、キクコに妥協の二文字はなかつた。あのシャドーパンチは、正にキクコの生きざまと言つていい。

「会場は崩壊したのですよ、カツラさん。試合は一時中断された。ポケモンバトルではあつてはならないことです。私とワタル君が全力で闘う機会など、初めからなかつた」「そう言つてくれるか。正直なことを言うと、あれは私達にとつて多少の慰めであつた」

「食事にしましよう。ジムリーダーがこうやつて集まれる機会は、年に数回しかない貴重な時間だ」

サカキが促すと、カスミが真っ先に料理に食らいついた。空腹を堪えていたことを隠しもしない姿勢で、全員が苦笑いしながら料理に手を付けた。

「そう言えばサカキ君、この前のチャレンジャーはどうだつたね？」

カツラが言つた。ジムを巡る順番は決まつてるので、グレンを突破したトレーナーはトキワに来ることになる。

「残念ながら、私のところまでは来ていませんよ」

「ふうむ、そうかね。まあ、トキワジムのトレーナー達はみな一角の腕前ではある」「あんまり追い返してると、支給金が減らされるぜ」

「金のことでは勝負をどうこうしようとは思わんよ、マチス」

「いいじやねえか、通してやれば。カンナ、シバ、キクコ、ワタル。万に一つも勝ち抜けやしないんだから」

「君のところは三つ目だからな。素養ありと認めたら渡さねばなるまい。私は、これでも最後のジムリーダーを務めているのだよ」

「ふん」

マチスがウイスキーを呷つた。突つかられるのはいつものことだ。

同盟軍の顧問

のような立ち位置にいるので、サカキの方にも無意識のうちに隔意があるのかもしれない。

「最近はエリカ嬢もあまり挑戦者を通していないうだね」

「あら、そうでしたかしら？」

「エキシビションの後からだと聞くぞ。お陰で私は暇になつたが」

「良いことではありますんか。暇な時間があれば、花を慈しむことができます」

「うむ、そうかな。しかし、ウチにあるのは毒花ばかりだ。慈しむと言つてもな」

キョウの言葉に、エリカは微笑みだけを返していた。キョウが肩を竦める。

エキシビションでシバのイワークを倒しきれなかつたことを、悔やんでいるのかもしない。シバ側が格闘ポケモン達で上手くいなした形だったが、もしエリカが踏ん張りきれば、サカキの前にキクコを倒すことも不可能ではなかつただろう。

「まあいいか。私も最近はやることがあつてね」

「ご子息の鍛練ですか？」

「いや、実は捜査協力なのだ。タマムシの警部でね」

「まあ。でしたら、私の知つている方かしら？」

「どうかな。タカギという。『老いぼれ犬』と言えば、そつちの界隈では通る名前らしい」

「ああ、タカギ様ですね。の方のウツボットはとても素敵ですわ。特に、下から上に掬

い上げるよう打つ『つるのムチ』はかなりのお手前で

「ほう、それは良いことを聞いた。掴み所のない男で、実力の方もはつきりしなかつたのだが」

食事をしながら、サカキはエリカ達の会話に耳を立てていた。

タカギという警部とキヨウがゲームコーナーを訪れたことは、報告を受けていた。腐れ役人が鼻を膨らませてやつてくるようなものとは、全く違う、という感じだった。探りを入れにきたと、支配人などは言っている。

ロケット団とゲームコーナーを繋ぐパイプが露呈するような要素は、今のところない。もしパイプの存在に気付いたとしても、掘り起こすことはできない筈だ。この国の役人が手を出せない所に、それは埋まっている。

しかし、ロケット団繫がり以外でゲームコーナーを探る理由などないのもまた事実だつた。あそこの遣り口が阿漕なことくらい、多少世間を知つている者なら誰にでもわかる。今さら警部が現場に現れるようなものではないのだ。

老いぼれ犬というのは、普段から口ずさんでいる鼻唄から取られたあだ名らしい。ただ、捜査の方の鼻も犬並みに利きそうだ。

そこまで考えて、サカキは思考を切つた。情報が足りない。そういう時、敵は大きくも小さくも見える。幻に囚われるぐらいなら、自分の最善を探すべきだった。

店員が慌ただしく個室に駆け込んできた。タケシを見つけると、耳打ちをして連れていった。

「申し訳ない。ニビで少し問題が起こったようで、僕はここで下がらせて貰います。最も、間に合いはしないでしようが」

「問題? タケシ君、一体どうしたのだね?」

「どうも、ロケット団のようです。オツキミ山の化石を狙っているようで、採掘場は既に占拠されていると。ウチのジムトレーナーが自警団を率いて向かつたというので、大丈夫だとは思うのですが」

「私達も手を貸そうか?」

「いえ、それには及びません。ああ、カスミ君だけはちょっと。ハナダ警察に連絡を入れて欲しいんだが」

「ええ、お安い御用よ」

「二人が、連れだって出て行く。サカキは座椅子に背中を凭れ、ブランデーをちょっと舐めた。

作戦が、始まっていた。フミツキがどう乗り越えるか。作戦の成否よりも、サカキはそれが楽しみだった。首領として間違った考えだとわかつても、そういう気分になってしまうのだ。

もう一度、ブランデーを舐めた。

氷が、ゆるゆると溶けだしている。

## 第6話

一番最初にしたことは、発掘の目処をつけることだつた。

フミツキにはよくわからなかつたが、タマムシ大学の発掘跡からある程度の絞り込みができるらしい。いくつを、どれくらいの時間で。それだけははつきりさせなければならぬ。時間制限のない防衛は必ず気持ちの糸が切れるからだ。

発掘担当の団員が提示してきた時間を、フミツキは半分に切り捨てた。どれだけ言いまうれやうとも、時間に關して妥協する気はなかつた。同士から逮捕者を出す訳にはいかない、というフミツキの言葉で相手もしぶしぶ意見を引つ込めた。

発掘場の周辺は、タマムシ大学が拡張を行つたために広場のようになつてゐる。フミツキは八方に斥候を送つた。傍にはクリードが控えていて、斥候に異常事態があれば、石を打ち鳴らすことでクリードのズバットに連絡が取れるようになつてゐる。中が空洞の石で、一度で敵の発見、二度で交戦、三度で撤退の知らせだ。

「ま、交戦は無理だろうな。自警団が来るとなつてだらう」

クリードが頬を搔きながら言つた。身元を隠す為に、全員に仮面を付けさせている。それがうつとうしいのだろう。

「その場合は、ここで一度止めます。発掘部隊の撤退を待たなければなりませんから」「二人ですか？」

その問には答えなかつた。策はある。ただ、実際にどういう行動を取るかはその場で判断しなければならないだろう。その時、事前に話した策と別の動きをする可能性は充分にあるのだ。認識を共有できる利点よりも、混乱を招きかねない欠点の方が大きい、とフミツキは判断した。

本当は、あまり口にしたくないだけだとも、思つてゐる。自分なりに考えているつもりだが、なにか間違があるのではないかという不安が常にあつた。口に出して説明などすると、その不安が抑えきれない気がしたのだ。

否定して欲しい。その思いを、抑え続けた。否定されて、なにか代案を出されたら、良し悪しも考えずに自分は飛び付くだろう。それが一番、楽なことだからだ。

クリードがまた頬を搔いた。どこかヤドンを思わせるような緩慢な仕草で、不安や緊張とは無縁に見えた。最初は頬もしいような気もしたが、段々と腹立たしい気分になつてきた。それも、抑えた。

「今頃、ニビの自警団に連絡が入つてゐる頃かね」

「まだ早いと思いますね。精々、横暴なトレーナーがいた、というぐらいでしよう」

「お前、お国はニビなんだって？」

「郊外の方ですよ。自警団の集会所はニビ中央の方で、私が見る機会はあまり

「全く知らないって訳じやないんだな」

「話し合いのための少人数が最初に来ると思います。いきなり武力行使というのは自警団のやることではありませんから」

「俺達が口ケツト団だとわかれば？」

「一旦引き返して、まとまつてくるでしょう」

「なるほどな。その辺のトレーナー共を厳しく追い散らさない理由は、わかつた」

「そんなことをすれば、最初から自警団の主力が出てくる。今必要なのは戦闘での勝利ではなく、時間だ。」

名目上の作戦も、本命の任務も、共に時間を稼ぐことが重要になる。偶然ではないだろう。支配人か、あるいはボスが、そういう作戦を立案したということだ。作戦を実行しているだけで、任務の方も達成することができる。それも、違和感なくだ。

この作戦を立案した人間はどういう人間か、ふと考えた。新地層での発掘作業にある程度目処を付けられる人間でなければ、この作戦は出てこない。作業時間を想定できなからだ。それはつまり、ボス、あるいはボスに近しい人間がタマムシ大学の研究チー

ムにいる、ということになるのだろうか。

弾かれたように、顔を上げた。石の音。一度。しばらく待つたが、次の音はしなかつた。

「さて、俺らの正体は割れたようだな。次は本隊か」  
「斥候の半数を、音のした位置に回します」

「全員合流させちまえばいいだろう」

「一人が一気に八人になるより、四人になり八人になる、という方が効果的でしょう。もし上手くできそなならば挟み込んでいい」

「お前、本当にトレーナーが本職だつたのか？どつかで野盗でもやつてたんじやないだろうな」

「トレーナーですよ。本職などといえる腕ではないですが」

クリードのズバットに指示を持たせて斥候へ飛ばした。発掘部隊から、延長の懇願が来た。フミツキは取り合わなかつた。

「カブトやオムナイトの一部なんですよ。それも、ただの化石じやない。過去に見つかった化石よりも、明らかに後の年代の物です。恐らくですが、ポケモンの力によつて出来た地層ですよこれは。この化石なら、下手したら、明確な遺伝子情報も残されていわかもしれません。隊長さん、大発見なんですよこれは」

発掘部隊を任せている団員が、熱に浮かされたように喋り続けているのも、無視した。

こういう団員がいるのは、口ケット団の変わった所だつた。タマムシアジトには研究者のような人間もいて、最近ではシルフ生産のスコープを改造したりしていた。戦闘員であるフミツキにはどういう意図の作業なのかはわからなかつたが、金儲けのためにないことぐらいはわかる。それどころか、ゲームコーナーの売上<sup>レ</sup>が研究費として回つてきている気配もあつた。

無為なヤクザ集団などではない。熱量を取り戻したフミツキにとつては、それはいくらか救いだつた。

ただ、今は作戦行動中である。この化石に、学会をひっくり返すような価値があつたとしても、フミツキの考えは変わらない。

それが相手にも伝わつたのだろう。激しく捲し立ててから、フミツキを一睨みして持ち場へと戻つていつた。

「誤射つてのも、珍しくはないらしいぜ。特に、後ろからの誤射はな」「いざという時はお願ひしていいですか？クリードさん」

「なんだ、いざという時つてのは」

「撤退する時です。逮捕者は出さない、と決めているんですよ」

「ふん。発掘部隊の中に、顔見知りが何人かいる。さつきの奴がごねても、無理矢理連れ

ていくよう伝えといてやるよ」

「ありがとうございます」

クリードを副官のような形に据えたのは、単純にフミツキの次にスタミナがあるというだけの理由だったが、共に行動するうちに、悪くない抜擢だったことがわかつてきた。とにかく顔が広い。それに見合う程度には人望もあるようだ。フミツキが作戦を考えている間、他の団員に声をかけて回っていたのもクリードだった。それで集中が切れのを防げた、というところがある。

口調や態度は品行方正とは言えないが、互いの不利益になるようなレベルの言動はない。今のフミツキにとつては、生真面目に付き従われるよりもずっとやり易かつた。「ところで、本当にその格好で行くのかよ？ 女物にしろとは言わねえが、動き辛いだろそりや」

そして、意外とフミツキのことを気にかけてくる。最初は下心でもあるのかと思つたが、どうやら生来の質らしかつた。

「目立つんですよ、ロケット団に女性がいると」

「そりやそりやうが」

「それに私は、ゲームコーナーで『老いぼれ犬』に顔を見られているので」

男物のジャケットを羽織った上に、団服を着込んでいた。下はダブついた作業ズボン

をベルトできつく留めている。あまり近くで見られるとどうしようもないが、遠目には小柄な男性に見える筈だ。

「腕っこきの刑事でからしいな。しかし、タマムシだろう？」

「念を入れて困ることもないでしよう。幸い、今日のオツキミ山は涼しい」

「まあ、干からびてミイラにでもなつてなけりやいいのさ。お前には、ジムトレーナーへの当て馬になつてもらわにやならないんだからな」

そう言つて、クリードは口を閉じた。フミツキは一度だけ時計を見て、前を向いた。

オツキミ山は立地的にも、生息するポケモンの強さとしても、交通に使うには悪くない道だつた。というより、ニビとハナダの間に横たわる山は険しく、この洞窟以外に道と呼べるものはないのである。オツキミ山、という名は山全体の名称だが、専ら洞窟を呼ぶ時に使われるのは、この洞窟以外に住民が親しむような場がオツキミ山にはないからだ。

当然整備が進んでいて、昼夜を問わず方々に明かりが灯されている。その多くは間接照明のような形を取つていて、環境をできる限り荒らさないように配慮されていた。

照明を破壊するという手もないわけではなかつた。ただ、それをすると復旧作業員が常駐しかねない。それはフミツキにとつて、というより上層部にとつては目障りだろう。再度の囮作戦が必要になる可能性があるので。

なんとなく、壁に目をやつた。照明の関係か、一人の影が四方に伸びている。それが壁にかかると、表面の凹凸が影を引き伸ばしたり縮めたりするので、全く予測できない動きをしている。影ではなく人を見れば、ただ歩いているだけである。

どの道、もうなにかを始めるほどの時間は残っていない。そのことは、フミツキにもよくわかっているのだ。サンドパンを手招きして、頭を撫でた。影ではなく、人を見る。サンドパンと触れあつていると、不思議とそう心を定めることに苦労はしなかつた。石の音。一度だけだ。待つた。呼吸を数える。クリードが姿勢を低くしながら、耳を澄ましている。

三度。撤退を始める合図だった。呼吸にして五つほどの間があつた。

「どうやら、それなりの人数で來たようですね」

「どうする?」

「斥候は合流させてください。一度ぶつかつて押し返します。その後は、殿を務めながらハナダまで駆け通すことになりますね」

「へつ、お前に散々走られたのがようやく生きるつて訳だ」

「発掘部隊に撤退の指示を。私はクリードさんと前線に行きます」

近くの団員へ手短に指示した。クリードもなにがしかを言い含めている。恐らくは、先程頼んだ件だろう。

「さーて、行くか」

クリードが頬を搔いた。ヤドンのような感じは、どこにも残っていない。



斥候の姿が見えたところで、フミツキは足を止めた。向こうもこちらに気付いたようだ。一人が駆け寄つてくる。

「合流しねえのかよ？」

「撤退中なら即合流するつもりでしたが」

駆け寄つて来た斥候は、汗こそ搔いているが、追い込まれてるようではなかつた。

「膠着しています。相手は二十人」

「そりや変だろ。膠着する要素はない」

「最初、押してこようとしていたんですよ。こちらは四人でしたから。でも、二人合流してきて、しばらくしてまた二人来て。どうも、向こうも人数を測りかねているようです」

フミツキ達の位置からは、自警団の姿は見えなかつた。斥候の場所までは平坦な道だ

が、その先は下り坂なのである。

「坂を登り切つたら囮まれていました、つてのは相手も嫌だろうな」

「とは言え、向こうは採掘場の奪還に動いているのですから、このまま膠着を続けはしないでしよう」

「どうする？」

「待ちましようか。動き始めたら、私とクリードさんが出る、ということで」「みんなにそう伝えます」

「ひとつだけ。ニビジムのジムトレーナーらしき人がいたら、特徴を教えてもらいますか？動き始める時がわかりやすいと思います」

「指示を出している人ってことですね。わかりました」

団員が、斥候達のところへ戻つていく。クリードが訝し気な顔をした。

「二十人いて、率いているのはニビジムで鍛えられたトレーナーか。どうする気だよ、おい

い」

「手信号、覚えてますか？」

「あん？」

「進む、退く、集合、散開。タマムシでやつたと思しますが」

「覚えてるよ。クソみたいに走らされた後に、目の前で延々とやられりやあな。思い出

したくもないが」

不意に、斥候の半数がこちらを向いた。フミツキは迷わず撤退の指示を出した。

「行きますよ」

道の半ばで合流した。自警団からは、まだ見えていないだろう。声は発さず、手信号だけで合図をした。散開。八人は、きちんと反応した。フミツキとクリードだけは前に進む。離れ際、団員の一人がフミツキに耳打ちした。ボーアスカウト。フミツキは小さく頷いた。

視界が開けた。自警団が坂を駆け登つてくる姿が見える。二十人とその手持ちが一斉に向かってくる光景には、流石に圧力があった。フミツキは集団を見回した。先頭。ゴローンを連れたボーアスカウトが、勢いよく駆けて、集団を先導していた。

「おい、結局どうすんだよ。押し切られるぞ」

返事は、手信号で送った。声だけは、女であることを隠しきれない。クリードが躰を密着させてきた。

「さつきの道に誘い込んで、挟み撃ちにします」

囁くように言った。

「先頭のゴローンに突つ切られたら終わりだ。止められるんだな?」

「必ず。クリードさんは、ズバットを集団の中に突つ込ませてください。攻撃はしなく

て構いません。ただ、連中の間を飛び回つてくれれば』

下がつた。ボーアイスカウトは、坂を登り切ると、全員の到着を待つて進みだした。目が合う。フミツキは速度を落として、クリードを先に行かせた。ボーアイスカウトが猛然と駆けだした。後続との間に、僅かだが距離が生まれた。

手を挙げた。集合の合図。フミツキはボーアイスカウトへ向き直ると、サンドパンを繰り出した。『ころがる』。ゴローンも、同じ技で向かってくる。中央で、激突した。小石や塵が二匹の周囲で巻き上げられ、視界を遮った。

待つた。クリードのズバットが、砂煙を切つて飛び込んでいった。見えた。サンドパンとゴローン。互いに睨み合っている。勢いは、止まっていた。

その後方では、ロケット団が包囲を敷いていた。人数差が倍以上あるので、まとまれば容易く突破できる包囲だったが、一、三人がまとまろうとしているところへ必ずズバットが飛び込んで乱している。

ボーアイスカウトが反転すれば、瞬く間に包囲は崩壊するだろう。一瞬たりとも目を逸らさなかつた。反転した瞬間後ろを突く、という意思をはつきりと表に出した。

「ロケット団みたいなチンピラが、僕と一対一でやり合う気か。ジムトレーナーを相手取ろうなんて、一万光年速いんだよ」

ゴローンが跳びあがる。『のしかかり』。サンドパンの対応は速かつた。跳び退き際

に、『きりさく』まで見舞つている。フミツキは立ち位置を変えた。サンドパンの視界に入る位置にだ。目さえ合えば意思が伝わる自信があつた。

幾度か、ゴローンとサンドパンが交錯した。攻撃を受けてはいない。ただ、サンドパンの攻撃も大したダメージにはなつていないだろう。それでも、積み重ねればやがて勝敗を左右するものになる。

「足を止めろ、『がんせきふうじ』」

ボーアスカウトの対応も速かつた。素早さが両者を分けていることを、見抜いたようだ。

ゴローンが地を叩く。浮き上がつた小石がくつきあい、いくつかの岩石となつてサンドパンに降り注いだ。フミツキはじつとサンドパンを見つめた。サンドパンが躰を丸めていく。『まるくなる』。それで、ダメージは最小限に抑えられる。フミツキの考えは、伝わつたはずだ。

大小様々な岩石の山に、サンドパンが埋まつた。『まるくなる』を使った以上、致命的なダメージはない。ただ、素早さは落ちる。

「悠長な選択だ。所詮素人だな。ゴローン、『ロックカット』

ゴローンがその場で回転するようにして、自分の躰を地面に擦り付け始めた。素早さ関係は、これで逆転することになる。サンドパンにとつては、アドバンテージが一つ消

えることになるだろう。むしろ、不利な要素の一つになつた。勝負が続けば続くほど、それは重くのしかかつてくる。

そんな悠長な戦いをする気は、フミツキにはなかつた。

ゴローンが不意に動きを止めた。

「なにをやつてる。まだ」

言い掛けたボーカスカウトが目を見開いた。ゴローンは、瀕死時の特徴である躰の収縮を始めていた。その後ろからサンドパンが姿を現した。足元には、穴が開いている。

「馬鹿な。『あなをほる』だつて」

「お前ら、今だ。ジムトレーナーは敗北したぞ」

クリードが声を張り上げた。自警団に動搖が走るのが、見ていてはつきりとわかつた。フミツキは、サンドパンを突撃させた。誰かが、悲鳴とともに逃げ出した。一人が逃げてしまえばそれで終わりだつた。サンドパンが向かうだけで、自警団は散り散りになつた。ボイスカウトがなんとかまとめようとしていたが、下り坂に入った辺りで諦めたようだ。

「退きます」

心情的には、追い打ちをしたくなる場面だつた。追撃に走りそなうなら、何としてでも止めなければならぬ。そう思つていたが、意外に団員はみな素直にフミツキに従つ

た。

化石の採掘場まで下がつた。一人だけ、団員が待っていた。状況把握のために、足の速い人間を数人選んであつたのだ。

「化石は？」

「いくつかは。ただ、掘り出せていない方がずっと多いです。特にあのカブトとオムナイトの化石らしいものは、皆惜しがつて いましたが。自警団は？」

「一度追い返しました。といつても、戦闘不能にしたのは精々数人です。クリードさん？」

「四人だ。ジムトレーナー合わせて五人だな。こつちは一人やられてる。俺のズバットも正直、あまり余力はないな」

「ということです。残りの化石は置いていきます」

「なんとかなりませんか。ウチの人間は、血相を変えてましてね。特に、化石に心血を注いでるのが一人いるんですよ」

「誰のことかは、なんとなくわかつた。ただ、これ以上の時間はない。

「撤退します。先行してる部隊に追いついて、指示を伝えてください。それと、運搬部隊が衣料品をもつて いる筈です。前もつて指示した場所に置いておくように、と」

「そんな話が？」

「オツキミ山を出る時には、一般人になりきれるようにしておこうと決めてましたから」「どうも、隊長さん以上に考えている人間はいないようですね。わかりました」

「俺達は？」

「念のため、もうしばらくここで待機します」

不満が出るかもしれない、と思つた。しかしこれも、特に反対されることなく受け入れられた。

思い思いに、岩や壁に腰かけた。

フミツキは、なんとなく埋まつてゐる化石に触れた。カブトの姿は昔、本で見たことがある。記憶のそれと触れている化石とがあまり結び付かず、見るともなく見続けて、躰の一部分しかない、ということに気付いた。恐らく、甲羅だ。中身に当たる部分がどうなつたのかは、フミツキには想像もつかない。

「まあなんだ、上出来だろう、隊長さんよ」

始め、誰に言つてゐるのかわからなかつた。自分に言つてゐるらしいと思つたのは、クリードが正面に立つていたからだ。

「そりや、その化石は随分貴重なもんなのかもしだねえけどな。ジムトレーナーを追つ払つたつてのも、貴重な評判だと思うぜ」

化石を撫でてゐるフミツキを見て、惜しんでいると思つたようだ。化石など、大した

興味はなかつた。手慰みに触つていただけである。

「また、機会はあるでしよう。その時にでも持つていきますよ」

「おう。ま、その時は手を貸してやる」

「手を貸すつて。私の指揮と決まつた訳じやありませんよ」

「隊長はお前さ。俺達は、そう思つてるよ」

それだけ言つて、クリードは離れていつた。クリードに隊長と呼ばれるのが初めてであることに、フミツキは気付いた。

サンドパンが寄つてくる。フミツキはバッグから木の実を取り出すと、半分に分けてサンドパンに差し出した。仮面を外して、もう半分は自分で食べる。水は小型のキュービテナーに入れていて、フミツキがコックを回すと、サンドパンが口元を寄せて飲む。フミツキも、いつでも走りだせる程度に口を湿らせた。

見回すと、全員がフミツキに倣つていた。不意にこそばゆくなつて、フミツキはサンドパンを抱き上げた。

## 第7話

ライターを、分解していた。

オイル式の年代物で、僅かにゴミが混じつただけで火の着きが悪くなる。フリントの減りも速かつた。

写真機用のドライバーとピンセットを使いバラし、オイルを染み込ませた脱脂綿で各部を丁寧に拭う。手順を考えたりすることはほとんどない。躊躇に染み付いているのだ。組み立てまで合わせても、三十分もからなかつた。

月に一回は、作業を行う。それでも、一週間もしないうちに火は着きづらくなるのだつた。

使い捨ての安いライターを持つたこともある。その時期、煙草の量はなぜか減つた。いつの間にか失くし、いつものライターを持ち出すと、再び煙草を頻繁に吸うよくなつた。ライターを変えようという気はそれでなくなつた。

今日の朝刊を開く。一面の内容は避けて、読み進めた。オーキドの研究についての記

事が載っている。疑問を投げかける、という体だつたが、どう読み解いても批判的な意図が透けていた。

「見るべき記事を飛ばしているんじやないかね？化石強奪事件は一面にあるぞ」キヨウだつた。もう九時か、とタカギは思つた。この男は、時間に関して遅れることも早く来ることもない。

「馬鹿馬鹿しい研究だ、と書かれてあるな。まあ、ポケモンの種類が百五十一程度で済まないことは、子供でもわかる話ではある」

「ふむ。オークド博士の記事か。どうせ、批判的な内容だろう？」

「私も、なぜ、と思うがね」

「君、ポケモンという生き物が世界に何種類いるか知つてているかな？」

「さあ。少なくとも、百五十一ではないだろう」

「確かにな。答えは、三十種類だよ」

タカギは、束の間口を噤んだ。揶揄われているとしか思えなかつたのだ。キヨウの目に遊びの色はなかつた。

「ずっと昔、タジリンという外国の貴族が研究をし、三十種類の生物をポケモンと認めた。しかし、所詮は貴族の道楽でね。研究はもつと実践的な分野に移つていき、ポケモンという生き物そのものへの問い合わせは途切れた。オークド博士の肚は、大変なものだ

よ。辺鄙な町の研究者が、貴族の研究を五倍に膨らませようというのだからな

「実践的ではない、原義的な研究か」

「それを行うのが、かつてトレーナーとして実践を極めたオーキド博士だというのも、面白いところだ」

タカギは、ゴロワーズを取り出した。オイルライターの火が、一度で点く。手入れを行つた日はこんなものだ。これがほんの数日でじやじや馬になつてしまふ。

「訊いてみたいことがあつた」

「ほう」

「三年前、山吹組が一晩で壊滅した。あまりの出来事で現場も混乱していてね。三百人に襲われたという者から、たつた一人の奇襲だったと言う者までいた。警察は、三、四十人の精銳による作戦だろうと結論付けたがね」

「それで？」

「一人で山吹組を陥とせるトレーナーは、この世に何人いる？」

「現実的な話ではないな」

「わかっている。すぐに忘れることにしよう」

捜査に先入観を持たない、という意味でタカギは言つた。キヨウがしばらく腕を組んだ。

「カントーで、という意味に解釈するがね。可能性があるのは三人だろう」「多いな」

「可能性の話だ。私の気持ちとしては、零だよ」「誰かね、その三人は?」

「ワタル、サカキ、オーキド」

「わかつた。忘れよう」

若い刑事が、手招きしていた。それから、隣室を指差した。課長の部屋だ。まだ吸い始めたばかりのゴロワーズを消した。

課長室には三人の人間がいた。課長以外の二人にも、見覚えはあつた。一人は組対で、もう一人は窃盗を担当している部署の人間だった。タカギの専門は殺人で、つまりは畠違いになるのだが、他所でも優れた刑事は多少記憶していた。優れた刑事が集まっているというのは、大抵厄介事である。

「君も災難だな、タカギ警部」

言つたのは、組対の男だ。体育会系に見られればマシな方で、ほとんど暴力団員のような見た目をしている。

「公安が機能していれば、君が引っ張り出されることもなかつたろうに。なんせ、口ケツト団は殺しだけはやらん」

「同盟軍に文句でも言いますか」

「やめてくださいよ、お二人とも」

窃盗担当の男が口を挟んだ。こちらは神経質そうだ。

「連中、公安と秘密警察の区別もついておらん」

「捜査権はこちらです。専門部署設立と情報共有について、向こうに権利があるだけです」

「三課は、そんな形に納得している訳だ？」

二人の言い争いを、タカギは耳に入れないようとした。

特定団体を担当する部署がない。それで、殺人が専門のタカギにお鉢が回つてきたりするのだ。オークドの研究記事など目じやない程に議論されている話題で、いささか倦んでいるところがあつた。

課長が立ち上がった。階級はタカギよりも二つ上で、流石に静まり返つた。歳は五つ以上、下である。

「とりあえず、情報の共有をしましよう。タカギ警部、認識は？」

「新聞程度ですかね」

「化石強奪事件と窃盗が、ほぼ同時に起きました。化石の方は被害軽微、しかしへンムトレーナーが撃退された件が耳目を集めているようです。窃盗は金品多数に、技マシンも

持つていかれました」

それならば、被害額は決して少くないだろう。技マシンの取り引きは国が厳しく取り締まつていて、その価格決定について市場経済から切り離されている。その分、闇に出回つた時の価値は大きかつた。

「上は、いよいよ口ケット団が食うに困つたのだと考へてゐるようですがね」

「つまり、ただの窃盗グループだと思つてゐる訳ですか。山吹組との抗争については?」

「なにかの間違いだらうと」

組対が、苦虫を噛み潰した顔をした。

「今回被害に遭つた金品、技マシン、化石については三課の方でルートを暴いて欲しいそうです」

男は、眼鏡を外し丁寧に拭つていた。やたらと擦つているが、曇りが付いてゐるようには見えなかつた。

しばらく話をしてから、二人が退出し、タカギだけが残された。課長はゆつたりと椅子に背を凭せると、タカギに煙草を勧めた。

「苦情が来ているんですがね」

火を点けた瞬間に切り込んできた。

「ゲームコーナーに、ちよつかいをかけたんですね」

「遊びに行つただけですよ」

「それについての苦情ですよ。上からですが、大元はタマムシの議員ですね」

ならば、苦情などではなく圧力ということだつた。

タカギはゴロワーズを呟えた。そちらのルートからの圧力ならば、成り上がつた小悪党の動きとして不自然はない。ゲームコーナーという商売で一山当てた男が、利益を守るために当然の動きをした、といふだけだ。

しかし、あの支配人と呼ばれていた男は、そんなにつまらない人物だつたか。あまりにも無難すぎる気もした。次期四天王と言われるキョウが、できる、と表現した男だ。「もし、タカギさんに何かしらの確信があるのだったら、この程度の苦情は僕の方で止めようと思うんですけどね」

そう言つて、課長はじつとタカギを見つめた。

エリートは、こんなものだつた。恩を着せて、手柄を持つていく。そして、切る時は平然と切る。

それを悪と言うつもりはなかつた。こういう上司を利用して、独断的な搜査を行つたことも一度や二度ではない。手柄を渡せばいいだけ、道義的なことを言い始める上司よりも楽とも思えた。

ジムバッジを三つ。それがいつからか、警察にとつての暗黙の了解のようになつた。

タカギは終戦直後に警察に入つたクチで、その頃はそのような慣習はなかつたのである。そして、戦時中のタカギに、ジムを巡る余裕もなかつた。若者が取り立てられたと思つたら、慣習ができ、タカギ達の世代は置いていかれたのだつた。年下の上司にも、既に慣れてしまつてゐる。

「ニビに、行つてみたいんですけどね」

休暇でも取るように、タカギは言つた。課長が頷く。捜査許可を出すとは言わなかつた。この辺りの呼吸は馴染んだものだ。

部屋の外ではキヨウが待つていた。

「資金の流れがあるはずだ。しかし、見えない」

「金か」

「山吹組との抗争は、決着の一晩ばかりが口に昇るが、それ以前から暗闘はあつた。まして口ケット団は、勝利した後もこれといった縄張りを引いた訳でもない」

組織としての体力が持つ筈はなかつた。しかし現実として、口ケット団は存続し、ジムトレーナーを撃退するほどの集団を養つてゐる。

糧道がどこかにある。捜査の命令を受けた時、始めにタカギが考えたのがそれだつた。

企業を当たつた。しかし、口ケット団のバツクにいそうな企業は見つからなかつた。

ゲームコーナーに目をつけたのは、勘といつていい。

支配人という男が、やはり引っ掛けた。あんな、腐った商売の差配で満足していられる手合いとは思えなかつたのだ。

「当たつてみよう。あまり得意ではないがね」

「忍だろう、君は」

「忍にも色々ある。鷹狩りの時、警備についたというのがうちの家でな」

「鷹狩り？」

「鷹匠と御庭番の間に生まれたのが祖先でね。わかりやすく言えば、武闘派という訳だ」  
その時、どこからかゴルバットが舞い降りて、キョウの肩に掴まつた。ゴルバットがどこから出てきたのか、タカギにはさっぱりわからなかつた。自分の頭の上から出てきたような気さえしたのだ。

「君は、山吹組を壊滅できるのではないかね？」

キョウは、小さく笑つた。



ヤマブキから帰つて来た結果は、衝撃だつたと言つてい。

ハナダの洞窟の観測結果である。

「サカキ様、これは」

ムツキが、啞然としていた。それほどに、前回の結果との差が大きかつたのだ。

全体を流し見て、それから細部に目を通した。ミュウツーの波長は、ほとんど進化としか言えないほどの上昇を起こしていた。

抱き込んである研究者の見解も添えられていた。興奮そのままに書いたのか、文章には粗が多い。はつきりわかるのは、既存のどのポケモンよりも強い生命体が誕生しようとしていることだけだった。

「こんなことがあるのですか？」

「研究は、途中で投げ出されていた。理由についてはつきりとは書かれていなかつたが、科学者の理解を越えたのだろうな」

「これがポケモン、ですか」

「以前、私が戦つた時よりも既に強くなっている。自己進化だな。放棄された研究、計画は、ミュウツー自身の手をもつて完成しようとしている」

トキワジムの一室だった。いつもなら、資料はムツキが上手く振り分けている。それ

が今は、堆く積み上がっていた。

作戦は、予想を遥かに越える成功を見せた。特に大きかったのはフミツキの存在である。発掘部隊を逃がしながら、ニビジムのジムトレーナー率いる自警団を軽く蹴散らした。

報告書を見る限り、作戦勝ちという趣が強かつた。ジムトレーナー含めた自警団全体を混乱と焦りに叩き込んだ、という感じだ。

サカキや支配人が感心したのは、化石を置いてきたことだつた。それで、次の動きの幅はずつと広くなる。フミツキの動きは全体的に部下に譲歩する流れが強かつたが、その点に関しては自身の意思を通した、という感じだつた。指揮官としての柔軟さと強さが垣間見える。

これで一トレーナーとして優秀なら、幹部にでもすぐに上げたいくらいだつた。しかし、どう好意的に解釈しても、ジムバッジ五つが限度というところだ。

サカキはもう一度資料に目を通して、それから父の遺したメモを見た。

ミュウツーの波長は、当時から激しい上下が起こっていたようだ。最高値の時には、周囲百キロに妨害の念波を飛ばすことも不可能ではなかつたらしい。この念波が、同盟軍が用いるような電子機器の機能を狂わせる能力がある、とされていた。つまりは、切り札になり得る、ということだつた。問題は、安定しているか否かだ。

「再度の調査がいるな。それも、可及的速やかにだ」

「今なら、化石採掘場にもそれほどの警備体制は敷かれていません。あちらの言い分としては、口ケット団を撃退した、ですから」

「注目も集まっている。一ヶ所でも、陽動としての役割は充分に果たせるな」

そして、タケシ本人でも出てこない限りは、フミツキはやつてのける筈だ。あるいは、タケシが出てきても上手く躱すかもしれない。

フジに会う必要があるかもしれない、サカキは思った。データの進行が、サカキ達の予想の先を行っている。サカキの計画のために必要な要素はいくつかあり、ミュウツーは欠かせない存在だつた。読み解ける人間を放置している余裕はない。

「もう一度、オツキミ山に行かせてみよう。その裏で計測、その後はタマムシに帰還でいい」

ムツキは一礼すると、部屋を出ていった。サカキは、ちょっと天井を仰いだ。



思ったよりも、ニビは平穏だった。オツキミ山の事件は、ニビの住民に取つては近くで遠い出来事だつたようだ。

タカギは、しばらく観光をした。課長には、休暇とも仕事とも言わないで来ている。微妙なやり取りで、どちらに転んでもいいような手回しはしておくべきだつた。博物館に来た。眺めるともなく、見て回つた。化石の標本がある。それは貴重な古代の軌跡なのかも知れなかつたが、タカギにとつては、白骨化した死体の人形だつた。月の石も、進化に使える便利な石というだけだ。

化石採集の地層についてのコーナーに差し掛かつた。古いものから、最新の発見まで網羅してある。最新の地層について、文章を最後まで読んだ。末尾には当然、この文を書いた人間が記してある。キヨウの挙げた三人の中の一人の名前が載つてゐる。先入観は持たない。それは、キヨウとの約束のようなものだつた。

博物館を出て、ジムに向かつた。全体として静かな町で、博物館以外の名所はジムと花畠ぐらいだつた。花畠も、普段タマムシで暮らしているタカギにとつては決して華やかなものではない。白や紫の花たちが、まばらに立ち並んでいるだけだ。

タカギが着いた時、ジムからは大きな歓声が響いていた。受付の横にある部屋で、しばらく待つた。

やつてきたのは二人の男だつた。片方には見覚えがある。ニビジムのジムリーダー、

タケシだつた。もう一方の少年は知らない顔だ。二人はいくらか言葉を交わし、やがて少年がジムから出ていった。

タカギはなぜか、その背を目で追つた。いや、凝視していたといつていい。自動扉が開き、特徴的な赤の帽子とジャケットがその向こうに消えた。それでようやく、タカギは目を離すことができた。

「どうも、こういう者ですかね」

警察手帳を見せてから、タカギはタケシに話を聞いた。流石にタケシは、自分のところのジムトレーナーの不始末も隠さず話した。奇襲で、あるいは多人数で無理矢理襲つたというような報道も少なくなかつたが、タケシは負けるべくして負けたと思つているようだ。

「それほどですか、ロケット団は」

「強いというのと、試合巧者というのはまた違いましてね。上手くやられた、というしかない」

「もう一度やれば勝てる」と？」

「まさか。巧者というのは、常に上手いから巧者なんですよ。強いて言えば、相性が悪い、ということですかね」

「なるほど」

「勝負というのは、残酷なことが起きるもんです」

タケシはちょっと笑うと、なにか良いことでも思い付いたような声を出した。

「タカギさんは、すぐにタマムシへ帰られるんですか？」

「一応、オツキミ山も見てみるつもりですよ。あんまり言うとなんですが、手掛かりすらも足りない状況でしてね」

「じゃ、彼と一緒に行つてみるといいですよ」

「彼？」

「レッドという子でね。正直なところ、試合中、僕は本気で彼を倒すつもりになつたんですよ。全て躊躇ましたがね」

ジムチャレンジは、あくまでも加減したレベルのポケモンを使うものだろう。それでも、ジムリーダーが本気になることは珍しい。加減したジムリーダーさえも突破できないトレーナーの方が、この世にはずつと多いのだ。

「その子は？」

「さつき出ていった筈ですけどね。一日二日は、ポケモンセンターで準備を整えるんじゃないかな」

先程の赤い少年だ。そう思つた時、なぜかタカギは頷いていた。自分でも、理由は説明できない。タケシは、ちょっと頷くと、ジムに戻つていった。

ポケモンセンターにいると言つたか。考えるともなく、タカギはそう思つた。すれ違う人が、時折タカギの方を振り向く。自分が鼻唄をやつていることに気付いて、タカギは口を閉ざした。昔からの、忌々しい癖だ。いつの間にか、ポケモンセンターの前に着いていた。

## 第8話

ポケモンセンターには、姿はなかつた。少し考えて、タカギはフレンドリーショップへ向かつた。

レッドは、商品棚を眺めていた。タカギはその背をしばらく見つめていた。どう見ても、ただの少年である。それでもなぜか、引き込まれるような気分が寄せては返しながらタカギを襲つてきた。

今まで、色々な男を見てきた。いそうもない男が、この世にはいる。そういうこともよく知つていた。しかしこのレッドという少年は、今まで見た誰とも違う部分で、タカギの心に触れてくる。

頭を振る。考えて、わかることではない。

「ちよつといいかね？」

警察手帳を見せながら声を掛けると、レッドはぎよつと目を見開いた。やはり子供なのだ、とタカギは思つた。

「いや、物騒な話じゃない。実は、二ビジムのタケシ君に君を推薦されてね」「推薦?」

「ある捜査でオツキミ山を通りたいんだが、パートナーがない。警察には、最低でも二人一組で行動しないといけない決まりがあるんだよ」

原則としてはその通りだが、この程度の規則を破ることぐらいタカギは慣れたものだつた。つまりは、レツドを誘うための方便である。なぜこの少年を連れていこうとしているのかについて、タカギは考えないことにした。

「タケシ君は忙しいらしい。そこで挙がつたのが君の名前だつたということだ。まあ、あまり面倒なことを求めるつもりはない。オツキミ山を抜けるまで行動を共にする、というだけの話なんだが」

しばらく考える様子を見せてから、レツドは小さく頷いた。そのまま、再び商品棚へ向き直る。無口な少年だつた。

ショッピングカートの中身を、タカギは覗き込んだ。

「なんだね、これは」

思わず声を挙げた。モンスター・ボール。一つや二つではなく、二十以上のボールが縮小された状態でカゴの中に転がつていた。その横には、申し訳程度に携帯食料や傷薬などが入つていて、

ジムチャレンジは、賞金が出る。トレーナーの前途を応援するという名目で、ポケモン協会が出資している補助金だ。金額は後のジムほど大きくなるので、ニビジムの賞金は大したものではない。

タカギの計算では、ニビジムの賞金を丸々使つてもまだ、カゴの中身には足りないだろう。

タカギの驚きからしばらくして、レッドがああ、と声を出した。

「なにか、ハナダまでのポケモンで狙つているものがあるのかね？」

「いえ。行けるところまで、リザードだけで行くつもりです」

「しかし君、このボールは」

レッドが懐から何かを取り出した。赤い手帳のように見えたが、よく見ると紙などでなく、もつと硬質な素材でできていた。どこかで見たことがある。

新聞。どの記事だつたか。

「ポケモン図鑑、だつたかな？」

「そうです」

オーキドの記事。思い出した。百五十一匹の生き物をポケモンと認定するにあたつて開発された専用のマシン、だつたか。詳しくは思い出せなかつた。ほとんど流し見ていたのだ。

「君は、オーキド研究所に勤めているのか？」

「いえ。頼まれただけです」

「君だけが？」

「もう一人。グリーンといつて、オーキド博士の孫ですけど。俺の幼馴染です」

年齢さえ考えなければ、身内に研究を託すというのはおかしいことではなかつた。孫ならば、ありえない話ではない。しかしこのレッドという少年は、身内でもなければ研究者でもないのだ。

キヨウの言葉を思い出した。山吹組を一人で壊滅できるとしたら、ワタルにサカキ、そしてオーキド。それほどの実力者が、一体何を思つてこの少年に図鑑を渡したのか。「オーキド博士の研究は、大変有意義なものらしいね」

「そうなんですか？」

「知人の意見だがね」

「よくわかりません」

「そ、うか」

レッドがカートを押していく。途中で甘味を取り、しばらく眺めてから棚に戻します。レジに着いた時、タカギは後ろからカゴの中に甘味を投げ込んだ。財布を取り出

「安いが、依頼料とでも思つてくれ」

レッドがちょっと頭を下げた。

一旦別れてから、タカギはポケモンセンターの公衆電話に向かつた。

「ダミーが多すぎるな」

電話に出たキョウは、いささか疲れた口調で言つた。

「それほどか」

「タマムシをたらい回しにされたよ。ペーカンパニーダラけさ。四つ追つたが、全て行き止まりだつた」

「他の当ては？」

「あるとも。うんざりするほどな」

ゲームコーナーからの資金の流れは、タカギの思つた以上に方々へ伸びてゐるようだ。いかがわしい商売をしていると名乗つてゐるようなものだが、それはある意味、それなりの悪党としては当然の姿ではあつた。疑われる程度のことは、言うまでもなく計算しているだろう。

タマムシ議員を動かして、圧力を掛けてくる。課長が守つてくれるなどという期待を、タカギは持つていなかつた。ある一点を越えれば、平然とタカギを切つてくるに違いない。

ゲームコーナーに踏み込むのは、当面無理と判断するしかなかつた。それに、ゲームコーナーを潰すのはあくまで手段であつて、目的ではなかつた。

「ロケット団と繋がつてゐる道。それが判明するだけでいいんだが」

「まあ、容易くはあるまい。君の勘の通り、ゲームコーナーがロケット団の下部組織ならば、繋がりは一番強固に隠すだろう」

「他に手繕れる糸はない」

「やつてみるさ」

受話器を置いて、タカギは考え込んだ。

ロケット団とはなんなのか。それが、一番の謎だつた。

過去に起こされた事件は二つに分類できる。窃盗や強盗が本業ならば、そちら方面の犯罪組織だし、山吹組との抗争が本性ならば暴力団だろう。

しかし、捜査の命令はタカギに来た。殺しの線がない以上、特定団体という疑いがかつていてると思わざるを得なかつた。

この手の命令はいくつかあるが、出所がはつきりしないものは大抵反同盟軍絡みの団体だつた。

そういう想定で物事を見ると、ロケット団は恐ろしい組織だつた。表面上を取り繕つたまま、地下に深く潜行している。それが一瞬、力の一端を見せたのが山吹組との抗争

だということになる。それ以降、ロケット団が武力を見せたことは一度もない。

山吹組を壊滅させる力を持ちながら潜行した、反同盟軍組織。それはカントーの治安に置いて、過去類を見ないほどの脅威だろう。下手すれば、先の戦争の続きをカントーで始めかねないのだ。

考えても、現実味はなかつた。資金ルートの有無で、それは形を見せる筈だ。現実的な脅威なのか、あるいは過去いくつもあつたような、理想だけ掲げて立ち消えていく団体なのか。

タカギは地図を眺めた。オツキミ山に、ロケット団の目的となりうるなにかがあるとは思えない。あるいは、何かの陽動なのか。  
それでも今は、オツキミ山から始めるしかなかつた。



再度の命令は、予想以上に速かつた。

クリードは、前回持ち帰り損ねた化石の催促だと考えたようだ。戦闘要員の団員達を

相手に、動きの確認などを繰り返している。化石担当の技術者達も意気を揚げていた。化石などである筈がない。そう思つても、フミツキは言葉にならなかつた。意味のあることでもないからだ。

先の作戦は陽動だつた。これほど速く再度の陽動作戦が必要になつたのならば、本命の動きが失敗したか、あるいは大成功を収めたかだろう。どちらにしても、フミツキのやることに変わりはない。

クリードがやつて來た。全身に、軽く汗を搔いている。

「よお、隊長。いつも通り、難しい顔してゐるじやねえか」

「トレーニングは終わりですか？」

「まあな。化石、持つて帰れるぜ、今回は」

「拘りはしませんよ。逮捕者を出さない。今のところ、それが一番です」

「まあ、いいじやねえか。みんなやる気になつてる。悪いことじやないだろう？」

「それはそうですが」

「わかつてるよ。暴走しそうな研究者については、周りの奴に声を掛けてる。いざとな

りや取り押さえで無理矢理連れ帰るさ」

副官としては、やはりクリードは優秀だつた。自分で考えることはしないが、こちらの言葉をしつかり覚えていて、先に手を回してくる。それがスムーズなのは本人の人望

だろう。フミツキが同じことをしようとして、これほど手際良いくとは思えなかつた。

ハナダの隠れ家である。フミツキは椅子に腰掛けながら、地図に目を落とした。オツキミ山の内部図だ。

前回の勝利は、地の利が大きかつた。相手の慢心もあつただろう。

世間ではロケット団が撃退されたということになつてゐるが、ニビのジムトレーナーがそう思つてゐる筈はなかつた。勝ちすぎた、という気もする。慢心はもう期待しない方がいい。

「顔の造りは悪くねえが、そのうちに皺まみれになるな、これは」

「褒められてると思つておきます」

「大事なのは、ケツと度胸さ」

クリードの後ろに、団員達が駆け込んでくる姿が見えた。全員汗を搔いていて、ドアを通り抜けた順に大の字に転がつた。クリードが頭を蹴つ飛ばしながら、水を渡している。

「どれだけ走つたんですか」

「長くはねえよ。ただ、ペースは速かつたな。ほれ、さつさと起きろ」

一人一人と、起き上がつては涼みに行く。といつても、外で寝つ転がるだけだ。その

香気さが、フミツキは羨ましかつた。

自分の気持ちが浮わついていないか、フミツキは何度も自省した。前回は、クリードの香気さに対して羨みと苛立ちが同時にあつた気がする。今、苛立つような感情は湧いてこなかつた。しかし、油断のようなものも、自分の中に見当たらない、と思う。

漠然とした不安だつた。オツキミ山に、なにか得体の知れない、それでいて突拍子のない隕石ような存在が降つてこないか。馬鹿げた考えが、時折頭を過る。それは初めてのことだつた。

やるべきことは決まつてゐる。地図を見、それから引き連れてゐる団員を一人一人思い浮かべた。なにも、新しいことは思い浮かばない。

一般トレーナーを蹴散らし、採掘場まで歩みを進め、発掘班を背に斥候を出す。後は、どこで退くかというだけだ。

团服を脱いで薄手になると、フミツキはストレッチを始めた。最初はどうまきしていきたクリード達も、流石に慣れたようだ。

「躰は、適度に休めていてくださいね」

それだけ言つて、フミツキは駆け出した。周囲を一、二周すれば、きっと振り切れる。何を振り切るのか、フミツキ自身にもよくわからなかつた。



オツキミ山までの道のりには、多くのトレーナーがいた。

その全てを、レッドは圧倒した。別段、難しいことではない。ニビを抜けたばかりのトレーナー達は練度が低く、やろうと思えば自分でも同じことができるだろう、とタカギは思った。

本当の意味で同じことができるかはわからない。同じタイムで勝つだけなら、タカギにもできる。その程度だ。

「フレンドリーショップでの購入代ぐらいは取つただろうな」

からかうように言うと、レッドは財布を開いて中身とレシートを見比べ、それから頷いた。

無口だが、暗い性格ではなかつた。タカギが警察での苦労話をいくつかすると、レッドもマサラタウンでの思い出をぽつりぽつりと語つた。旅立ちの日、母親は映画に夢中でまともに見送られなかつたというエピソードにタカギが笑うと、レッドも顔を綻ばせた。

「夕方までには、オツキミ山に着きそうだな」

本来なら、もつと早く着いていてもおかしくなかつた。ただ、道中でレッドは度々草むらに入り、ポケモンの捕獲を試みていた。そちらの方は、バトルほどの手際は発揮されなかつた。リザードが、強すぎるのである。

見かねたタカギが手を貸した。タカギのウツボットもこの辺りのポケモンに対しては強すぎたが、リザードよりはずっと搦め手が利いた。手加減にも慣れている。容疑者を死なせるようでは、警察は勤まらないのだ。

「そろそろだな」

夕焼けが射していた。タカギは、微かな疲労を感じた。ここ数年は、こういうことがある。いくらかのポケモンを捕獲したレッドは、それら全てを転送装置で送つたことで、旅立ち前よりもむしろ身軽になつていた。下手をすれば、祖父と孫ほどに歳の差があるので、とタカギは思つた。

ゴロワーズを取り出した。ライターは火花を散らすばかりで中々着火しなかつた。レッドがリザードを指すのを無視して、ライターを擦り続けた。火が点いた時には、オツキミ山の前に着いていた。

「今、立ち入り禁止になつています。近場のポケモンセンターまで戻つてください」

洞窟の入り口近くで、赤色の警棒を回している青年がいた。警察ではない。ニビの自

警団だろう、とタカギは当たりをつけた。

「どういうことだね？立ち入り禁止とは」

「どうつてね、おじいさん。どうもこうもないよ。とにかく、今オツキミ山の洞窟は立ち入り禁止なんです」

タカギは警察手帳を突き付けた。青年が、肩を跳ねさせた。

「警察？」

「タマムシの、タカギという者だよ。こちらの子は協力者でね。タケシ君のお墨付きでもある」

「はつ、いえ、失礼しました」

青年が敬礼をした。不恰好なことは指摘せず、タカギも敬礼を返した。時間が惜しい。

「それで、オツキミ山が封鎖とはどういうことだね？」

「それは」

ゴロワーズの煙が青年の顔にかかる。青年が小うるさそうに手で煙を払っている。点けたばかりのゴロワーズを、踏み消した。全く、面倒なことばかりだ。

「口ケット団ですよ。連中、また来やがつた。あの化石を今度こそ持つていこうってんだ」

「いつだ？」

「ほんの一時間前に、次々中のトレーナー達が出てきたんですよ。集団に、いきなりバトルを仕掛けられたとかで。それも、普通の格好をしたトレーナー達にですよ」

前回、口ケット団が使つたと思われている手口と同じだった。

脱出も同じ手口だとタカギは睨んでいた。自警団は、団服を着た口ケット団と交戦している。しかし、そんな格好の人間がオツキミ山から出てきたという証言はなかつたのだ。

化石の運搬、それから率いていた人物が使つたという『あなをほる』から、別ルートで脱出したという認識が警察内では強かつた。しかし、化石の運搬を任せられる人員が他にいれば話は変わる。要は、口ケット団にそれだけの人員がいるかどうかだ。他に資金源があるかどうかも、それである程度は測れるだろう。

レッドが、不思議そうにこちらを見た。鼻唄をやつてることに、タカギは気付いた。『老犬トレー』。子供の頃からの癖だ。元々は、同盟軍の兵士が口ずさんでいたという唄だ。

「自警団は？」

「今、人を集めているところです。前回のこととで、みんな尻込みしちやつて。もう二時間もすれば、タケシさんも来れる筈ですが」

あまりに遅すぎた。ロケット団が撤収するには、充分過ぎる時間だろう。  
レッドを見た。瞳は望洋としていて、感情が読めない。

「リザードは？」

「平気です」

傷を負つてないのは、タカギもわかつていた。疲労の度合いを見極めるのはトレーナーの役目だろう。

事も無げに言つて、レッドは歩きだした。慌てて遮ろうとした青年の鼻先に、タカギはもう一度警察手帳を突き付けた。

「ロケット団は犯罪組織だ。それも、世間の誰もが予想していないような、とんでもない力を秘めている可能性がある」

レッドは振り向かなかつた。僅かに逡巡してから、タカギはレッドに並んだ。  
とんでもない力を秘めている可能性。それは、この隣の少年からも感じているもの  
だつた。

## 第9話

化石は、簡易な保護ケースがつけられていた。鍵が掛かっている。いささか杜撰な仕事で、自警団が咄嗟に施したものと思えた。壊そうと思えば壊せるのだ。ただし、中身の化石も破損するだろう。解錠も不可能ではないが、時間が掛かるらしい。都合がいいと、フミツキは思った。

斥候の一人に私服を着せ、蹴散らしたトレーナー達に紛れ込ませていた。その方が、出口により近付ける。前回の斥候を出した範囲は、後になつて思うと狭すぎた。たまたま有利な地形が戦場になつたから良かつたが、不本意な遭遇戦が起きてもおかしくはなかつたのだ。

斥候が次々と戻つてくる。頭の中にある地図を、フミツキは黒塗りしていった。

発掘班の団員がやつてきた。

「大した施錠でもないんですが、何分用意がない。隊長さんなら、なんとか中身を傷付け

ずに破壊できませんか？」

フミツキは苦笑した。この団員は、バトルというものをよく知らないのだろう。ジムトレーナーは世間一般で言えばバトルの専門家だが、達人ではない。それになんとか勝つただけのフミツキも同様だ。

支配人のキュウコンを思い出した。フミツキの腕に炎を絡ませながらも、決して肌を焼くことはなく、手の中にあつた書類だけを燃やしてみせた。フミツキでは想像もつかないほどの技量である。まず、できることではない。

「無理ですね」

地面こと掘り返すぐらいならサンドパンはできるだろうが、そんな岩を運搬するような用意はない。いざとなれば、ハナダ側に敷かれた警戒を突破しなければならないかもしないのだ。

「時間さえあれば、あの程度の鍵ぐらいどうにでもなるんですが」

そう言つて、団員はフミツキの顔を窺つた。フミツキはまた苦笑した。どうやら、本命はこちららしい。

「時間について妥協の余地はありません」

「前回はかなりの余裕があつたじゃないですか」

「全てが上手くいった結果ですよ。もう一度同じ事をやれと言われても、できるもので

はない」

「やつて頂きたい。研究員の幾人かが目立つて見えるでしょうが、あの化石を完全な状態で掘り返したいというのは全員の想いなのですよ」

やはり勝ちすぎた、とフミツキは思った。団員の目に浮かんでいる火は、明らかに前より強くなっている。なんとか説得しようとフミツキが口を開いた時、最後の斥候が帰つて来た。私服の斥候だ。

「どうも、自警団は出動が遅れているようですよ、隊長」「本当に？」

フミツキより先に、団員が声を挙げた。困惑している斥候に、フミツキは続きを促した。

「前回のこと也有つて、少なくない自警団員が二の足を踏んでいるようです。ニビ側の出口では、集合の遅さに地団駄を踏んでいるトレーナーがいましたよ」

警察は、自警団よりずっと出動が遅い。ポケモンバトルの可能性がある現場については、出動前に会議が義務付けられているのである。ロケット団の規模を考えれば、捜査本部の立ち上げが必要と判断されてもおかしくはない。

自警団は、ポケモン協会やジムリーダーの影響を強く受けた組織で、フットワークの軽さを公的に認められている立場にある。

自警団が遅れるということは、しばらくの安全が確保されているということだ。

団員がフミツキを見詰めている。その足はずつと重くなつたように見えた。色好い返事を貰わなければ、動きそうにもない。

「一時間です。撤収準備だけは元の予定通りに開始して、最低限の道具で作業を進めてください」

団員が飛び上がつた。駆け去つていく背中に、フミツキは言葉を投げた。

「これ以上は延ばしません。暴走しそうな研究員については、事前に監視をつけていてください」

「承知していますよ、隊長さん。クリードさんにも言われていますから」

フミツキは頭を振つてから、斥候の方を向いた。

「服は着替えてきてください。洞窟の入り口が見張れるポイントは？」

「いくつか見繕つてあります」

斥候は、一度頭を下げてから奥へ進んだ。替えの服は運搬要員の団員が持つていて、撤退の際にはそれに着替え、フミツキ達戦闘要員の分はいくつかの岩影に隠すことになつていた。それで、ハナダ側に抜けるのは難しくなる筈だ。

斥候と入れ替わりで、クリードがやつて來た。念のため、ハナダからの追跡も警戒す

る必要があつたのだ。ここまで来たということは、ひとまず後方に問題はないのだろう。

「連中、腰が引けてるつて？」

「そこまでは。あるいは、タケシが出てくるのかもしません」

「どんだけ強かろうと、足が遅せえってのは致命傷だ。そうだろ？」

クリードの言うとおりだつた。ニビジムからタケシがやつてくるほどの時間があれば、撤収を終える自信がフミツキにはあつた。

あるいは、意表を突いたのかもしれない、とフミツキは思つた。少なくとも、自警団は態勢を整える余裕すらなかつたのだろう。前回の勝利の余韻が、そのまま時間に繋がつたということか。

それならそれで良かつた。この作戦の後は、タマムシに帰還することになつてゐる。今回だけ乗り切れればそれで良いのだ。

斥候が定期的に戻つてくる。目新しい報告はなにもなかつた。

「お前、なんで口ケット団に入つたんだよ？」

クリードが言つた。一度動き始めると、隊長のやることなどない。並んで躰を休めている格好だ。

「クリードさんはどうしてですか？」

「そりや、世間に馴染めなかつたからよ。ガキの頃から、気に食わねえことを見ると突つかかつていつちまう。そんなことやつてると、たまに、どうしようもなく不利益なこともやつちまうんだな」

「不利益ですか」

「偉い人のガキだつたらしい。俺の親は頭ぺこぺこ下げるよ。しばらくして、親父はホ

ウエン地方に飛ばされた。俺は、縁を切つたよ。多分、俺がよくねえんだ」

「私も似たようなものですよ。世間には、多分馴染んでいなかつた。突つかかるることはありませんでしたけど」

「わかんねえな。お前なら、良い企業で良い顔してられるような気がするが」

「できたと思いますよ。できるということ、馴染むということは結構違うんじゃない

かと思います」

「頭が良いんだろうな。頭が良い奴は、ろくでもない奴が多い。お前は違うが」

「フミツキは笑いを堪えた。口ケット団ほど、ろくでもないという言葉が似合う組織もそうそうないだろう。」

「ま、お前のことは嫌いじやないさ、隊長。そしてボスのことは、なんだ、尊敬してるつてやつだ。それでいいと、俺は思つてる」

斥候が戻ってきた。入り口を見張つていた筈の斥候だ。

「二人組？」

「そうなんですよ。ガキと年寄りです」

「なんだそりや。ただのトレーナーなら、追い返せばいいだろう」

「いや、二ビ側の入り口は自警団が固めてるんですよ。一般人は、もう通れない筈なんですよ」

クリードが声を一段落とした。

「ジムトレーナーか？」

「あるいは。タケシじゃないのは、はつきりと確認しました」

しばらく腕を組んでから、クリードがちらりとこちらを見た。当初予定の時間には達しているが、延長の一時間はまだ過ぎていなかつた。

ジムトレーナーが二人来たのなら、選択肢はない。

「退きましょう」

「発掘は終わったかな？」

「例え途中であつても退きます。クリードさん、通達をお願いできますか」

「仕方ないな。言い聞かせてみるさ」

「俺は？」

「もう一度確認に出てください。戦闘は徹底して避けるように」

「了解です」

二人が、反対へと駆けていく。フミツキは壁に背を預けた。

ジムトレーナーが二人で来たのなら、相手は少數精銳を選んだということだ。

戦うとなれば、厄介なやり方だつた。しかし、こちらが退けば、相手は追いきれない筈だ。少人数では、万が一不意を突かれた時に建て直しが効かないでの、不用意な動きはできないだろう。

オツキミ山の洞窟は、わかりやすい経路こそあるものの、脇道も少なくない。潜めるところもいくつかある。追う側には負担の大きい地形だ。

クリードから、撤退を開始したという合図があつた。斥候が戻つてくるのを待つて、フミツキもその場を離れた。

人のいなくなつた採掘場には、掘り返そうとした跡のある岩肌の地面と保護ケースだけが残してあつた。解錠は上手くいかなかつたようだ。カブトとオムナイトと言われている化石を横目に、フミツキは駆け抜けた。しばらく走つて、フミツキは立ち止まつた。クリードが立つていたからだ。横には、発掘要員の団員を一人連れている。半ベソを搔いていた。なにか嫌な予感が、フミツキの脳裏を掠めた。

「逃がした？」

「以前、隊長に突つかかつた研究員を覚えてるか？いかにも、理科系の男といつた顔をしたやつだ」

それは覚えていた。発掘時間を妥協しないフミツキに対して、露骨に不快感を顕にしていった男だ。

「野郎、どうもいつの間にか抜けてたらしい。すまねえ。無理矢理連れて帰ると言つたのに」

「俺が悪いんです」

隣の団員が言つた。

「今度駄々を捏ねたら強制的に連れていくつて言つてしまつたんです。そうすれば大人しくなると思つたんだ。でも」

片手を挙げて、フミツキは言葉を遮つた。理由など、もうどうでもいい状態になつてゐる。

見捨てるどうかだつた。これがトレーナーならば、フミツキは見捨てただろう。しかし、発掘要員の連中は、本質的に研究員だつた。

他愛もない一研究員かも知れず、あるいは、口ケツト團にとつて大いに有益ななにかを産み出せる研究員かもしれない。その判断が、フミツキにはつかなかつた。後ろを向いた。ジムトレーナーが二人なら、あるいは戦えるかもしれない。勝たずと

も、時間を稼いで逃げるだけでいいのだ。人数差があれば、それほど難しいことではない筈だ。

「発掘、運搬要員の方々はそのまま撤退してください」

クリードが並んできた。駆け始めた。採掘場はそう遠くない。しかし、どこで抜けたのかがわからなかつた。脇道も一つ一つ覗き込む。奥までは確認しなかつた。向こうにも、そんな精神的余裕はないだろう。

人影はどこにもない。間接照明から伸びる影は、フミツキ達のものだけだつた。影は先端が揺らめいて、どこか、頼りない陽炎のように見えた。それが、間接照明の位置によつて右往左往している。追い越し、あるいは追い越されるように、影は無尽に四方を回転した。

採掘場へとやつてきた。視界の端に、怯えるような白衣の男が見えた。化石を一つ、抱えている。発掘要員の団員だつたが、フミツキにはそちらを見るような余裕がなかつた。

二人。老人の方は見覚えがある。老いぼれ犬だつた。なぜ、老いぼれ犬がここに。考えようとしたが、まとまらなかつた。

老いぼれ犬の隣にいた少年が、一步前へ出た。それだけで、なにか重苦しいものがフミツキに襲い掛かつた。

赤い少年だつた。目や口元は、どこか望洋としている。背は、フミツキよりも低いだろう。しかし、なにかが違う。この感覚を、フミツキは知つているような気がした。

白衣の男が、意を決したように立ち上がり、こちらへ駆け抜けた。それが合図のようになつた。

フミツキがサンドパンを繰り出すのと、少年のリザードが飛び上るのがほぼ同時だつた。相性は悪くない。先手を取ろうとフミツキは口を開いた。

『ひのこ』

フミツキの指示よりも先に、攻撃が飛んできた。離れた距離からの『ひのこ』など、大した脅威ではない。しかし、出鼻は挫かれた。

一度、受けるべきかもしれない。指示を出そうとした。

『えんまく』

薄い煙が広がつた。『まるくなる』を指示しようとした矢先だつた。少年は位置を変えて、煙幕に遮られない場所でこちらを見ている。一方的に遠距離技を撃たれかねない。

『こうそくスピン』や『スピードスター』で牽制るべきだろうか。しかし、咄嗟に判断がつかなかつた。

「スピー」

『きりさく』。それから『りゆうのいぶき』

煙から、リザードが飛び出してきた。フミツキの指示を聞こうとしたサンドパンは、どちらにも対応できなかつた。切り裂かれ、息吹に晒されたサンドパンが体勢を建て直した時には、リザードはまた煙の中へ姿を消していた。

何が起きているのか、フミツキははつきり把握しようとした。その時、リザードが再び煙から姿を現した。『ひのこ』。今度は直撃した。サンドパンの足がぐらついている。不意に、フミツキは恐怖に襲われた。なにかがおかしい。この少年は、なにかがおかしい。

『ころがる』

指示を出してから、悠長な判断だと思った。しかし、ほかにどんな選択肢があつたのか。とにかく突つ込んで、煙を晴らすべきではないのか。

サンドパンが回転を始める。回転が最高潮に達する前に、唐突に煙が四散し、その真ん中でリザードが口を開いている姿が見えた。フミツキは立ち竦んだ。

はつきりと思い出した。タケンとの戦い。あの時に感じた絶望的な差が、あるいはそれよりももつと酷いなにかが、今フミツキの前にあつた。

『かえんほうしや』

視界一面に炎が拡がり、サンドパンを包み込んだ。洞窟の中の空気が一気に温度を上

げ、フミツキは激しく噎せ返った。広がった火柱が壁に跳ね返り、荒れ狂う津波のように無造作に散らばった。

目は、閉じなかつた。最後の最後まで、勝負を見続けなさい。あれは、誰に言われた言葉だつたか。はつきりとは思い出せなかつた。サンドパンが、炎の中を必死に振り切ろうと転がつてゐる。少年は、小刻みに指示を送つてゐるようだつた。サンドパンの転がる先々で、火柱が上がつてゐる。

何を指示すればいいのか。少年の指示は、全てにおいてフミツキの一歩先を進んでいた。自分がなにかを指示することは、もつと大きな不幸を呼び寄せる切つ掛けになるのではないか。

呼吸が激しくなつた。息を吸う度に、熱された空気が喉と肺を焼いてゐる。噎せ、吐き出した空気を補うように更に息を吸つた。余計に激しく噎せ返るだけだつた。咳と共に息を吐き出す度に、意識も紛れていくような気がした。

誰かが、フミツキの腰をまさぐつた。払おうとしたが、躰は自由に動かなかつた。別の誰かが、フミツキの躰を掴んだ。いや、抱えられているのか。

再び、腰に手が来た。ベルトに、なにかを填められた。モンスターボールだ、と思つた。サンドパンの入つたモンスターボール。

誰かが、少年と相対してゐた。その周りを、小さなポケモンが飛んでゐる。クリード。

呼ぼうとしたが、喉がひりついて声は出なかつた。

その背が、段々と遠ざかつた。クリード。もう一度呼ぼうとした。やはり、声は出なかつた。

再び炎が燃え上がり、洞窟内を真つ赤に照らした。クリードの背も、見えなくなつた。やがて、フミツキは目の前が真つ暗になつた。

## 第10話

ムツキが、部屋を右往左往していた。

サカキは報告書を眺めた。ハナダの洞窟の計測結果である。全ての数値が、安定的な上昇を見せていた。昔、サカキと交戦した後に一旦は力を落としたようだが、下手をしたらジムリーダーですら対抗できない存在まで、今のミュウツーは進化している。これがチャンピオンの力を超えた時、ミュウツーという存在は人類の軛から抜けることになる。

間違いなく脅威だつたが、ムツキが狼狽しているのは全く別の理由からだつた。

「コーヒーをくれないか」

弾かれたように、ムツキが顔を擧げた。それから真っ直ぐに給湯室へと向かう。その動きには、狼狽などなかつた。仕事さえあれば落ち着けるのだ。

逮捕者を出したことが、ない訳ではなかつた。暗闘だつたとはいえ、山吹組との抗争

は組対にもしつかりと見張られていたのだ。ただ、捕まつたのは下級の団員で、さしたる尋問もなく懲役に送られた。あの時、組対が考えていたのは山吹組の力を削ぐことだけだつたのだろう。ロケット団は、有象無象の組織の一つとしか認識されていなかつた筈だ。

クリードという団員の階級は、決して高くない。しかし、本部と言つていいタマムシのアジトに所属していた。捕まえたのは老いぼれ犬である。一人の団員が懲役に行つて終わり、などと楽観する訳にはいかなかつた。

ムツキが、サカキの前にコーヒーカップを置いた。途端に、表情から落ち着きがなくなつた。「どうなるでしよう？」

サカキは苦笑した。あまりにも漠然とした問い合わせで、普段は冷徹な秘書然としたムツキが、幼子のように見えた。

「フミツキ君はどうしている？」

「ハナダの隠れ家で養生しているようです。負傷などはありませんが、酷く憔悴しているようで。タマムシへと帰させますか？」

「憔悴か」

「やはり、荷が重かつたのでしょうか？」

報告書は上がつてきていた。戦闘要員として連れていった一人と、発掘要員の研究員

からそれぞれ届いている。

ほとんど成功しかけていた、と言つていいだろう。人員の配置や時間のコントロール、安全マージンの取り方も悪くはない。

研究員の一人が、暴走した。それが、まず一つだ。それを見捨てる判断をせず、追いかけた。これがもう一つ。

研究員がニビの自警団に捕まる程度なら、どうでもよかつた。組織にとつて損失ではあるが、痛手ではない。自警団の認識なら、精々窃盗集団の一人として処理されるだけだつたろう。あるいは、火事場泥棒を企んだ名もなき理科系の男として扱われたかもしれない。

しかし、そこにいたのは老いぼれ犬だつた。これも一つだ。

フミツキの作戦を破綻させた大きな要因はこの三つだろう。ただ、そこに駄目押しをした存在がいる。サカキが一番興味を惹かれたのは、そこだつた。

「この、レッドという少年について調べはついたのかな？」

ムツキが、自分の机から封筒を一つ手に取つた。ただ、厚みはない。

「駆け出しのトレーナーで、数日前にタケシを破つています。特に、終盤タケシがかなり厳しめの攻勢を見せたようですが、なんなく捌いて勝利したようで、観戦した者の間ではちょっとした評判になつているようです」

ジムリーダーとしてのタケシの試合は、とにかく受けだつた。それは挑戦者の手並みをしつかりと見定めるためで、『がまん』などといった一風変わつた技を選ぶのも、状況を把握して攻めを中断できるか確かめるためだ。

つまりは一つ目のジムリーダー、教育者としての試合運びである。苛烈な攻勢に出るのは、タケシ本来の戦闘スタイルだつた。

当然、レベルを抑えたポケモンを使用してはいるだろう。それでも、まだバツジも持つていないうようなトレーナーに捌けるものではない。

「それ以前は？」

「それが、その、マサラタウンの出身のようだ」

ムツキが、躰を縮こませながら言つた。

「まあ、そんな気はしていた。気に病むことはない」

マサラタウンは、ナナシマやグレンを除いたカントー本土では唯一の、ロケット団が全く手出しできていない町だつた。

オーキド一族の町なのだ。町長こそ違うものの、警察所長と郵便局長をそれぞれオーキド家の長男と三男が務めている。その背後にいるのが、次男であるオーキド・ユキナリだつた。役場でポストを占めているのも一族の者で、町長などはただのお飾りでしかない。

実質的には一族による独裁と言つてよかつたが、有能かつ善良な者が治めている限り、独裁に欠点はない。何度か諜報員を潜入させてみたが、全く身動きが取れないまま、やがて怪しまれ帰還させるだけだつた。

「ただ、ポケモンの捕獲に勤しんでいる姿が随分と目撃されています。恐らくは、オーキド博士の例の研究かと。それらしい機械を持ち歩いているという報告もあります」

「ポケモン図鑑だつたか。ということは、やはり博士の秘蔵つ子という訳だ」

サカキは報告書に目を落とした。戦闘員から上がつてきた方の報告書だ。

報告者の所感として、何が起きたのかわからない、という言葉が添えられていた。フミツキがほとんどマトモな抵抗もしないまま、負けていつたと見えたらしい。裏切りとは思えず、という文言は部下からの信頼と取るべきだろう。

どういう動きで戦闘が展開されていつたのかが、淡々と記してあつた。ムツキなどは首を傾げていたが、サカキにはどういった駆け引きがあつたのか手に取るようにわかつた。

全てを、叩き潰されていた。それも、行動をではない。一手を思考に浮かべた瞬間に、更に先回りした一手をレッドという少年が打つていて。

魚の泳ぐ先々にガラス板を打ち込んで、いつの間にか水槽のように覆つてしまふ。そういう試合運びだ。魚は動くことを恐怖し、やがて藻搔くことすらできなくなる。呼吸

をすることすら躊躇する心境に陥る。

過呼吸を引き起こしたフミツキに代わって、クリードが飛び込んだ。現場の混乱から内容は途切れ途切れだが、フミツキのサンドパンを回収して撤退させるぐらいの奮闘をクリードは見せたようだ。あるいは、あくまで民間人であるレッドが無理押しをしなかつたのか。

とにかく、クリードが捕縛されフミツキ達はニビまで撤退した。ロケット団はミュウツーについて確度のあるデータを得た。結果を見れば、そういうことだろう。

コーヒーを口に運んだ。カフェインの摂取を目的とした、作業的な飲み方だった。コーヒーに拘りはない。ただ、気紛れで薰りを嗅いだりしても、ムツキの手抜きを感じたことは一度もなかつた。

「余裕が出来たら、フミツキ君をトキワに呼んでくれ。無理はさせるな、使い物にならなくなる。それから、ジムの備品を頼む」

ジムリーダーとしての貌で、サカキは言つた。この辺りの切り替えはムツキも心得たもので、帳簿の用紙を用箋挟に挟むと、サカキに一礼して部屋を出ていった。どこから見てもジムリーダー付きの秘書、あるいは事務員といった姿だ。

しばらく、椅子に背を凭せた。大仰なソファーなどを揃えるジムリーダーもいるが、サカキが使っているのは何の変哲もないオフィスチェアだった。質素で、頑丈である。

タマムシのアジトに行けば、四、五人が優に座れるようなソファーアーが準備されている筈だつた。サカキにとつては、飾りのようなものだ。

ニドキングをボールから出し、それからグラスクロスを手に取つた。ライトはデスク用のものがある。

ニドキングが手持ち無沙汰に床に寝転んだ。天井は高く造つてあるが、それでも多少窮屈だろう。普通のニドキングと比べて、かなりの巨体だつた。角まで合わせると三メートル近くなるのだ。

自分が入つたままボールを磨かれることを、ニドキングは嫌がる。旅をしていた頃はそうではなかつた。サカキが磨くボールの中で眠つていたこともあつたのだ。そうせざるをえないような状況が、旅の途上ではいくつもあつた。

ジムリーダーになつてしまやすくしてから、ボールを磨く時は必ずニドキングを出すようになつた。本来ポケモンを出せないような場でも、サカキが頼めば許可は降りた。

「脂肪が付いたのかもしけんな、俺やお前にも」

ニドキングがちらりとサカキを見て、それから小さく唸り声をあげた。威嚇のようにも見えるが、本当は呆れているのだ。サカキは苦笑した。

付き合いは長かつた。二十二番道路で、生まれて初めて捕まえたポケモンがニドラン♂だ。父の葬儀の三日後だつた。どういう経緯で草むらに飛び込んだのかは、もう覚え

ていない。手持ちのポケモンも居らず、偶然手に入れたモンスター・ボールを一つだけ持っていた。捕獲に失敗したら、毒針で死んでいてもおかしくはなかつた。

ニドキングにだけは、不思議と弱音のようなことも言えた。他人や、他の手持ちポケモンの前では、一度もそういう姿を見せたことはない。殿堂入りしてからも、ニドキングだけは常に連れ歩いている。

心の底からの弱気は、もう何年も感じていらない。それでも時折こうやって、弱音のようなものを吐いてみたりする。いつも、呆れられるだけだつた。

ボールに、光沢が出てきていた。四方から光を当て、僅かに光線の強い部分をグラスクロスで擦つた。もう一度光を当てる。反射とも拡散ともつかない鈍い光を、ボールは湛え始めている。

気配。事務室に向かつてくるのはムツキだろう。しかし、もつと複雑な、あるいはもつと深い気配が、玄関の辺りにあつた。

「サカキ様、お客様です。その、タマムシのタカギ警部だと」

領いて、ニドキングをボールに戻した。ムツキの額に、汗が一筋流れている。

「私、席を外します」

「取り調べではない。秘書が席を外す理由もないだろう」

「ですが」

「お呼びしなさい」

「はい」

入ってきたのは、若い男と初老の男だった。若い方には見覚えがあった。トキワ署の刑事で、年二、三回ほどある講習会で顔を合わせている。

タカギは、老いぼれなどと言われる程の歳には見えなかつた。ただ、髪はほとんど白くなつてゐる。そして、眼には不思議な光があつた。頻りに、コートの中で何かを擦つてゐる。それがなぜか、神経質には見えなかつた。

「いや、サカキさん、いきなり申し訳ないですね。こちら、タマムシ警察のタカギ警部。今、口ケット団について追つてゐるとかでね」

ムツキは、無心に書類に向かつてゐるようだつた。前日の在庫表と先ほど確認した在庫を見比べてゐる。そして、所々でペンを走らせていた。

若い刑事が、話を始めた。タカギはその後ろでなにか身じろぎをしてゐる。

「実は、オツキミ山で色々ありましてね。まあ、新聞でも大きく取り扱われたからサカキさんも知つていてると思いますが」

「化石でしたか。学術的価値を軽視し、好事家への売り物とする。嘆かわしいことだと思つていましたよ」

「ま、所詮こそ泥連中で。こちらのタカギ警部が姿を見せると尻尾を巻いて逃げたよう

だが。実は、タカギ警部はちょっとした有名人でね。凄腕なんですよ」「心強いことです。それで、私には何を?」

「ああ、そうだった。その化石が見つかった場所がですね、なんだ、地層というのかな?とにかく、そこについてサカキさんがなにやら詳しいとかでね」

若い刑事は、誰かに指図されていることを露骨に態度で表していた。演技ではないだろう。そこまで器用な男ではなかつた筈だ。

あの地層についてサカキが触れているのは、ニビ博物館の展示に寄せたコメントだけだ。そこに目を留めてトキワまで来たのならば、老いぼれ犬の洞察は噂程度のものではない。

「実に、興味深い地層でしたよ。露頭を見ても、オツキミ山の他の場所とは明らかに違う。時間間隙と言われたりもするが、ポケモンに依るものは特に携帯獸性の不整合と呼ばれましてね。地質学だけでは読み解き難いのですよ。そういうた地形はいくつかあるが、オツキミ山は隕石の影響を多分に受けたとも言われますから」

「ああいえ、講釈は勘弁してください。自分は、学もありませんから」

「私も、まともに学んだ訳ではない。ただ、地面とはなにか、と時折思いますよ」

「いや、弱つたな」

若い刑事がちらりとタカギを見た。手を背広のポケットに突っ込んだまま、タカギは

何をするでもなく立っていた。

若い刑事が二、三質問をして、サカキはそれに対しても完璧以上の解答を返した。意地の悪いやり方で、若い刑事も途中で自分がからかわれていてことに気付いたようだ。

「トキワジムのトレーナーは皆優秀でしてね。あまり、こういった講義をする機会もない」

「本当に、勘弁してくださいよサカキさん。自分も一応は刑事ですから、情けない姿ばかり晒せないですよ」

「知らないものは知らないでいいんですよ。特に専門知識はね。人生で一度、役に立けば御の字でしょう」

「随分、綺麗にモンスター・ボールを磨くんですね、サカキさん」

タカギが割つて入った。タイミングよりも、その内容にサカキは不意を突かれた。

「若い頃から、磨く習慣が付いてましてね」

「ボールに思い入れでも？」

「いや。ない、と思いますよ。勿論、中に入っているポケモンとの思い出は語りきれない

が」

「尋常な磨き方ではないという気がするな。その光沢を見ると、私は一瞬、気圧されたような気になるんですよ」

「これは、お目障りでしたかな」

「理由を知りたいと、ふと思つてね」

「理由か。どうだつたかな。そんな話を聞いて、どうされるんです?」「つまらないことが、時々気になる。無性にね」

そう言つた割に、タカギの顔には興味の色もなかつた。

「煙草、構わぬいかね?」

サカキは、なんとなく頷いた。タカギがライターを擦る。火は、中々点かなかつた。幾度か繰り返され、やつと火が灯る。その間、誰も口を開かなかつた。

「随分、骨董品のようですね」

「古い、ということだけが取り柄になりつつある。若い者が安売りのライターを使つていたりすると、時々腹立たしくなりますよ」

「ライターにですか? それとも、ご自分に?」

「どうかな。サカキさんのボールと、似たようなものじやないかと思ひますがね」

「腹立たしいと思つたことはありませんよ」

「そうですか。考えてみれば、私もないかも知れない」

タカギがちよつと笑つて、煙草を吸つた。

唄。タカギが、鼻唄をやつていた。どこか、物悲しい曲だ。暖かい陽光の中で別れを

告げるような、物悲しさだつた。

ムツキが顔をあげていた。タカギは、自分が鼻唄をやつてることに気付くと、忌々しげに口を閉じた。ムツキが慌てて顔を伏せた。

「化石とは思えないんだな」

どうでもいいことでも呟くように、タカギが口にした。

「化石を好事家に売り付けるようなつまらないことで動くとは、どうにもね」

それだけ言つて、タカギは立ち上がり部屋を出ていった。

ムツキが顔をあげた。書類は全く進んでいないようだ。

サカキは灰皿を見た。ゴロワーズ。いがらっぽい煙を出す煙草だつた。窓を開けた。既に、タカギ達の背中は遠ざかっていた。

「タマムシのアジトは、必要最低限の人員にしろ」

ムツキが目を見開いた。

「それは、人員は移動できますが、設備や開発品は」

「仕方あるまい。機密は隔離のうえ、常時痕跡を残さず移動できるように。最重要機密さえ保持できれば削除でも構わん」

「資金ルートも、削除対象に含まれますが」

「構わん。残つたものも即時退却できるようにしておきなさい。クリードが知つてゐる

逃走口は?」

「二番と五番です」

「二番と五番出口は破棄。その二つしか知られていない団員には三番と六番を案内しないさい」

「クリードは喋りますか?」

「易々とは喋るまい。しかし、老いぼれ犬の前では無理な話だな。想像以上に鋭く、そして人の心を突く」

ボールを磨くことについて問い合わせられた時、自分でも意外なほどの不快感がサカキを襲つた。自分の中の何かにタカギは触れ、そして足跡を残すような形で去つていった。キクコの試合運びと、どこか似ていた。ああいう手合には、安易に動かない方がいい。しかし、既に団員が一人、あちらの手に陥ちているのだ。

「ヤマブキ周囲の通行所に手は回してあるな?」

「はい」

「差配しているのは?」

ムツキが挙げた名は、サカキも知っていた。幹部の一人で、バトルの腕前は良い。しかし、部下に配慮できないところがあつた。休息を取らせずに任務に就かせて、失敗を引き起こしたこともある。

「他にいなか? できれば、人望の厚い人物で」

「タマムシ所属だと本部長ぐらいしか。クリードも慕われていたと聞きますが」  
どちらも、動かしようがなかった。本部長、タマムシでは支配人と呼ばれている男は、  
それこそタマムシ近辺の要である。クリードは牢屋の中だ。

「そのまま、進めるしかないか」

一度、目を閉じた。

サカキの計画が全て完了すれば、ロケット団はおいそれと手出しできるような組織で  
はなくなる。活動家に限らず、反同盟軍的な思想の人物はいくらでもいる。それこそ、  
政治家にもだ。それに、ゲームコーナーの利権に溺れている者も少なくない。

時間の勝負かも知れなかつた。ただ、まだ仕掛ける訳にはいかない。

「シルフカンパニーの開発中のボールは、まだ完成しないだろうな」

「恐らく、ですが。社内のネットワークからも独立しているとのことで、詳細は。ただ、  
特殊研究室の動きはここ最近特に活発なようです」

特殊研究室は、特殊とは名ばかりの何でも屋だと思われていた。そこで極秘の、そし  
て全てのボールを過去にするような物が開発されているとわかつたのが数年前だ。  
「スケジュールに、まとまつた時間を取つてくれないか。三日ほどだ」

「三日となりますと、多少無理な調整でも一週間は先になりますが」

「構わんよ」

「わかりました。いくつか、キヤンセルを出します」

フミツキはいくつかのバインダーを手に取ると、外に駆け出して行つた。

サカキはしばらく天井を見上げていた。それから、グラスコロスをボールに当てた。  
ニードキングは、嫌がる素振りを見せなかつた。

## 第11話

取り調べに手間取っていた。というより、タカギにその役を回すことに手間取つていいのだ。

二度の化石強奪事件で、ニビ警察がまともに出動すらできなかつたことが先日の朝刊に大々的に載つた。即日の記者会見では、警官の命を守るための慎重さを強調したことで一時追及は治まつたが、結果として年端もいかぬ少年が矢面に立たされたことが報道されると、批判は益々の勢いタレコをもつて再燃した。

レッドのことを新聞社に密告タレコんだのはタカギだつた。具体的な特徴など伝えなくとも、少年というだけで新聞社は沸き立つたようだ。裏取りも、ニビ自警団で簡単に取れる。

あとは、課長がどれだけ圧力を掛けられるかだつた。管轄内で逮捕された犯人への取り調べを自分達の手で行いたいのは、当然のことだ。多少の圧力ならなんとしてでも抗

うだらうが、これだけ世論を敵に回した状態で圧力をはねのけ続けるのは苦しい筈だ。毎日、ニビ警察署へ顔を出した。名目としては、自ら逮捕した容疑者の経過が気に入る、という訳だ。どれだけ苦々しい視線を向けられても、タカギは平然とベンチに腰を降ろした。今のところ、他にやることはなかつた。

一度だけ、トキワに行つた。サカキという男に会うためだ。

明るい男だった。小難しい講釈を聴かせて、若い警察官を揶揄つたりもする。それでも、ふと暗い影を纏う瞬間がタカギには感じられた。そして、影を背負つたサカキの姿は、明るく弁舌を振るう姿よりもずっと強く印象に残つた。

惹き付けてくるものがある。それは、全く正反対の筈のレッドにどこか似ていた。

憂鬱な気分になつた。好ましい人物に手錠を掛けたことが、何度がある。いつも、隣人を絞首台に送るような、胃の裏返るような不快感があつたものだ。

階段から刑事が降りてきた。憔悴してて、タカギを見つけると露骨に顔を背けた。取り調べの機会はそう遠くなさそうだ。

ニビ警察署を出て、町を歩いた。昼食時をいくらか過ぎていて、町は閑散としていて、草葉から照り返す日差しが瑞々しかつた。ここ数日通つていた定食屋の前で、タカギは顔をしかめた。定休など気にもしていなかつたのだ。特別旨い訳でもないが、夜まで続けて営業していて、そのまま喫茶店のように使える店だつた。

当てもなく歩き出した。人通りが段々と増え、建造物には背の高いビルもちらほらと見えてきた。ニビの繁華街で、余所者のタカギでもあまり目立たなくなる。

尾<sup>つ</sup><sup>け</sup>行られていると確信したのは、飲食店の集まつた区画を一周した時だつた。それも、敢えて知らせてきた、という感じだつた。

口ケツト団なのか。しかし、今ここでタカギを消すことに大きな意味はない筈だ。通りを逸れて右へ曲がつた。路地裏。さりげなく、腰元のモンスター・ボールを確認する。開閉スイッチの向きだけははつきりさせておかなければならぬ。

五歩。それから前方に飛びつつ、タカギは振り向き様にボールを構えた。男。臨戦態勢のタカギを見ても、悠然と笑みを浮かべている。その顔を確認してから、タカギはボールを腰に戻した。ポケモンで勝負をして勝てる相手ではなかつたのだ。

「クチバジムは社会活動を免除されているというのは本当らしいな。ジムリーダーが、こんなところにいるようでは」

「どのジムだつてあくまで目標を課せられているだけさ。馬鹿正直に取り組む連中の気が知れねえぜ。そつちこそ、警察つてのは税金貰つて散歩する組織なのかい？ 老いぼれ犬さんよ」

マチスは、皮肉げな笑みを浮かべて言つた。  
「テレビなんかじや片言だつた氣がするがね」

「ちよつとしたサービスさ。臆病者が多くてな。もつとも、軍人上がりをその程度の愛嬌で受け入れちまう危機感のなさは笑えるがな」

「終戦は遙か昔だ」

「俺はそうじやねえ。世界つてのはいつだつて戦争をやつてはいる。勝ち目もねえ戦をしたがる馬鹿はうようよしているさ」

マチスは一度言葉を切つて、タカギの顔を伺つた。

「この国にも、そんな馬鹿がいる。わかるか、老いぼれ犬？」

「何が言いたいのかよくわからんna」

「わかつてる筈さ」

「言い直そう。私に何を言わせたいのかが、よくわからんよ」

「目星は付けてるんだろう？ 口ケット団の正体つてやつによ。それを教えろつてことさ」

タカギは腕を組んで、それからゴロワーズを取り出した。オイル式ライター。ニビに来てからは一度も手入れしておらず、着火には時間がかかる。

口ケット団の捜査命令については、どこから出たものなのある程度予測はしていた。マチスが来たことで、それはますますはつきりとした。しかし、軍籍を離れたマチスがやつてくるというところは、どこか引っ掛かつた。

現役と比べても実力では頭抜けているだろう。それでも、あくまで退役した身であり、ジムリーダーという歴とした立場を得ている人間もある。公に動かすことは同盟軍も避けたい筈だ。

ロケット団は、それほどの危機感を同盟軍に抱かせているのか。山吹組を一晩で押し潰したのは秀逸な出来事だったが、それもあくまでヤクザ同士の抗争という形だった。軍隊の前では子供の喧嘩のようなものだ。

火が点いた。ゴロワーズを咥え、一度煙を吐き出した。

「精強な武力を持つた窃盗集団。そんなところかな」

「本気で言つてる訳じやあねえだろ」

「反同盟軍的な意味を持つてゐるかも知れない、と思つてゐるよ。お陰様でね」

「そんなことはどうでもいい。ボスは誰なのか、つてことさ」

消すつもりなのかもしれない、とタカギは咄嗟に思つた。反同盟軍の気運が、国内で漬えている訳ではないのだ。事を荒立てて糾合されるぐらいなら、首領を消す方が手間は少ないのである。

「連中の手口は巧妙でね。確かなことは何も言えん」

「推測でもいいぜ」

「私の主義に反するな」

「どうも、履き違えているようだな。俺は言えと言つたんだぜ、老いぼれ犬」  
「言えん、と言つたよ、私は」

言葉が途切れた。日は、いつの間にか傾き始めていた。それがちょうどビルとビルの間に来て、タカギとマチスの影をずんぐりと揺らめかせた。表情を消していったマチスが、にやりと笑つた。

「骨無しではないみたいだな。大したもんさ」

「やり口が随分荒いようだな、マチス」

「南方の戦線じやこんなもの挨拶代わりだつたぜ。俺は、二十歳から従軍していた。退役前には、勲章をいくつもぶら下げていた」

「英雄という訳だ」

「人殺し、と言つてはいるように聞こえたぜ。気に食わねえな、その言い方」

「私も、老いぼれ犬と呼ばれることが好きではなくてね」

「ま、いいさ。ボスが判明したらいつでも連絡してくれ。特別に、深夜でも受け付けてやるよ」

「言えることはなにもない」

「そう言うな。明日には、取り調べの許可も下りるさ」

事も無げにそう言つて、マチスは路地裏を出て行つた。タカギはゴロワーズが燃え尽

きるのを待つてから、その場を後にした。

マチスの発言については、深く考えなかつた。同盟軍がその気になれば、取り調べの許可ぐらいは簡単なものだろう。同盟軍が直接行うのは難しいだろうが、逮捕の当事者であるタカギならば、ニビ警察も面白が立つ。

同盟軍がなぜそれほどにロケット団を警戒しているのか。

歩きながらいくら考えても、答えはでなかつた。ホテルの自動ドアを潜る。受付が一礼して、鍵を差し出した。

「タカギ様に、お電話がありました。不在をお伝えしたところ、タカギ様の方から折り返して欲しいと」

「誰だね？」

「キヨウ様と名乗つておられました」

キヨウからの電話。不意に、タカギの頭の中に思考が走つた。なにかが、繋がりかけている。

部屋に戻ると、コートも脱がずに受話器を取つた。外線をダイヤルする。キヨウがどこを拠点に動いているのか、タカギは知らなかつた。電話番号だけを教えられていて、そこにかけければ必ずキヨウに繋がるので。

待つた。その間も、思考はもどかしげに揺れている。

「戻ったか。報告がある。良いとも悪いとも、私には見えないがね」

キヨウの声。頭の中で、はつきりと物事が繋がった。

「恐らく、資金ルートだらうと思える道を見つけた。表面上の額は小さいが、途中で別の資金が合流している節がある。様々な資金の動きは搅乱だと思っていたが、違うな。鱗から水が零れるように、少しづつ逸れて本命のルートと合流しているんだ。行き先は」

「クチバ、かね」

「わかつていたのか？」

「いや。そうかも知れない、という気がした」

「大した嗅覚だ。しかし、問題はそれだけではないんだ」

「わかっている。同盟軍だな」

「そこまでわかつているなら、私の説明は必要ないかな？」

「推測でしかないさ。聞かせてくれ」

「港湾に出入りしている業者のいづれか、だろうな。それも、同盟軍と関わりのある業者だ」

「どこまで潜り込んでいると思う？」

「下士官程度で転がせる金額じやない。かといって、あまり上を抱き込むのはいくらなんでも無茶だ。参謀部のどこか、といったところか」

「他国のマフィア組織の資金洗浄に使われていた。それも、参謀クラスが。スキヤンダルどころの騒ぎではないな。本国の方では海外派兵に反対する派閥も根強いらしい」「平静を装っているが、同盟軍内部はぶち切れているだろう。しかし事が事だ。大手を振つて内部捜査をする訳にもいくまい」

「資金ルートの絞り込みはできるか?」

「ふたご島で寒中水泳するようなものだ、それは。飛び込んだ瞬間に身動きも取れなくなるさ。今のクチバで動き回るのは遠慮したい」

「出口は?」

「それこそ無理だ。一度基地内に入つてしまえば、どのがどの金かなど見分けられる筈もない」

タカギは、電話機を持ち上げてベッドに置き、自身も腰を降ろした。

資金ルートは行き詰まつた、とみるしかなかつた。同盟軍の中に入り込んでいる以上、この国の役人で手を出せる訳はない。

「明日、取り調べをする。こちらまで来れないかね?」

「ほう、許可が下りたのか。もう少しかかると見ていたのだが」

「事情がある。それについては来てから話そう」

「一室、取つておいてくれ。夜には着く」

通話を切る。疲労していた。横にもならないまま、タカギは目蓋を閉じた。どれほどそうしていたのか、よくわからなかつた。眠つてはいない。しかし、再び目を開いた時には、窓から夕焼けが射し込んでいた。

ボールが揺れている。草タイプのポケモンの多くが、日光浴を好むのだ。

苦笑して、窓際にウツボットを出した。葉をうんと広げる姿を見ながら、タカギはフロントに電話をかけた。



それなりに勾留されている筈だが、クリードの表情に堪えたような色はなかつた。タカギを見上げてくる視線には、ふてぶてしさが隠れもせずに出ている。

「前口上は要るかね？」

「いいのかよ、おい。隣室にはニビの警官が控えてんだろう?」

「あいにく、身内だ」

「老いぼれ犬の身内っていうと、タマムシの警察つてことか」

「私のことは知つてゐるようだな」

「昨日まで取り調べしてたおっさんが教えてくれたぜ。お前を逮捕した陰気なジジイが  
老いぼれ犬だつてな」

昨日、タカギから目を逸らした刑事だろう。良く思われてゐる訳もなかつたが、随分  
な言い草をされたものだ。

「煙草、やるかね?」

タカギが市販の煙草を差し出すと、流石に怪訝そうな表情をした。

「喫わないなら構わんが」

「高くつきそうだな」

「煙草屋をやろうとは思わんよ」

「なら、一本貰うか」

クリードが箱から煙草を抜き出す。タカギはライターを差し出した。昨日手入れを

したばかりで、着火の調子はいい。

タカギもゴロワーズに火を点けた。

威圧したり、長時間拘束することで口を緩めるようなタイプではなかつた。仲間を  
庇つてレツドに立ち向かつてきた男だ。

ニビ警察は、あと少しで口を割らせられたと言つていた。クリードが、会話に応じる

からだろう。黙秘していないというだけで手応えを感じる刑事も、少なくはない。た  
だ、タカギの見る限り、何日にも及んだニビ警察の取り調べは何の痛痒も与えていなそ  
うだつた。

「名前の由来は、何かね？」

「あん？」

「君の、クリードという名前だ」

「なんだよそりや」

「お袋さんとも、ホウエンにいる親父さんとも似てない名前じやないか」

クリードの表情が一瞬強張つた。ただ、すぐにふてぶてしさを取り戻している。

「流石に老いばれ犬、つて訊か。ニビの田舎警察どもは、化石をどこに運んだかつてがな  
りたてるだけだつたが」

「私はタマムシの人間でね。化石の行方には、正直なところ興味がない」

「親子の縁は切つてあるぜ。由来なんざ、訊いたことがねえな」

「切ろうと思つて切れるものでもないだろう。書類を出したところで、情は残る」

「書類の上だろうがなんだろうが、切れちまつてるんだからしようがねえ。情つてほど  
もねえな」

「大切にした方がいいぞ。私の父は随分前に死んだよ」

「勘弁しろよ。お涙頂戴なんて聞きたくねえぜ」

「言いたくもないさ。ただ、人は死ぬ」

「何の脅しだよそりやあ」

「ロケット団のボスは、殺されるぞ」

クリードは、反射的になにか言い返そうとしたようだつた。その前に、タカギが言葉を被せた。

「同盟軍が動いてる。連中は、ボスを暗殺することで全てを消し去つちまうつもりだ」「何を言つてる」

「ただ、事実を言つているのさ。お前らのボスは大したタマだよ。同盟軍をコケにするようなやり方で金を洗つていた。それがそのまま、同盟軍の弱味を掴むことにもなつた。だから消される。それだけの話だ。そして、同盟軍に顎先で使われているのが私という訳だ」

「意味がわからねえな」

素つ気なく言いながらも、クリードは考へてゐるようだつた。ふてぶてしさは消えて  
いる。

「わからない筈はない」

「俺をどうしたいんだ、あんた」

「私がやりたいのは、口ケット団のボスを捕まえることさ。それがそのまま、同盟軍に対する意趣返しにもなる」

「俺に得はねえな」

「ボスの命が助かる。証言が欲しいという人間がいくらでもいるだろう。全力で守つてくれるさ」

「そういうことか」

「口ケット団の拠点はどこにある？」

クリードが腕を組んだ。しばらくして、くつくつと笑い始める。

「笑えるところがあつたかね」

「いや、いい話さ。筋も通つてる。嘘じやないという気がするぜ」

「なら、なぜ笑う？」

「前提が違うのさ。ボスは殺せねえよ」

「同盟軍だぞ」

「なんでもさ。腕っぷしでボスをどうにかなんてできねえ。できる訳がねえ」

虚勢を張つているようではなかつた。当然のこととして、クリードはそう思つてゐるのだろう。

「それほどかね」

「わかるまいよ。会つたこともねえ奴にはな」

「ボスは誰だ？」

「知らねえ。嘘じやねえぜ」

「嘘ではない、とタカギは判断した。本当に素性も知らないまま、信頼を置いているのだ。

タカギはちょっと窓を見た。憂鬱というほどのことはない。そう思いながら、意識して口を閉じた。鼻唄をやつてしまふような気がしたのだ。

「ズバットというポケモンは、随分と神経質らしいね。明かりの点いた部屋に放置されたりするとすぐ参ってしまうらしい」

クリードは一瞬、何を言われているのか理解できないようだった。それから、眼を怒らせながら顔を真っ赤にした。

「どういう意味だ、おい？」

「言葉の通りだ。それ以上でも、それ以下でもない」

「ふざけるなよ」

「何日かすると拒食が始まるとそうだ。それから飛べなくなる。一度飛べなくなると、本来の環境に戻しても元通り飛べる個体の方が少ないらしい。そのまま衰弱して、死んでしまう例も少なくない」

クリードが机に拳を打ち付けた。手錠がじやらじやらと音を立てる。しかし、殴りかかつてくるような真似はせず、ただ俯いていた。タカギは立ち上がりつて、飛び散った煙草の吸殻を拾いあげると、灰皿に捨てた。再び、パイプ椅子に腰を降ろして腕を組んだ。目を閉じる。

待つた。互いに、微動だにしなかつた。クリードの拳だけが、時折強く震える。無音の時間が、長く続いた。

「許されるのかよ、こんなやり方が」

やつと絞り出したような声で、クリードが言つた。

「わからんよ。わかつた時には、全て手遅れになつているだろう」

「仲間は、売れねえ」

「調書は録らん」

クリードが顔を挙げた。

「隣室に控えているのは、信用できる者だよ」

「どういうことだ？」

「言つたろう、意趣返しをすると。下手に報告をあげると、同盟軍に漏れてしまいかねん

からな」

「本気で、ボスを逮捕する気なのか？」

「そう言つてゐる。方法はわからんがね。少なくとも、お前の証言で令状が出ることはない」

落とし所は、この辺りだろう。調書にサインさせるには、死にかけたズバットを連れて来るぐらいはしなければならない。できることではなかつた。

「他の団員のことも訊かない。拠点の場所だけでいいぞ」

クリードが再び俯いた。今度の沈黙は、長くは続かなかつた。

「タマムシだ」

消え入りそうな声だつた。タカギは目を見開いた。

「なんだつて？」

「アジトは、タマムシにある」

「お前達は、三年前に山吹組とやりあつただろう？ 繩張りを争つていたんじやないのか？」

「なぜ山吹組と抗争になつたのかは、知らねえ」

警察では、ヤマブキに拠点があるという見方が強かつた。しかし、具体的な証拠はない。当然の帰結として、ヤマブキにあるだろうと思つてゐたのだ。組対も三課も、その認識は一致していた。

資金源と思われるゲームコーナーから、金が流れしていく。つまり、タマムシからだ。

それがまた、タマムシに戻つてくることがあるのか。

ない、とはいえた。同盟軍の中を使って資金洗浄をしようという組織だ。しかし、それならば山吹組は、ただ警察や世間の目を眩ますためだけに潰されたことになる。カントー最大の暴力団は伊達ではない。それを撹乱のためだけに潰すなど想像できるものではなかつた。

タカギはいくつか質問を続けた。クリードは言葉少なに、拠点の場所に関するこどだけ答えた。

タカギが腰をあげた時、ようやくクリードも顔を持ち上げた。口元には、自嘲的な笑みが浮かんでいる。

「やっぱ、駄目だな俺は。学がねえし気が短けえ。真つ当な世界じややつていけねえと思つてこつちに來たが、やっぱ駄目だ」

言葉はかけなかつた。扉を出ると、一人の警官がいた。見覚えのない顔だ。連れだつて、タカギは歩き出した。

「先に言つておくが、軽蔑したりはしていない」

警官が言つた。姿がまるつきり違つても、声はキヨウのままだつた。

「ポケモンを盾に脅す。非人道的なやり方だ。取り繕おうとは思わんよ」

キヨウは答えなかつた。取り調べを終えたことを告げ、ニビ警察署を出た。キヨウ

は、いつの間にか普段通りの姿に戻っていた。

「ジョウトのウツギという博士が発見をしてね」

唐突に、キヨウが切り出した。

「クロバットというポケモンは、ゴルバットの進化形だと思われていた。しかし、条件がわからなかつたんだ。レベルとも、進化の石とも違つた」

タカギは、キヨウのゴルバットを思い出した。レベルという点では、極まつてゐるポケモンだろう。

「なつき度、だと言うのさ。ゴルバットが真にトレーナーに心を許せば、進化するのだ」と。まだあまり知られていないが、そのうち世間にも広まつていくだろう

キヨウは、飄々とそう言つた。

残酷な発見をするものだ。タカギは素直にそう思つた。人とポケモンの信頼を、そこまで白日に晒してしまはうのか。

「密猟者との戦いを、私は悔いていない。それだけ苦しい戦いだつた。卑怯なことをいくらでもしたし、されたさ」

にやりとキヨウが笑つて、一軒の屋台を指差した。

「飯でも食おう」

頷いて、タカギは暖簾を潜つた。

## 第12話

旅というほどのものではなかつた。素性を隠したままの『そらをとぶ』は発覚した場合が面倒なのだ。だから、自分の足で歩くことにした。

トキワからタマムシまでは『そらをとぶ』で來た。ポケモンバトルを中心に取り扱つてている月刊誌からの依頼で、地面タイプについて一つ書かなければならなくなつたのだ。今サカキは、ホテルに缶詰めで原稿を書いている、ということになつてゐる。

参考にと見た先月の特集は水タイプで、カスミの文章が載せられていた。水タイプの強みがこれでもかと書かれていて、炎、岩、地面タイプには負ける要素がないとまで豪語してある。その次にサカキを持ってきた編集部の意図は透けていた。大会やエキシビションで、カスミに負けたことはない。理論などなくとも、サカキが反論するだけでカスミはやり込められることになるだろう。

サカキが書いたのは、カスミの言をほぼほぼ否定する内容だった。草や氷、飛行タイ

プとの対面についても書き綴つた。地面タイプの弱味について一通り書き出したと  
いつていい。

強味など勝手に活きてくるものだ。対戦の最前線ならばともかく、一般トレーナー達  
が理解すべきはポケモンの弱味だとサカキは考えていた。弱味を知らなければ、いつか  
必ず不幸になる日がくる。ポケモンも、トレーナーもだ。

出版社に持ち込めば渋い顔をされるだろう。どう言われようと、書き直す気はない。  
空が暮れなずんでいる。サカキは、変装用のロングコートの前を搔き合わせた。こう  
いう日は、不意に夜がやつてくるものだ。

既に地下通路は抜けて、八番道路に入っている。夜通し歩けば、朝方にはシオンタウ  
ンに着くだろう。それはわかっていたが、サカキは夜露を避けられる場所を探し始めて  
いた。

鞄二つにもなろうかという大荷物を準備しようとしたムツキを尻目に、サカキが持ち  
出したのは最低限の医薬品と火を起こすためのライター、保存食、飲み水だけだ。テン  
トだの寝具だのを持つた旅など、旅ではない。安物のレインポンチョにくるまつて、い  
ざとなればポケモン達と身を寄せあつて夜を越える。それがポケモントレーナーの旅  
であり、サカキもずっとそうやつてきた。

ベルトに固定した二つのモンスターボールのうち、手前のものを掴むと、縮小を解い

た。第一関節程度の大きさだったモンスター、ボールが掌大に膨らむのを確認してから放り投げる。

「風を凌げる所はあるか？」

飛び出したペルシアンに、サカキは問いかけた。ペルシアンが目を閉じる。敏感な髪は僅かな空気の動きまで感じとることができるのでした。目を開き、一つ頷いて歩き始めたペルシアンの後ろをサカキはゆっくり追いかけた。気ままな性格で、急かされることも歩みを遅くさせることも嫌う。生半可なトレーナーでは振り回されるだけになるが、それが却つて富裕層や一部トレーナーに人気になつたのがペルシアンというポケモンだつた。

サカキのニドキングは、いくらなんでも目立ちすぎた。身から離すつもりはないが、ロケット団の総帥として大っぴらに使用することは憚られる。そういう時に用いるのがペルシアンだつた。額の宝石を理由に乱獲された過去があり、現在でも闇市に多くの個体が出回っている。足が付きそうになれば、形だけ闇市を経由することで追跡を躱すこともできる。

見えてきたのは、丘の麓にある大人ほどの高さの土肌だつた。同じようなものが土肌を登つた先にもあり、何段か続いたさらに向こうには地下通路の入り口が小さく見えていた。サカキが降ってきた道も元々は険しい段差が続いていたのだろう。半分ほどが

道として整備され、残つたもう半分がここという訳だ。人目はそうないだろう。

サカキは干し肉を一つ千切つてペルシアンに与えると、周囲の枝を集めた。懷に抱えようとしたサカキから、ニドキングが枝を奪う。サカキは苦笑いした。今着てているのは安物のレインポンチョなどではなく、機能美に富んだロングコートだつた。

集め終わる頃には既に日も沈んでいた。雨を凌げそうな場所を選び火を起こす。ひつそり漂い始めた宵の冷気が、それで霧散していく。

小さい鍋を一つだけ持つてきてあつた。湯を沸かし、三等分にした干し肉を柔らかくなるまで茹でると、逆さにした鍋の蓋に取り出して胡椒を一振りした。それを、無造作に口に運ぶ。火はしつかり通つてゐるが、簡単には噛み切れなかつた。噛み続ける。最初は強い塩味が段々と軽くなり、肉の旨味がでてくる。ニドキングも同じようにしていた。ペルシアンだけが、僅かに戸惑つたように干し肉とニドキングとサカキを見回していたが、意を決したように干し肉を咥えた。野宿などさせたこともないポケモンなのだ。はつきりと顔をしかめている。

肉を胃に納めると、サカキは鍋の湯を飲んだ。塩と旨味が溶け出していく、なにより躰が暖まる。ニドキングが続くと、ペルシアンも恐る恐る口を付けた。肉とは違ひ、こちらは気に召したようだ。

やがて、火が燠になると、ペルシアンはその横で丸くなつた。寝息が小さく聞こえる。

土の上では眠れないなどという柔な鍛え方は、流石にしていない。

「懐かしい、などと思うのはポケモントレーナー失格だろうな」

夜空を見上げていると、自然に言葉が出た。星空など、飽きるほど見た筈だった。しかし今、散らばつた星々はどこか新鮮さを伴つて映る。

ニドキングは横になりながら、時折耳を動かしていた。ニドラン♂の頃からの癖だ。旅を始めた頃、まだ一人と一匹だけだった夜には、ひつきりなしに耳を動かして周囲を警戒していたものだ。

眠気はやつてこなかつた。これといった疲労も感じてはいない。まだ若い、ということが。

「同盟軍と戦闘になるのも、そう遠くはないだろう。俺もお前も、まだ若いままだらうな」

資金ルートに誰かが触れた気配があつた。十中八九、老いぼれ犬だろう。

ルートは、同盟軍内部の参謀部を通っていた。はつきりと誰を通しているのかはサカキも知らない。それを知っているのはタマムシの支配人だけだ。同盟軍のどこを通そうが、この国の役人には手が出せない筈だつた。ただ、内部調査で浮かぶ危険性はある。しかし、大々的に行うことはできないだろう。同盟軍は、あれこれと理由を付けてクチバ港を締める動きを見せた。内部調査の動きが取れていない証拠だつた。内側では

なく入り口を絶とうという動きだつたが、締め付けの後も資金ルートは事も無げに稼働していた。

そろそろ、外に出てくる筈だ。本来殺人を担当する一課の老いぼれ犬がロケット団を嗅ぎ回るのも、同盟軍の影がちらついていた。資金洗浄に使われたなど、あつてはならない不祥事だらう。その事実を消すためならば、強引な手段も厭いはすまい。

戦うための算段はついている。しかし、必要な要素がいくつかあつた。今、サカキがシオンタウンに向かっているのも、そのうちの一つを固めるためだ。

諸々の事情を、ニドキングに喋つたことはない。聞きたいとも、思つてはいないう。

高みを目指す。サカキの立場がどのように移り変わつても、ニドキングとの間にあるのはただそれだけだつた。それ故に威厳も尊敬もいらず、弱音を話すことも厭わなかつた。

「俺は、まだ強くなつてゐる氣がする。お前もそうだらう。しかし、いつかは老いるだろうな」

弱音を吐いてゐるのだろうか。自分でもよくわからなかつた。老いるというのがそれほどの弱味だとは思わない。キクコなどは今でも最前線で力を振るつてゐるのだ。ふと、一つだけ思い当たつた。ニドキングに見せたくない姿。いや、見たくない姿か。

高みを目指せなくなつた姿。

ニドキングの耳に触れた。背中を中心に刺々しい印象の強いニドキングだが、耳の先是意外なほど柔らかい。

「もしお前が死ぬ時は、俺の前から消えてくれるか？」

ニドキングが体勢をそのままに見上げてきた。不満げな色がある。

「わかっているさ。俺が先に死ぬ時は、お前の前から姿を消そう」

鼻息を一つ吐き出して、ニドキングが目を閉じた。ペルシアンはすっかり寝入つているようだ。サカキは燠の様子をちよつと確かめてから、コートを襟元まで搔き合わせて一本の木に背を任せた。



静かな町だった。町全体がどこか澄明で、煌めく朝の日射しにも騒々しさがない。音もなく息を吐けそうな町だ。

ポケモンセンターにも寄らず、ハットを日深に被つて町の中心地へ向かつた。建物は

全て背が低い。最初に靈園があり、その後に町ができたのだ。遙か昔はヤマブキの一部だつたようだが、ハナダやセキチクなどから山や海を越えて人が訪れるようになり、シオンタウンとして独立した。

便宜上町となつただけで、村の規模を出るほどの人口はいない。それでも今では、カントーのどの町の人間でもポケモンを亡くせばまずシオンを目指すようになった。

一軒の家で、サカキは訪いを入れた。応答はない。敷地内に気配もなかつた。足を北東に向ける。十分と経たない内に、ポケモンタワーが見えてきた。

ポケモンを亡くしたという記憶が、親族を含めてもサカキにはなかつた。その分、父が幼い頃に死に、母もサカキがジムチャレンジを終えた頃には逝つた。両親が持つていたポケモンは親族に引き取られ、今ではどうしているのか見当もつかない。

菊を買ってから入つた。知人のポケモンの墓に一輪ずつ添えるなら、これで不自然はないだろう。

ゴーストがうろうろとしている。それは別に、珍しいことではなかつた。力量差がわかるのか、サカキに突つかかつてくることもない。ただ、祈祷師がいないのは不自然だつた。

祈祷師というと仰々しいが、要は人の通るルート上から野生ポケモンを排除するのを生業としている人間だ。警備員やレンジャーなどが行うことが多いが、ゴーストタイプ

の特異性とシオンという町の性質からポケモンタワーでは祈祷師がその役を務めている。

その祈祷師が見当たらず、建物内をゴースやゴーストが我が物顔で徘徊している。何か異常があつたと見るべきだろう。

階段はつきりと、気配を感じた。

靄。離合集散しながら、時折、手や躰のようなものを形作っては崩れていく。「新種のポケモン、という訳でもなさそуда」

「目ができる。というより、靄が形作った中で欠け落ちていている部分が目に相当している」と言うべきか。

前に出た。靄が揺らめき、それから猛つたように押し拡がった。

「土の匂いがするな。カラカラ、いや、ガラガラか」

靄が止まつた。

「何に憤つているのかは知らん。それなりに、不幸な身の上だつたのだろう。そのまま、死んだのか」

サカキは、持つていた菊の花を供えた。どこの墓でもない、ただの道の真ん中にだ。「存分に恨むがいい。ただ、全てを自分で決める。恨むも、消えるも、託すも全て自分で」それだけを言って、サカキは階段に足をかけた。靄はもう遮つてはこなかつた。

地面タイプを選んだのは、様々な成り行きからだつた。今では、不思議と心が通う部分がある。それは理解とは違つて、わからないままに共鳴できるなにかだつた。あのガラガラに必要なのは意志だ。なんとなくそう思い、口にした。そして、もうガラガラのことは考えなかつた。

最上階に足を踏み入れた。弾かれたように、二人の男が振り返つた。その間には老人が踞つている。サカキは思わず苦笑した。二人の男は、ロケット団の團服を着ていた。一人がマルマインを繰り出してきた。サカキへ向かつて猛然と回転しながら、点滅を始める。

『だいばくはつ』。咄嗟にしては、随分と思いきりのいい判断だ。サカキと吹き飛ばすつもりでいる。常人に下せるものではなかつた。

『ねこだまし』

飛び出したと見えた時には、もうペルシアンはマルマインの目前にいた。攻撃を受けたマルマインが点滅を止めた。

『きりさく』だ

ペルシアンが飛びあがる。不意に、もう一人の男がサカキへ距離を詰めてきた。拳。退こうとしたサカキの肌に、なにか嫌な直感が走つた。その直感に逆らわず、前に出た。

男のパンチが途中で軌道を変え、サカキの腕に絡みつこうとしてくる。掴まれる寸前をすり抜けながら、肘打ちを飛ばした。上体を仰け反らせながらも、男は蹴りを飛ばしてきた。足を折り曲げることで、太腿の外側で受けた。タツクルに移行しようとした男が束の間棒立ちになる。サカキは今度こそ退いた。

### 『スピードスター』

既にマルマインを蹴散らしたペルシアンが、サカキの指示に素早く反応した。額の宝石が一瞬光を帯びると、無数の星形を宙に噴き出した。その全てが不規則に、時には星同士で衝突して方向を変えながら拡散していく。横に飛ぼうとした男を流星が薙ぎ払った。

「躊躇なく『だいばくはつ』を敢行するマルマインとトレーナー。それに今の動きは、多少の差異こそあるもののクラヴ・マガか。お里が知れるな」

咳きに反応したマルマインのトレーナーが、隠すこともなく殺気を見せている。見せかけだけで退くだろう。ペルシアンを呼び戻すと、サカキはポケットに手を入れ、姿勢も崩した。男達は顔をはつきりと歪めたが、冷静に撤退していく。軍人らしい動きだ。

老人が顔をあげた。腫れぼつた目と真っ白の眉が左右に振られ、やがてサカキに焦点を合わせた。

苦悶も恐怖も怒りも、その目にはなかつた。小うるさい蟻が飛び去つた時のような、ささやかな不快の余韻だけだ。

「助かつた、と思つていゝのかな」

「さて、どうですかね。先程の連中が去つたのは確かですが」

「正義の味方という訳ではないか」

「残念ながら、悪党ですよ。先の二人組と同じ程度にはね」

「腕っぷしは、比じやなさそうだね。あの二人も随分な遣い手に見えたが、勝負になつてはいなかつた」

「ならば、私の方がタチの悪い悪党かもしません」

「正直、君の方が怖いという気持ちはあるよ。私に、なんの用だね？」

「先の二人は何を？」

「お金だよ。これでも昔は、ちょっとした学者でね。その頃の資産を残していると思われたのだろう。先に言つておくが、私はほんどの資産を寄付した。ポケモンタワー や、だいすきクラブや、なんらかの愛護団体なんかにね。今持つているのは、年寄りが細々暮らすだけのお金だ」

「あの二人にもそう仰ればよろしかつたでしよう」

「信じてはくれまい。口ケット団というらしいね。金に強欲な者は、他人も強欲で秘匿

的だと思い込む

「口ケット団とは、そんなものですか」

「ポケモンを金稼ぎに使う、ろくでもない悪党集団と聞く」

「悪党が三組も集まつた、ということですな」

「三組?」

「遺伝子から人造兵器とでも言うべきポケモンを生み出す。それは、悪党の所業でしょう、フジ老人」

感情の薄い目元に、束の間鋭い眼光が走つた。すぐに、加齢と諦念がそれを覆い隠した。

「ありそうもないことが、人生には時々おきる。大抵は過去に起因するというがね。この齢になつて、過去が追いかけてくるとは思わなかつた」

「金などではないな、やはり。あの二人も、ミュウツーのことで來たのでしょうか？」  
「口ケット団がミュウツーを求める理由など、見当もつかないよ。碌な理由ではあるまいが」

「口ケット団でないとすれば?」

「どういうことかね?」

「例えば、同盟軍。いえ、あえて進駐軍と呼びましょく」

フジが沈黙した。目尻から頬を通り首に至るまで、細かい皺が刻まれている。俯きがちになると、それは一層深く見えた。

急かさなかつた。フジが考え込んでいた間、サカキはペルシアンの点検をした。マルマインに直接攻撃をした。ポケモンは麻痺を受けることがあるのだ。個体によつては麻痺状態にならないペルシアンもいるが、サカキのペルシアンはそうではなかつた。そういつたことは、世話をすると決めた時に徹底的に確かめる。

「ここに来るまでに、なにかを見なかつたかね？怨霊のようななにかを」顔をあげたフジは、全く関係のないことを言つた。ペルシアンの筋肉を触診しながら、サカキは答えた。

「怨霊は見ませんでしたよ」

「そんな筈はない」

「本当です。私が見たのは、一匹の憐れなガラガラだけだ」

「馬鹿な。ガラガラを見たのかね？」

「言い直しましよう。ガラガラだと、私にはわかつた。ガラガラは私を通してくれましたよ」

フジが、大きく長く息を吐いた。

「彼らがロケット団ではないという根拠は？」

「簡単な話です。私が、ロケット団だからですよ」

「なるほど。確かに簡単で、明瞭だ」

「あの二人は何を?」

「何も。ただ痛めつけてくるだけだつたよ。ミュウツーのことだというのは、なんとかわかつたが」

そういう拷問のやり方があると、聞いたことがある。求める物を提示すればそこには駆け引きが生まれるのだ。駆け引きならば手札の切り方がある。ただ痛めつけられると、どの手札をどう切ればいいのかすらわからなくなってしまうのだ。やがて、手当たり次第に手札を明かすようになつてしまふ。

ペルシアンがくすぐつたそうな声をあげた。気位の高いポケモンで、無遠慮に撫で回せば爪の餌食になる。サカキだけは受け入れるが、他人が手を出せば五秒も触らせたりはしないのだ。大抵のペルシアンがそうで、撫で回すサカキをフジは珍し気に見ていた。

筋肉のどこにも強張っている部分はなかつた。サカキは干し肉を取り出し、一切れを与えた。木の実があれば食べさせるところだが、生憎手元にはなかつた。トレーナーとしての心構えが、やはりどこか弛んでいる。

ペルシアンをモンスターボールに戻してから、資料をフジに差し出した。何枚もの書

類が留められている。怪訝そうな顔で受け取つたフジの両腕が、読み進めるほどに震えを帶びた。

「なんだ、これは」

「我々がハナダの洞窟で、ある波長を観測し続けたデータです。あまりに危険なので、洞窟の外から計測したものですがね」

フジの目がサカキを見上げてくる。ハットのつばで、その視線を遮つた。表情を読もうとしたのか、それともサカキの正体を見定めようとしたのかがはつきりしなかつたからだ。

「一つお訊きしましよう。それは、完全体ですか？」

フジは返答を躊躇つてゐる気配だつた。それも、サカキは辛抱強く待つた。

「違う、とは言えない。しかし、これが完成かと言われば、私にはわからんよ。慮外の存在になつてゐる」

「訊き方を変えましょか。そのデータの生物は、電子機器への干渉能力を獲得していふと思えますか？例えば、進駐軍の電子機器にね」

はつきりと、フジは絶句した。父の書斎で見た資料は、あるいは研究の深部にまで迫つた情報だつたのかもしれない。

次の言葉は絞り出すようだつた。

「電子機器に干渉できたとしても、同盟軍に勝つ力はない」

ロケット団という存在の目的を、フジは察したようだ。声の響きには、宥めるような音が含まれていた。そして、真実が表面に表れていた。

ミュウツーという存在の根源を考えれば、進駐軍相手のシミュレーションは数限りなくやつただろう。現在のミュウツーのデータを見ても、すぐに結果が想像できるほどに。

ミュウツーでは同盟軍に勝てない。その言葉を聞いて、サカキは笑った。そうだろうと思っていた。いや、そうであるべきだとthoughtっていた。

「よければ、ロケット団にお越しいただけませんか。研究は好きなようにしていただけて結構」

「私は死んだ、と思っている。世の中に影響しようという気が、ある時すっかり消えてしまった。今はただ、肉体の死を待っているんだ」

「ポケモンタワーに足を運んでおられる」

「贖罪などという気はない。この場は、世の中ではないと思い定めたよ。あの世でも、この世でもない」

「残念です。もう少しお若い時にお会いしたかった」

「私が死んだのは、もうずっと昔だよ。死人の戯れ言としても一度言おう。君たちは

「勝てない」

「先程と言つていることが違いますよ。勝てないのはミュウツーでしょう」

「ミュウツーでなくば手段はない。万に一つも。いや、ミュウツーですら無理なのだから、つまり手段など最初からないのだ」

不意に、サカキはフジが哀れに見えた。それは生きている人間の哀れとも、死んだ人間の哀れとも違う。生きたままに停止した人間にに対する哀れみだつた。フジは現世を断ち切つたような物言いをするが、サカキの眼には、現世へ干渉する力を失つた老いぼれとしか見えなかつた。

現世に干渉できないならば、知識を持つた骸も同然だつた。そんな存在に訊いてみたいことが、サカキには一つだけあつた。

「ミュウツーを使い強力な野生ポケモンを捕獲する。それこそ、ハナダの洞窟のポケモン達を。そのポケモン達を団員に配備し、ミュウツーで電子機器を抑える。それでは、戦えませんか?」

「ただの博打だろう」

「そうですかね」

「他人から譲り受けたポケモンは、トレーナーの指示を受け付け辛くなる。それは、鍊度が上がれば上がるほど顕著になる。ハナダの洞窟に住むようなポケモンであれば、携帯

「獣学の観点から見てほぼ野生と変わるまい」  
「全く、ごもつともですよ」

サカキは フジに背を向けた。フジという老人は予想以上に見識が深く、そして無価値になつた存在だつた。その答えだけでサカキには充分だ。

知識だけは持つてゐる。そして、知識を持つてゐることを同盟軍も知つてゐる。それは、ムツキに人を派遣させればいいだろう。ロケット団に成り済ましていた所で、同盟軍の微妙な動きや立場が読み取れる。本物のロケット団がフジの周りをうろついていれば、動きは取りづらい筈だ。

他人から貰つたポケモンは言うことを聞かない。誰でも知つてることで、どうすれば解消できるかも誰でも知つていた。

階段を降りた。靄のような姿も、菊の花も既になかつた。菊の匂いと、僅かな土の薰りだけがサカキを迎えた。新品のロングコートなどよりは、ずっと鼻に馴染んだ薰りだつた。

## 第13話

タマムシに戻つて最初にしたことは、ゲームコーナー周辺を歩くことだつた。クリードが語つたアジトは、ほとんどゲームコーナーに隣接しているようなものだつた。入口と、緊急時用の出口を確かめると、証言通りの場所にそれらはあつた。アジト自体は地下施設だという。

見た目は小さな倉庫のような建物だ。扉の近くまで寄つてから、タカギは引き返した。人の気配がある。

ゲームコーナーへ行き、コインを購入してスロットの台に座つた。昼飯時で、人の姿はまばらだ。絵柄に集中しながらボタンを押す。十五分ほど、勝つたり負けたりを繰り返した。コインの量は微増といったところか。コインは端が煤けていて、指先が僅かに黒ずんだ。その黒ずみを、次のコインの清潔な部分で擦りおとしてから投入する。絵柄が回転する。機械的に、タカギは回転を止めていった。七が二つ。最後のボタン

を押そうとした瞬間に、隣に誰かが座った。

「楽しんで頂けているようで、なによりですよ」

タイミングが微妙にずれ、最後の七が画面外に消えていく。タカギはちよつと息を吐いて隣を見た。ゲームコーナーの店長だつた。

「客が大当たりを出しそうになると声をかけるのかね？」

「これは、お邪魔をしてしまいましたか。お見かけして、思わず声をかけたもので」

特に悪びれた様子もなく、店長は椅子をこちらに回転させると、どこからともなくコインを三枚取り出し、タカギの手元に置いた。当然、手は付けない。

「決して、深い意味のあるものではないのですが」

「煤けているような気がした」

「はい？」

「いや、なんでもない」

コインを取り、投入する。絵柄も見ずに押した。店長は苦笑している。

「君は、この街でジムチャレンジを辞めたんだつたな」

「レインボーバッジは持っていますよ。エリカさんではなく、先代のジムリーダーから貰つたものですが」

「キヨウはもう現役だつたろう?」

「サカキ、カツラ、キヨウのお三方は当時から挑戦者の壁として立ちはだかつておいででした」

「そのキヨウの見立てでは、君はもつとバッジを得られるようだが」

「自分で言うのもなんですが、バッジのコンプリートぐらいは不可能ではなかつたと思います。挑まなかつた癖に何を、という話ですが」

「なぜ」

「反抗心のようなものだつたんですよ、上の世代に対しての。しかし、下の世代にワタルさんが天才少年として登場し、そのまま天下を取つた。それを見たとき、なにかが宙ぶらりんになつて消えてしまつた。恐らくは、挑戦者として在るために必要ななにかが。ジムチャレンジは、そこでやめました」

タカギは店長の顔を盗み見た。スロットに向かう横顔には、出任せを言つている気配は全くなかった。

「それで、こんな商売に漕ぎ着けた訳か

「すぐにこうなつたんじやありませんよ。やるせないとでもいうんでしようかね。真つ当なことをしようという気力は湧かなかつた」

「何をしていたんだね？」

「サイクリングロードを走り回つていましたよ。セキチクまで何時間で行けるかって

ね。似たようなことをして連中が他にもいて、最短コースを取り合つたり、時にはバトルになつてました

「今でもそういう連中はいる」

「若さですね、あれは」

くつくつと喉を鳴らしながら笑う姿は、やはり嘘を言つているような気配ではなかつた。

小綺麗に澄ました経営者という顔は、完全に消え去つてゐる。過去と現在の清濁が、過ぎた時間として顔の陰に浮かんでいた。

「阿漕と言つたのは、取り消そう」

「それはまた、どうしてです?」

「手錠わっぱをかけれそうにはない」

資金ルートの線は完全に詰んでいた。強引に逮捕あげようとしても、末端のペーパーカンパニーをいくつか消すだけに終わるだろう。それについても、ゲームコーナーの責任を問えるとは思えなかつた。ペーパーカンパニーの名義上の責任者は別にして、現在は海外に渡航している。国際手配を敷けるほどの罪状はなかつた。実体があるのかもわからず、そもそも、刑事訴訟にあたるかも微妙なところだ。被害者はいないのである。

アジトの中に、証拠が残してあるかどうか。望み薄だろう、とタカギは思つていた。

「そのうち、タカギ警部から手錠を戴くかもしれないと思つていますよ」

思わず、タカギは店長の方を見た。さつきまでと変わらない、事も無げな顔をしながらコインを取り出している。四、五回目でスリーセブンを引いた。

誘い。あるいは、裏切りを匂わせているのか。暴力団の捜査ではよくあることで、組織に見切りをつけた組員はこういう駆け引きをやる。

ただ、すぐに洗いざらい吐くのは小物だつた。匂わせだけはしておいて、一番高く売れる時に情報を売る。その辺りには微妙なやり取りがある。

クリードの逮捕がそれほどの衝撃を与えたとは思えない。しかし、同盟軍と向き合う心労は、いつ分水嶺を超えてもおかしくはなかつた。特に最近はクチバの動きが活発になつてゐる。タカギのところにマチスが現れたのも、同盟軍内部が事の深刻さをはつきり認識している証拠だろう。

もう一度、店長の顔を見た。何も言葉を続けてはこない。

すべてが仮定でしかない。ゲームコーナーとロケット団の繋がり、それから同盟軍との対立。見えそうで見えない、薄靄の中にそのすべてが暗躍している。

「このスロットには必勝法のようなものはないのかね？」

様々な言葉を呑み込んで、タカギはそう言つた。店長はもう一度大当たりを当てる。

「勝てる台を、見つけるんですよ」

笑いながら店長はそう言つた。タカギは、指先の煤をコートの端で拭つた。  
しばらく打つて、タカギは席を空けた。店長は何も言わず、小さく会釈をして見送つた。

ゲームコーナーを出て裏手に回る。アジトの入口。相変わらず、人の気配はある。

「どうも」

「おい、なんだよおっさん」

「景品に交換して欲しいんだがね」

「景品? なにか、勘違いしてんじゃないか」

口調は粗野だが、景品と言つた瞬間から雰囲気の棘は抜けていた。

「ゲームコーナーのコインだよ」

「だから、勘違ひだよ。ここは倉庫でね。それも、ゲームコーナーとは違う会社の倉庫だ」

「ここはゲームコーナーのすぐ隣じゃないか。隣に行けばいいと聞いたんだがね」

「逆だよ、逆。反対側だ」

「そこに行けばいいのかね?」

「いいとか悪いとかは知らねえよ。ただ、ゲームコーナーの客はよくそこに入つていく

ぜ」

白々しいが、言質は取らせない言葉選びだつた。タカギは困惑した様に周囲を見回してから、建物を出た。

景品所の前をうろうろとしている若い男がいた。コインの枚数を数えてはため息を吐いている。手持ちのコインをケースごと、その男に譲つた。

「思つたより出てしまつてね」

そう言うタカギに男は卑屈なほど礼を言い、景品所へと入つていつた。そのうち、身を持ち崩すだらう、と思つた。

煙草に火を点ける。ライターはいつも通り、調子が悪かつた。  
入つて右奥の段ボール。その下に、地下への階段がある。

クリードの証言は今のところ信用できそだつた。



出頭命令は翌日に来た。四課辺りがゲームコーナーを張つていたのだろう。タマム

シ警察内部ならば、タカギの顔はよく知られている。

出勤したが、課長室へとすぐには向かわなかつた。コーヒーを淹れ、いなかつた間に起こつたことに目を通す。タマムシシティには、取り立てるべき事件は起きていなかつた。

目を惹いたのは、ハナダシティとシオンタウンだつた。ハナダの北部で、ロケット団による強引な勧誘が行われている。勧誘自体は化石強奪事件より前から始まつていて、近隣ではトラブルになつていたようだ。ロケット団によるものだと発覚したのは、あるトレーナーが勧誘していた男を散々に打ち倒したかららしい。レッドだろう、と思つた。具体的な情報は出ていないが、略式の聴取内容と日付を見比べると、そういう結論になる。

シオンタウンの方は、よくわからなかつた。そもそも警察の出るような事件にはなつていない。ポケモンタワー内部でポケモン達の異常な活性化が起こつてゐる、という内容だつた。タマムシ署にその資料があるのは、墓参りへ出向く人間への注意喚起の要請からだ。

別の資料に目を向けた。タカギと付き合いのある若い刑事が、気を利かせてまとめておいたものだ。

ロケット団の本部について、ハナダ説が浮上してゐた。主に三課の主張で、ヤマブキ

説を唱える四課とは対立という形になる。互いに証拠不十分の主張は、僅かだが不和の芽を生んでいた。

立て続けにハナダで起こつた犯行は、タマムシから目を逸らすため、ということになるのか。

コーヒーを啜る。煙草を喫いたかつた。しかし、今呼び出されれば点けたばかりの煙草を消すことになりかねない。

結局、一時間ばかり待つことになつた。待つたというのはタカギの主觀で、周囲から見れば、言い出せないまま呼び出されたということころだ。

「二ビくんだりまで行つて貰つたのは、申し訳ないと存じましたがね」

タカギを見るなり、課長が言つた。行つて貰つた。つまり、課長の命令でタカギは捜査に出た、ということになつてゐるようだ。

あえてあやふやにしていた物をはつきりと明言するからには、手柄の気配でも感じ取つたのだろう。

自分の嗅覚で稼いだ手柄以外は信用しない。年季を入れた刑事なら誰でも知つていることで、その点で課長はまだ若かつた。

「久しぶりに羽を伸ばさせてもらいましたよ。いい休暇でした」

課長が曖昧な笑みを浮かべた。タカギは、ただ微笑み返した。課長の日尻がひきつる

まで、大した時間は掛からなかつた。

ライターを擦る。二度で、火が点いた。全く、調子の良いものだ。

「博物館ぐらいしか見るものはないだろうと思つてたけんですがね。なかなかどうして、立派な花を養つていてるところがありまして。植物園などではなく、町の中にポツンとあるのも良かつたな」

「タカギさん」

「赤い花があつたな。ラフレシアをもつと鮮やかにしたような赤でしたよ」

「私に、何か報告することがあるんじやないですか？」

「休暇を終えて、本日から復帰します、ということならば」

「取り調べでは何も聞き出せなかつた、という風に解釈しますよ」

「休暇でしたよ」

そこまで言つてから、タカギは横を向いた。目を逸らす。後ろめたい時は、誰だつてそうするだろう。

処分されることはないと、という自信があつた。あのタイミングでタカギがニビにいた理由を、誰も説明できないからだ。ニビ警察の管轄である化石強奪事件にタカギが職務として首を突つ込んだとなると、問題はややこしくなる。当然、指示を出した課長まで巻き込んでだ。

休暇というのも疑わしい理由ではあった。しかし、休暇の申請自体は二度目の襲撃前で受理されているのである。博物館で観光しているタカギの姿も、ニビの住人には見られている筈だ。

「事件後、タカギさんから私に電話がありましたね。電話番の人間はそのことを知っています」

「トキワまで足を伸ばしたくて、休暇の延長をお願いしましたよ」

「そうですか。いや、そうでしたね」

肘をデスクに突いたまま、課長が行つていいという仕草をした。軽く会釈をしてタカギは部屋を出た。

クリードの取り調べについて、タカギが参加できるよう取り計らつてもらうための電話だった。勿論、課長も忘れてはいる訳ではない。口裏合わせというやつだ。

自分の席に戻つてから、いくつかの資料を広げた。数ヶ月前にタカギが逮捕した被疑者の公判が、二週間後に入つていた。有罪はほぼ確定していて、求刑がどの程度まで通るかというだけの裁判だ。傍聴するつもりもなかつたが、もつともらしくメモを取つたり、記録と資料を見比べたりした。休暇明け、という感じにはなる。

本当にただの休暇だったと思つている者など、タマムシ署にはいないだろう。仕事をしていると、滑稽な役をやらなければならぬことが時々ある。

昼食時になつてから署を出た。

店は指定されていない。人通りは多かつた。この人混みの中で、とは思うが、なにかしらの技はあるのだろう。何度か周囲を窺つたが、尾行の気配はない。

表通りを二、三軒覗き込み、結局は路地を二つ縫つた場所にある定食屋に入った。

「何名様でしようか?」

「二名で」

答えたのはタカギではなかつた。キヨウ。何食わぬ顔で、隣に並んでくる。タカギは肩を竦めた。

「いつから、後ろにいたんだね?」

ざる蕎麦を二枚、ビールを一杯頼んでから水を飲んで尋ねた。

「これでも警戒していたんだがね」

「何度か周囲を見回していたな」

「見ていたのか」

「君の視界に二度入つたよ。もつとも、一度目と二度目で顔は違つたがね」

「この分ならば、私の命など大したことはないな」

「なかなか鋭かつた。同盟軍程度の尾行なら気付けるだろうさ。正直言つて、少し安心したよ」

蕎麦が運ばれてきた。ワサビを半分ほど取り、つゆに溶かす。キヨウは少量を直接、麺に乗せながら食べていた。刺身でも食べるかのようなやり方だ。

お新香が付いていた。ビールを飲み、お新香をつまむ。蕎麦を食べる。キヨウが笑っていた。

酒はよく飲んだ。普段はブランデーをやつていて、飲む時に食料はほとんど口にしない。一本を空にして、ようやくまどろむといった感じだ。

妻はその辺りを心得ていて、本当に食事をさせたい時はビールしか出さない。ビールで酔うことはまずなかつた。仕事中に飲むことはないが、絶対に飲まないと決めている訳でもなかつた。

「警察が普段、同盟軍のどの辺りまで手を出せるか知つているかね？」

ビールはまだ半分ほど残つている。キヨウが自分のお新香をタカギの方へ押しやつた。

「さて。佐官、というのは高望みなのだろうな、恐らく」

「そうだな。正解は、伍長だ」

「なんだつて？」

「それも現行犯という前提がつく。それ以上の階級になると、任意同行が限界だ。現行犯ならば一時拘束できるが、引き取りが来たら身柄を明け渡すしかない。後は検察官任

せだが、ほぼ不起訴で終わるよ」

キヨウが箸で一度空を掴んだ。箸の先端がタカギに向いていることに気付いたのか、ざるの上に放り投げた。からんと音を立てた箸が片方、ざるから落ちた。

「条約と違すぎる」

「しかし、現実でね。巢食つている、という言葉が近いかもしだれん。連中はこの国に巢食い、表に見えない根を張っている」

ビールを呷る。それは冷たい塊のように、タカギの肚に沈殿した。

クリードの取り調べについて、課長に依頼した。課長とニビの署長が交渉し、その成否がタカギに伝えられる。断られたのならば、もつと上に話を持っていく。そうなる筈だつた。

やつてきたのは、同盟軍の名代となつたマチスだつた。

同盟軍に情報が漏れる程度ならば最初から想定していた。上へ上へと行けば、どこかに横道はあつて当然だ。

その横道がすぐ上にあるかもしれない。マチスを見た時に、そう思つた。

「伍長が精々。それが、参謀部か」

キヨウが呟いた。

ロケット団が行つてゐる、同盟軍を通した資金洗浄。証拠次第では、ずっと先まで手

を伸ばせる筈だ。少なくとも、伍長などで止まることはない。

「話は、わかつた。警察内部の状況まで含めてね。私達一人で、仕掛けるかね？」

「私は警察だよ。そして君は、警察関係者ということになる」

情報には守秘義務が課せられる。そしていざということになると、その証言は証拠能力を失う。

「ならばどうする？」

「待つさ。私は、待つ刑事でね」

グラスを持ち上げて、微かに残ったビールを呷った。キヨウが腕を組んでいる。  
何を待つのか、キヨウは訊かなかつた。

## 第14話

一日が速かつた。

苦しみが短い訳ではない。むしろ、苦痛ほど長く感じた。一日を振り返ると、なにも成したことがない。だから、その日の終わりには速く過ぎたようを感じるのだ。

躰はとつくに癒えている。元々、洞窟内での炎と過呼吸によつて酸欠を起こしただけなのだ。数ヶ所の切り傷と、倒れた時に右足首の軽い捻挫。数日大人しくしているだけで充分の負傷だつた。

窓の外を見た。数本の街路樹と隣家の屋根があり、そのずっと向こうにトキワジムの外壁が見えた。

トキワに口ケツト団が潜伏していると、フミツキは知らなかつた。なぜハナダの隠れ家からトキワに移されたのかも知らない。知らないままに、流されてきたのだ。最初に目が覚めたのはハナダの一軒家だつた。ハナダ団員の隠れ家の一つである。

見舞いと称して、代わる代わる団員が訪れた。クリードの顔が見えないことに気付くのに、大して時間は掛からなかつた。

自分に才能がないことなど、ずっと昔からわかっていた。

勝ち続けるなど不可能で、悪の組織の敗北にはきついリスクが伴うことも承知していた。

部隊を任せられた時は、自分の敗北に他人を巻き込んでしまうと思った。しかし、口ケツト団に所属するならば誰でも覚悟するリスクもある。他人を巻き込むことが心に重かつただけだ。

自分が助かり、他人だけがリスクを負う。それは、全くの埒外だつたと言つていい。

共に戦つた団員達はそれぞれの持ち場へと戻つていったようだ。一人だけ、フミツキに付き添うように療養していた団員がいたが、それもトキワに移る際に離れていった。誰もフミツキを責めなかつた。直接率いた戦闘員の面々は、むしろフミツキを慰めようとしていたぐらいだ。

仕方がなかつた。やれるだけのことはやつた。誰にも責任はない。

慰めの言葉はそんなものだつた。誰も悪くなくとも、結果に対して責任を負うのが隊長ではないのか。そう思つたが、口にはしていない。居たたまれなくなるだけなのはわかつていた。

束の間、眠つたようだ。躰を起こした。いつの間にか掛けられたカーテンの隙間から、うつすらと一筋の夕陽が床からベッドを這い、フミツキの躰に迫っていた。もつと伸びて、脇腹から肩へと両断していけばいい。そう思つたが、それ以上陽射しは迫つてこずに、輪郭を薄ぼんやりとさせて、やがて消えた。

躰を倒す。再び眠つた。今度は三十分ぐらい眠つただろうか。

深く眠ることができなくなつていた。長くとも一時間で、酷いときは十分と経たずに目が覚める。短すぎる眠りは疲労と倦怠感をやたらと際立たせた。今の自分の顔は病人さながらだろう。

ドアが開いた。フミツキは一度掛け布団に頭を伏せて、顔を揉みほぐした。

「おかげり」

のつそりと顔を覗かせてから、サンドパンが入つてきた。フミツキが寝込んでいる間は自由にさせていて、昼にどこかへ出かけては、日が沈む頃にこうやって戻つてくるのが日課となつている。

ベッドの傍までやつてきたサンドパンが挨拶代わりに両手を擧げる。片手でそれに応えながら、フミツキはサンドパンの手の付け根、人間で言う左肩に当たる部分を盗み見た。

負傷したのだということは、トレーナーとしての勘が教えてくれた。扉を押す時の重

心の位置、歩き姿、右に比べて僅かに動きの鈍い左手。それら全てが、フミツキのトレーナーとしての勘に働きかけてくる。

勿論、傷が残っている訳ではない。メディカルマシーンを使えばポケモンの傷はたちどころに治癒できる。よほど深い傷や、負傷してから長い時間が経過した場合を除けば傷痕が残ることはないのだ。

ただ、それは形としては残つていないとということで、負傷した記憶そのものが消える訳ではない。

負傷部位を庇いながら動いていたポケモンが、傷が癒えた途端に元の動きに戻れるということはまずなかつた。重傷の場合は一時的に幻肢痛に近い症状を発症した例もある。メディカルマシーンは、決して万能ではないのだ。

「おいで」

ベッドを軽く叩きながら言うと、僅かに躊躇した様子を見せてからサンドパンが飛び乗ってきた。やはり、動きはぎこちない。

首元や鼻先を柔らかく擦つてやる。背中の棘が春風に捲られた外套のようにふわりと膨らみ、ゆっくりと元に戻つた。サンドパンにどこか漂つていた緊張や警戒は、それで解けたようだつた。

どこで、何をしてきたのか。フミツキの懐に戻つてもなお容易には解けない緊張

感など、いつたいどんな怪物と見えたというのか。

問い合わせることがトレーナーとしての責務だと、頭ではわかっている。しかし、言葉はいつまでも口を衝かなかつた。

サンドパンを抱き寄せて、フミツキは躰を倒した。サンドパンがするりと腕の中を抜け出して、器用に部屋の明かりを落とすと、再びフミツキの腕へと戻ってきた。

久しぶりに深く眠れそうな気がした。安堵と自己嫌悪を、ほとんど同時にフミツキは感じた。



日差しが深々と突き刺さる気がした。盛りはどうに過ぎて、いよいよ沈むのを待つばかりの太陽でも、今のフミツキには厳しい光線だつた。

手洗いや入浴以外はほぼベッドの上で過ごしていたのだ。屋外に出たのは、トキワに来た日以来だつた。

サンドパンの後ろ姿が建物の陰に消えた。呼吸を四つ数えてから、フミツキはその背

を追つた。

トキワの町並みが次々にフミツキの視界を通りすぎる。この数日間のうちにサンドパンは随分とトキワに精通したようだ。迷いのない足取りで進みながら、時折、住人に声をかけられている。

散歩をしている男性、夕方に備えて掃除をしているポケモンセンター職員、道端に蹲つている酔っぱらいの老人。

一言二言の言葉を投げ掛けてくる彼等と、それに反応するサンドパンを、フミツキは建物の陰から盗み見ていた。

私は何をしているのだろう。それはサンドパンを尾行し始めた時から。いや、もつと前に、ハナダのベッドに躰を横たえていた時から考えていたことだ。

自分は一体何をしているのか。復帰していく同僚を見送った。わざわざ見舞いに訪れた人を前に、怪我人らしく振る舞つた。掛け布団を少し捲れば、完治して捻挫の痕もない脚を見せることもできたのだ。

また、サンドパンが誰かと話していた。トキワの住人達は地面タイプに対して親しみを持つているらしい。トキワ周辺には生息していないサンド系列についても、ある程度の理解はあるようだつた。

サンドパンが動き出す。いくつか呼吸を数えてから、フミツキも建物の陰を出た。

サンドパンと話していた男とすれ違ひ様、会釈をした。男はどこか戸惑うようにフミツキを窺いながら会釈を返してきた。

サンドパンのトレーナーだと認識されなかつたことに、しばらく歩いてから気付いた。滑稽な話だ。トレーナーらしからぬ行動をしながら、トレーナーであるという自認だけはある。

町中を抜けると、サンドパンは真っ直ぐ西へ進んでいった。遠方にはセキエイ高原へと連なる山々が日差しの中で影を伸ばしていて、風向くままに空から地へと落ちる雲の影を、無造作に呑み込んでいた。道は意外なほど拓けていて、山に至るまでの数キロを見渡せる。

サンドパンが足を止め、木陰に座り込んだ。何をするでもなく、フミツキはその姿を見守つた。

一時間ほど経つただろうか。サンドパンが立ち上がり、遠く一点を見詰めた。フミツキも目を凝らした。

男。山と雲の影が入り交じった大地から、不意に湧き出てきたように見えた。トキワへ向かつて走っているようだ。トレーニングかなにかだろう。興味を失いかけたフミツキは、男の走りに目を見開いた。

速い。それも、ただ速いというだけではない。脚力自慢の男が八百メートルを走るよ

うな速度を、既に二キロ以上続けていた。遙か遠くに見えたと思つた姿は、あつという間にサンドパンの前まで来て足を止めた。

「また君か。あれだけ打ち倒されて、よく気力が続くものだ」

息を整えながら話しかける男の顔を見て、フミツキは声をあげそうになつた。サカキ。カントー最強のジムリーダーの姿がそこにあつた。

サンドパンが臨戦態勢を取る。サカキが仕方なげに、しかし、どこか楽しげな雰囲気も醸しながらモンスター・ボールを投げた。

現れたニドキングの威容には、声を出そうという反射すら起きなかつた。とにかく、大きい。並のニドキングの倍近い大きさの躰には、余分なものがほとんど見受けられない。小柄なサンドパンとの対比は、どこか悲劇的にすら見える。

「出てきてやつてはどうだね？ 君のサンドパンは、例え一匹でも戦うつもりのようだが」 フミツキが身を隠している木を横目に見ながら、サカキが言つた。姿を見せると、サンドパンが驚いたように飛び跳ねながら駆け寄つて來た。フミツキはその頭を撫でた。  
「私のニドキングと戦いたがるもののはそう多くない。まして連日挑みかかるなど、トキワジムの者でも稀なことだ」

サカキが言う。フミツキは慌てて立ち上がつた。

「構えなさい」

「あのつ、サカキさん」

「君のサンドパンは力に飢えているよ。それも、随分と真っ当な飢え方だ。つまり、トレーナーの為に強くなるうというのだな」

「私は」

「君がトレーナーであるならやるべきことは、いや、サンドパンの為にしてやれることは一つしかない」

言い切って、サカキは目を閉じた。その佇まいは、鞘から放たれる前の刃に似ていた。サンドパンの為にしてやれることが私にあるだろうか。してやれる力が、私にあるだろうか。

サンドパンと目が合う。無邪気に笑顔を見せると、サンドパンはニドキングに向き合った。しかし、動こうとはしない。フミツキから指示が出ると信じて疑わないのだ。

私は何をしているのだろう。ここしばらく、ずっと繰り返した疑問だった。今でも、自分の感情に整理はつかない。しかし、何をすればいいのかは、目の前にはつきりとした形で示されている。

力は足りないかもしない。いや、サカキという相手を考えれば足りる筈もないだろう。

それでいいとは思わなかつた。ただ、サンドパンのトレーナーとすら認識されない滑

稽さんは、もう耐えられないという気がする。それならば、力不足のトレーナーとして認識される方がずっとマシだ。

「フミツキといいます。ジムバッジは、二つしか持っていません」  
「構わんよ。目と目が合つた。そういうことにしよう」

サカキが目を開く。思わず、唾を飲み込んだ。今まで出会つたどのトレーナーでも比類できないほどの、圧倒的な存在感だった。それでも、あくまで一人のトレーナーなのだ。そしてフミツキは、サンドパンのトレーナーだった。

「行きます」

試合は一方的という言葉では表せないほど、無惨に進んだ。フミツキが声を張り上げる。答えるようにサンドパンが駆け、時に飛び、時に這う。それら全てが、サカキとニドキングによつてあっさりと受け止められた。咄嗟に反応しているのではない。ほとんど未来予知としか思えないほどの先読みで、こちらの行動を潰しているのだ。オツキミ山で赤い帽子の少年が行つた試合運びとどこか似ていた。違うのは、先手を取ることで行動を潰した少年に対して、サカキはあくまで後手で対応していることだつた。絶対に読み間違えない自信がサカキにはあるのだろう。事実、サンドパンの攻撃は爪の先すら掠つていなかつた。

『こうそくスピン』で突撃しようとしたサンドパンが、明後日の方向へと動き、木に接

触しながら止まつた。『おだてる』だろう。いつ技にかけられたのかは全くわからなかつた。尾の一撃にサンドパンが弾き飛ばされる。辛うじて受け身を取つたようだが、追撃を躱す余力はどこにもなかつた。

ニドキングが迫つてくる。不意に、眼を閉じてしまいたい衝動がフミツキを襲つた。

「最後まで勝負を見続けなさい。私は、そう言つた筈だ」

声。弾かれたように顔をあげ、フミツキは眼を閉じそうになつたことを恥じた。サンドパンが爪を振り上げている。迫りくるニドキングに一矢報いようと、力を振り絞つている。

### 『ひつかく』

叫んだ。最後の一撃を加えようとするニドキングの尻尾を、確かにサンドパンの爪が捉えた。それで終わりだつた。瀕死による躰の収縮を始めたサンドパンへ、フミツキはモンスターボールを向けた。



## 「ボス」

呼びかけたフミツキを一瞥して、サカキはニドキングの尻尾を観察していた。その横顔を、フミツキはぼんやりと見遣つた。

最後まで勝負を見続ける。フミツキがボスから言われた言葉だつた。

考えてみれば、サカキがボスであるというのは想像できることではあつた。ゲームコーナーの支配人は、ボスが出陣すればキョウを突破できると言つたのだ。キョウが四天王級の腕前とされる以上、それを成し得るのは他の四天王かチャンピオンであるワタル、そしてワタルと互角とされるサカキぐらいだろう。

サカキがニドキングを触診している。その姿は僅かな不調も見落とすまいとする誠実なトレーナーそのもので、事實を知つた今でも悪の組織の首領とは到底見えなかつた。

やがて、ニドキングをボールに戻すとこちらに向き直つた。口を開こうとして、慌ててフミツキは周囲を見回した。

「心配するな。付近には誰もいない。ピクシーが聞き耳を立てている、ということもな

いさ」

「しかし」

「修行をしていた頃に敏感になつてね。本氣で気配を消したキョウを察知できるという

のが密かな自慢でもある」

そう言つて、サカキは道沿いの小岩に座つた。促され、フミツキもその向かいに腰を降ろす。

いざ対面に座ると、言葉は出てこなかつた。訊くべきことがあるという思いと、なにも知らずにいるべきだという考えが頭の中で打ち消しあい、言葉まで巻き添えにしている。

「君は多分、苦しむだろうな」

「え？」

「逃げるべき時というのが人間にはある。弱ければ弱いほど、その機会は多いだろう。私の見る限り、君が直面した問題は逃げるに足るものだつた」

「そう、なんでしょうか」

「口ケット団にいればもう一度レッド君と立ち合うことになるかもしけんぞ。君が敗北した、赤い帽子の少年だ」

レッド。赤い帽子の少年。圧倒的な才覚で、フミツキが育んだすべてを擂り潰した少年。名前を聞いただけで、フミツキは鳥肌が立つた。

「マサラタウンには時々ああいうのが生まれるそうだ。古くはオーキド・マサラが、直近ではオーキド・ユキナリがそうだな。レッドという少年もその類いだろう」

「天才、ですか」

「怪物というべきだろう。ワタル君などもそうだ。私もあり、人のことを言えた義理ではないがね」

そう言つて、サカキはニドキングが入つてゐるボールを撫でた。確かに先ほど感じた威圧感は、真剣勝負ではないにも関わらずレッドのそれを凌駕していた。

「目を覚ました時、逃げるべきだつたんでしょうか?」

「逃げて当然、と言つただけだ。君は観察力があり、自身の身の丈も知つてゐる。君の自己認識は、私から見ても間違つてゐるものではない」

「私は」

言葉が詰まつた。サカキは急かすでもなく、時折地面を見詰めていた。

「自分は何をしてゐるんだろうと。そればかり考えていました」

「どうか。ならば私は、見誤つたということだな」

「そんな」

「何をしているのか悩むというのは、何をするべきか考えていたということだ。逃げる

者の思考ではない。ただ、苦しむことになるだろうが」

「弱いから、ですか」

「君の場合は立ち向かうべき相手が悪い」

サカキが笑った。ふと、フミツキは動悸が速くなるのを自覚した。

なぜ口ケット団に集まつた人間がこの男に惹かれるのか。それが、なんとなくわかつた気がする。

複雑なのだ。サカキという男は、強者が持ち得ない筈の複雑さを持ち、理解し得ない複雑さを理解しているのだ。それも、物事を単純に処理するだけの力と精神を持ちながら。

道を踏み外す人間はどこかに弱さを持つていて。社会に理解されずに切り捨てられるような、そんな弱さだ。

クリードは自制ができずに踏み外した。フミツキも、才能の壁に向き合えずに踏み外した。どちらも、社会から理解は得られないだろう。内面の動きが複雑だからだ。そんな人間が縋りたくなるものを、サカキは備えていた。

笑みを収めたサカキが、枯れ枝を拾い地面に何かを描き始めた。

「ハナダの洞窟の最奥にミュウツーというポケモンがいる。それを観測するために、陽動が必要だった。ハナダの洞窟は協会の職員が常駐しているのでね」

「え？」

「敗北は君の弱さ、あるいはレッド君の強さに依るものだ。ただ、君が作戦の全体像を知つていれば違う展開が拓けた可能性はあると思つていてる」

地面に丸が二つ描かれ、その中心に星形の図が置かれた。

「聞くかどうかは任せよう」

枝が動く。星形にハナダの洞窟という名が彫られると、二つの丸にもそれぞれ内容が描かれていく。一つはオツキミ山だ。

今さら、背を向けようという気はなかつた。ただ、気になることはある。

「機密になるのではありませんか？私が聞いていい領分を越えているように思います。機密の保持に関する正直、自信はありません」

「心配はいらん。ロケット団に残っているのはこれだけだ」「これだけ？」

「次の作戦が成功しなければ、ロケット団は解散ということになる。成功すれば全てが新たな段階に進む。成否を問わず、今ある機密など役に立たなくなる訳だ」

システム  
事も無げにサカキは言つた。

「国家に目を付けられているのが一つ。目的に対する最適化、言い換えれば先鋭化が進みすぎたのも一つだな。次の作戦が成就しなければ、その後の展望はない」

「わかりました」

「ほう、なにがわかつた？」

「ただ、全力を尽くすだけだということが」

サカキが頷いた。やはりどこか、気のない表情をしている。

「恐らくは終戦直後、一匹のポケモンが研究施設を脱走した。名はミュウツー。ミュウの遺伝子を用いて生み出された、対進駐軍用の人造ポケモンだ。類稀な戦闘力と、同盟軍が用いる電子機器、兵器に対して強い妨害能力を保有している」

「同盟軍の兵器、ですか」

「連中は電気タイプのポケモンを主力として電子機器や兵器と連動した作戦行動を主眼としている。手持ちの電気タイプ一匹だけで、複数の戦闘車両などを無人走行させることが可能と言えば、その厄介さはわかるだろう」

「つまり、ミュウツーを用いてそれらを妨害、撃破するというのが最終目標ですか。私たちの作戦はミュウツー捕獲の下準備だった訳ですね」

「捕獲については想像の通りだ。だが、私は同盟軍をもう少し優秀に捉えている。ミュウツー一匹でどうにかなるのならば、旧軍が敗戦を喫することもなかつた」

「ミュウツーでは勝てない、ということですか？」

「私はそう考えている。ミュウツーを生み出したフジという研究者も同意見だった

「では」

どうするんです、というフミツキの言葉をサカキの枝が遮った。地面に描かれた図を枝がなぞり、やがて一点を指して止まつた。ハナダの洞窟。

「まさか」

「ハナダの洞窟の野生ポケモンを捕獲し、団員に支給する。同時に溜め込んだ技マシンを開放することで、野生ポケモンにありがちな技の不足を補う。高レベルで技の揃ったポケモン軍団ができるが、ミユウツーの役割は、同盟軍の兵器を抑え込んでポケモンでの勝負に持ち込むことだな。これで、同盟軍と五分五分の勝負を展開することができる」

「賭けの要素が強すぎる気がします。高レベルのポケモンを支給されても、指示を出すことは」

そこまで口にしてから、フミツキは愕然とした。ある。高レベルで、他人から貰つたポケモンであつても、指示を聞かせる手段が一つある。そのことに思い至つたのだ。

「ジム、バッジ」

「ポケモンを落ち着かせる作用を持つた、特殊な鉱石でできている。特にグリーンバッジは、鉱石そのものと言つてもいいだろう。最低限の信頼関係は必要になるが、ハナダの洞窟のポケモンであろうと指示を出すことはできる」

そして、グリーンバッジを大量に所持しているのはこの世にただ一人。トキワジムジムリーダーであるサカキだけだろう。

フミツキは条件反射のように、なにかの欠点、落ち度を見つけようとした。しかし、見

つけきれなかつた。目の前の男は、ハナダの洞窟のポケモンであろうと問題なく捕獲できるだろう。大量の技マシンはロケット団が蓄えており、グリーンバッジは他ならぬサカキ自身が唯一の保有者といつてもいい。作戦に必要な要素のほとんどは、既に手中に収まつていた。不確定な要素は一つだけだ。

「ミュウツーは類稀な戦闘力を持つているのですよね？ 捕獲は可能なのでですか？」

「無理だな」

あつさりとサカキが言う。

「一度、ハナダの洞窟で戦つたことがある。まだ自己進化の途中だったが、私の手持ちを壊滅させてくれたよ。ニドキングがいなければ、今頃私はこの世にいないだろう」

「それほどに」

「再生能力も持つている。あれを弱らせて捕獲など夢のまた夢だろう。全靈を尽くせば瀕死に追い込めるかもしけんが、そうなるとキャプチャーネットにかかるない」

モンスター・ボールは、瀕死時に躰を縮小させるポケモンの性質を利用したものだつた。モンスター・ボールに依つて縮小を起こすことで捕獲するのだ。先に瀕死にしてしまうと、捕獲は不可能になる。

ミュウツーが捕獲できないのならば、作戦は成り立たなくなる。そう危惧したフミツキを尻目に、サカキが枝を動かした。表情は相変わらず、興醒めて見える。

枝が止まつた。ハナダの南。ヤマブキシティ。

「三年前、ある情報が入つた。シルフカンパニーが新型の、これまでにない性能を持つたボールを開発するという噂だ。実際はもつと前から動いていたのだろうな。噂が入つた頃には既にプロジェクトの立ち上げも終わり、スケジュールも稼働し始めていた」

「三年前というと、もしかして」

「競合他社が山吹組を動かして、シルフカンパニーを妨害しようとした。私は山吹組を叩き潰すことに決めたよ。それだけの価値が、シルフカンパニーのプロジェクトにはあつた。警察の眼をタマムシから逸らせたのは副産物のようなものだな」

地面に文字が描かれる。M。

「Mプロジェクトは箒口令が敷かれるようになつた。息のかかつた研究員を送り込めたのは幸運だつたな」

「そのボールなら、ミュウツーでも？」

サカキが頷いた。

「マスター・ボール、と呼称されているらしい。もつとも、こちらの研究員は末端になんとか潜り込んだだけだがね。ボール本体や研究資料には近付けもしないようだ」「マスター・ボールを盗み出すのが次の作戦ですか」

「いや」

サカキが首を振る。口の端に、ちょっと楽しげな笑みが浮かんでいた。

「シルフの現会長は一角の人物だよ。警備の徹底は当然として、盗まれた場合のことも想定している筈だ。マスター・ボールにはセーフティが掛かっている可能性が高い。それも、自壊しかねないようなセーフティがね。我々が狙うのは設計図だ」

「設計図の場所は?」

「わかっていない。データのみなのか、紙媒体に出力されているのかすら不明だ」

「それでは、盗み出すのは不可能だ。見つけるだけでも随分な困難だろう。シルフカンパニーの本社ビルを、上から下までしらみ潰しに探さなければならない。」

「そこまで考えて、フミツキは一つの方法に思い至った。まさか、という思いと、この男ならやりかねないという納得が同時に浮かんだ。」

「シルフカンパニー本社ビルの占拠」

サカキが笑みを深めた。

「悪くはない。しかし、スケールに欠けるな。シルフ周辺の区画は通行をゲートで制限されている。本社ビルと言わずとも、区画まるごと孤立させることも不可能ではない」

「それならば、撤退時にも余裕ができます」

「ゲートには既に手を廻してある」

フミツキはため息を吐いた。自分の頭で思い付くような懸念など、もうなにも浮かば

ない。全て、自分に想像できる範疇を超えた勝負となつてゐる。スケールの差は、そのまま人間としての器の差だろう、とフミツキは思つた。

「一つだけ、お訊きしても構いませんか」

「言つてみなさい」

「同盟軍を倒したとしてロケット団は、いや、ボスは何に成るのですか？」

それだけが、フミツキにはよく見えなかつた。これだけの器を持つた男だ。非合法な手段など用いなくとも、いくらでも成り上garことはできるだろう。

現時点でも、カントーを代表するスターの一人といつていい。これだけの思慮とカリスマがあれば、政治家になつて首長を目指すことも容易いようと思える。

「ふむ。私の目指すところか」

サカキが枝を小刻みに動かした。なにかを描いている訳ではない。形を成さない線が、訥々と地面に横たわつた。

「重力というものがあるだろう。これは人々の自由を奪うと同時に、生活を安定させておられる」

語りだした内容は、質問となんら関係ないよう思えた。フミツキは一つ相槌を打つて、続きを促した。

「それを悪いというつもりはない。自由などというものが、世間が標榜するほどに甘美

な豊かさを備えている筈もない。重力の中で身を低くしていれば世界は、まあ優しいものだろう」

枝は動き続けている。描かれる線は全て直線で、銳角に曲がっていく。それは全て内側へと入り組んでいき、やがて塗り潰された円のようになつた。

重力というのが同盟軍を指すのは、フミツキにも理解できた。彼らの存在はカントーを締め付け、同時に安定もたらしている。

不意に、枝が激しく動こうとした。円の中心から一気に外側へ突き抜けようとし、耐えきれずに手元から折れた。サカキがちょっと苦笑した。

「私は、この重力を無くしてしまいたい。多くの人々が無重力という、自由の苦しみに藻搔く羽目になるとわかつていてもね。自由で、苦しく、懸命に生きなければいけない世界を作つてしまいたい。そして、戦いたい。懸命に、戦いたい。不自由の安穩を我慢できなくなつてしまつたのさ」

「そのために同盟軍を倒すのですか？」

「口ケット団が新しい重力になつてしまつただだな、それは。口ケット団と同盟軍という逆方向の力が互角に向き合うからこそ、無重力は生まれる」「なるほど」

「私が生まれたのは終戦後だ。進駐軍のいない時代を、私は知らない」

「私などは、在つて当たり前の存在でしたよ。同盟軍がいない世界を考えたことがありません」

「考えても意味はない。そういう時代に放り出されれば、それなりに身を処すだろう。君は私が何に成りたいのかと訊いたが、成りたいものなどないのだよ。一人のポケモントレーナーとして全身全霊で、無重力の世界に挑みたい。そのために世の中を苦しめようとしている」

「人々を無重力の世界へと連れていく。ロケットとは、そういうことですか」

「言い出したのはゲームコーナーの支配人だ。なかなか洒落たことを言うと感心した」  
　サカキの口元が綻んだ。それはどこか少年のような、無邪気な笑みだった。心のどこかが、弾んだ。

「微力ながら、お手伝いします」

笑みはもう消えていた。どこか望洋とした表情でサカキが頷いた。

「まあ、しばらくはゆつくりするといい。君のサンドパンはトキワジムでも人気でね。稽古をつけてやろうという者が何人かいる」

「ヤマブキに移動しなくともいいんですか？」

「タマムシの動きを待つていて。老いぼれ犬はアジトの存在を掴んでいるだろう。多少警察に手柄を立てさせてやつた方がこちらも動きやすい。それに、タマムシ次第で老い

「ぼれ犬の肚も読める」

「肚、ですか」

「まともな刑事なら警察組織の力を頼るだろう。そして、同盟軍の介入を招く」「頼らなければ?」

「無重力に生きている男が一人、という訳だ」

笑いながら立ち上がりつたサカキが、腰のモンスター・ボールを宙に翳した。どこか凄惨な予感を孕んだ鈍い斜光が、フミツキの爪先を横切つた。

## 第15話

三日も屯つていると、住民の顔や町の性質も見えてくる。刑事の習性のようなものだ。

昔ながらのタマムシと言つてよかつた。閑静な町に、背の低い家が軒を連ねている。行き交う人々の足並みは緩やかで、ちよつと会釈を交わしながらすれ違つて行く。十一時を過ぎる頃になつてようやく、個人経営の食堂が暖簾を店先に掲げた。これがタマムシの中部から北部ならば、二十四時間営業のチエーン店がいくらでもあるのだ。

サイクリングロードができる前のタマムシは、都市全体がこととこと同じような空氣感を持つっていた。ヤマブキに近いということがほぼ唯一の取り柄で、これといった産業もなく、無駄に広い土地になんとなくという感じで植えた花畠だけが、街の特色だつたのだ。サイクリングロードができ、その利用者を待ち構えるような位置にタマムシデパートができた。タカギが少年の頃の話だ。

そこからは速かつた。タマムシを東西に走つていた旧道沿いの家々に一斉に立ち退

き交渉が行われ、完了を待たずに建物の取り壊しが始まつた。周囲が次々と更地と化していく中で、立ち退きを拒否し続けることができる者はいなかつた。拡張された旧道はメインストリートなどと呼ばれ、タマムシはカントー第二の都市となつた。

決して悪いことではないが、失つたものはある。ここには、その失つたものがまだ静かに息づいていた。

男が一人、タカギをちらりと見て、下卑た笑みを浮かべた。同類を見る眼だ。馴れ馴れしく近付いてきた男の鼻先に、タカギは警察手帳を突きつけた。飛び上がつた男が曖昧な愛想笑いを浮かべると、風でも避けるように身を縮ませながら立ち去つていつた。タカギはコートの襟を一度立たせてから、丁寧に折り込んだ。

「もう。あの方は放つて置いてくださいとお頼みしましたのに」

ジムから出てきたエリカが、着物の袖を揺らしながらよつと周囲を見回して言つた。

「異性の視線が大事だというのはなんとなくわかるが、刑事としては贊同できんよ。もう少しマシな方法はないかね？ 好色な中年男の覗きなど不快極まるだろう」

「だからこそ、ですわ。不快な視線を意識しないのは不可能ですから。うちの子達、スカートが翻らないような歩き方をすっかり身に付けてしまいました」

「作法というよりは、自衛手段だね」

「あら。作法がただの見栄え造りだと思われているのなら、とても心外です。なにかしらの手段、合理的な理屈から作法は生まれるものですよ」

「そういうものかね。傍目には、合理性など見つけられんが」

「タカギ様が古いライターをお使いになられているのと同じですわ」

クスリと、エリカが品の良い笑みを溢した。

警察では年に二回、ポケモンバトルについての講習があり、ジムのある町はジムリーダーが、それ以外は協会が認めた有力なトレーナーが指導を行うこととなつていて。タマムシは当然エリカを教官に迎える訳だが、彼女の指導は当初難航した。

警察では、炎タイプや飛行タイプをパートナーとする者が多かつたのだ。特に、初代警視総監の相棒だつたとされるウインディに憧れる者が多く、ガーディ、ウインディは警察のシンボルとも言われているほどだ。

不慣れな環境で不慣れなポケモンについて指導することがエリカの大きな負担になつていた。

白羽の矢が立つたのが、タカギだつた。ウツボットを相棒とするタカギはエリカにとつても指導しやすく、練習台には最適だつたのだ。講習前にエリカが訪ねてくるのが通例のようになり、多少話をする間柄になつた。

若い刑事などは、羨望の眼差しでタカギを見たりする。苦笑いするしかなかつた。遅

くに出来た息子と一つ二つしか変わらない年齢で、並んで歩くと滑稽な気分さえするのだ。羨望に添うような実態がある筈もなかつた。

「それで、ご用件は？覗きに来た、というのなら、わたくしとしては歓迎いたしますが」

「現役の警部が覗きか。洒落にならないな、それは」

「それは残念。今日はミニスカートでも穿こうかと思つていましたのに」

タカギはエリカの横顔を盗み見た。薄く浮かんだ笑みを手の甲と袖で隠している。

「どうも、機嫌が良くないらしないな」

「ポケモンセンターへ行つてみることをお勧めいたしますわ。タカギ様の探し物はそちらです」

「探し物？」

「待ち人、と言つた方がよろしかつたでしようか。タケシさんから、色々とお話は伺つていますので」

「そうか、ニビのジムリーダーから」

オツキミ山への道中にレッドを同行させることを勧めたのがタケシだつた。当然、新聞に出た少年という文字が誰を指しているのかもわかつただろう。

「有力な挑戦者について、事前に連絡を頂いたりする」ともありますわ」「試合はもう？」

「今朝早くに。私が一蹴されただけの試合でしたが。三日も張つていらしたのに、タカギ様の到着まで持たせられず面目もありません」

「張り込みが無駄になるなど、刑事をやつていれば日常茶飯事だよ。それより、君の目から見てレッド君の実力はどれほどだね？」

「バッジ三つ用のパーティーではどうしようもありませんわ。私が岩や水タイプのポケモンを使つたとしても勝負にはならなかつたでしょう」

「それほどか」

「これでも抑えられている方なのですよ。あの方の瞬発力、自由な発想はむしろルール無用の戦いでこそでしょ。試合形式の枷を外せば、バッジ八つのトレーナーでもどうなることやら」

「バッジ八つとなると、一流のトレーナーになるが」

「ですから、そう申し上げているのです。ルール内であつても既に六つは軽く取れる実力だと思いますわ。あのリザードが進化する頃には、ジムリーダークラスのトレーナーになることでしょう」

タカギは腕を組んだ。エリカの言葉が、真に迫つてはこなかつたのだ。

間違いなく天才ではある。しかし同時に、子供でもあつた。

「オツキミ山の頃にどれほどのお手前だったのかは存じませんが、おそらくタカギ様の

想像とは別物となつておりますよ」

「男子三日会わざれば、ということか」「タケシさんの言葉を信じるなら、元々阿蒙などとは程遠いでしょう。そこから更に躍進したのですから」

「私の想像など超えていく訳だな」

「タカギ様があの方をどうしたいかは存じませんが、恐らくは、期待の上を行くと思いますわ」

含みを持った流し目を送りながら、エリカはそう言つた。タカギは礼を言い、足を北東へ向けた。

まだ十一時になつたばかりだ。ポケモンセンターは空いていて、壁際の椅子に腰かけているレッドはすぐに見つかった。

「やあ」

片手を挙げたタカギのことを、レッドは一瞬思い出せなかつたようだ。僅かに目を白黒させてから、思い至つたように、ああ、と声を漏らした。

「タカギ、さん？」

「思い出して貰えたかね」

「その、はい」

「改めて名乗つておこうか。タマムシ警察のタカギだ。ジムリーダーとは多少の仲でね。君のことは色々聞いたよ」

「タマムシの方だつたんですね」

「旨い飯屋ぐらいなら、いくつか案内できる。オツキミ山では随分助けられたことだし」

「いえ、そんな」

「好意には甘えるものさ。どうせ、今回の賞金もモンスターボールへ消えるのだろう?」

「はい」

「タマムシではまともな食事もできなかつた、などと思われるのも地元民として看過できませんね」

レッドがはにかんだ。了承の意と受け取つたタカギが歩きだそうとするのをレッドが手で制し、傍らのリザードを観察し始めた。特に右腕は、細かく触診している。  
『まきつく』を受けたんです。右腕だけ、ちょっと引っかかるつてしまつて  
「メディカルマシーンの治療は受けたのだろう?」

「なんとなく」

そう言つて、レッドは視線をリザードに集中させた。

なんとなく気になる、あるいは不安になる。そういうことだろう。言葉を切つたのは口下手故か、それともポケモンセンターの職員に配慮したのか。

タカギも近くの椅子に腰を降ろした。言葉こそ丁寧だが、頑なな気配をレッドは滲ませている。梃子でも動きはしないだろう。

コートの内側を探つた。煙草とライター。タカギは周りを見回して、苦笑いした。ポケモンセンターは当然禁煙で、喫煙所は外、という案内が天井からぶら下がっている。煙草を内ポケットに仕舞い直して、コートの襟を搔き合わせた。



いくつかの候補の中からレッドが行きたがつたのはラーメン屋だつた。それも、手頃な値段とメニューの豊富さを売りにした大衆店である。

レッドの前に運ばれてきたラーメンを見て、タカギは閉口した。秘伝のタレにマトマの実の絞り汁を混ぜたというラーメンは、真っ赤な表面から立ち上る湯気ですら、咳き込みそうなほどの刺激臭を漂わせていた。

「いえ。でも、慣れました」

レッドは一回り小さい丼にラーメンを取り分けながらそう答えた。横には、目を輝かせたりザードが座っていて、その手にポケモンでも使いやすいように改良されたスプロンフオーラクを握っている。

辛味と渋味の合わさったマトマの実は、戦闘を得意とするポケモンに好まれることが多いようだ。レッドのリザードの好物でも不思議はなかつた。

タカギは自分のラーメンに口を付けた。なんの変哲もない、醤油ベースのラーメンである。

「そういう特訓方法もあるのかね？つまり、手持ちのポケモンと同じ食事を取るとか」「さあ。聞いたことはないです」

「君のオリジナルという訳か」

「特訓つてつもりもないんです。ただ、同じものを食べたいと思つただけで」

事も無げに言つて、レッドはラーメンを啜つた。その横では、リザードが器用に麺を口に運んでいる。

不意に、タカギは羨望に襲われた。タカギが子供の時分には、旅などする余裕はなかつた。タカギがではなく、国全体がそうちだつたのだ。だから、旅を羨むことはなかつた。若い刑事などがジムバッジをちらつかせながら昇進していくことも、苦々しくはあつても羨ましいとは思わなかつた。出世コースに乗るためにジムバッジが必要など

という風潮ができ、いつのまにか慣習となつて若い連中を押し上げた。それだけのことだつた。

先に食べ終えたりザードが、物足りなさそうに一つ鳴いた。レッドが自分の蓮華に麵を乗せ、リザードの器に移した。そこには慣習もなにもなかつた。

これが、旅か。一人と一匹を眺めながら、タカギは胸中で呟いた。麵を啜つていたレッドが、顔を上げてタカギを見た。いつの間にか鼻歌をやつていた。誤魔化すように、タカギはコップの水を飲んだ。

「一つ、頼みがある。付いてきてくれんかな」

食事を終え、人心地ついていたレッドへタカギは言つた。レッドは束の間、望洋とした眼でタカギを見つめ、行き先も訊かずに領いた。タカギは伝票を手に取り店員を呼んだ。

昔ながらのタマムシが左右に広がつていた。背の低い家々が密集し、窓から道路へと昼食時らしい喧騒が溢れている。内緒話をするように肩を寄せあつた主婦達が、その距離からは想像もできないような大声で世間話を交わしていた。その横では手持ちらしいラツタが時折髪を揺らしながら眠つていた。

レッドが意外なものでも見るよう辺りをキヨロキヨロと見回した。想像の大都会、タマムシシティとは様相が違つたのだろう。どんな街も、いくつかの貌を持っている。

タマムシはその落差が激しいというだけのことだ。

不意に、視界が開けた。道幅は広く、ビルが建ち並び、ネクタイを締めたサラリーマンやヒールのオフィスレディが混雑の中をうつむきがちに、しかし器用にもぶつかることなく行き交っている。ポケモンを連れ歩いている者などおらず、モンスター・ボールは窮屈そうにベルトやカバンの内側に収まっていた。

振り向けば、すぐ目の前に古いタマムシが広がっている。南北の境界線となるこの通りは、タマムシという街に走った亀裂のようでもあった。その亀裂に忍び込むように、ゲームコーナーは建っていた。

この三日間、心のどこかで燻っていた逡巡が消え去っていた。当たり前のことだ、と思つた。間違いなくレッドは子供だ。しかし、ジムリーダーからジムバッジ八つのトレーナーと互角と評され、タカギに羨望を抱かせた男でもあるのだ。

ゲームコーナーを通り過ぎ、裏手の建物へ向かつた。

「入つて右奥の張り紙に開閉スイッチが隠されているらしい。入口は手前の床で、つまりは地下アジトという訳だな。ロケット団というのは大変な組織だよ」

レッドに背を向けたまま、タカギは続けた。

「色々と事情があつて、私は入ることができないんだ。公に君に頼むこともできない」

レッドが自身の判断で突入し、そこで起きる全ての出来事の責任を自分で負わなければ

ばいけない。それで初めて、同盟軍の介入を防いだままアジトを世間に晒すことができ  
る。

無責任としか言いようがなかつた。断られて当然の話だ。タカギは振り向いた。望  
洋とした眼で見上げてきたレッドが小さく顎を引いた。頷いたとも、そうでないと取  
れる仕草だ。

「オーキド博士にも、できるだけロケット団を倒してほしいと頼まれてますから」  
「何?」

擦れ違い様に呟かれた言葉に、タカギは顔をあげた。まるで見知らぬ他人のように、  
レッドはタカギを無視したまま建物へと歩いていった。その背をしばらく見送つてか  
ら、タカギはゲームコーナーへと向かつた。

エントランスに公衆電話があつた。受話器を取り、小銭を投入した。

「始めるぞ。彼はアジトへ行つてくれた」

「わかった。予定通り、私は脱出ルートを張つておこう」

「小者は捨て置いていい。必要なのは資金ルートに関する証言だ」

「精々、善意の第三者をやつてくるさ。暴力組織の幹部級だけを狙う、第三者をね」

受話器の向こうで、キヨウが笑いを洩らした。二、三個の決め事を確認して、タカギ  
は受話器を置いた。ポケモンや盗品の技マシンの扱いなどで、改めて確認するほどでも

なかつたが、なにかを声に出しておきたい気分だつたのだ。

自動ドアを潜り抜けると、不意に活氣づいた騒音がタカギを包んだ。

「いいかね？」

ゲームコーナーは盛況だつた。スロットの列を覗き込み、最奥に二つ並びで空いている台を見つけてから、店長に声をかけた。

「これはタカギ様。何かご用でしようか」

「スロットを打ちたくてね」

「それはもう、ご存分に」

「ところが、コインケースを失くしてしまつた。コインケース無しでは打てない決まりだらう？」

「困りましたね。確かに、あれが許可証を兼ねてている部分はあります。紛失された場合は再度のご購入をお願いしているのですが」

「生憎手持ちがない。そこで、君に三枚の貸しがあつたことを思い出してね」「あれはお返しした筈ですよ」

「君が勝手に置いた。私は拾つただけさ」

「それはまたご無体な」

店長が苦笑いした。

「なにもコインケースを渡せと言つてはいる訳じゃない。一緒に打とうと誘つているのさ」

「勤務中なんですがね」

「接客は立派な勤務だろう」

タカギが歩きだすと、ちょっと肩を竦めてから店長も付いてきた。二つ並びのスロット。タカギが何かを言う前に、店長はコインを一山、タカギの目の前に積んだ。「意外に几帳面だね。灰皿にでもぶちまけられると思つていたよ」

「灰皿はきちんと磨いていますよ。お客様への礼儀として置かなかつただけです」

「灰皿からコインを取るのは、お断りだな」

「そう仰るだらうと思いましたよ。巷の成金などよりはずつと小綺麗でいらっしゃる」

言つたきり、店長はスロットに集中しました。タカギもコインを入れた。てんでバラバラな絵柄が、画面に散らばつた。何十回かの回転の間、互いに無言だつた。

時間を稼げればそれでよかつた。サカキがトキワにいるのは確認が取れている。タカギが目を付けている中で、レッドを負かすとしたらこの男だけだ。少なくともキョウは、この男をジムリーダーに迫る実力者と見なしている。

一時間ほど、スロットを続けた。コインは微減といったところだ。タカギは店長と時折言葉を交わしながら、コインを入れてボタンを押す作業を繰り返した。店長も微減だ

ろう。ただ、タカギの負けまで合わせると多少の損にはなるかもしれない。

店内放送が流れた。タカギの名前が呼ばれている。

「お電話だと思いますよ。お客様のお名前をお呼びするのはその場合だけですので」領いて、タカギはカウンターへ向かった。名乗ると、口元を押さえた受話器が差し出された。

「やられたよ」

キヨウ。どこか投げやりな言い方だった。

「何があった」

「何も。脱出口からは、誰も出てこなかつた」

咄嗟に、クリードが虚言を弄した可能性が頭に浮かんだ。しかし、あの直情な男がタカギとキヨウをまとめて欺けるのか。むしろ、欺かれていたという方が自然だ。

「脱出口は一つじゃないな」

「やはりそう思うか。クリードが知っていたのはいくつかあるうちの一つ、ということだろうな」

「そして、クリードから情報が漏れる可能性を考慮していた。誰も出てこなかつたならば、そういうことになる」

「重要な証拠など、まず残つていないな。そちらに動きは?」

「ない。ずっと横並びでスロットを打っていたよ」

「刑事の横にいたか。大したアリバイだ」

「今から行く。どちらだ?」

「脱出口の方さ。入口にはもう、野次馬が集まり始めている」

受話器を店員に返した。いつの間にか後ろに立っていた店長が、接客業の笑顔でタカギを見ていた。

「用事が入つてね。損をさせちまつたな」

「いえ、私もいい気分転換になりました」

何か一言言おうとして、タカギは口を閉じた。出る言葉は負け犬の遠吠えにしかならないだろう。ただ領いてゲームコーナーを出た。

脱出口はそれほど遠くなかった。真ん中に溜め池のある小さな公園の裏手で、ゲームコーナーから数歩歩けば行ける場所だ。管理人用の小さな小屋。壁に背を預けるように、キヨウは立っていた。

「通路は見た目だけが残つていてね。気付くのが随分遅れた。中は物理的に塞がつているんだ」

「鍵かね?」

「それならば開けてみせるさ。完全に埋め立てられているよ」

「レッド君は？」

「先に逃がした。今頃、ポケモンセンターの辺りではないかな。ああいう若者の時間を、マスコミなんぞにくれてやるのはカントーの損失だよ」

キヨウに倣つて、タカギも背を壁に凭せた。煙草を咥える。硬質な音を立てながら、ライターがたつた一度の着火で火を点した。煙を一度吐いてから、ちょっと雑な手つきでタカギは火を消した。

「中にはほんの少數の団員が居ただけだそうだ。その割には盗品と思しき物が散乱していたという」

「餌だな。三課辺りが喜んで飛びつくだろうさ。そして、タマムシをひつくり返すような捜査を始める。ロケット団がとっくに捨てたタマムシを」

「靈視用のスコープとやらがあつて、拝借したと言つていた。丁度必要としていたらしい」

「報酬としては不足なくらいだ。技マシンを持つていつても、私は目を瞑るよ」

「そう言うだろうと思つていた」

煙を吐いた。それは一瞬だけタカギの前を漂い、やがて千々に吹かれて消えていった。落ちそうになつた灰を、携帶用の灰皿で受け止めた。

四課ならば、アジトを一つ潰してやつたと誇るだろう。普通の組織が相手ならば、タ

力ギも多少は得意になつたかもしない。

潜行された。そうとしか思えなかつた。逃走や撤退ではなく、潜行。それも、手繩れる糸を全て振り切つての潜行だ。

次にロケット団が浮上してくる時は、半端な事件では済まないだろう。それは予感というよりも確信だつた。

「新米の頃以来だな」

「なにがだね？」

「ここまで後手を踏まされることがさ」

「かの老いぼれ犬にも、そういう時代があつた訳だ」

「不甲斐なさに酒を呷つたことも、何度かある。どれも若い頃のことだがね」

「今は煙草を吹かすだけか」

「不甲斐ないと感じなくなつた。次があるとも、思うようになつた。捜査については、そ  
うだね」

風が強くなつた。みるみる短くなつていく煙草をしばらく眺め、それから念入りに消  
した。

「トキワに行く」

キヨウがちらりと、横目にタカギを見た。

「何かができるとは思わんよ。証拠はなく、向こうには社会的地位がある。腕っぷしでどうにかなる相手でもないだろう」

「まあ、やめておいた方がいい。彼は間違いなく最強のトレーナーだ」

「チャンピオンには僅差で劣ると聞いたぞ」

「ワタル君は最強のドラゴン使いであると同時に、最強の飛行使いでもあつてね。本来ならば地面タイプでは勝負にもならない程の相性差があるんだよ」

「それが僅差か。なるほどな」

「地面技の奥義に『じわれ』という技がある。途方もない威力だが、超一流トレーナーでも三割当たるかどうかという技でね。彼とニードキングは、これをほぼ確実に当ててくれる。何度も苦い思いをさせられたか数え切れんよ」

言葉と裏腹に、キヨウは楽しげに語った。そこには、優れたトレーナー同士が持つのであろう親近感、理解、尊敬があつた。

「私がサカキを疑うのは、不快かね」

思つたことをそのまま口にしていた。意味のない問い合わせだつた。警察とはそういうものだ。幼い子供の目の前で、父親に手錠をかけた経験もタカギにはあつた。バディを組んでいた刑事に白い目を向けられようと、気にはしなかつた。警察とはそういうものだからだ。

どんな犯罪者も平等に逮捕する。それが犯人に対する唯一の誠意だと、若い頃は思つてもいた。

「いや」

顎に手をやつたキヨウが、僅かに思案してからそう言つた。

「君は、評判通りの腕つこきの刑事だ。私だつて、密猟者達の奸計を見破つたことは一度や二度じやない。それが二人揃つてこうもあしらわれている。これほどの人物がカントーに何人いるか、と考えざるを得ないよ」

「思い当たるのは、サカキだけか」

「残念ながら、そうだ。トキワに行つてどうするつもりだね？」

「サカキに会う」

「それから？」

「それだけだよ。もう一度、あの男と言葉を交わしてみたくなつた」

「同盟軍の尾行は、今はい。しかし君がタマムシから出れば流石に気付かれるだろうな。恐らくはトキワに行つたことも」

「わかっている」

同盟軍がサカキに目を付ける。あるいは、ずっと直接的で過激な手段に出るかもしけない。

ない。

ボスは殺せねえよ。クリードの言葉が、頭の中に甦つた。危険な賭けになるのかもしれない。クリードの言葉に、タカギは賭ける気になつていた。私が逮捕するまでは、殺されない。分が悪いのかどうかも、判断が付かなかつた。

「私は一度セキチクに戻るよ。レッド君が来るだろう。彼とは、腰を据えて対戦してみたい」

「そうか」

「待つ刑事というの、中々のものさ」

それだけを言って、キヨウは背を向けた。見えなくなるまで、タカギは見送つた。

もう一本、煙草に火を点けた。ライターはやはり、素直に一度で火を点した。煙は西へ、小綺麗で新しいタマムシへと流れていつた。

## 第16話

眼下の競技場を、サンドパンが転げ回っていた。

トキワ郊外に建つたジム別館である。元々はここがトキワジムだつたというが、サカキが就任する遙か前に今の地点に本館が新設され、こちらは練習場となつていて。いつでも指導できるよう、事務室の壁はガラス張りになつていた。巻き上がる砂埃の内側にサカキは目をやつた。

サイホーンがサンドパンを追つているが、紙一重で捉えきれずにいた。元々、直進以外は苦手としているポケモンなのだ。フミツキとサンドパンは実に巧い試合運びをしていた。競技場というフィールドをよく利用しているのだ。

サイホーンの突進が躱される。屋外ならば遠くまで距離を取つてから反転すればいいが、室内競技場には必ず壁というものがある。急停止し、振り返ろうとしたサイホーンの背をサンドパンの爪が捉えた。既に何度も繰り返された光景だつた。サイホーンのトレーナーが唇を噛んでいるのが、サカキのところからも見えた。

後ろ足で『ふみつけ』を狙う手があつた。サイホーン側はそれを狙っているが、タイミングを外されている。フミツキにではなく、サンドパン自身の判断に因つてだ。フミツキは観察力や判断力に優れる代わりに、機を捉える力や反射で劣る。それが、彼女がそこそこのトレーナーにしかなれない理由だつたが、サンドパンがその欠点を埋めていた。

「強さとは、不思議な物だな」

デスクにかじりついていたムツキが顔をあげた。作成しているのは、来年度の予算について協会に提出する資料だつた。一昨年までトキワジムに在籍していたトレーナーが、どこかの大会で入賞したという。それを、トキワジムの実績として高く評価してもらう為の資料作りだつた。試合内容を羅列して、サカキの熏陶が活きていくと思える点を抜粋する作業を朝から続いているのだ。

ジムリーダーとしてのサカキに来年はない。それがわかつていても手を抜けないのは、ムツキらしくはあつた。

音が止んだ。サイホーンのトレーナーがフミツキに一礼し、自分のポケモンに駆け寄つた。屋外ならば、という考えは当然あるだろう。それをおくびにも出さず、サイホーンの手当てをしていた。

「彼女が、一番の若手とはいえたキワのジムトレーナーに勝てるとは思いませんでした」

ちらりと階下を窺つて、ムツキが言つた。不思議という言葉をフミツキの勝利と結び付けたようだ。そんなつもりで言つたのではなかつた。

「私やワタル君は、強みを活かす。自分の強みをポケモンの強さに上乗せする。私のサイホーンを指揮すれば、恐らくフミツキ君には勝てるだろう」

「サカキ様やチャンピオンの強さは誰もが知るところです。疑う者などいませんわ」

もし、サンドパン同士の戦いになつたらどうなるのか。サカキが考えたのはそれだつた。それも、フミツキのサンドパンがこの世に二匹存在したらという、荒唐無稽な考え方だ。

客観的に見て、トレーナーとしての能力でフミツキに劣る部分はない。それでも、負けた自分の姿がふと頭を過つた。ジムリーダーどころか、四天王相手でもそんな姿が浮かぶことはなかつた。全く同じ条件で戦つて負けるとしたらワタルぐらいのものだろう。そう思つてきたのだ。

考へても意味はなかつた。フミツキのサンドパンはこの世にただ一匹しかおらず、自分とフミツキが戦えばニドキング対サンドパンの構図にしかならない。勝負にもならないだろう。

強さとは。トレーナーとしてのサカキとロケット団総帥としてのサカキにはつきり共通することがあるとすれば、その問い合わせぐらいのものだ。常に問い合わせ続けてきたと

いつていい。意味のない仮定などと、簡単に割り切るには時を重ねすぎた。

考え込むサカキを見てムツキが困惑氣味に首を傾げた。サカキは苦笑して、なんでもないという風に手を振った。どんな理由にせよ、フミツキに負けるかもしれないと考えていたなどと知られれば、団の命運を決める戦いを前に怖じ氣づいたようにしか見えないだろう。ムツキを相手に、強さとは、などという問答をする気はない。

ふと、一つの氣配がサカキに触ってきた。建物まで数十メートルといつたところか。誰の氣配かということも、なんとなくわかる。特徴的な男だ。

「ムツキ君。下に降りて、フミツキ君を下がらせてくれるか。女子更衣室まで踏み込むようなことは流石にすまい」

「はあ。その、何かありましたか？」

「来客だよ。老いぼれ犬だ」

ムツキの表情に、はつきりと緊張が走った。

「フミツキ君は一度顔を見られている筈だ」

「すぐに下がらせます」

「君も下がつていい。老いぼれ犬とは、私だけで話そう」

「アジトには何も残さなかつた筈ですが」

「私を拘束するつもりならジムリーダーの一人でも連れてくるだろう」

「ではなぜ?」

「嗅覚というやつだろうな。面白い男だ。何かしら、私を追い詰める道筋を見つけたのかもしれん」

ムツキの顔がますます強張った。サカキは笑つて、手を払つた。表情をそのままにムツキは退出した。

席を立ち、コーヒーマーカーを淹れようとした。といつても、半分以上は機械が勝手にやつてくれる。サカキのやることは、豆を挽いて機械に放り込むだけだ。カツプとビターチョコレートを二つずつ、コーヒーマーカーの横に置いた。

デスクに戻つてグラスクロスを取り出し、モンスター・ボールに当てた。光沢が鋭かつた。宥めるように、サカキは少しずつグラスクロスを遣い、光に翳しては別の箇所を擦つた。光沢が鈍くなるのを待つてはいる。そんな気分になつてきた。

コーヒーメーカーが完成を告げた。サカキはボールを擦り続けた。光。まだ、くすんだ中に射してくる筋がある。慎重にグラスクロスを当てた。鋭さをボールの中に押し込んでいく。光沢が曖昧になつてきた。これがはつきりと鈍くなるのは、いつなのか。光が鈍くなる前にボールが磨耗してしまうことも、あるのではないか。それでも、擦り、磨き続けるしかない。

コーヒーの薫りが室内に立ち上つて、サカキは顔をあげた。タカギだつた。

「邪魔をしちまつたかな」

どこかが気安い感じで、タカギが言つた。サカキはちょっとボールを確かめ、布でくるんだ。目元に微かな疲労があった。

「訪いを入れたが案内がいなくてね。悪いが、勝手に上がらせてもらつた」

「秘書は出払つていましてね」

「若いトレーナー達がいるだろう」

「来客を気にしていられるような、悠長なトレーニングはさせていませんよ」

「確かに。凄まじいもんだね」

タカギが階下に目をやつた。ガラス張りの向こうでゴローンが飛び上がり、それから地面を叩いた。衝撃を逃す構造でなければ建物の一つぐらいは軽く崩せるほどの『じしん』だ。競技場はかなり揺れた筈だが、バランスを崩すようなトレーナーは一人もいなかつた。

トキワジムの特訓は地獄の苦しさだと言っていた。体幹のできていないうトレーナーは話にならない。そして体幹とは、躰の一部分だけを鍛えれば身に付くというものではなかつた。ポケモンに求める以上のストイックさをサカキは己に課し、トキワジムのトレーナー達にも求めた。それが周りには地獄のような特訓に見えるようだ。

地獄のようなものは、決して地獄ではない。サカキはそう思つていた。だから、他人

に求めることも許される。

「我々警察も年に何回か、護身術程度の訓練はするがね。私ぐらいの歳になると参加している態を装っているだけで、まともに組みやしないが」

「それで充分でしよう。警察の方にはもつとやるべきことがある。苦しいトレーニングとは、ある意味で合理性から外れるのですよ」

「強くなるのだろう?」

「ほんの僅かに。一個人のほんの僅かな強さは、世間に何の影響も持ちませんよ」

「しかし、君たちはそのほんの僅かの差を競っている。違うかね?」

「まさしく。トレーナーの宿運のようなものでしてね。誰でも一度は悩むのですよ。この僅かな差に何の意味があるのかと。いや、強さそのものにかな」

立ち上がり、コーヒーを淹れた。薫りはどこか統一性をなくし、まばらに浮かんでいた。不味くはない。しかし、旨くもなかつた。ムツキが淹れたものと同じ銘柄とは到底思えない。タカギも一度口を付けたきり、机に放り出してしまつてはいる。

「私が準備しまして。お口汚し、と言つておくべきでしたか」

「そう悪くもない」

言つたが、タカギはコーヒーに手を伸ばそつとはしなかつた。サカキは灰皿を勧めた。タカギが軽く会釈し、煙草を咥えた。オイルライター。フリントホイールから火花

が散つてゐる。三度やつても火は着かなかつた。焦つた様子もなく、タカギがホイールを回す。なかなか火を見せないライター。老いぼれ犬にはぴつたりだ、という気がした。

着火した。タカギの目尻に僅かな影が走つた。それが消えると共に、いがらっぽい煙が拡がつた。

「強さとは、なんなんだね?」

俯きがちにタカギが問うた。サカキは内心で笑みを溢した。強さの価値ではなく、もつと観念的な問い。清々しいほどに、人の心の内を突いてくる男だ。

「禪門問ですか」

「君がどう答えるか、ふと気になつた」

「戦うことですよ」

「それで?」

「それだけです」

「戦つて、終わりかね?」

「次の戦いがどこかにあるでしょう。終われば、またその次が」

「負けたらどうする?」

「死ねば終わりますよ。死ななければ、次の戦いが」

「戦うだけの人生が強さか。軍人でももう少しマシな答えを出すだろうな」「ポケモントレーナーなのですよ、私は」

言つてから、酷い欺瞞のように思われてサカキは自嘲した。表向きは最強のジムリーダーとして栄誉を受け、裏ではロケット団の総帥として暗躍している。純粹さを持つてポケモントレーナーなどと名乗る資格がある筈もなかつた。

本当のポケモントレーナーとは、ポケモン達と旅をし、粗末な食料を分けあい、身を寄せ合つて眠る人間のことだ。そういう人間こそがポケモントレーナーを自称することを許される。サカキはそう思い続けてきた。

タカギが気のない表情をしながら煙草を吹かした。コーヒーの湯気はもうか細くなつている。

「父親を、子供の頃に亡くしているね」

「幼いといつてもいい頃でしたよ。登山中に滑落したと聞いています」

「なぜ、オツキミ山で登山を?」

「さあ。父の物はなに一つ帰つて来ませんでしたので。遺体すらもね。損傷が激しかつ

たらしいと、母が言つていましたよ」

「搜索にはなぜか同盟軍が出動しているね」

「チヨコレートを一切れ貰いました。そのことだけは、今でもよく覚えてています」

「仇をか」

「チヨコレートを貰つたことを、ですよ」

「私は同盟軍に見張られている」

タカギが煙草を置き、コーヒーに口を付けた。それも、熱いコーヒーでも飲んでいるかのようゆつくりとだ。

「口ケット団についての捜査情報提供を求められたが、拒否した。連中は私を泳がせて、最後の獲物だけを横取りすることにしたらしい」

「ご苦労はお察ししますよ」

「奴らは口ケット団の首領を殺したがつてているだろうな。私は警察だ。生きたまま逮捕し、取り調べ、全ての悪事を明るみにしなければならん。全ての、だよ」

タカギはコーヒーカップを持ったまま語っていた。本心を語っている。それは見ていてわかつた。

全ての悪事。つまり、同盟軍を介して行われた資金洗浄も明るみにすると言つてているのだろう。口ケット団は勿論、同盟軍にとつても大きな痛手となる。本国でも海外派兵の贊否がわかっているという。不祥事は大きな火種になり得るのだ。

並みの刑事なら圧力に揉み消されて終わりだろうが、老いぼれ犬ならあるいは遣り通すかもしれない、とも思えた。

「私がトキワに来たこともすぐに掴まるだろう。君の滑落死体を、見つけたくはない」

一瞬だけ、サカキはタカギに好感を覚えた。

悲しみを抱えた男なのだ。決してまともな刑事とは言えないが、その一点だけでこの男を嫌いになりきれない気がした。

「謂れのない話ですよ。しかし、もし」

煙草の煙がうねつて、そのまま消えていく。コーヒーの薫り。

「もし私が死んだとすれば、力の限り戦つてのことでしょう。例え不本意な形であろうとも」

「そうか」

タカギは頷くと、煙草を灰皿に擦り付けて消した。コーヒーも律儀に飲み干して、タカギが腰を上げた。

「君と一度、勝負をしてみたかった。刑事としてではなくポケモントレーナーとして」「ジムへの挑戦に年齢制限はありませんよ。これから各地を周られれば良い」

「無理さ。私は刑事なのだから」

ドアを開けながら、タカギはちょっと笑つてそう言うと、丁寧にドアを閉めて去つていった。

サカキは自分のコーヒーを時間をかけて飲むと、流しに持つていってスポンジを泡立

てた。戻ってきたムツキが慌ててスポンジを取り上げた。

「私が洗いますから」

「そうか。すまないな」

椅子に腰を降ろし、グラスクリスを手に取つた。しかし、ボールを磨く気にはなれなかつた。ぼんやりと虚空を眺める。

「最低限の団員を各地に残して、それ以外は総員ヤマブキに集結させる。シルフカンパニー内部に潜入している者にも連絡を取つてくれ」

洗い物を終えて戻ってきたムツキに言つた。ムツキが表情を強張らせた。

「配置については以前から話していた通りだ。シルフ周辺やゲートを押さえる部隊と内部に突入する部隊に分かれる。内部組は更に制圧班、設計図の捜索班、シルフ社員等を拘束隔離する班へと分かれ、全工程を同時に進行する」

「フミツキ隊員は？」

「制圧班だ。制圧完了後は半数を捜索に回し残りを警戒に当てる。彼女には警戒を担当してもらう」

ムツキが何かを言いかけ、ためらつたように口を閉じた。サカキは無言で促した。  
「ゲートの方へ彼女を回せないでしょうか？今の担当者は細かな配慮に欠けるところがあります。彼女が適任という気がするのですが」

「もつともな意見だな。私の見方とも近い」

「ならば」

「彼女とサンドパンは戦おうとしている」

一度区切り、それから諭すようにサカキは続けた。

「戦う意志を遮つてしまえば、ロケット団はロケット団ではなくなる。わかってくれるな」

一瞬口を開きかけてから、ムツキが項垂れた。

「私はどうも、理屈ばかり先走ってしまうようです。大事なことがなにかを忘れて」

「我々は悪の組織だ。一つだけ他の組織と違うことがあるとすれば、戦う意志だろう」

「お言葉は忘れません。本部長と連携して作戦の体制を整えます」

「頼む」

ムツキが駆け足で部屋を出ていった。

サカキはガラス窓へと身を寄せ、階下を見下ろした。ジムトレーナーがサイホーンを駆け回らせ、その動きに合わせて自身も走ることで指示を出すのに最適な位置取りをする訓練をしていた。公式戦では大して役に立たない技術だ。しかし、これをこなすことこそがトレーナーの実力とされる時代もあつたのだ。

苦しいトレーニングだが、サイホーンは活力に満ちていた。もう数ヶ月もすれば進化

するだろう、とサカキは見た。

サイホーンとサイドンでは戦い方が全く異なる。

サカキはノートを手に取り、サイホーンとサイドンの扱い方の違いについて思い付く限りの注意点を書き込み、参考になる書籍や映像のタイトルを付け加えた。そして、棚の目に付きやすい場所にそのノートを仕舞つた。

## 第17話

からりと晴れ上がっていた。シルフカンパニーを横目に見ながら、フミツキは首を滴る汗を拭つた。

「隊長、水です」

「ありがとうございます」

「こう暑いと参っちゃいますね。合図が来ればすぐ突入するのに」  
「北との兼ね合いもありますから」

ペットボトルを一度呷ると、蓋は閉めずに隣へと渡した。全員で回し飲む。汗は全員が等しく搔いているのだ。

ジムリーダーのナツメはタレント業を始めたとかで一時的に海外に行っているらしい。ただ、古くはヤマブキのジムリーダーを務めていた格闘道場があり、支配人がそちらに備えることになっていた。ジムトレーナーや自警団の方が警察よりも身軽なことは、フミツキも実感をもつて覚えている。

全員私服だつた。だから見た目にはわからないが、今この区画を歩いている人間の半数以上はロケット団が占めている。ゲートを担当する班が少しずつ人の入出をコントロールしているのだ。やがて、シルフカンパニーが社外秘の実験を行うという名目で完全にシャットダウンされる筈だ。ボスや支配人の手腕を考えれば、政治的な部分からも手を回しているだろう。

そういつた事情や、ボスの持つてゐる遠大な計画についての一切を、フミツキは頭から追い出した。

シルフカンパニーにも警備員などの戦力はいる。事前に知らされた情報によればバツジ持ちも少なくはないようだ。そういつた相手を無力化し、拘束隔離を担当する班へと引き渡す。それだけに集中すべきだつた。

トキワでは、ひたすら自分の限界へ挑むような訓練を続けた。走り、筋力トレーニングをし、ポケモンバトルをし、また走つた。途中から自分が何をしているのかも怪しくなつてくる。それでも、指示されるままに続けた。トキワジムの誰一人とて、トレーニングに不満はなかつた。サカキ本人が一番キツいトレーニングを自身に課してゐたからだ。それを見ながら泣き言など言えなかつた。

今、バツジ持ちのトレーナーと戦えと言われても、フミツキはさほどの恐怖は覚えなかつた。

「もう躰の方は大丈夫なんですか？」

「ええ。トキワの方でしばらく療養させてもらいましたから」

訊いてきたのはオツキミ山でも一緒だつた隊員だ。あの時の隊員で突入部隊になつた者は全員、フミツキが指揮するメンバーに入つていた。フミツキを含めて五人の部隊だ。

やりやすくはある。それと同時に、いなくなつた顔のことも思い出された。

今の自分があの時のレッドと相対したらどうなるだろうか。勝てる、と思えるほどの自信はフミツキにはなかつた。しかし、撤退ぐらいはできたのではないか。

全て終わつてしまつたことだ。次の機会があるかもしれない。その時に、自分にできるだけのことをすればいい。脇に抱え込んだ上着に、フミツキは目をやつた。

「隊長」

「ええ」

二十人程の人間がシルフカンパニーの入口に集まつていた。シルフ内部に潜入している団員が、建物内のセキュリティや外部との通信を切ることになっている。

腰を上げた。ドアが開き一人の男が出てきた。男が合図すると、二十人が一齊に飛び込んでいった。一瞬の静寂の後、何かが割れるような音と悲鳴が街をすり抜けた。動搖したような気配を見せた通行人が、数人の男達に包み込まれた。

三十秒待つた。警報は鳴らない。周囲の部下に目線を送つてから、フミツキもシルフカンパニーへ向けて駆け出した。



入つてすぐにフミツキはマスクで顔を隠し、抱えていた上着を団服の下に着込んだ。明るい照明と真っ白な壁、磨きあげられたタイル張りの玄関フロアにはいくつかの噴水と受付があり、その奥に階段が見えていた。先に突入した二十人が社員達を壁に追い詰めて一纏めにしている。数人の警備員は軽く蹴散らしたようだ。

二十人を横目にフミツキは階段へと駆けた。外の通行人は粗方押さえたのか、後続も次々とシルフカンパニーに突入してきている。

二階に上がり後続を待つた。警備員が二人、立ち向かってきた。ケーシイとスリープ。サンドパンが容易く蹴散らした。トキワのジムトレーナーと比べればまるで素人だ。

「こちらは終わりました」

「こつちもです、隊長。順調ですね」

「そろそろポケモンバトルに手馴れてる人間が出てくるはずです。気は抜かないようにしてください」

「やつぱりいますかね？」

「専門家というほどではないようですが、事前情報によればバッジ持ちがいます。一番多い人でバッジ四つ持ちとか」

「そりや、俺達から見れば専門家と一緒にですよ」

「できる限りは私で受け持ちますが、いざという時はお願ひします」

遅れてやつてきた団員達が散らばつていくと同時に、いくつもの足音が一階から駆け上がってきた。フミツキは五つ息を数えて、それから階段に向かつた。すぐ後ろにフミツキが率いている団員が、さらに後ろには三階の制圧を担当する部隊が続いていた。

後ろが遅れ始めた。シルフカンパニーは大型のポケモンや飛行タイプでも不自由しないように設計されていて、天井はイワークが躰を起こせるほどに高い。一つ階を昇るだけでもかなりの負荷になる。フミツキ達五人だけが突出している格好になつた。

「復帰したばかりとは思えないな、隊長の体力は」

「みなさんも、以前よりずっと体力が付いたように見えます」

「オツキミ山以降ずっと、隊長にやらされたメニューを続けてたんですよ」

「俺達の頭じや他にやることなんて思いませんでしたから。走つてゐる方がずっと性に合つてゐるつてもんです。なあ？」

「違ひない」

療養中は私が隊長だつた訳ではない。それぞれ、直属の上司がいただろう。そう言いになつて、フミツキは口をつぐんだ。

私が隊長なのだ。上がる笑い声を聞きながら、フミツキはそう思つた。自分がどう思うかも、組織の形式も関係ない。私を隊長と呼ぶ人間がいる限り、私は隊長なのだ。自分が、サカキのことを何があつてもボスだと勝手に思つてゐるようだ。

重かつた。心地よい重さでも、あるのかもしれない。

サンドパンのトレーナーとして相応しくあらうとするだけでも苦労するというのに。そう思いながら、フミツキは薄く笑つて三階に飛び込んだ。

制服を着込んだ男が三人、待ち構えていた。左の二人が手強い。そう判断した瞬間にはフミツキは左に飛びながら、後ろにハンドサインを送つた。四人がフミツキとは逆に駆けていく。

「オコリザルつ」

左の男がオコリザルを、真ん中がモルフォンを繰り出してきた。残りの一人は四人と相対してゐる。

どちらのポケモンも等しく鍛えられているように見える。一瞬、迷った。フミツキが指示を出すよりも先にサンドパンがモルフオンに躍りかかり、『きりさく』を見舞つた。そのまま、オコリザルのことなど忘れたかのように追撃を加えている。

フミツキはオコリザルのトレーナーと相対して、腰元のボールに手をやつた。ハツタリだつたが、相手は一瞬二の足を踏んだ。サンドパンがモルフオンを倒すには充分な時間だつた。

「なにをやつてる。そいつ、一匹だぞつ」

仲間からの叫び声に、オコリザルのトレーナーは顔を紅潮させた。フミツキは敢えて笑みを浮かべてから、これ見よがしに空のモンスター・ボールを放り捨てた。

『こうそくスピン』

怒りのままに飛び出そうとしたオコリザルの横つ面を、サンドパンが弾き飛ばした。

『きりさく』でも悪くはなかつたが、オコリザルの中には急所への攻撃で怒りを増幅させ力を発揮する個体もいる。素早さを上げつつ攻撃できる『こうそくスピン』がベターだろう。

自分の指示を振り返り、そう評価を下した。本当の意味での実戦はオツキミ山以来だが、戦況ははつきりと見えてる、という気がする。

「オコリザル、『かたきうち』だつ」

怒りに筋肉を膨張させたオコリザルが向かつてくる。ここが競技場ならば『あなをほる』だろう。しかし、タイル張りの床が素早く潜れるような構造になつているとは思えない。

『まるくなる』、それから『きりさく』

サンドパンが飛び上がりながら、空中で躰を丸める。オコリザルの拳がその上部を殴り付けた。芯は外している。躰を開いたサンドパンがそのままオコリザルに飛びかかり、その爪で逆袈裟に切り裂いた。オコリザルの躰が瀕死時の収縮を始めた。

「馬鹿な、俺がロケット団なんかに」

相手のトレーナーが愕然としている。恐らく、バッジ四つ持ちのうちの一人だろう。

男は目を剥くと、怒氣を撒き散らしながらフミツキに向かつってきた。数歩踏みしめるように歩き、それから勢いを付けて走りだそうとしたその躰を、横から数人の男達が取り押さえた。ロケット団の団員達だつた。後続もようやく追い付いてきたようだ。

反対側に目をやつた。四対一の戦いは、流石に数の利で圧倒している。問題無しと判断したフミツキがサンドパンに傷薬を塗つているうちに、勝負は終わつていた。

「ジム巡りでもしてたんですか、隊長？」

「特にはなにも。いい環境でトレーニングできた、とは思っていますが」「あのハンドサインは速く倒して加勢しろ、の意味だと思つてましたよ。まさか隊長の

方が先に終わつちまうとは」

「逡巡みたいなものが一切見えなかつたな。プロのトレーナーかと思いましたよ」  
逡巡はあつた。サンドパンが咄嗟に判断したおかげで、周りからはそう見えなかつただけだ。

そのことで自分を卑下しようとは思わなかつた。サンドパンが判断してくれることまで織り込んで、フミツキは動いているのだ。

フミツキが人並み以上の実力を發揮できるのはサンドパンとのコンビでだけだろう。  
それならそれで構わなかつた。自分は、サンドパンのトレーナーなのだ。サンドパンの  
トレーナーとして優秀であれば、それでいい。

「このまま、最上階を目指します」

三階の制圧完了の報告を受けてから、フミツキは言つた。フミツキの隊だけではなく、  
その場にいた団員皆が神妙な顔でフミツキの言葉に応答した。



やるべきことはなかつた。

タマムシでは、三課が血眼になつて口ケット団が盗品を捌いていたルートを洗つてい  
る。四課は残党狩りで、タカギの出番はどこにもなかつた。

ゲームコーナーも表向きは何事もなく営業している。あくまで口ケット団とは無関  
係だという態度を貫いていた。店長など、被害者面でマスコミのインタビューに答えて  
いたぐらいだ。

アジトを壊滅させたのは謎の少年ということになった。タカギはたまたまゲーム  
コーナーにて、現場に急行した格好だ。信じてもらえる訳もなく、課長からは口ケッ  
ト団の案件から外れることを命じられた。

「タカギ警部、また独断専行ですか？」

歳の近い同僚が揶揄してくるのを無視して、タカギはコーヒーを淹れた。デスクに着  
き、新聞を広げる。

捜査では口ケット団の痕跡が至るところで見つかっていた。マスコミもこれを大き  
く報じ、捜査の進捗はお茶の間の娯楽と化している。警察が犯罪組織を追い詰める、ド  
キュメンタリー番組のような扱いだ。捜査関係者の証言として、大物幹部の逮捕が近  
い、などと書いてあつた。

これ以上進展はないだろう、とタカギは見ていた。出てくる情報はどれも単体のもの

で、初見のインパクトこそあるものの捜査状況を大きく前進させるものではなかつた。他の情報と一切連動しないのだ。意気込んで出かけていった捜査員はみな、尻切れトンボの内容に首を傾げながら帰つて來た。

痕跡は意図的に残された物だと判断するしかなかつた。課長もここ数日は憔悴しているようだ。ここで逃せば警察の威信に関わる。かといって、有力そうな情報はなにもなかつた。

「課長もずいぶん焦つてるみたいですねえ」

「そうだろうな。手がかりがない」

「やつぱりタカギ警部から見てもまずい状況だと思いますか？」

「間違いなくな」

「ですよね。これで逃げられたら大変なことですよ」

タカギが懸念しているのは、逃げられることではなかつた。このまま消えてくれるのなら有難いくらいだ。

口ケット団が大きく動くとしたら、警察や世間の目がタマムシに向いている今ではないのか。そして、潜行し続けたあの組織がその力を全て顕したら、一体どういうことになるのか。

暴力団やマフィアと抗争を起こすぐらいならばいい。しかしもし、口ケット団が同盟

軍と争う覚悟を決めているのなら、どこかで大きな勝負に出る筈だ。

「まあ、一課が気になったって仕方ないんですけどね、本来なら。課長もなんだつて首を突つ込んだんだか」

同盟軍絡みなどと言う訳にもいきかず、曖昧に頷いてからタカギはコーヒーを口に運んだ。

サカキの淹れたコーヒーは誉められたものではなかつた。ふと、そう思つた。  
トキワジムでそれを飲んだのだつた。以前見た秘書はおらず、サカキ自らコーヒーを淹れた。

どこかに、無骨さがあつた。優れた銘柄に優れた機械を使って淹れても、薰りの中に一本の線があつた。それは、サカキが磨きあげているモンスター・ボールから時折射してくる鋭い光線に似ていた。

上品な薰りや磨きあげた鈍い光で誤魔化そうとしても、どうしようもないものだ。あの男の中には、獣染みた意思が一本の線となつて通つている。

「警部、どこか出るんですか？」

「歳を取ると、じつとしているのも腰が辛くてね」

「やだな、そんな歳でもないでしょ。外に行つたつて暑いだけですよ」

部屋を出た。行く宛はない。今さらタマムシを歩き回つても、まともな手がかりなど

出てくる筈もなかつた。コーヒーと新聞を手に、管を巻いているのが馬鹿らしくなつただけだ。

「はあ、それは、国からの許可は降りてゐるつてことですよね？」

声が聞こえた。交通部だつた。受話器を耳に押し当ててゐる警官の横で、スーツに身を包んだサラリーマンが大声で喚いていた。

「なあお巡りさん、こつちは困つてゐんですよ。なにせ急なことで」

「ちよつと待つてください、今問い合わせていますから」

一旦受話器から耳を離した警官はサラリーマンにそう言ふと、再び通話に戻つた。タカギはそちらに近寄つた。

「どうしました?」

タカギが警察手帳を見せながら言ふと、サラリーマンはちようどいい話し相手を見つけたとばかりに口を開いた。ハンカチで額の汗を頻りに拭つてゐる。

「いや、本当に困つてゐるんですよ。シルフカンパニーの区画が全面通行禁止つて連絡が急に回つてきて。同僚は朝から出かけていつたつてのに、ゲートの所で止められましてね」

「シルフの区画が通行禁止?」

「そうですよ。それで今、こつちのお巡りさんに色々訊いて貰つてゐるところ」

タカギはそちらを見た。若い婦警で、顔にははつきり迷惑そうな表情が浮かんでいた。

「一課のタカギだ。君、相手は？」

「シルフ区画の西口ゲートです。行政の許可が降りてるのは確認したんですが、そちらの方がダメ元で訊いてみて欲しいと」

「ちよつと替わつてもらえるかな」

「言いながら、タカギは受話器を奪い取つた。

「あのね、お巡りさん。いくら言われたつて駄目なものは駄目なんですよ。わかるでしょう」

「ちよつと聞きたいんだがね。ああ、私はタカギつて者だ。刑事だよ」

「刑事さん？」

「こちらでも確認はした。ずいぶん、急な話のようだね」

「そんなこと、こつちに言われたつてわかりませんよ。下つ端ですから」

「こちらの方はシルフカンパニーとも取引があるようだ。それでも駄目なのかな？」

「ですからね、刑事さん。ただでさえ暑いのに同じ事を何回も言わせないでくださいよ」

「そりや申し訳ないが、こちらも仕事でね」

「通りたけりや、タマムシでもなんでも連絡取つて許可取つてきてくださいよ。こつち

もね」

そこで一度、男が言葉を切った。

「ああもう、ちょっと待つててください。子供が入ってきたんで」

「構わんよ」

タカギは受話器を強く耳に押し当てる。何か急かすようなことを喚き立てているサラリーマンを一睨みし、手錠を取り出して見せた。サラリーマンが口をつぐんだ。一言も聞き逃したくなかった。聞き逃してはならない、という気がした。

「だから、さつきも通せないって言つたじやねえか。聞き分けのねえ坊主だな」「あの、そうじやなくて」

「何だよ。忙しいんだよこつちは」

「これを」

「なんだよこれ?お前これ、水か?ずいぶんあるじやねえか」

「キツそうにしてましたから」

「買つてきたつかよ、お前」

「水分は補給した方がいい、と思ひます」

しばらく声が途切れた。

「友達に会いに行くつて言つたな、お前」

「幼馴染がちょうど、昨日から来てるって聞いて」

「友達に会うだけなんだな？」

「その予定です」

「ああもうつ、ちよつと待つてろ」

受話器が持ち上げられたような音がした。タカギは何も聞かなかつたような声音を心掛けた。

「とりあえず無理なもんは無理ですよ、刑事さん。これ以上時間取らせないでくださいよ」

「そのようだね。忙しい時に悪かつたな」

「じゃ、これつきりでお願いしますよ」

電話が切られた。縋り付いてこようとするサラリーマンを無視して、タカギは外に出た。日差しが強かつた。

電話口から聞こえてきた声は間違いないく、知つている少年の声だつた。縁、というやつだらうか。

ヤマブキで何かが起こつてゐる。それは間違いないだろうが、タカギが行つてもゲートを通れはしないだろう。交通規制自体は正規のルートから出でているのだ。歩きだした。待つ刑事か。口の中で呟いた。

「最後にもう一度、待つてみるか  
今度は、声に出していた。

## 第18話

五階を制圧した頃には、バッジ持ちの警備員は全て拘束し終えていた。

ほぼ、フミツキが相手をしたようなものだ。他の団員達も力関係を途中で呑み込めた  
ようで、手強い相手が出てくると真っ先にフミツキを呼ぶようになつていて。

事前に潜入していた団員からもたらされた資料に目をやつた。残りの警備員は、年数  
回の講習を受けているだけの半分アルバイトのような人間だけだった。

「隊長、制圧済みの階はエレベーター回りも固めたようです」

「そうですか」

エレベーターは停めていた。社員の逃走に使われる可能性があつたからだ。バッジ  
持ちの警備員も一緒になれば、一般の団員では対抗できず逃がしてしまふ可能性が高  
かつた。

しかし、バッジ持ちの警備員はもういない。

「私は五階に留まつて、いざという時のため待機します。手強い相手がいた場合は連絡

をください。それから、セキュリティルームに連絡を取つてください。エレベーターを再稼働してもらいます」

上階に手練れがいた場合、あるいは下の階から相手への応援が入つてきた場合。そのどちらにも、エレベーターが動いていれば即応できる筈だ。

越権に近かつたが、異論は出なかつた。それなりの力を示せたのだ、とフミツキは思つた。フミツキの隊の団員は胸を張り、どこか晴れがましそうな表情をしている。それぞれが散つていつた。一人だけ、フミツキの補助のために残つている。一瞬、オツキミ山でクリードと話している時の記憶が頭を過つた。なぜロケット団に入ったのか。そんな話をしたものだ。

弾みのようなものだつた。今考えれば、そうとしか言えなかつた。真つ当に生きていくのも、恐らくは無理ではなかつた。

真つ当な世界で、バッジ三つが精々のトレーナーとして生きていく。そのことに否やはない。

サンドパンがバッジ三つ程度の実力のポケモンと見なされる。それも昔のフミツキならば受け入れただろう。

受け入れられる筈がない。今ははつきりとそう思う。そしてサンドパンも、フミツキが低く見られることを受け入れはしないだろう。

「強さとは、不思議なものですね」

「隊長、何か言いましたか？」

「いえ、なにも」

怪訝そうな団員に笑みを見せて、フミツキは前を向いた。

サカキの理想は、案外悪いものではないかもしない。そんな気がした。

自分は強くなつた。それは、サカキやワタルといった天上人からすれば誤差のような強さだろう。少なくとも弱者のカテゴリから抜け出すほどの進化ではない筈だ。

それでも、悪い気はしなかつた。自分もサンドパンも、僅かでも強くなつたのだ。サンドパンを撫でていると、なおのことそう思つた。

自分達が何を手に入れたのか、上手く言葉にできなかつた。それでいい、とも思う。

「隊長っ」

駆け込んできた団員は、顔色を変えていた。

「落ち着いてください。どうしました？」

「七階に、化物みたいなトレーナーが」

「わかりました。案内してください」

なんとか息を整えようと肩を上下させながら、その団員は頷いた。流している汗は疲労からくるものばかりではなさそうだ。

駆けた。七階ならば、階段の方が速い。先行する団員の背中を見ながら、フミツキはモンスター・ボールの開閉スイッチの位置を確認した。

見えてきた。数人の団員が、壁に背を預けながら座り込んでいる。不意に水音がして、ラッタが吹き飛ばされた。ラッタのトレーナーである団員が下がつてくる。入れ替わるよう前に出た。

カメツクス。全身に、鳥肌が立つた。サンドパンが飛び出し、低い唸り声をあげた。

「ほう。意外に、強そうなやつもいるじゃねえか」

カメツクスの後ろにいる少年が、口角をあげながら言った。

誰なのか、一瞬考えた。シルフカンパニーにこれほどの使い手がいる筈がない。考えても意味はなかつた。現実に目の前にいて、ロケット団と敵対しているのだ。フミツキにわかるのは勝てそうにない、ということだけだつた。

「大人しくして貰えれば、危害は加えません」

「面白いね。抵抗したらどうなるって言うんだい？」

「力尽くでも、拘束します」

滑稽なことを言つていた。しかし他に、やるべきことはなかつた。今ここで、自分の全存在を賭けてでもこの少年を止めるしかない。この作戦はロケット団の全てなのだ。

少年が頭を搔いた。

「どうしようかな。爺さんの使いは完全に無駄足だつたし、これ以上骨を折つても損なだけではあるんだが」

交渉の余地があるのか、と一瞬考えた。しかし、情報がない。そして相手には、交渉しなければいけない理由もない。

あと一手が足りなかつた。それは少年もよくわかっているようだ。カメツクスが一步前に踏み出した。

「抵抗の意思ありとみなしますよ」

「構わないぜ。止めておいた方がいい、と思うが」

「同感だな。止めておいた方がいい」

背後から聞こえた声に、フミツキは弾かれたように振り返つた。サカキ。いつもの仮面にハットを被つている。控えるように歩いていたペルシアンが、サンドパンの前に出た。

「なかなか、頭は回るようだな。ここで争つても仕方ないと思わないかね？」

少年が腰を低くした。額に汗が一筋、伝つている。

「なんだ、あんたは」

「口ケット団の総帥とだけ言つておこう。いいカメツクスだ。ペルシアンよりも少々、力が上のようだな」

「少々だつて?」

「ペルシアンはなんとか相討ちに持ち込めるだろう。そして、君は一人だ」「俺の手持ちは一匹じやないぜ」

「私もだよ。潰し合いになるな」

空気がひりついていた。誰かが唾を飲み込む音が聞こえた気がした。フミツキはもう気を抜いていた。目の前の少年は優れたトレーナーだが、サカキに勝てる筈はない。

「瀕死のまま回復してもらえないというのも、ポケモンには酷なことだよ」束の間、睨みあつていた。少年がカメックスをボールに戻した。

「何日も拘束されるつてのはごめんだぜ」

「そこまで時間をかける気はない。しばしの不自由は我慢してもらうしかないがね」

「ポケモンを取り上げられるつてのもお断りだ」

「よからう。丁重に隔離させてもらおう。フミツキ団員」

「はつ」

「これより上は私が行く。君は警戒班を担当してくれ。下の階になにかあつた時は、君の判断で事に当たれ」

「わかりました」

サカキの背を見送つてから、フミツキは振り返つた。

「拘束させてもらいます。といつても、あなたを本当の意味で無力化することは私にはできませんが」

「好きにしろよ。ところで、あんたらのボスつてのは何者だ?」

「お答えできません」

「ただ者じやねえな。爺さんと向き合つてるような気分になつたぜ」

「あなたのお爺さんよりは、優れたトレーナーだと思いますが」

隔離を担当している団員が少年の両脇に付いた。隔離する場所は事前に決まつていて、シルフカンパニーの制圧が終わり次第、防火シャッターを降ろすことになつていて、シルフカンパニーの少年がフミツキの顔を見つめ、それから肩を竦めた。

「まあいいさ。どうせ、あんたらの野望も爺さんの願いも叶いやしないんだから」

フミツキがハツと顔を上げ、言葉の意味を尋ねようとした時には、少年はこちらに背を向けていた。負け惜しみだろう、とフミツキは自分に言い聞かせた。警戒班の団員達が、指示を仰ぎに集まつてきた。



左後ろに控えている秘書は顔を青ざめさせていたが、シルフカンパニー会長は流石に泰然としていた。皺が刻まれ、目蓋はやや厚ぼつたくなつてはいるものの、大きく開かれた眼には知性が光っていた。

サカキは椅子を引き、会長の対面に腰かけた。

「全てが力尽くかね？」

「力、というものを複合的に考えるのであれば」「君達は無作法ではない。ただの無法だよ」

「返す言葉もない」

殊更に下卑て見えるように笑つた。秘書の方は更に顔を歪めたが、会長の表情は変わらなかつた。いい目だ、と思った。戦いに挑む男の目だ。

「私で手配できるものは全てくれてやろう。それで帰つてくれないか。いや、社員を解放してくれればそれでいい。人質が欲しければ私一人で足りる筈だ」

「会長とはいえ、シルフカンパニーの資産のうちあなたの一存で即座に動かせる物は決して多くない。総資産から言えば一パーセント以下でしょう」

「債権や手形についてもいくらかは私の権限が及ぶ。しかし、君達ではそれらの現金化は不可能だろう。このような形で移った債権の取引など」

「凍結されてはね。まあ、腰を据えて探らせてもらいますよ」

足を組む。一番恐れているのは、こちらの目的を察した会長がなんらかの手段でマスター・ボールの設計図を廃棄することだった。金が目的だと思われているのなら、こちらにとつて悪い状況ではない。精々、拝金主義の悪党をやるべきだろう。

「コーヒーを淹れてくれ。会長さんと、そちらの秘書の方の分も」

「結構です」

秘書が固い声で言つた。部下が運んできたコーヒーをサカキは飲み、会長も一口で呷つた。秘書は毒でも見せられたかのように、目を背けた。

会長が躰を前のめりにした。意思の光。並外れた光だった。毒など、皿ごと飲み干そうという強さだ。

「海外資産がある。イツシユとガラルでそれぞれ現地通貨に株、それから私名義での投資銀行への出資だ。海外経由ならば横槍を入れられることなく資金を動かせるだろう」「雲の上のお話ですよ。我々では真偽すら確かめられないような」

「私もただ椅子に座つているだけではない。世の中のことには通しておるよ。細かいことはわからんが、君達は随分金の動かし方が巧みなように見える」

「ほう。我々をご存知でしたか」

「それなりの悪党だろう。しかし、私の若い頃は悪党などいくらでもいた。悪党でなければ、成り上がれなかつた」

「終戦直後のお話ですか。様々な媒体で目にしましたよ、小さな町工場がモンスター ボールの量産と縮小機能開発を成功させてのしあがつていくサクセスストーリーを」

「物語になつたのは綺麗事だけだ。あの時、無惨なことはいくらでもあつた」

会長が腕を組んだ。意思の光は輝きを増している。

やはり、マスター ボール本体を手に入れるのは不可能だろう。どれほどの苦痛を与えようとも、屈するタイプの男ではない。フジ老人とは全く別の意味で、死を受容することができる男だ。

しかし、生きていた。それもまた、フジ老人とは別の意味合いで事実だつた。あちらは現世を諦めた生だが、目の前の男に諦念はない。

「悪党でしたか、シルフカンパニーの会長が」

「昔のことだよ。無辜とは思わないが、殊更に露悪するつもりもない」

「そしてシルフカンパニーを作り上げた。手に入れた価値を鑑みれば、一級品の悪党ですな」

「善人では何一つ手に入らない時代だった。ささやかな衣食住を求めるこことすら悪党に

しかできなかつたのだ。君達のような現代の小悪党とは何もかもが違う

「衣食住ね。確かに、そんなものは求めてなどいない」

サカキは机に深く肘を突き、会長に応じるように躰を前のめりにした。会長が僅かに目を見開いた。

卑しい悪党などを演じても意味はない。言葉を交わしていくなかで、それがはつきりとわかつた。この男と向き合うのに、拙い演技などしていても仕方がない。いずれ見透かされるだけだろう。

「言うなれば手段ですよ、会長。自由になるための手段」「小癪なことを言うな。現代に不自由などどこにもない。我々が体験したような不自由はな」

「いつの時代も人間は不自由で空腹だ。そういうものでしよう」

「人間の欲に際限などないと、そう言いたいのかね？」

「そんなことは改めて口にするまでもない。欲が尽きればそれは死者だ。不自由というのは全く別の話ですよ」

「金で解決できる不自由か。くだらんな」

「さて、解決できるかはわかりません。ただ、戦う自由は得られる」「戦うだと。金で、不自由と戦うというのかね」

「あるいは」

サカキは仮面越しに微笑んで見せた。会長は束の間思案げに手を顎にやり、それから勢いよく顔をあげた。

「まさか、同盟軍と戦うつもりか」

答えなかつた。会長が、呻くように声をあげた。

「馬鹿なことを。今更、そんなことに何の意味がある」

「不自由が我慢できない。そんなところです」

「止せ。金で勝てる相手なら、私がとっくにやつている」

「ほう。会長は同盟軍のなんたるかを知つておられる」と

「我々の時代がどれだけ苦渋を嘗めたと思つていて。あの頃、どんな悪党であつても反進駐軍という一点では必ず結束できた。告白すれば、私も反進駐軍の活動には参加していたのだ」

「そうでしたか」

「彼奴らがいくつかの権限を手放し、同盟軍へと変化したのは我々の働きが多少なりと作用したと思つていて。極々僅かだつたかもしけんがね」

「なるほど」

「なるほどだと? いつたい、何をわかつた氣になつたのだ?」

「私のような者が、不自由になつていく過程ですよ」

会長が歯軋りし、それから肩を落として脱力したように椅子に躰を凭せた。

団員が近付いて来て、サカキの耳元で囁いた。

「一から五階まで探索を終えました。電子データの方も進めていますが、今のところは何も」

「研究ごとにクローズドなネットワークがあるかもしれません。物理媒体を探している団員に、そちらにも目を向けなさい」

「はい。それから」

団員が口ごもった。

「報告ははつきりとしろ。内容で、人をどうこうしようとは思わんよ」

「はつ。どうやら、ゲートの方が手違いで人を一人通したらしく」

「何が気になる?」

「赤い帽子を被つた、少年だというのですが」

「そうか」

サカキは束の間、目を閉じた。因縁。そういうこともあるのかもしれない。それが自分との因縁なのか、あるいはフミツキとレッドの因縁なのか。

残酷な因縁になるのかもしれない。そう思つたが、それを遮る選択肢はサカキにはな

かつた。

「万が一シルフカンパニーにやつてきたら、フミツキ団員に相手をさせるように。通路毎の防火シャッターはどうなっている?」

「事前の計画通りに降ろしています」

「広い通路は三枚のシャッターが横並びになつていたな」

「はい」

「一枚を降ろし、一枚を中間で止め、もう一枚は開けておけ」

「完全に封鎖することもできますが」

「本当に行き詰まれば、防火シャッターを食い破つてでも進んでくるだろう。本末転倒だ」

「しかし、かなりの耐久性ですよ」

「無駄だ。遮蔽物を作るだけでいい」

それで、炎タイプの攻撃を捌くのは容易になる筈だった。フミツキならば、遮蔽物を上手く使つた戦いをやってのけるだろう。その手の才は元々悪くなかった。

団員が二人駆け出していく。フミツキへの連絡とセキュリティルームへだ。サカキは会長をちらりと盗み見て、それから肘掛けに片肘を突いた。人を包み込むような柔らかな椅子だった。

こういうもので人は癒されたりするのだろう、と思つた。ペルシアンがカーペットを爪で擦りながら、退屈そうに一鳴きした。

## 第19話

それらしきものが、どこにもなかつた。

下の階を探索していた団員達は、見落としを疑つて二周目に入つてゐる。ネットワー  
ク上のことはフミツキにはわからなかつたが、行き交う団員の顔を見るにそちらも芳し  
くはないようだ。

「隊長、駄目です。上階も見つかってはいません」

「手がかりは？」

「研究室や開発メンバーについてはデータがあつたようなのですが、設計図はどこにも  
「わかりました。警戒に当たつてゐる人員も半数を探索に割いてください」

「まさかとは思いますが」

言いかけた団員が、周囲を窺つて口をつぐんだ。

何を言おうとしたのかはよくわかつた。マスター・ボーラーの情報が誤りであつた可能

性を考えたのだろう。

フミツキの知る限り、サカキとゲームコーナーの店長は図抜けた切れ者だつた。この二人が揃つて存在を信じたのだから、マスター・ボールの実在についてフミツキは疑つていなかつた。それに嚴重なセキュリティが掛けられ、強引に奪えれば自壊するだらうという予測についてもだ。

そして、開発に成功した以上設計図も存在する筈だ。商業的な話ではなく、研究者の性がそうさせるだらう。研究者という人種が持つ情熱が半ば狂氣的なものであることを、フミツキはオツキミ山で嫌というほど思い知つた。

「私達にできることは探索を続けることと、外部からの横槍を跳ね除けることだけですよ」

フミツキの言葉に団員がはつきりと表情を固くした。

オツキミ山でフミツキが率いていたうちの一人だ。レツドに敗北したフミツキを、安全な場所まで退避させてくれた団員の一人でもある。

ゲートを担当していた班がなぜか子供を一人通したこと、その子供が赤い帽子の少年だつたことは既に連絡を受けていた。なぜ、ということは考えなかつた。そういう縁だつた、と思うだけだ。

トレーナー同士の才能だけを比べれば勝負にもならないだらう。それだけのものを、

フミツキはオツキミ山で見た。絶望したといつてもいい。

立ち向かうべき相手が悪い。サカキはそう言っていた。逃げて当然だ、とも言つた。逃げろとは言わなかつた。それがフミツキを思つてのことなのか、サンドパンのためなのかはわからない。それでもこの、否定されて当然の戦いを肯定してくれたのだ。

「隊長、俺達にできることは？」

「できる」と言つても

「なんでもいいんです。囮になれつて言われりやなります。ピッピ人形でも投げながら」

ちよつと冗談めかしながら団員が笑つて、それからフミツキを見つめた。退きそなが氣配はない。

「それでは、相手を誘導して貰つて構いませんか？できれば五階の広い通路で戦いたいのですが」

「命に代えても」

「そこまでは頼みません。とにかく、探索班を避けながら誘導してもらえれば充分です」「わかりました。二階辺りで待機します」

団員が駆け出していく。その背を見送つてから、フミツキはサンドパンを出した。爪の先、頭、背の棘、お腹、脚と順番に観察し、それから触診していく。表面上の傷

だけでなく疲労などまで考慮しながらだ。メデイカルマシーンは傷を癒すが、傷付いた時の感触や違和感まで拭いさつてくれるような万能機器ではない。

爪の内側に凝りがあったのでピーピーエイドを塗つた。同じ技を使い続ければ当然その箇所に疲労が溜まり、凝り固まつていく。それを解す薬品だ。トキワジムでは、ジムトレーナー全員がこういった回復薬を複数常備していた。そういうふた環境で特訓を積めたことは、フミツキにとつて幸せなことだった。

一通り終えてから、サンドパンを仕舞い階段を降つた。七階である。一段一段、ゆっくりと降りていった。静まり返つた中で壁に足音が反響した。

捜索を担当している団員がフミツキを見て軽く会釈した。五階だつた。行き交つていく団員達を見送りながら、フミツキは大きい通路の真ん中を歩いていった。外は真夏日といつてよかつたが、シルフ内には冷房が効いていた。サンドパンを出し、躰を小刻みに擦る。寒さに強い種族ではないのだ。

されるがままのサンドパンの爪を握り、フミツキは自身の頬へと当てた。最初の数秒には冷気が漂つたが、その後からサンドパンの体温がじんわりと広がつてきた。サンドパンが目を閉じている。フミツキは額を合わせた。

階下が騒がしかつた。叫びと、技の余波が壁を押し拡げる音。ポケモンが自由に過ごせるように作られたシルフカンパニーの建物をもつとしてなお、その音は低い唸りを響

かせながら近付いて来ていた。フミツキはまだ目を閉じ、サンドパンと額を合わせていた。

行き交う足音が激しくなった。目を開き、立ち上がった。

「隊長さん、こんなところに。今、下が大変なことになつてて」「わかつています。私の」

言葉が途切れた。重い言葉だ。しかし、背負つてしまつたものだつた。

「私の部下が、こちらに誘導してくる手筈になつっています。五階にいる他の団員達は退避をお願いします」

「わかりましたっ」

団員が大声で退避を叫びながら走つていく。人の気配が段々と遠ざかっていく。入れ替わるようにして、数人の男達が近付いてきた。

「隊長」

「みなさん」

フミツキの隊の団員だつた。服はところどころ破れ、壁にでも擦つたのか白く汚れていた。ポケモン達も瀕死に陥つているようだ。疲労困憊なのか、壁に躰を預ける者もいる。

「あの少年は？」

「もうすぐ来ると 思います。二階で暴れまくつてましたよ。横からバトルを吹っ掛けた  
逃げながらなんとかここまで来ようと思つてたんですが、四階で捕捉されちまつて。階  
段手前までは来てたんでそのまま上がつてくる筈です」

「ありがとうございます。みなさんは上階に退避を」

「冗談よしてくださいよ。ここにいます。何のお役にも立てませんがね」

一人がそう言つて笑つた。他の団員も同調するように頷いた。フミツキはわざとら  
しく肩を竦め頷きを返すと、後方を指した。流石に団員達も従い、大人しく後方に待機  
した。

フミツキは団服の上着を脱ぎ、ベルトのモンスター・ボールや躰の可動を確認してか  
ら、黒いフェイクレザーのジャケットの首元までファスナーを閉めた。長袖が手首まで  
を覆つている。手袋は着けなかつた。ボールを投げる時の感覚が狂うのだ。

不燃性の上着だつた。しつかりとした想定の元で買った訳ではない。偶然見つけ、衝  
動的に購入したのだ。

こうなることをわかつていたのかも知れない。自分の躰を見下ろしながら、フミツキ  
はそう思つた。緩やかな団服と違い躰にフィットする形狀で、女性的な体型が見てわか  
るようになつてゐる。

今までにはロケット団として活動する時、頑なに性別のわからないような服を選んでい

た。そんなことを言つていられない相手に、自分は挑むのだ。

まともに戦えば勝負にならない。覚悟は決めていた。

「来ましたか」

影が伸びていた。子供と、翼を持つた巨体の影。巨体の尻尾が揺れる度に、影も左右に揺れた。一人と一匹が壁に突き当たり、こちらに向き直った。レッドとリザードン。目が合つた。

最初に動いたのがサンドパンだつた。火を噴こうとしたリザードンを止めて、レッドが前に出た。防火シャッターの位置が微妙だつたのだ。

レッドの側に一枚目が、僅かにフミツキ寄りの位置に二枚目がある。初撃は楽に凌げる、とフミツキは計算していた。事前に計算していたフミツキと同等の判断を、レッドは瞬時に下したのだろう。

走る。レッドとリザードンが一枚目を潜り抜けた。二枚目のシャッターが、フミツキにはまだ遠い。

「サンドパンつ、『スピードスター』』

サンドパンが飛び上がり独楽のように回転し、そこから星形の光線が飛び出して行つた。レッドが下がると同時に前に出たりザードンが、尻尾の一振りで星を凧ぎ払う。効いた様子はないが、出足は奪えた。フミツキはシャッターの陰へ飛び込んだ。僅かに遅

れてサンドパンがやつてくる。その向こうを巨大な炎の網が過ぎていった。

膠着した。二度サンドパンが飛び出し『スピードスター』を撃つたが、まともなダメージにはならなかつた。お返しとばかりに撃たれる『かえんほうしや』は防火シャツターが遮つてゐる。シャツターの上げ下げはサカキが指示したのだろう、とフミツキは確信した。適度に遮り適度に逃がし、それでいて視界は確保できてゐる。競技としてのバトルが主流の現代らしからぬ、実戦的な配慮だ。

『かえんほうしや』が通り過ぎる。フミツキは躰を低くしてから息を吸つた。腰より上は熱氣で覆われてゐる。

力は圧倒的に向こうが上だつた。それで膠着に持ち込めているのだから、フミツキにとつて悪くはない。この応酬がいつまでも続くならばだ。

汗が額から鼻、そして首筋へと伝つてきた。前髪が張りついている。

膠着が続く筈がない。それはわかつてゐた。フミツキはただ、相手が状況を動かすそ  
の瞬間を待つてゐた。

『スピードスター』を撃つたサンドパンがシャツターの陰へ飛び込んでくる。しかし、  
反撃はこなかつた。

異様な音が、通路の向こうから響いてきた。フミツキはシャツターから僅かに顔を出  
した。

火の粉。それもただの火の粉ではない。無数の火の粉が、風もない筈の室内で渦を巻きながら通路を埋め尽くすようにゆっくりと迫つてきていた。『ほのおのうず』。

『かえんほうしや』のような直線の動きではない。あれならば、防火シャツターを越えてサンドパンを捉えることも可能だろう。

フミツキは膝を付いてサンドパンと目を合わせた。どこか鉱石を思わせる瞳が、フミツキを見上げている。

「最後まで、見続けるから」

渦の先端が、防火シャツターを叩いている。飛び越えてきた小さな火の粉が、フミツキのジャケットに付着して、消えた。

「最後まで、戦い続けて。ただ、あなたらしく」

言つてから、フミツキは小さく笑つた。サンドパンが抗議するように爪を打ち鳴らした。

「私達らしく、にしておこうかな」

サンドパンが頷いた。もう一度笑つてから、フミツキはサンドパンをモンスター・ボルに戻した。それを、右手にしつかりと握つた。

できるかどうかは考えなかつた。やれなければ、ただ無抵抗に負けるだけなのだ。

シャツターを乗り越えてきた『ほのおのうず』の中に、フミツキは迷わず右手を突つ

込んだ。左腕で目鼻を覆い、口は固く結んでそのまま右半身まで躰を突き出す。

熱いとは感じなかつた。全身に鳥肌が立ち、強烈な吐き気が胃と肺腑を駆け巡つた。目蓋の裏に閃光が走り、酷い頭痛がした。皮膚の上を不快なにかが這つてゐる気がした。その全てを無視して、フミツキは力一杯振りかぶつた。

不意に渦が散り、視界が開けた。視線の先。フミツキははつきりと見た。リザードンの足下に落ちたモンスター・ボールから、サンドパンが踊り出る。リザードンは応戦しようとしていたが、間に合わなかつた。サンドパンの『ころがる』がまともに胴体を捉え、リザードンがたらを踏んだ。再度の『ころがる』。飛んで距離を取ろうとしたリザードンを再び捉え、地面へと引き摺り落とした。オツキミ山で傷一つ付けることのできなかつた相手を、サンドパンが圧していた。全てを、フミツキは見ていた。

右手の感覚がなかつた。足が痙攣を起こしている。喉は耳障りな音を立てていた。世界が、ぐるりと横に回転した。自分が倒れたのだと、しばらくして気付いた。躰を起こしたかつたが、どちらが上でどちらが下なのかもよくわからなかつた。

サンドパンはフミツキを顧みることなく、懸命に食らいついていた。複数の足音がフミツキへと駆け寄つてきた。

オツキミ山の時と同じだ、と思つた。違うのは、サンドパンがまともに戦つていること。そしてそれを、フミツキが見続けていることだつた。

『えんまく』を張られたサンドパンが『ころがる』を外した。壁にぶつかり、無防備に回転を解いたサンドパンを『かえんほうしや』が飲み込んだ。炎から飛び出してきたサンドパンはまだ立っていたが、震える両脚は明らかに限界だつた。

近寄ってきた団員達が、フミツキの手を脱いだ上着で叩いていた。まだ火が残つているのかも知れない。

最後の力を振り絞るようにして、サンドパンが飛び掛かつた。レッドの指示は素早く、リザードンもよく反応した。尻尾に弾き飛ばされたサンドパンが、壁にぶつかり床へ落ちた。うつ伏せでピクリともしないまま、やがて瀕死状態の収縮を始めた。

最後の最後まで、勝負を見続けなさい。それがサカキに掛けられた言葉だつた。

最後まで、サンドパンは戦つた。そんなサンドパンを、自分は最後まで見続けたのだ。  
そう思つた。

不意に、全ての感覚が曖昧になつた。最後まで見続けた。もう一度そう思い、それからフミツキは目を閉じた。



マスター・ボールの設計図が、見つからなかつた。

連れてきた団員は勿論、唾を付けていた研究者達も総出で捜索していた。数十億の価値があるであろう研究成果も、シルフカンパニーを揺るがしかねないような契約内容も、厳重に鍵を掛けられた顧客情報も、その全てを今口ケット団が掌握していた。マスター・ボールを造り上げたというM計画についての資料も見つかつた。その成果だけが、どこにも見当たらなかつた。

「もう良いだろう、ロケット団。君達が手に入れられるものは全て手に入れた筈だ。これ以上何を望む？奪つた金を手に、同盟軍に突撃するといい」

「玉砕する、と思われていますね」

「むしろ、君がそう思はないのが不思議だよ。話していくわかつたが、君はずいぶんと理性的な人間だ。知性もある。それでなぜ、同盟軍と武力衝突することの無意味さを理解できないのだ」

「無意味ではないからですよ。少なくとも、私にとつては」

会長が眉間に皺を寄せた。サカキは顎を引いて、なんとはなしに机を見詰めた。

「自由とはそれほど尊いものかね。敗北のための戦いに、賭ける価値があるかね？」

「敗北のためではない、と言つておきましょう。自由が尊いものかどうかは、各人が判断

すればいい

「傲慢だ、君は」

その通りだ、とサカキは思った。自分はとんでもなく傲慢なことを考え、実行しようとしている。

戦いたかった。力の限り、戦いたかった。

無謀なだけの勝負は、戦いではない。この国の全てを巻き込んで、一筋の光明を握り締めるような、そんな戦いの場に身を投げ出したかった。誰もが吼え声をあげるような戦場を、おのがポケモン達とともに這いずり回りたかった。

そんな戦いなどどこにもないことは、ポケモンリーグを勝ち抜いたまだ若かりし頃で既にわかっていた。

夢だと思った。それを、夢ではないものにしてしまったかった。

「ボス、隊長が」

飛び込んできた団員はすっかり憔悴していた。フミツキの指揮下の団員だ。

「敗れたか」

「はい。それから、酷い火傷を負つて意識が戻りません」

「火傷だと」

『ほのおのうず』に躰ごと突つ込んだんです。右腕を中心に酷い状態で』

「服は無理に脱がせるな。生地と肌とが癒着している可能性がある。服の上から冷やせ  
るだけ冷やせ。それから抗生物質を」

「もう退け、ロケット団」

「低く、会長が言つた。俯きがちで、独り言のようだつた。

「重度の火傷を治療するような設備や技術はシルフカンパニーにはない。気管支に損傷  
がある可能性も捨てきれんだろう。命に関わるぞ」

フミツキ指揮下の団員が一瞬言葉を失い、それから壁を拳で叩いた。

「マスター・ボールの設計図はどこに。それさえ、それさえあればいつでも」

「マスター・ボール？ まで、マスター・ボールの設計図と言つたか？」

別の団員が抑えようとしたが遅かつた。マスター・ボールという単語に反応した会長  
が立ち上がり、見開いた眼でサカキを見詰めた。

サカキは領きを返すことで肯定した。放心したように会長が虚空を見詰め、それから

椅子へと腰を落とした。

「なんということだ。あんな、あんな神の氣紛れがこんな事態を」

会長が蹲るようにしながら頭を搔き毬り、それから顔をあげた。ふと、不吉な予感に  
サカキは襲われた。会長の表情にあつたのは深い憐れみと、見通せぬほどの後悔だつ  
た。

「よく聞け、ロケット団。マスター・ボールの設計図などという物は、この世に存在しない」

「馬鹿な。マスター・ボールは実在する」

「そうだ。マスター・ボールは間違いない実在する。キヤブチャーネットの強靭性、ポケモンの収縮機能を喚起する能力、外殻硬度。その全てが従来のモンスター・ボールを圧倒的に凌駕した。既存の捕獲指数に間違いがなければ、どんなポケモンでも捕獲できるボールと言つていいだろう」

「それならば」

「なかつたのだよ。あのボールには、再現性が一切なかつた。同じ素材、同じ技術者、同じ設備、同じ環境。果ては月の満ち欠けまで揃えたが、マスター・ボールが再び完成することは終ぞなかつた。あれは神の気紛れ以外の何物でもないのだ」

「マスター・ボールの製法は存在しない?」

「そうだ。そして唯一のマスター・ボールもここにはない。嚴重なセキュリティとセーフティの元に眠っている」

会長が真っ直ぐにサカキを見据えた。相変わらず、瞳には憐れみと後悔が鈍く漂っている。そこに嘘の一欠片さえも、サカキは見つけることができなかつた。

「本当、なのでしょうね」

「誓つて、嘘は言わん。私にとつても無念なことだつた」

沈黙が降りた。団員達が固唾を飲んでいるのを、サカキは感じた。壁に備え付けられた時計の針音が、やけに大きく響いた。

ミュウツーのデータを集め復活を待つ。技マシンを収集しながら資金を集め、組織を成長させていく。マスター・ボールによつてミュウツーを捕獲、対同盟軍の切り札としつハナダの洞窟のポケモンを捕獲し団員に配給する。ジムバッジと技マシンを同時に配ることで戦う態勢を整える。

それから同盟軍との戦端を開く。誰もが己の力を磨き続ける、戦いの時代。

ロケット団の戦略に、欠けていい要素は一つもなかつた。

天井を見上げた。柔らかく光る蛍光灯の中に、光の中に全てが吸い込まれていつた。

「夢か」

呟いた。声は罅割れ、乾燥して、空間へとほどけていつた。

「全ては、夢だつたか」

ぼんやりと、光の輪郭が霞んでいた。それは全ての色を飲み込んでしまつたように、色とりどりの残影を目蓋の裏に焼き付けた。

振り向いた。団員達が顔を伏せる。

「撤退する。各階の団員達を階段付近に集め、点呼を取らせろ。揃つた階から順に下つ

ていく。一階で合流後ヤマブキを脱出し、ロケット団を解散する

告げて、サカキは声を和らげた。

「済まなかつたな。どうやら、幻影を追うのに付き合わせてしまつたようだ」

「ボス、俺は。いや、俺達は」

「いいんだ」

誰かが堪えきれないように嗚咽を漏らした。やがてそれは部屋中の団員達に伝播した。恥もなにもない、男泣きだつた。それをみつともないとは、サカキには思えなかつた。

会長が机の上で腕を組み、空を睨んだ。

「私は神を恨もう。私と君達に偽りの夢を見せた神を」

「つまらないことですよ、会長。夢は人が見るものです」

「どこへ行く、ロケット団。まだ、夢を見るのか？」

「さて、どうでしょうね。いくらか現金を頂戴していきますよ。その方が都合がよろしいでしよう」

「好きに持つていけ。黒い交際や自作自演などと書かれてもつまらん」

「だそうだ。お言葉に甘えるとしよう」

サカキは団員達を促し、金を持たせたそれを、サカキは受け取らな

かつた。

「ボス」

「君達が持つといい。行くぞ」

会長室を出る。既に八階までは集合が完了し、下を目指して下っているらしい。エレベーターは止めてあつた。階段へ向かう途中、一人と一匹の影が道を遮つた。フミツキ指揮下だつた団員が悲鳴をあげた。

赤い帽子とジャケット。背後にリザードンを控えさせた少年が、レツドがそこにいた。

## 第20話

子供としか思えなかつた。

それが見た目だけであることも、サカキにはよくわかつてゐた。強者の気配。今まで数多く見たそれと同じものを、レッドは放つていた。

一人だつた。サカキの後ろには数多くの団員達がいる。それでも、臆することなくレッドは歩みを進めてきた。

ペルシアンが前に出て唸り声をあげた。レッドが足を止める。ペルシアンの間合いの、ほんの僅かに外だつた。非凡な位置取りだ。

「こうして会うのは初めてだな。私が口ケット団の首領だ。君には、随分と苦渋を嘗めさせられた」

「そうですか」

なんでもなさそうにレッドは答え、それきりペルシアンの様子を窺つていた。まとも

に会話をするつもりはなさそうだ。

団員の一人が激昂し、前へ出ようとするのをサカキは片手で制した。レッドが半身ほど躰を引いている。仕掛けても、軽く受け流されるだろう。

「一つだけ訊いておきたい。サンドパンのトレーナーは強かつたかね？」  
「え？」

「部下でね。君に敵わないことは、恐らく本人が一番よくわかつていた。それでもなお、挑もうとした」

「強かつた、と思います」

「君はジムリーダー達を何人も破っている。もっと強いトレーナーもいくらでも知つているだろう」

「それは」

レッドが考え込んだ。言葉に迷つていていたようだつた。

「思つた通りのことを言つていい。勝者の特權であり、義務だ」「やつぱり、強かつたと思います。意志が、強かつた」  
「そうか」

サカキは一步前へと踏み出した。レッドとリザードンが目を細める。強者の目だつた。

「止めておいた方がいい。君には、まだ早い」

ペルシアンをボールに戻す。そのボールを仕舞いながら、別のモンスター・ボールに手をかけた。鈍く光るモンスター・ボール。

現れたニドキングを見て、団員達が絶句した。多少バトルに詳しいものなら間違いなく見覚えのある個体だろう。体長は普通のニドキングの倍近く、三メートルほどもあるのだ。

レッドが大きく後ろに跳んだ。入れ替わるようにリザードンが飛行しながら前に出てくる。悪くはないが、遅かった。

炎。ニドキングが姿勢を低くして躊躇しながら、リザードンの下へ潜り込んだ。尻尾を掴み、レッドの方へと投げ返す。壁に叩きつけるつもりだったが、上手く空中で体勢を立て直していた。姿勢の制御は中々のものだ。

レッドがさらに距離を取った。ニドキングは巨体だが、鈍重ではない。踏み込みを一度見ただけでイメージを修正したのだろう。

フミツキが立ち向かうには、あまりにも強大すぎる相手だつた。トレーナーとしてのセンス、瞬発力、判断力と決断の果敢さ。その全てがフミツキを大きく上回つていた。

そういう相手に挑めることを、一瞬だけサカキは羨ましく思い、それから苦笑いした。傲慢がすぎる考えだ。

リザードンが尻尾を振る。一振り毎に無数の火の粉が空中に散らばり、どれからともなく集まるとやがて渦を巻き始めた。『ほのおのうず』。本来隙の大きい技だが、サカキの目から見ても仕掛けるタイミングは見つからなかつた。後ろの団員達に至つてはいきなり『ほのおのうず』が出現したように見えただろう。

渦が放たれる。捕らわれれば面倒だが、サカキは焦つてはいなかつた。

『だいちのちから』

ニドキングが両手を床へと付ける。高層階では大地のエネルギーを汲み上げるのに手間取るが、今更その程度を苦にするレベルではない。

放されたエネルギーが『ほのおのうず』を霧散させ、余勢を駆つてリザードンへと迫つた。

リザードンが飛び上がる。同時に、レッドが反対側へと駆け出した。それで視界が広く取れる。ニドキングが後手を踏めばだ。

『エアスラッシュ』

『ふいうち』だ

ニドキングが、一瞬姿を見失うほどに加速した。空中のリザードンへと打撃を与えると、縛れ合うようにしながら地面へと落ちてくる。

『ほのおのキバ』

躰を起こしながら口角から溢れるほど炎を生じさせたりザードンが、ニドキングの肩へと噛み付いた。ニドキングは一瞬仰け反つたが、すぐに躰を前に出した。越えてきた場数が違うのだ。火傷や怯みといった状態異常など、数えきれぬほどに受けってきた。

全てを、踏み越えてきた。自嘲と共に、サカキはそう思った。

「壁に押し付けてやれ。『とっしん』」

リザードンに噛み付かれたまま、ニドキングが猛然と前進を始めた。リザードンの口元からもう一度炎が溢れ出す。ニドキングの勢いは一切弱まらなかつた。

壁にぶつけられたりザードンが、流石に頤を開いた。甲高い音と共に、リザードンの背中を中心として蜘蛛の巣状の鱗が壁に拡がつた。ニドキングが尻尾を地面にベたりと付け、三本目の足として前進を強くする。鱗が更に細かくなつた。

「叩き落とせ」

耳障りな音を叫びながら、壁が崩壊した。飛び散る瓦礫が擬似的な『いわなだれ』となつてリザードンの躰を打つた。痛撃に力を失つたりザードンが押し出されるままに後退し、建物から弾き出されて落下を始めた。

ニドキングの横を小さな影が駆け抜けた。

「あのガキ、何をつ」

団員達から悲鳴があがつた。一切の逡巡を見せることなく、レッドはリザードンを

追つて壁に空いた穴を飛び出した。シルフカンパニーの最上階である。サカキは穴へと駆け寄った。

落下しながらなんとかリザードンの背に取り付いたらしいレッドが、その口元に木の実を押し込んでいた。サカキは目を凝らした。レッドがリュックへ手を突っ込み、取り出した何かをもう一度リザードンの口元へと持つていった。なんのかはよく見えなかつた。既に六階近くまで落ちている。

不意に、リザードンが翼をばたつかせた。もがくようにしながら空中で体勢を整えると、束の間旋回し、ヤマブキ郊外へと進路を取つた。再浮上するほどの体力は戻らなかつたようだ。風に乗り、滑空するように遠ざかっていく。尾の炎が、遠い地表を断ち切るよう薄く線を引いていた。

一連のレッドの動きには、束の間の迷いすらなかつた。尋常な決断力ではない。団員達が啞然としていた。

「いそともない人間が、この世にはいるものだな」

リザードンの背で、レッドが振り向いた。標的を見定めるようなその視線を、サカキはただただ受け止めた。それも、勝者の義務である。雪辱を期す眼光が、静かにサカキを貫いた。

やがてレッドが前を向くと、サカキはニドキングをボールへ戻して踵を返した。困惑

と畏怖を湛えた団員達がサカキを見つめていた。

「撤退する。行くぞ」

それだけを、サカキは告げた。



一階では作戦に参加した全ての団員が集まっていた。その中に、輪を作っている集団  
がいた。

「隊長っ」

後ろにいた団員が声をあげて輪に駆け寄った。サカキもそれに続いた。

輪の中心で、フミツキが仰向けに寝かされていた。袖から覗く右手が焼け爛れてい  
た。レザージャケットも右腕部分は原型を失っていて、皮膚と癒着していた。左側も表  
面は熱に変形している。意識は戻っていないようだ。首まで迫る火傷と対比するよう  
なあどけない顔は普段よりもずっと幼く見え、その分だけ残酷な光景となっていた。  
「服を脱がせる。右腕以外だ」

「え？」

「急げ」

「は、はいっ」

女性の団員、などと言つてゐる場合ではなかつた。フミツキの隊の団員が、恐る恐る服に手をかけた。

サカキはペルシアンを、ボールから出した。ペルシアンが鼻をひくひくと動かし、嫌そな表情をした。肉の焦げた匂いがしてゐるのだ。人間のサカキですらわかるのだから、ペルシアンにとつては相当な悪臭だろう。

「ボス、これでいいですか？」

「ああ。下がつていなさい」

黒いノースリーブのスポーツインナーを晒したフミツキの右側に、サカキは無造作に立つた。足元ではペルシアンが髪を揺らしている。

「集中しろ、ペルシアン。斬るのは袖と腕の間だけだ」

ペルシアンが目を細め、フミツキへと向き直つた。呼吸を、サカキは測つた。自分のものではない。ペルシアンの呼吸。フミツキの呼吸。あるいは、その空間にあるなにがしかの呼吸。

ペルシアンが姿勢をゆつくりと低くし、反対に体毛を少しづつ逆立てる。呼吸。本当

に呼吸と言えるのかはわからない。成功の機微。

体毛が逆立つ。ペルシアンの髭が、地面に付きそうになつていてる。

『きりさく』

動きは決して大きくなかった。ジャケットの袖に一筋の線が走り、やがて枯れ葉が木から落ちるようにフミツキの躰を離れた。

「消毒、それから包帯を巻いておけ」

「はいっ」

「誰か、フミツキ団員を運べるか?」

「俺達で、隊長は俺達で運びます」

数人の団員が名乗りをあげた。全員、オツキミ山でフミツキが率いていた団員だ。

サカキは頷いて、それから外へ出た。男が一人駆け寄ってきた。

「支配人か」

「一応、本部長つてことになつているんですがね」

「これからは支配人で構わん。正式にだ」

ゲームセンターの支配人が苦笑いをした。

「北は?」

「格闘道場の連中なら今頃てんてこ舞いになつてますよ。道場破りをしてきましたん

で。マスター・ボールの設計図は?」

「存在しなかつた。どうやら、道化を演じてしまつたようだ。シルフカンパニーの会長は、神の気紛れなどと言つていたが」

「そうですか。そんなこともあるんじゃないか、という気はしました」

「ほう」

「神つて奴はたぶん人間が怖いんでしよう。だから、優れたリーダーが生まれそうになると陥穰を掘る」

「ならば、やはり道化だな。まんまと陥穰に嵌まり込んだ」

「言つてみても仕方ないことですね。とりあえず、ヤマブキを抜けますか?」

「ああ。そこまでは私が突破口を開く。その後は散開することになるな。私以外への追跡は厳しくはないと思うが」

「ボスはタマムシへ向かつてひた駆けてください。そこからは身を隠してサイクリングロードへ」

「セキチクか?」

「いえ。サイクリングロードの手前に『そらをとぶ』を使える人間を待機させてます。あそこからならすぐに海上へ出れるので目撃されることもないでしょう。私はもうしばらくこつちへ残つて、情報を錯綜させておきます」

「わかった。もう一つ問題があるんだが、フミツキ団員が負傷している。酷い火傷だ」「口ケット団の被害者ということにして病院にでも持ち込みましょう。私のキュウコンで適当に放火をしておきますよ。火傷を負った人間が出ても不思議はないでしよう」「そうしよう。すまない、最後まで面倒をかけるな」

「願わくはもう一度、ボスの元で。そう思い続けます」  
支配人はそう言つて、小さく笑つた。



勘が良いと、よく言われた。

半分は褒め言葉で、もう半分は嫉妬を含んだ陰口だった。独断的な捜査を行うタカギのやり方は、同僚から理解を得られるものではなかつたのだ。

本当は捜査の根拠があることも少なくなかつた。しかしその根拠は、その瞬間にしか生きないものだつたりするのだ。タカギは根拠の共有よりも有効活用を重視した。それが同僚からの軽蔑の視線と、何枚かの賞状となつてタカギの評価を作つた。

なぜ自分はここで待っているのか。今、根拠はなにもなかつた。勘が働いた訳でもない。何気なくタマムシを出て、適当に腰を降ろしたのだった。

七番道路。もうしばらく進めばヤマブキシティに達するそこで、タカギは足を止め、煙草に火を点けた。オイルライターは相変わらず火花ばかりを飛ばし、中々着火しなかつた。

ファイルター近くまで燃えると煙草を丁寧に消し、携帯用の灰皿へと捨てた。しばらく待ち、もう一本煙草を取り出した。

三本。四本。調子が出てきたのか、いつになくオイルライターが快調に火を点した。ボールから出したウツボットが一杯に葉を広げていた。陽射しの強い、暑い日だ。

五本目。待つた。自分は待つ刑事なのだと、言い聞かせ続けた。口ケット団に関するは常に追っていた、という気がする。タマムシのアジトの時でさえ、結局は飛び込む形になつた。

根拠もなにも持たずにただ待つ。捜査とは言えなかつた。だからこそ、駆け引きの外側で勝負が決まる。運のようなものだ。

六本目。煙がタカギの目の前を横切つた。遙か遠くに砂煙が上がつていて、近付いてくる。

七本目。砂煙が更に近付いた。誰かがポケモンに騎乗して駆けている。豆粒ほどの

大きさだつたその人間が、段々と大きくなつてきた。

立ち上がり、タカギは煙草を消した。ペルシアンに騎乗した男。顔はわからなかつた。仮面を着けているのだ。その後ろを数十人の人間が走つてゐる。口ケット団。タカギはそちらを意識せずに、先頭の男だけを見つめ続けた。男も、タカギを見ていた。

「口ケット団」

肚の底から、タカギは吼え声をあげた。まだ距離がある。それでも、男には届いていふ筈だ。ウツボットが前に出る。

「勝負だつ」

叫んだ。男がペルシアンの上で立ち上がり、跳んだ。片手でペルシアンを戻し、もう一方でモンスター・ボールを投げた。

現れたニドキングの背に男が着地した。三メートル近い、どこか見覚えのあるニドキング。圧力は凄まじいものだつた。ほとんど小山のような物体が、自分を目掛けて駆けてくる。退きそうになる脚を、タカギは抑え込んだ。

ここだけだ。拳を握り込みながら、タカギはそう思つた。自分が口ケット団の首領に接触できるとしたら、今この時だけだ。ここが、分水嶺だ。

ウツボットが蔓の先端を結び、瘤のようにした。この瘤を、下から掬い上げるように打つ『つるのムチ』がタカギが持つ唯一の技だつた。レベルの高いポケモンを従えた犯

罪者を、悉く打倒した技だ。

ニドキングが、その巨体からは考えられないほどの速度で迫つてくる。息が詰まりそうだつた。指先が震えている。

叫んでしまったかつた。速く『つるのムチ』を指示して樂になりたかつた。待つ刑事。もう一度言い聞かせた。最後の一瞬まで、待てる筈だ。

地面が揺れている。風が肌を打つた。堪えた。動きだそうとする全てを、タカギは堪えた。

何かが弾けた。

『つるのムチ』だ』

ウツボットの蔓が稻妻のように迸り、ニドキングの下顎を捉えた。ニドキングが前につんのめつた。タカギは勝鬨をあげそうになつた。

ニドキングがもう一段加速した。咄嗟にタカギは横に跳んだ。ウツボットが、まるで触れてはならないものにでも触れたかのように弾き飛ばされ、地面に倒れ付した。砂埃が、タカギとウツボットを覆つた。

砂埃が晴れた時、ロケット団は既に遠く離れていた。タカギはワイヤシャツを点検し、入り込んだ砂をはたき落とした。それからウツボットをボールに戻し、煙草に火を点けようとした。

「自分から体勢を崩すことで『つるのムチ』の衝撃を殺したか」

呟いて、タカギは苦笑した。どうせ待つのなら罠でも仕掛ければ良かつたのだ。

真っ向から、勝負をした。そうしたいと、なぜか思わされてしまった。困ったものだ。

あの男には、どうにも人たらしの才能がある。

「追い詰めきれんかもしけんな」

どれだけサカキのニドキングに似ていても、メタモンの『へんしん』という可能性は捨てきれない。戦前に冤罪を複数出したらしく、警察組織はその辺りに慎重になつていった。ヤマブキがどういう展開になつたかによるが、即座に逮捕することは難しいだろう。

砂でも入つたのか、オイルライターはまた渋くなつていた。八本目の煙草はしばらく喫えそうにない。ライターを擦りながら、タカギは遠ざかる砂煙に目を細めた。

## 第21話

日常の変化は少なかつた。

事務作業をし、トレーニングをやり、挑戦者がいれば試合を受ける。それだけだ。ムツキが元団員達のアフターフォローのために各地を飛び回っているので、スケジュール調整は多少面倒になつたか。

数日前に、シルフカンパニーで会つた少年が來た。オーキドの孫で、血筋に見合うだけの実力があり、あるいはワタルに届くかもしれないと思えた。刺激的な出来事はそれぐらいだつたろう。

変化がないのはあくまでもサカキの周囲に限つた話で、世間は天地をひっくり返したような大騒動になつっていた。タマムシで壊滅したはずのマフィア組織がヤマブキに姿を現し、世界的企業であるシルフカンパニー本社を襲撃したのだから当然と言えば当然だつた。

サカキはリモコンを操作し、テレビの電源を点けた。試合映像を見返す以外には使つてこなかつたジムのテレビも、ここ数日はニュース番組ばかりを映している。

報道はひつきりなしに事件を取り上げ、事の全容や責任の所在、今後の見通しなどを侃々諤々に言い合つていた。新聞やワイドショーを流し見しながら、サカキは一つのことを探していた。ロケット団総帥についての報道だ。

老いぼれ犬はロケット団総帥の正体を完全に突き止めているはずだ。自分を逮捕しに来るとすれば、あの喰えない老警部だけだろう。

しかし今のところ、サカキの名が報道に挙がることはなかつた。水面下で事が進んでいる気配もない。

自惚れでもなく、警察部隊の包囲なら軽く破れる自信があつた。サカキを捕らえるならば、ジムリーダーか四天王を複数人招集しなければならないだろう。その動きを見落とすほどに落ちぶれてはいない。

警察内部で老いぼれ犬の発言力が低いというのはありそなことだつた。本当の意味で組織に馴染むことは決してない男だ。捜査本部の会議が紛糾する中で、サカキの逮捕を強引に推し進めるることは難しいだろう。

捜査の手がサカキに伸びるまで、まだ時間があるかもしない。

そこまで考えて、思考は停止した。

時間があつたとして、何をするのか。逃げるべきなのはわかっている。しかしサカキは、ただ普段通りの日常を惰性のまま続けていた。状況は刻一刻と悪化していくにも関わらずの停滞は、思考が停止しているとしか思えなかつた。

頭を振つて、本棚へ目を向けた。一昨日、ジム別館にあつた重要な書籍を全て本館へと移した。ジムトレーナーには整理のためだと言つたが、本当はいざれ警察が押収に来るのを防ぐためだつた。別館ならば私物扱いされかねないが、本館の物品は全て協会及び各ジムの公的な持ち物となる。帳簿や目録も細かくつけてあり、サカキ個人への令状では持ち出すことは叶わないはずだ。

ここにあるのはロケット団に一切関係しない、純粹にトレーナーの成長の糧になるものだけだ。警察の押収を対策しておくのは、からうじて残つたジムリーダーとしての責務だらう。

別館を空っぽにしておきたい自分がいる。そのことに気付かないフリをして、サカキは椅子から立ち上がつた。

「リーダー、どちらに？」

「少々町を散策してこようかな」  
 「それはいい。ここ数日は籠りつきりでしたからね。トレーニング以外は机にかじりついて」

「ムツキ君がいない以上、私が事務作業をするしかあるまい。挑戦者の予定は入っていないね？」

「大丈夫です。ゆっくりしてきてください」

ジムトレーナーの言葉に頷いて、サカキは外へ出た。微かな冷気を伴う風の中で昼の陽光は暖かく、雲のない青空がどこまでも高かつた。トキワの町。見慣れた田舎町だが、考えてみればもう見る機会はあまりないのかも知れない。

擦れ違う人々は、サカキを見かけると笑顔で会釈をした。暇を持て余した主婦やバトルに関心を持つ学生などは、立ち止まって言葉を投げ掛けてきたりする。サカキも立ち止まつて雑談に応じ、質問や相談にはそれなりの答えを返した。見覚えのある顔が大半だつたが、中には記憶にない人間も混じつていた。この田舎町でさえ、人も時間も流れ続けているのだ。見回すと、新しい住宅や店舗などちらほらと目につく。

「あんなところに家があつたかな」

「あれはついこの間建つたものですよ。サカキさんはお忙しいでしようから知らなくとも無理はありませんわ。お店なんかも、新しくできたものもあれば潰れてしまつたところもあつて」

そう言つて笑つた主婦が、いくつかの店を教えてくれた。小料理屋、雑貨店、婦人向けの衣料品店に喫茶店。フレンドリーショップよりもバトルに特化した専門店もでき

て いるらしい。どれも個人経営で規模は小さいが、商品やサービスには意欲的な面が見られるようだ。

サカキは礼を言つて別れ、しばらく散策してから一軒の店に入った。教えて貰つたばかりの喫茶店だ。

「これは、サカキさん。いらつしやいませ」

ドアベルの音に反応して新聞から顔を上げた店主が、慌てて立ち上がり頭を下げた。細身の青年だ。顔見知りのトキワの住人で、一度はチャンピオンを目指し旅にも出たはずだ。サカキも片手を挙げて挨拶した。

木製のテーブル二つに椅子が二脚ずつ、テーブルと同じ材質でできたカウンターという小ぢんまりとした店内に客の姿はなかった。人の気配は残っているので、閑古鳥が鳴いているという訳でもなさそうだ。カウンターの端よりのスツールにサカキは腰を降ろした。店主は慣れた動作で軽くテーブルを拭くと、木の実の種子を荒く碎いたものを出した。匂いからして、恐らくオレンだろう。

「うちのコーヒーには合うんですよ、深みのある味でね。さて、どうしましよう?」「おすすめを頼む。しかし、君の店だつたとは」

「最近始めたんですよ。こんなに早くサカキさんをお迎えするとは思いませんでした」「お父さんは元気かな。子ども達にポケモンの捕まえ方をよく教えてくれていた。本来

はジムの人間がその辺りにも気を配るべきだつたんだが

「いつも通り、酒を飲んで酔つぱらつてますよ」

店主は快活に笑つて、コーヒーの準備に取りかかつた。サカキはオレンの種子を一つ噛みながら、その背をなんとなく見やつた。ドアベルが鳴つた。

「コーヒーを貰えんかね。今作つているものと同じで構わんよ」

入つてきた男は、迷いなくサカキのすぐ隣のスツールに腰掛けた。店主が驚いた顔でオレンの種子を持つてくるのを尻目に、男はこちらを向いた。

「奇遇じやのう、サカキ君」

サカキは苦笑いした。

「トキワにいらしているとは存じませんでしたよ、オーキド博士」

「マサラタウンはなにかと不便での。トキワのフレンドリイショッピに色々便宜を図つてもらつておる。必要な機材を取り寄せて貰つたりとな」

「博士自ら受け取りに?」

「以前は孫に任せておつたが、今は忙しいじやろうからのう」

「グリーン君ですか。この間、私のジムにも来ましたよ。ワタル君に届き得る才ですね、あれは

「身内最員かもしけんが、チャンピオンになれると思うておるよ。もつとも、短い天下

じやろうが」

オーキドがちよつと寂しそうに笑った。不意に芳ばしい香りが立ち昇り、コーヒカップを載せたお盆を持った店主が緊張した面持ちで後ろに立つた。

「豆の表面や割れ目に残った薄皮を、ピンセットで一つ一つ取り除いてから挽いています。蒸らしにも工夫があつて、雑味のないクリアな味わいに仕上げています」

説明とともに配膳されたコーヒーを手に取り、香りを味わい、口に含んだ。豊かな風味、という訳ではなかつた。むしろさらりとした苦味が、仄かな酸味を携えているようなシンプルな味だ。一口飲み干してから、オレンの種子を齧る。こちらは豊かな味わいをしている。再びコーヒーを飲む。組み合わせが抜群に上手かつた。

「旨いな、これは」

オーキドの呟きに、サカキも頷いた。店主は顔を綻ばせると、頭を下げてカウンターの向こうへ行き、サカキ達の対角に腰を降ろしてなにか機械をいじり始めた。しばらくすると店内に低い、穏やかな曲調の音楽が流れだした。ボリュームは抑えられていて、隣同士で話をする分にはちょうど良い。気を利かせたのだろう。サカキはカウンターに肘を付いて、曲に耳を澄ませる素振りをした。

巧い手を考えたものだ。呟きは、心の中でのことだつた。

サカキを捕らえるならば四天王かジムリーダーを動員する筈で、そちらの方には充分

注意を払っていた。僅かな動きも見落とさないよう注視していたのだ。むざむざとトキワに接近されるなどありえなかつただろう。

オーキド・ユキナリを動かす手は正に盲点だつた。

サカキの少年時代、オーキドのガルーラは最強の象徴だつた。今なお四天王に君臨するキクコさえも、オーキドとガルーラのコンビには常に後手を踏まされていたものだ。母親が攻撃する間にお腹の子どもが変化技を使う。海外をヒントに会得したというその反則染みた戦法は、特に接近戦で無類の強さを誇つた。まともに受けきれたのはゴーストタイプの使い手であるキクコだけだ。

第一線を退いてから長い時が経つていて。ニドキングが負けることはないだろうが、それも通常の位置関係での話だ。この距離ならばガルーラがサカキの躰を抑える方がずっと速いだろう。

ガルーラの初撃をサカキが躱せるか。分が悪い賭けだが、分が悪いだけでしかないとも言えた。不可能と思えるような賭けをしなければならないことも、勝負の世界には度々ある。

「どうやつて儂に勝とうか、計算しておるなあ」

眼を閉じて、音楽に聞き惚れているような緊張感のない表情のままオーキドが言った。

「これは失礼しました。どうにも、性のようなもので」

「トレーナーの性じやな。外道に堕ちた者ならば、もつと違うことを考える」

「なんです、それは？」

「この老いぼれの首根っこを抑えるとかじやな。誓められる手段ではないが、一番手つ取り早い。しかし君はそうせんかつたのう。まだ、腐つてはいないようじや」「なるほど。そういう手もありますか」

「君が外道に墮ちているのならば、儂のような年寄りが引導を渡さねばと思つておつた。若者に任せるのは酷じやからな。しかし、その必要もなさそうじやのう」

「博士は警察の要請で來たのでは？」

「君は人を過大評価しすぎるな。こんな老いぼれなど、警察連中は思い出しもせんよ。儂は、儂の意思でここに來ただけじや」

「引導を渡しにですか」

「そうなるかもしけん、と思うておつた。そうでなければ、懺悔にでも付き合つて貰おうかと考えて來たが」

「懺悔？」

「秘密を墓場まで持つていくというのは中々難しいもんじや。誰かに聞いて欲しいという気持ちはどうしても出てくる。かといつて、親しい者に言う訳にもいかん。神父とい

う柄でもないしのう」

「それで私に、というのもどうかと思いますが」

「適任じやろう。これから君はお尋ね者になり、全ての信用を失う。君の口からどんな内容が洩れても誰も信じまいよ」

オーキドが眼を開き、揶揄するようにサカキを流し見た。

「やはり、私のことはご存知でしたか」

「フジは古い友人でな。あれはバトルはからきしじやが、見る目は肥えておる。フジから見ても相当な手練れのペルシアン使いがいると聞いて訝しんではおつたのじや。あれほど気難しいポケモンを縦横に従えるトレーナーはそうはおらん。確信したのはレッドからシルフカンパニーでのことを聞いてからじやが」

「そこまでわかっていて懺悔とは醉狂なことだ。まあ、私で良ければ聴きましよう」

コーヒーを飲み、オレンの種子を一つ口に放り込んだ。ムツキ辺りならば、細かい感想が出るのだろう。淹れ方なども推測できるかもしれない。サカキはただ、旨いと思うだけだった。

オーキドはなにかを噛み締めるように、数秒口を噤んだ。音楽がゆつたりと流れている。それが途切れ、再び頭から流れ始めた。

「儂が今行つて、いる研究は知つて、いるかね」

「ポケモン図鑑でしよう。取り上げた記事を見ましたよ。記事は批判的な論調でした  
が、ああいつた事業を個人で行うというのは大変なことだと思いますよ」

「そのポケモン図鑑じやが、一体何種類のポケモンを記録するかは？」

「それこそ批判の中心でしたよ。百五十一種類。少なすぎる、というのが世間の反応の  
ようですね」

「儂は気にしておらん。というより、儂にとつて必要なのがその程度の数だつたという  
だけじや。なんなら、もう少し減らしても良かつた」

「必要な数、ですか」

「内訳までは知らんじやろう。カントー地方で頻繁に見られる百四十九種類に幻のポケ  
モンであるミュウ、それからホウオウじやよ」

思わず、サカキはオーキドに顔を向けた。

「ホウオウ？ あれはジョウトの伝説では？」

「マサラタウンでは昔からホウオウの言い伝えがあつてな。偉大なトレーナーが旅立つ  
日には、ホウオウが門出を祝いに来るというのじや。恥を恐れず言えば、儂も旅立ちの  
日にはそれらしい鳥ポケモンを見た。何十年も前の話じやが」  
「博士が見たというのであれば、あながちただの言い伝えという訳でもないのでしょう。  
それでホウオウを」

「しかし儂は、ホウオウが見つかるとは思つておらん。ミュウもな。片や他地方の伝説、片や幻とあつては出会うことすらままならんじゃろう」

「ではなぜその二匹を図鑑に？」

「そこが懺悔じやよ。あるいは君ほどの知恵者ならば、推測できるのではないかな？」

「これはまた無理難題を」

「ミュウは見つからん。見つからんが、見つかる。そういうことじやな。ホウオウの方はあくまでカモフラージュとして入れただけじや」

謎かけを残して、オーキドはコーヒーを呷つた。答えを言う気はなさそうで、呑気に流れている曲に相槌などを打つてゐる。

見つからないが、見つかる。それだけならば訳がわからなかつただろう。ただ一つ、サカキには引っ掛かっていることがあつた。オーキドの孫であるグリーンがシルフカンパニーにいたことだ。

「フジ老人は古い友人だと言いましたね」

「歳は向こうがずいぶんと上じやがな。儂が研究の道を志したのは、ナナカマドとフジという二人の影響じやつた。幾度も頼り、助けて貰つたものじや。友人であり、恩人でもある。考え方によつては師とも言えるかもしけん」

「そうですか」

スツールを回し、オーキドに向き直った。オーキドはちらりとサカキを横目に見て、それから天井を見上げた。音楽は続いている。赤を散りばめたステンドグラスの窓から射し込む光が、音に乗せられたように慎ましく乱反射している。

「ミュウツーを、ミュウにしてしまうつもりだったのですね、オーキド博士」

オーキドが喉をくつくつと鳴らしながら、お見事、と笑つた。乱反射した光が、カウンターの上に手の形の影を落としていた。骨ばつた手の甲の形が、赤に縁取られてくつきりとしている。

「それほどに、フジ老人はミュウツーの存在を気に病んでいたのですか」

「見ておられんかったよ。儂が若い時分にはあれこれと世話を焼いてくれたが、決して自分で研究に携わろうとはしなかつた。どこかに、強烈な自己否定を抱えておつた。その原因が戦時に生み出された人工ポケモンにあると知つたのはずっと後のことじや」

「そこで、ミュウツーというフジ老人の汚点を消し去ろうと考えた。ミュウにしてしまうことで」

「ミュウの本当の姿など、現代では誰にもわからんよ。文献に残っている内容と差異があつたとしてもそういう適応、進化があつたと思うのが普通じやろう。今ならば、ミュウツーはミュウとして世に出ることができる」

「それで、フジ老人の気は晴れるのでしょうか」

「晴れんじやろう。だからこれは、儂の自己満足でしかないよ」

コーヒーの湯気がか細くなっていた。口をつける。温度が下がった分、味の透明度は更に増していた。頭の中で、色々なことが浮かんでは消えた。

「グリーン君がシルフカンパニーにいたのはやはり」

「君達と同じじやよ。正確には、もつと前から君達と同じ動きをしておつた」

「もつと前？」

「ハナダ北部でハナダの洞窟のデータを取り、シオンタウンでフジに確認して貰う。そしてシルフカンパニーへと向かい、新開発のボールをなんとか譲り受けミュウツーを捕獲する。それが儂の計画じやつた。大まかにじやがな。ところが、ハナダとシオンで儂らよりも先に騒動を起こしている連中がいた。あの時は驚いたもんじや。ロケット団の狙いも、そこでなんとなく読めた」

「我々は、意図せず先回りをしていたのですね。動いていたのはレッド君とグリーン君ですか？」

「グリーンだけじやよ。こんなことは身内にしか頼めん。レッドは純粋に図鑑完成を目指して旅をしているだけじや。ロケット団を見かけたら蹴散らしておいて欲しい、とは頼んだがの」

「それでタマムシのアジトに」

「あれは儂にも想定外のことじゃった。レッドの向こう見ずな強さじゃな。あとはどうやら、タマムシの刑事が背後にいたようじゃが」

「タカギ警部。老いぼれ犬と呼ばれる、タマムシ警察の腕つこきですよ。曲者というのがぴったりな男です」

「その腕つこきには感謝せねばなるまいな。おかげで、グリーンは初めて君達に先んじて行動することができた。シルフカンパニーへたどり着き、そして」

「そこにはなにもなかつた。少なくとも、博士や我々の希望に沿うものは」

オーキドがゆっくりと頷いた。

「あるいは儂が真に一途な探究心から図鑑を作つていたのであれば、交渉の余地もあつたかもしだれん。ボールがただ一つだけであり、量産に失敗していることを知つたグリーンは交渉を諦めたよ。会長に交渉するしかなかつたが、儂の計画を知つているグリーンでは誠意を持つて相対することはできんかった」

「シルフ会長は鋭い人でしたよ。邪念があればすぐ悟られたでしょう」「じやろうな」

曲は続いている。心の芯を弛めようとするような、生暖かく柔らかい音楽だ。低音が揺蕩い、時折主張する鍵盤楽器の音が空間を丸くしている。粘土のように間延びした弦

楽器の震える音が、人を包み込もうとしてくる。優しい奏。不意にサカキは、その音楽を聴いているのが嫌になつてきた。

「老いましたね、オーキド博士」

オーキドは一瞬口を結び、それからコーヒーを飲んだ。再び見えた口元は、苦く歪んでいた。刻まれた皺が数本深く走り、自嘲の影を色濃く落としていた。

「やはりそうかのう。これでは懺悔でなく傷の舐め合いではないか、と自分でも感じて

いたところじゃ。知らずに、慰めなんぞを欲しておつたのか、儂は」

「いつからそんな計画を考えていたのですか？」

「わからん。ミュウツーの存在を知った時には、ぼんやりと頭の中にあつたという気がする。二十年というところかな」

「二十年後ならば、まだ博士は生きているでしょう」

「酷なことを言うのう、君は。戦い続けろ、と言つているようなもんじやぞ」

「そう言つてているのですよ」

立ち上がり、サカキはレジへと向かつた。店主が頭を下げ、恐縮しながらお金を受け取つた。

「旨かつたよ。ただ、もう少し明るい音楽も入れてくれると助かる」

再び頭を下げる店主に笑いかけて店を出ようとしたサカキを、オーキドが手招きし

た。表情から自嘲の色は消え去っている。好好爺というにはいささか若々しい笑みで、一瞬見えた弱さは拭い去られていた。サカキの知つていてるオーキドの顔だ。

「ジムに行つてみてくれんか。あの子が待つておる。儂の勝手な想像じやが、君もあの子を待つていたのではないかと思つておるよ」

返答しようとして、一瞬サカキは言葉に詰まつた。

待つていた。待つ理由などなにもなかつたが、確かに自分はレツドを待つていた。オーキドの言葉を聞いた瞬間に、はつきりとそれがサカキにはわかつた。あのシルフカンパニーで戦つた少年ともう一度相見えることをどこかで心待ちにしていた。

奇妙なものだ。呟いた。因縁、ということだろうか。

頷いて背を向けたところで、一つお節介を思い付いて振り向いた。

「図鑑は修正した方が良い、と思ひますよ。あの少年ならばあるいは、本当にミュウと出会うこともあるかもしぬれない」

そうなれば、ミュウツーをミュウにするなどどの道できなくなる。それにレツドがチャンピオンになれば、ミュウツーと会うこともあり得なくはない。ミュウとミュウツーが同時に記録されることも可能性としてはあるのだ。

オーキドは困つたように頷いた。

「君もそう思うか。実は、それがここしばらくの悩みの種じやつた」

嬉しい悩みじやがの。

そう笑うオーキドは、

研究者の顔をしていた。

# 最終話

ジムの入口に佇む背中は、想像していたよりもずっと小さく見えた。当たり前といえば当たり前のことだ。彼はまだ少年なのだ。

困り顔で応対していたジムトレーナーが、サカキを見つけて手を挙げた。振り向いたレッドの瞳が、茫洋とした光の中にサカキを捉えていた。サカキも真っ直ぐに見つめ返した。

シルフカンパニーで戦った時とはなにもかもが違っている。立ち姿を見ただけで、それがはつきりとわかつた。敵。そう思つた。サカキのこれまでの人生の中で、最高の敵だ。それが今サカキのみを見据え、容易に見通せぬほど深い心の奥底で闘志を滾らせている。それは、サカキ自身の内にもあるものだつた。

ジムトレーナーが表情を強張らせた。自分は今、笑みを浮かべているだろう。他人事のように考えてから、サカキは二人に近付いた。

「すいませんリーダー、今説明しているところです。この子がすぐにでもリーダーと戦いたいと言うもので」

「構わないよ。私が相手をしよう」

「え？ しかし、勝ち抜き戦は」

「オーキド博士から頼まれてね。勝ち抜き戦などしなくとも実力は保証できるそうだ」

「オーキド博士が。それはまた」

ジムトレーナーが曖昧に笑う。相対していればわかる筈だ、という言葉をサカキは飲み込んだ。力の差を皮膚感覚で感じる能力など、サカキが若い頃でも必要とされなくなっていたのだ。不必要的物を持つていないので当たり前のことだった。

レッドを見る。持ちすぎている、と思った。

戦うことについて、必要以上の力を持ちすぎている。彼の旅に図鑑完成という目的を持たせたオーキドは、あるいは少年への思い遣りからそうしたのかもしれない。ジムを巡るだけならば、機械的に勝利を重ね続けるだけの旅だつただろう。

「場所を変えよう。ついてきたまえ」

「リーダー、どちらに？」

「別館を使う。少々派手な戦いになりそうなのでね。今日はみんな本館でのトレーニングだろう？」

「確かに別館は空ですが、お手伝いは」  
「必要ない」

切り捨てるよう言つて、サカキは歩き始めた。ジムトレーナーは困惑しているようだつたが、ついてはこなかつた。レッドだけがいくらかの距離を取つて後ろを歩いている。

ポケモン図鑑の存在がレッドの旅に幅を持たせ、ロケット団とぶつかることになつた。その図鑑がミュウツーをこの世から消し去ることを目的に作られたのならば、レッドとサカキの対峙はもはや因縁とも呼べないだろう。

必然。ただただ、起ころべくして起こつたことだつたのだ。これまでのこと、そして、今から始まる戦いも。

歩くうちに建物が少なくなり、やがて絶えた。トキワ郊外のさらに外れだ。人通りはどうに絶えて、左右には野原が広がっている。ここまでくるとジム別館に用事がある人間以外は滅多に見ない。

ジムとしては小ぢんまりとした別館は、静けさの中に佇んでいた。ここ数日で書籍やトレーニング用具などは全て本館へと移し終え、建物としての機能以外はなにも残つてない。静けさは、老衰した生き物が息を潜めて最期の時を待つているかのような、どこか緊張を孕んだものだつた。

解錠し、ブレーカーを上げて照明を点ける。競技場を刺すように、幾筋もの光線が降り注いだ。建物が、不意に目を覚ました。競技場へ入つてすぐのところで、レッドが足を止める。サカキは光の中をゆっくりと横切り、ジムリーダーの定位置へ着いて振り返つた。

「初めまして、と言つても白々しいだけか。私がサカキだ。トキワジムジムリーダーであり、ロケット団の総帥でもある」

「シルフカンパニーで会いました」

「そして、戦つたな。君はまだ未熟だった。隙を隠しきれていなかつた」

「もう、敗けません。敗けないと思えるぐらい、鍛えました」

「口先だけ、という訳ではないな。見違えたよ。この短期間でよく研ぎ澄ましたものだ」

レッドが腰に手をやり、モンスター・ボールを握つた。

「リザードンだつたな、君の相棒は」

「はい」

「私はニドキングだ。子供の時分からの付き合いで、語ろうと思えばいくらでも語れるぐらいには同じ時を過ごした。しかしまあ、今言葉は必要ないだろう」

レッドとリザードンはまだそれほどの時間を共にしてはいないだろう。だからサカキが有利、ということはない。強さがそれほど単純なものではないことぐらい、嫌とい

うほど知つてゐる。

サカキもモンスター ボールを手に取り、収縮機能を解除した。磨きあげたモンスター ボールが照明に鈍く照り返した。

「一対一だ」

「はい」

同時に、モンスター ボールを放つた。ニドキングが地を踏みしめるのとリザードンが宙へ舞い上がるのも、また同時だつた。

リザードンの動きもシルフカンパニーの頃とは別物だつた。真下に潜ろうとしたニドキングを容易く置き去りにし、天井付近まで飛び上がる。炎。『かえんほうしや』が二発、間髪入れずに飛んできた。

「風だ、ニドキング」

軽く躰したニドキングが、サカキの声でもう一段後ろへ跳んだ。『エアスラッシュ』。炎の裏に潜んでいた風が地を切り裂く。巨大な斧でも叩きつけられたかのように、地面がぱっくりと口を開けた。

『ヘドロウエーブ』

応ずるような雄叫びとともに、桔梗色の波動が放たれる。サカキはリザードンの動きだけを見ていた。翼を小刻みに動かすと、僅かな上昇と下降だけで波動を躰している。

横の動きはなく、天井すれすれに競技場の中央を維持していた。

何を警戒しているのか、見当はついた。シルフカンパニーで見せた、壁を崩しての疑似的な『いわなだれ』だろう。確かにリザードンにとっては致命打足りえる攻撃だ。炎が飛んでくる。ニドキングが躲し、ヘドロを返した。それはやはり、最小限の上下移動だけで避けられた。とにかく壁に近付くのを避けるつもりらしい。

「経験不足か。力はあるが、スケールがまだ足りんな」

咳いて、サカキは競技場を見回した。

古くはジム本館として使われていた建物だ。その頃からトキワは地面タイプのジムで、地下には衝撃を緩和する緩衝用の機構が整備されている。地面技を打ち込んだとしても建物が崩れる心配はなかつた。

あくまでも、過去のジムリーダー基準での話だ。

「ニドキング、『じしん』だ」

指示を受けたニドキングが尻尾を高々と持ち上げ、地面へと力強く振り下ろした。

凄まじい音とともにニドキングを中心とした円形が陥没し、僅かに遅れて衝撃が建物全体を襲つた。窓ガラスが音を立てて割れ、陥没した地面から八方に地が裂けていつた。レッドが体勢を崩し、手を付いた。サカキは競技場へ踏み入ると、ニドキングの背へ飛び乗り棘に手足を掛けた。

「外だ、ニドキング。崩れるぞ」「リザードン、こっちに」

地を走る亀裂が壁に達し、滝でも遡上するかのように登り始める。まだ激しく揺れていて、レッドは立ち上がりれないようだつた。リザードンが急降下してくるのを横目に、ニドキングが壁をぶち抜いて外へ飛び出した。ほとんど同時に亀裂が天井へ達し、芯を失つたように別館が崩れ始めた。



「東へ移動しよう。もう少し開けた場所がいい」

駆け始めたニドキングの背で、サカキは後ろを窺つた。砂煙がもうもうと立ち込めていて別館の姿ははつきり見えない。煙の向こうからは瓦礫がずれ落ちていく音が微かに聞こえるだけだ。

「多少のダメージになつていればいいがな」

崩落から逃れる時間はなかつたはずだ。レッドとリザードンは建物の下敷きだろう。

それでもサカキは、勝負が決したとは思つていなかつた。そんな普通の考え方を通じる相手ではない。

目を凝らした。風のある日で、砂煙は北東へ流れるように薄まつていく。それが晴れる頃、別の煙が瓦礫の下から漂つてきた。黒煙だ。最初一筋だつた煙は、やがて二つ三つと数を増やしていつた。

黒煙が十を超えた時、突然瓦礫の山が歪んだ。それが陽炎だと気付いた瞬間、別館全てを飲み込むほどの火柱が空へ逆り、周囲の瓦礫を悉く焼き払つた。いくらか遅れて光と熱波がサカキの頬を撫でる。雲へ届かんとする火柱はやがて渦を巻き、周囲の空気を引き込みながら猛つた。その中を一人と一匹の影が昇つっていくのが、サカキからも見えた。

渦が真ん中から霧散する。レッドとリザードンは、真つ直ぐにサカキを見つめていた。痛手を負つてているような素振りはない。

「勝負はここからか」

ニドキングが駆ける。リザードンが姿勢を前傾にし、追走してきた。二百メートルはあつた距離がみるみる縮まり、半分ほどになる。攻撃の気配がサカキの肌を打つた。

リザードンが空へと火を吹いている。それはぐるりと円を描くと上空から空気を引き込み、螺旋を作りながら地上へと降りてきた。一つではない。別館を飲み込んだもの

と同じ規模の渦が三つ、野原に点在する岩や木々を消し炭にしながら迫ってきた。

「無数の火の粉ではなく『かえんほうしや』で渦を作ったのか。巻き込まれればただでは済まんな」

速度は向こうの方が速い。ニドキングが進路を右に取ると、三つの渦も連動しながら追ってきた。

「制御を手放してはいないのか。面倒だな。ニドキング、消すぞ」

ニドキングは反転すると、先頭の渦へ向かつて一直線に駆け出した。その躰を砂塵のベールが、サカキごと覆っていく。

近くで見上げる渦は呆れるほどに巨大だつた。上は空まで届き、横はジムを丸呑みにできるほど広い。小山のようなニドキングがちっぽけに見えるほどだ。それでも、逡巡はなかつた。

### 『ドリルライナー』

何かに触れた。そう思つた次の瞬間には衝撃が空間を走り抜けた。鍔迫り合い。一息で押しきつたニドキングが、サカキが促すままに抵抗の一番強い所へ迷わず突つ込んでいく。抜けていた。渦。二つ目三つ目も同じく突き破る。真芯を破られた渦は行き場を失くしたように千切れていつた。

「さあ、次はどうする」

空に浮かぶレツドを見上げながら、サカキは呟いた。

遠距離で撃ち合っている分にはいくらでも対処できそ�だつた。『ほのおのうず』は搔き消し、『だいもんじ』ならば躱せばいいのだ。消耗はリザードンの方が大きいだろう。

近付いてくるか。あるいは、まだ技を持つてゐるのか。

リザードンが口を開けた。炎か。そう思つたが、なにも出てこなかつた。それどころか、周囲の空気を凄まじい勢いで吸い込んでゐる。吸気は長く、首から胴体にかけて一回り膨らんで見えた。

サカキはニドキングの背から飛び降りた。あれはどう見ても尋常な技ではない。

呼吸を止めたリザードンがその口を真下へ向けた。滝のような炎が、そこから吐き出されてきた。それは真っ直ぐに地へぶつかると跳ね上がり、後続の炎に押されて再び地面へと叩きつけられる。縦の渦。先程までの渦とは全くの別物だ。『ほのおのうず』のように周囲を引き込むのではなく、むしろ純粹なエネルギーで押し潰すような渦だった。

炎の津波。あるいは、炎で出来た巨大なローラー。そうとしか形容できないものが地を埋め尽くすように広がり、サカキとニドキングを踏み潰すと迫つてくる。

初めて見る技だが、思い当たるものはあつた。

「ナナシマで編み出されたという炎の究極技か。お伽噺だとばかり思っていたがな」

ニドキングがサカキを見た。頷く。この状況で思い付く技は一つしかない。

ニドキングが足を持ち上げ、地面を踏み抜いた。丹田に響く振動と共に無秩序な亀裂がニドキングを中心に広がっていく。その一つ一つをサカキは素早く見回した。

道だつた。衝撃を通して、絞り、加速させるための道。熟練のトレーナーでも見誤ると言われたそれを、サカキははつきりと見分けることができた。

見えた。ニドキングが両手を握り合わせ、高々と振り上げた。

『じわれ』

サカキが示した亀裂へ、ニドキングが全霊の一撃を叩き込む。地中から呻くような轟音が響き、次いで衝撃の波が地を裂きながら進つた。炎の津波へと真っ直ぐに向かつていく。咄嗟にサカキはニドキングの背後へ転がり込んだ。

世界が弾け飛んだ。そうとしか思えないような振動と音が、二つの力がぶつかつた地点から爆発的に拡散した。空気が暴力の塊となつて、近くの木を根元から薙ぎ倒していつた。目を閉じ、肚に力を込めた。有り余つたエネルギーの飛沫が過ぎていくのに、短くない時間が必要だった。唇を噛み、頭を低くしながらそれに耐えた。立ち上がる。視界に、ホエルオーが数匹は楽に入れそうな巨大なクレーターガ見えた。その中では、行き場を失つた炎がぶつかり合いながら地を焦がしている。サカキは

苦笑した。

「大した威力だ。『じわれ』と真っ向から打ち消し合うとはな。これ以上撃ち合えば地獄絵図だが」

空を見上げる。リザードンがその翼で薄い雲を引きながら、一気に距離を詰めてきた。レッドの判断は、どこまでも果斷だつた。

『どくどく』を使うか。一瞬頭を過つた案は、レッドの表情を見てすぐに捨てた。一切の隙がない。そして恐らくは、自分も隙を見せてはいないだろう。奇策を弄する余地はこの戦いにはない。純粹な力の勝負だけだつた。

ニドキングの背へ飛び乗つた。リザードン。僅かな減速もないままに馳せ違つた。ニドキングの肩口に一撃を貰つていた。代わりに、相手の脇腹を突いている。リザードンが旋回した。口が開いている。炎の下を潜り抜けようとしたが、読まれていた。炎を吐かずリザードンは地に足を付け、『エアスラッシュ』を飛ばしてきた。避けようがなかつた。

三ヶ所、まともに喰らつた。被弾しながら突き進んだニドキングを、リザードンが受け流そうとする。今度は、サカキが先読みした。上へのフェイントから右に逃れようとしたリザードンを完璧に捉えた。弾き飛ばす。打ち上げたが、追撃は躊躇された。振り向いた。サカキは一度息を吐き、大きく吸つた。高速の近接戦では呼吸のままな

らない状況も多い。リザードンも一度上空へ逃れ、息を入れていて。

ほとんど垂直にリザードンが降下してきた。引き付けて躲すのがセオリードが、レッドが地上に激突するイメージは湧かなかつた。

どこでブレークを掛けるのか。リザードンは翼を折り畳んだままだ。呼吸を数えた。一つ、二つ。

止まる気がないのだ、と気付いた時には激突していた。ニドキングの足先が地面へめり込んだ。サカキは背から飛び降りた。足を取られた時、トレーナーは邪魔でしかなりい。

サカキの動きをわかつていたかのようにニドキングが躰を捻つた。尾。リザードンの胴体をしたたかに弾いた。しかし足が抜けていない。

『かえんほうしや』

『だいちのちから』

どちらも当たった。ニドキングが右へ体勢を崩しそうになる。リザードンが空中で立て直し、尻尾の炎を猛らせて全身に纏いながら向かってきた。『フレアードライブ』。

サカキはニドキングの背に取りついて、重心を左へ寄せた。ニドキングが雄叫びをあげながら、尾まで使って地を蹴つた。砂塵が巻き起こつた。『ドリルライナー』。叫んだ。互いの距離が縮まつていく。

リザードンの背にレッドが見えた。レッドも、サカキを見ていた。吸い込まれていく。そう思つた。



低い唸り声をあげながらリザードンがサカキを威嚇した。その横ではレッドが倒れている。気を失っているようだ。あれほどの強者も、目を閉じると幼い印象が先立つた。

近付いた。リザードンが唸りを強くした。動きは鈍い。ほとんど限界に近いのだろう。しかし、倒れる素振りはない。

サカキはちらりと後ろを見た。ニドキング。俯せに突つ伏した姿が、やがてゆっくりと収縮し始めた。瀕死状態なのは明らかだつた。元気の欠片を与え、モンスター・ボールへと戻す。状態が落ち着いたら傷薬を使えばいい。

レッドの方へ足を進める。リザードンが首を持ち上げた。

「妙な心配をするな。お前も主人の容態は気になるだろう」

頭のすぐ傍で膝を折り、瞳孔を確かめた。それから関節。どこも異常はない。一時的に気を失っているだけだろう。所見をそのまま伝えると、リザードンは小さく頷いて地に伏せ、躰を横たえた。疲労の色が濃い。本当は目を開けているのすら億劫な筈だ。

上着のポケットからバッジケースが覗いていた。引き抜き、空いていた窪みにグリーンバッジを嵌め込んだ。ぱちん、という小気味のいい音が鳴った。その音で気がついたのか、レッドがゆっくりと目を開いた。

「意識ははつきりしているな。手足の指をゆっくり動かしてみなさい。頭はそのままで」

レッドは素直に応じた。何度も手を握ったり開いたりして、それから足首を回した。  
「俺は」

「衝突の衝撃で気を失つたようだな。リザードンに感謝すると良い。君を落とすまいと、必死にバランスを取りながら地上まで降りてきた」

「リザードンが」

どこかおずおずとしながら顔を寄せてきリザードンへ、レッドが手を伸ばし頭を撫でた。戦闘中とはまるで別の存在であるかのように、リザードンの表情が柔らかく綻んだ。

少し待つてから、サカキはバッジケースを差し出した。レッドが向き直り、真っ直ぐ

にサカキを見上げた。

「見事だった。レッド、リザードン。君達の勝ちだ」

受け取ったレッドが二、三度バッジを触り、ケースごと無造作にポケットへ押し込んだ。

対等な勝負で敗れたのはいつ以来だろうか。ふと、考えた。実感が湧いてこなかつたのだ。以前負けた時がどうだったのかも、あまり思い出せない。実感などなかつた、という気がする。

レッドがリザードンをボールへ戻した。横たわっていたからか、レッドのモンスター ボールは酷く汚れてくすんでいた。サカキはグラスクリオスを取り出し、レッドへ渡した。

「君に譲ろう。ボールを磨きたいと思つた時に使えばいい。使い古しで申し訳ないが、品質は保証する」

ボールへグラスクリオスが当てられる。くすんだ色が拭い去られ、紅白が鮮やかに照り輝いた。レッドが銛いのない驚きを、それから笑顔を浮かべた。どこまでも純真な姿だつた。

「君は」

無意識に口が開いた。レッドがボールを仕舞い、グラスクリオスをポケットへ入れた。

「君は何にでも成れるだろうな。それだけの力があればチャンピオンにも四天王にも、勿論ジムリーダーにも成れる」

何を言おうとしているのだ。サカキは自分自身に戸惑つた。考えがある訳ではない。言葉が勝手に口を衝いていた。

「競技者だけではない。強さはそれだけでカリスマ性もあるからだ。君にその気があればタレントにだって成れるだろう。政治の世界に進出もできるかもしれない。自警団にも、軍人にも、悪の組織の首領にだって成れる。君の力はそれだけの選択を可能にする筈だ」

言葉が途切れた。レッドの瞳の中に、サカキが映っている。嫌というほどに、それがよく見えた。

「ポケモントレーナーでいてくれないか。ただの、ポケモントレーナーで」

何を言つているのだ。また、そう思つた。この少年は無限の可能性を秘めている。名譽や榮光に満ちた未来を間違いなく掴み取れるだろう。それを全て台無しにしてしまいかねないことを、サカキは言つていた。

訂正するべきだ。それがわかっていても、言葉は喉につつかえたように出てこなかつた。

レッドが困惑していた。ただそれは、当たり前のことを殊更言わされたことへの困惑に

見えた。それから、控え目に頷いた。

不意に、サカキの胸の内を何かが満たした。願いが聞き入れられた歓喜などとはまるで違う。這いつくばりたくなるような、胸を搔き篠りくなるような、言葉にならない声を口の端から漏らしたくなるような、そんな衝動だ。止めどなく湧き上がるそれら全てを、サカキは目蓋の裏に呑み込んだ。

敗北か。ニドキングの入ったボールを軽く撫でる。自分の指先に郷愁が籠つていて気がした。

「礼は言わないでおこう。私を捕まえるかね？」

「いえ。警察じやないですから」

「そうか。そうだな。ならば、私は行くとしよう

「また、戦えますか？」

「いや。残念だが、もう会うことはないだろう。良い勝負だつた。今日の戦いを私は生涯忘れまい。さらばだ、ポケモントレーナーのレッド」

歩きだす。風のある日だつた。レッドの横を通り過ぎてから、サカキは空に目をやつた。戦いの余波で雲は散り、青々とした層が幾重にも広がつていた。空の果てまで、見透けてしまいそうな青だつた。何もない空。

「さよなら」

声が追つてきた。サカキは足を止めず、振り向きもしなかつた。

「さようなら、ポケモントレーナーのサカキさん」

应えずに、サカキはただ空を見ながら歩いた。どこまで行つても、何もない空だつた。  
それでも、歩き続ければやがて散つていった雲が見えてくるだろう。  
雲が見えてきたら、ニドキングの手当てをしよう。そう思つた。  
それまでは、ただ歩いていたかつた。短くとも、旅のように。

## 蛇足 二時間後

どこへ行こう、と考えている訳ではなかつた。

逃げるならジョウトだろう。ただ、老いぼれ犬がそれを読んでいない筈はない。しばらくはカントーに潜伏して、期を見てジョウトへ向かうべきだ。

そんなことは大して考えずとも浮かんできた。だからどの町に潜伏するかに意識を回すべきだろうが、サカキはただ足の向くままに歩いてきた。

空はもうとつくに雲が戻り、日差しを和らげている。ニドキングの手当ても既に終えた。疲労は癒えていないだろうが、野生ポケモンを蹴散らすぐらいならば造作もないだろう。

「強い相手だつたなあ、ニドキング」

時折、モンスター・ボール越しに声をかける。ニドキングも、対等な条件での敗北を味わつたのは何年も前のことなのだ。思うところはあるだろう。

人と擦れ違つた。サカキの顔を見て、その虫取り少年は大きな声で挨拶をした。トキワの子供だ。自分がいつの間にか街道へ戻ってきたことに、サカキは気付いた。

「しかしあつと人の姿が見え始めた。サカキへ声をかけてくる人間もいる。大抵トキワの住人で、一定の尊重を見せつつも口調は親しげだつた。

「まさか。この先はトキワの森でしたね」  
「まさか、何も考えずに？」

「たまにはね。近頃、デスクワークで出不精になつてしまつて」

「なるほど、それで散歩ですか」

「せつかくだし、森まで行つてみるかな」

「良いと思いますよ。森は今、ちょうど過ごしやすい季節で」

そう言つて笑う男に別れを告げ、歩みを進めた。どうせどこへ行こうとは決めてなかつたのだ。トキワの森へ向かつて、気が向ければそのままニビまで行つてもいい。その先のことは、ニビに着いてから考えることもできる。

太陽はそろそろ傾いてきたところだつた。風は相変わらず吹いていて、日が落ちれば多少肌寒いかもしれない。構いはしなかつた。寒ければ、身を震わせればいいのだ。トキワの森に入った。日差しは疎らになり、木々が戦いでいた。人の気配はない。森

の息遣いだけが静かに足元を流れていた。

どこかに身を潜め、いつかジョウトに逃れたとして、そこで何をするのだろうか。

考えて浮かんでくることでもない、という気はした。逃亡生活でも強さは物を言うだろう。旅の経験はあり、人里離れた場所で寝起きすることにも抵抗はない。だから野垂れ死ぬことはないだろうが、新しいことを一から始めることもできはしないだろう。

無為の、ただ一人の人間としての人生。そんなことを束の間思い浮かべて、それからサカキは失笑した。我ながら甘美な妄想をしたものだ。

囲まれていた。当たり前のことだつた。自分はロケット団の首領なのだ。安穩な逃亡生活など、許される筈もない。気配は次々と湧き出してきた。百人は優に超えている。正面から、よく見知った男が歩いてきた。

「やあ、マチス」

「まつたく、堂々と歩いてきやがつて。あんたらしいぜ、サカキ」

「よく包囲できたな。自分で言うのもなんだが、私は気配には鋭い方だ」

「知ってるよ。民間人に擬態したうえで、半径一キロ以上の距離からじわじわ詰めた。いくらあんたでも気付くのは遅れるだろうよ」

「無関係な人間を巻き込んでいいないだろうな」

「極秘作戦だよ。國にも極秘のな。あんたはただ行方不明になる。目撃者なんか出さないさ」

「そうか。安心したよ」

マチスが横を向いた。

「あんたが黒幕だつたとはな。知つてりや、こんな面倒な仕事は受けなかつたんだが」「私はむしろ、君が居てくれて嬉しいがね。戦い甲斐がある」

「馬鹿を言うなよ。まともに勝負するつもりなんてこつちにやない。ただなぶり殺しにするだけさ。ニドキングは平氣でも、人間まで地面タイプつてことはないからな」

「電気タイプの精鋭か。同盟軍の特殊部隊だな」

マチスの背後から、軍服を着た男達が姿を現した。サカキの後ろにも姿を見せている。サカキの感知できる範囲にいるのは、本当に軍人だけのようだ。

政府がいくら弱腰とはいえ、特殊部隊が百人規模で作戦行動を取ることを許可はしないだろう。

「同盟軍側の独断か。世間に知られれば大問題になるぞ」

「無駄な心配さ。十分後にはいつも通りのトキワの森に戻つて。ちよつと荒れてるがね」

「本氣で言つているようだな」

「ニドキング一匹でいつまでもあんたを守つてられる訳がねえだろう」

「鈍っているんじゃないか、マチス。君らしくない失態だぞ」

「なにを」

言い掛けたマチスが口をつぐんだ。地が揺れていた。

「まさか」

「いずれ、誰かが私を狙つてくることはわかつていたんだ。まさか、何の備えもないと思つたか？」

「總員撃て、やれつ」

電撃。ニドキングがボールから飛び出し、瞬時に五つを打ち消した。抜けてきた二つをサカキは自分で躱した。後ろからも四つ。ニドキングが反転して消し、サカキも地面を横へと飛んだ。外れた電撃が木に直撃し、不愉快な音とともに幹を叩き折つた。

嫌な直感に導かれて、サカキはもう一つ横へ飛んだ。脇腹を衝撃が抉つていった。『ソニックブーム』。マチスが電撃の影を縫うように撃つてきたものだ。血が噴き出してきた。すぐに死ぬようなものではないが、浅くもない。サカキは傷口に手を当てた。

マチスのレアコイルが、サカキに狙いを定めている。焦りはなかつた。既に、下まで来ている。

レアコイルが吹き飛んだ。その下からニドクインが顔を覗かせ、もう一度地面に潜つ

てサカキの元までやつてきた。

サカキを囮るように次々土が盛り上がっていく。そこからポケモン達が、一斉に飛び出した。

ニドクイン。ゴローニャ。ダグトリオ。ガラガラ。サイドン。

そのどれもが、サカキが信頼を置く手持ち達だ。

「フルパーティーだと」

「トキワ周辺に潜伏させていた。甘かつたな、マチス。私を消すのなら、海の上にでも誘い出すべきだった」

「あのガキとの勝負は手を抜いていたのか」

「全力だつたさ。君ならわかる筈だ」

ニドクインが心配そうにサカキの側へやつてきた。脇腹からは血が流れ続いている。  
特殊部隊を殲滅するのが先か、それともサカキの力が尽きるのが先か。そういう勝負になりそしうだつた。

「ああクソ、やつぱり引き受けるんじやなかつた」

マチスは毒づくと、後ろの軍人達へ顔を向けた。

「人間だと思うな。災害か何かを相手取るつもりでやれ」

「はっ」

サカキは周囲を見回した。前後左右、軍人達に囲まれている。全員が殺氣だつていて、僅かな隙にも電撃を撃ち込もうという構えだ。そして、この間にもその数をどんどん増やしていた。

全てを諦めた途端に、素晴らしい戦いが二つ続けてサカキを襲つてきた。人生は儘ならないものだ。こういう巡り合わせが、これからもあるのだろうか。あるいはこれが、最後の機会なのか。

ニドキングがちらりとサカキを見、脇腹から流れる血へ目をやつた。らしくなく、心配をしているようだ。

「いつだつたか、お互いの死に目には立ち会わないと約束しただろ。お前の目の前では、俺は死なんよ」

サカキは微笑んだ。あれは、シオンタウンへ向かう途中だつたか。あの時も旅をしている気分になつていたものだ。

呆れたように前を向いたニドキングが、一切の躊躇なく地面を踏み抜いた。地面が抉られ、木々が倒れた。亀裂がニドキングを中心に縦横に走つていく。脇腹の痛みを無視しながら、サカキはその亀裂の先へ目をやつた。

〔総員待避〕

マチスが叫んでいる。ニドキングが両手を握り合させ、高々と振り上げた。周囲から

放たれた電撃を、ニドクイン達が軽々と搔き消している。

勝敗は読めない。それこそが、戦いだった。サカキはニドキングへ、ある一点を指示した。ニドキングが両手を振り下ろす。衝撃とともに地が裂けていった。

自分以外頼るものがない、無重力の世界。生きていた。サカキは笑いながら、ニドキングの背へ飛び乗つた。

# 蛇足 二週間後

暇だつた。それはタカギだけで、周りの人間は目の回るような忙しさの中にいた。

ロケット団に関する捜査は独断専行を続けてきたと言つてもいい。課長がロケット団の案件からタカギを外そと考へたのは当然だろう。シルフカンパニーから逃走中のロケット団と一戦交え取り逃がしたのが決定打となり、口頭ではなく正式な指令として外されることが決まつた。その矢先に、あの事件だつた。

同僚達の捜査状況を覗き込みながら、コーヒーを淹れた。恨みがましい視線がいくつか飛んできたが気にしなかつた。

世間は大混乱の中にいた。その発端がタマムシに潜んでいたロケット団である以上、この騒乱は仕方のないことではあつた。こうやつてコーヒーを啜つていられるのは、多少の幸運でもある。指令を撤回すべき課長は、自己保身のために走り回つていた。

「タカギ警部、お電話です」

電話番が心底迷惑そうな顔で告げてきた。もう十二時間は電話対応を続けている。

マスコミから善意の個人まで、タマムシ署の電話は休む間もなく鳴り続けていた。

「相手は?」

「さあ。店長と言えばわかるとか」

「回してくれ」

電話番がいくつか操作をして、それから合図を送ってきた。タカギは受話器を取つた。

「お忙しいところ申し訳ありません。ゲームコーナーの者ですが」

「店長だろう。いつかのコインでも回収する気になつたかね」

「ああ、タカギ警部。ご無沙汰をしておりました。お時間よろしいでしょうか」

「忙しい。手短してくれ」

同僚達から視線が飛んでくる。見ていたかのように、店長が低く笑つた。

「タマムシ警察は大忙しでしそうね。トキワ戦争について、世間の誰もが知りたがつています」

『トキワの森大規模テロ事件』だよ。間違えてもらつては困る」

「そういう名前になつたんですか。ワイドショーンなんかでは、トキワ戦争としか呼ばれていませんが」

同盟軍の特殊部隊二百人、ポケモン総数四百匹超。戦争と言われても仕方なかつた。

「これだけの人員が市井の人々の目を盗んで軍事行動を行つていた事実は、世間に大きな衝撃を与えた。それでも、普段の同盟軍ならば功績を盾に批判を押し切れただろう。問題は、負けたことだつた。瀕死に追い込まれたのはもちろん、モンスター・ボールの開閉スイッチまで残らず破壊され、につちもさつちもいかずにトキワシティまで撤退してきただ。トキワの住人達の驚きと恐怖は想像するまでもない。大批判が巻き起こつた。

「映像を見ましたが、トキワの森は酷い有り様のようですね。トキワシティの人間がいきり立つのもわかります」

「壊滅状態だよ。再生計画は十年単位だ」

「抗議運動なんかは益々激しくなつてているようですよ。何より本国の方でも、海外派兵について論争になつていてるようで」

「次回選挙の争点らしいな。同盟軍は苦しい立場だろう。場合によつては大幅縮小もあり得るというが」

「創設以来の危機でしょうね」

「それで、用件はなんだね？世間話ならば切るぞ」

「以前、話していた件を実行しようかと思いましてね」

「以前の件？」

「タカギ警部から手錠を頂戴するかもという話ですよ」

言われて、タカギはスロットを打つた時のことを思い出した。店長は確かに、そういう言い方で自首を仄めかしていた。

犯罪組織について捜査していると度々、こういう話が持ちかけられてくる。大抵は落ち目の組織を見限つた構成員による密告混じりの自首だ。

口ケツト団だろう、と睨んでいた男ではあつた。しかしながら、今頃自首をする気になつたのか。情報の売り時を待つていたというならあまりに遅かつた。タカギの見る限り、口ケツト団は逃散してしまつていて。

「何を考えている」

「良心の呵責に耐えきれなくなつた、ということにしておきましようか」

「別に理由があるということか。しかし」

そこまで言つて、タカギは一つの可能性に思い至つた。今売れる情報。それは口ケツト団ではなく、同盟軍の情報ではないのか。

「君は、どういう地位にいた?」

「ナンバーツーと言つて良い位置だつたと思いますよ。組織にとつて重要な仕事をいくつか任せて貰つていました」

「君達の資金源については」

「まさしく、私の管轄でした。タカギ警部はボスではなく、私を追うべきでしたよ」

店長がちょっと笑つた。タカギは一度腰を浮かせ、椅子に深々と座り直した。長くなる気がした。

「資金は、同盟軍を通したマネーロンダリングで賄つていたのだな？」

「ご明察です。参謀部のお歴々の力を借りしましてね。私の自首で彼らが苦境に立たされるとと思うと心苦しいばかりですよ」

「証明はできるのかね？」

「書類がありますよ、先方のサイン付きで」

「書類？ そんなもの、よく連中が応じたな」

「この国のマフィアは形式に拘る、とお願いしましてね。契約さえ終わればすぐに燃やす約束で」

「燃やしたのかね？」

「目の前で火に投げ込みましたよ。ところで私のキユウコンは、燃やさないまま炎で紙を包めるほど器用でしてね」

「誰の目にも明らかな形で書いてあるんだな？」

「それはもう。なにせ、燃やす筈のものでしたから」

タカギは背凭れに軀を預け、一つ息を吐いた。

苦境に立っている同盟軍を辛うじて支えているのは、ロケット団という悪と戦つたことだつた。正義という大義名分が越権行動を正当化する最後の砦といつてい。しかしこの資金洗浄が表沙汰になれば、正義の戦いは不祥事の隠蔽へと成り下がる。

以前ならば適当な人間を本国に左遷する程度で済んだだろう。しかし今、トキワの森への甚大な被害とともに敗北を喫した同盟軍には、批判を封じ主張を通すだけの権威は残つていない。

失墜は免れないだろう。あるいは、事実上の撤退も考えられる。

「この戦い、君達の勝ちか」

「それは勘違いですよ。ボスは同盟軍を潰したい訳ではありませんでしたから。これはあくまで、私の八つ当たりです」

「同盟軍を狙つていたんじゃないのか?」

「誰もが戦う意志と力を持たざるを得ない世界。ボスは無重力の世界と言つてましたがね。そんな世界で力の限り戦いたかつただけですよ、あの人は。同盟軍はそういった世界でバランスを取るための都合の良い重りといったところです」

「無重力の世界を目指すか。なるほど、ロケットという訳だな」

「団の名前は私が言い出したものですがね。ボスも案外気に入つてゐるようでしたが、「君達の夢は、同盟軍を倒すことではなかつたか。協力を得られないのも道理だ」

「ボスの夢は、ですよ。我々の夢はボスそのものでしたから。ボスが同盟軍打倒に拘ればそれが夢ということになつたでしょ？」

「彼が夢？」

「自分の全てを賭けても良い。そう思わせてくれる存在でした」

一瞬、受話器の向こうで気配が遠ざかつた。僅かな沈黙。タカギは何も言わなかつた。自分の全てを賭けられる存在。確かに、それは紛れもなく夢だ。

「ボスはどうなりましたか？」

戻ってきた店長の声は常と変わりなかつた。

「不明だ。捜査範囲を拡げているが足跡すら掴めんな。ただ」

「ただ？」

「現場には多量の血痕が残つていたが、そのほとんどが彼のものだと判明した。誰が見ても致死量だそうだ」

「そうですか」

「死んだとは思つていらないようだな」

「戦つて死ぬのは私のような半端者の特権ですよ。本当に強い人間は死ねません。ボスはそういう末路を羨望しているでしようが」

「どうか、彼は死ねんか」

言われると、タカギにもそんな気がしてきた。あのニドキングと相対した記憶が甦る。彼らが敗れて死ぬなどあり得ないことのような気がする。なにより、死ねないというのがどこかサカキらしかつた。

「今から向かう。旨い料理を用意してくれ」

「食事ですか？」

「懲役は長くなるぞ。どうせ金はあるんだろう？今のうちにたらふく食べておく方が利口だ」

「最後の晩餐ですか。悪くないです」

「二人前だ。忘れるなよ」

「やれやれ。とんだ刑事もいたもんだ」

店長の苦笑いを聞きながら、受話器を置いた。周りから不審げな視線が突き刺さつてくる。素知らぬ顔をしながら、タカギは上着を手に取り立ち上がつた。

## 蛇足 一年後

「天気予報、どうなつてます?」

若い刑事がこちらを見ながら訊ねてきた。三ヶ月前に配属されたばかりの新人で、今はタカギのパートナーということになつていて。その前は田舎で派出所勤めをしていたようだ。

タカギは日付が見えやすいように新聞を掲げてやつた。

「一年前の新聞じやないですか。なんで今更」

「いつの新聞を読もうと私の勝手だろう」

「そりやそうですけど。ああ、あれか。トキワ戦争の頃ですね」

反応せずに新聞を読み進める。もう今では、例の事件はトキワ戦争としか呼ばれなくなつた。一々訂正するのも馬鹿らしくなつてしまつた。

「俺、まだ地元の派出所でしたよ」

「出身はグレンだつたな」

「島でも人の少ない地域で、話題なんてほとんどないですから。トキワ戦争だけで一ヶ月ぐらいは喋つてたな。誰が悪いとか悪くないとか」

「全員、悪党だよ」

「そうですよね」

横で机に向かっていた刑事がちらりとタカギを見て、すぐに逸らした。当時からいる人間はみなタカギと口ケツト団が因縁浅からぬことを知っている。

知らないのは、呑気に記事を眺めている新人ぐらいだ。

「ニュースを見た時は驚いたし、がっくりきたな。事件のちょっと前にサカキのインタビュー記事を読んだんですよ」

「ほう。何が書いてあつた?」

「今後の目標で、カントーのトレーナーを世界最強にしたい、だつたかな。それが実は同盟軍と繋がつて金儲けでしょう?よくあんな殊勝なこと言えたなつて思いましたよ」

「カントーのトレーナーを最強にか」

「大法螺吹きですよね」

同意を求める視線に、タカギはただ肩を竦めた。

自身が全力で戦いたいという大目標を抜きにすれば、記事の内容も嘘ではなかつた。

ロケット団と同盟軍が並び立つことで、安穩の許されない世界を作り人々に強さを求

めさせる。サカキが考えていたというその無重力の世界は今、全く逆の形で完成に近付いていた。ロケット団と同盟軍は、人々に危機感だけを植え付けて共に消えてしまったのだ。

タカギは次の新聞を手に取った。

「ああ、こんなことあつたあつた。同盟軍、事実上の撤退。号外出ましたよね」「グレンでか?」

「いや、どこか都会の方で。ニュースで号外を配つてゐる映像見たんですよ」

自分で言つていて馬鹿らしくなつたのか、新人がちよつと笑つた。こういう素朴なところは、派出所で愛されていただろう。

「クチバ港から次々船が出ていくのが、なんだかとんでもないことが起きてるつて感じしましたよ」

新人の感想は、当時多くの人間が抱いたものだつた。その次には不安が湧いたろう。同盟軍はもうおらず、ロケット団のような組織がいつ現れるかわかつたものではない。警察はロケット団関係の事件において、まつたく頼りにならない姿を晒し続けていただけだ。

人々が目を向けたのが、自警団だつた。

「このちよつと後でしたよね、自警団の大改造が始まつたの」

まず人員を増やし、次に訓練の本格化が行われた。試合形式に飽きていたキクコと地元への帰郷を望んでいたカンナが四天王を辞し、それぞれ本土とナナシマで特別講師となつた。シルフカンパニーが会長の鶴の一声で自警団への支援を始め、物資や設備の拡充を図つた。これらのことがほんの一、二週間の間に連続したのだ。

入隊していない者でも、講習や訓練などは自由に参加できる。カントーのトレーナー達は急速に力を付けつつあつた。

サカキがどこまでを計算に入れていたのか、今となつてはわかりようもない。思慮深さを持ちながらも、バトルについてはどこか子供のように無邪気なところもあつただ。戦うということについて、純粹ですらあつた。

ヤマブキの外れで彼らの前に立ちはだかつたことを、タカギは時々思い出した。一蹴されたが、彼らなら駆け引きにすら持ち込まないこともできただろう。それでも、真っ向から勝負してきて、タカギの狙いを綺麗に外していく。

サカキは、自身の純粹さを自覚していたのだろうか、とふと思つた。初めてサカキと会つた時、快活に振る舞いながら、どこか影を背負つていた。その影が一番強く感じられたのが、自身をポケモントレーナーだと称した時だつた。言葉の端々に、自嘲が滲み出していた。

誰かが、彼をポケモントレーナーだと認めてやるべきだつたのではないか。考へると

何かに切なくなつて、タカギは煙草に手を伸ばした。新人が躰を逸らす。嫌煙家なのだ。ちょっと迷つて、タカギは煙草の箱を置いた。

「いいですよ、喫つても」

「良い刑事になりたいならもう少し表情を隠すことだな」

「タカギ警部、品が良いですよ。親父なんかのべつまくなしに喫つてますから」

「長生きするよ、きっと」

「週末会うたびに運動しろって言つてます」

新人が笑つた。孝行息子で、毎週末にはグレンへ顔を見せて いる。

半年ほど前に『そらをとぶ』が解禁された。技能講習を受けるか規定数のジムバツジを獲得している必要があるが、以前のような厳格な申請と登録を乗り越える必要はなくなつた。タマムシからグレンも、今では決して遠くない。

なぜ解禁されたのかについて、世間はあまり関心を持つていらない。同盟軍が『そらをとぶ』登録者の名簿を把握していたこともあまり知られてはいないのだ。

最後の新聞を読み終え、タカギは腰を上げた。新人が新聞を覗き込む。

「キヨウさんが四天王に就任した時の。まだゴルバツトでしたよね」

「ああ。クロバツトに進化したのは二ヶ月後だった」

その時、タカギは祝いの電話をかけた。常に底の見えないキヨウがはつきり狼狽えた

のが、タカギには面白かつた。私のことを、好いてくれたようだ。思春期の少年のように、キヨウはそうこぼしたのだった。

「少々、出てくる」

「どうぞ。新聞は片付けておきましようか」

「捨ててくれ。必要なものは読んだ」

「必要?」

「世間から隔離されていた人間には、多少説明しなければいかんだろう」



長い扉に背を凭れて、タカギは腕時計を確かめた。降りだしそうな曇り空で、蒸し暑さがある。襟を少し緩め、もう一度時計を見た。

時間だ。すぐ横の門扉から、男が一人出てきた。見送りにきていた刑務官と挨拶を交わした男が、タカギを見つけて顔をしかめた。

「勘弁しろよ、おい。出所して最初にあんたを見た人間の気持ち、考えたことねえのか」

「あるさ。身が引き締まるだろう」

クリードがうんざりした表情を浮かべ、横を向いた。

「当てはあるのか？」

「世話を焼こうつてのか。罪滅ぼしならいらねえぞ」

「罪か」

「はつたりだつたんだろう？ ポケモンを盾にした尋問を避けるため、容疑者のポケモンは警察とは違う組織が管理してる。友達ダチから手紙で教えてもらつたよ」

「そうだな。お前のズバットをどうこうする権限は私にはなかつたよ。あれははつたりだ。悪かつたな」

「騙される方が悪いさ」

「騙す方が悪いだろう」

「警察の理屈ならな。俺の理屈は俺が決めるもんだろう。騙される方が悪いのさ」

本当に気にしてはいないうだつた。ロケット団内でも慕われていたというのは、あながち間違いでもなさそだ。竹を割つたような性格で、人には好まれただろう。

「親父さんのところへ帰るのか？」

「冗談言うな。どの面ツラ下げて帰れるつてんだよ」

「当てがないなら、当座の働き口ぐらい探してもいいぞ」

ダチ

「余計なお世話さ。友達が迎えに来てくれる」

「手紙のかね？」

「ああ。おつと、噂をすりやだな」

クリードが手を翳して遠くを見た。五、六人の集団が歩いてくるのが見えた。

近付いてきた集団を見て、タカギは揶揄するように振り返った。先頭が女だつたからだ。それもなかなかの美人だ。細身だが華奢ではなく、しなやかだつた。表情は理知的だが、冷たい印象はしない。庶民受けの良いモデルといったところだろうか。

「隅に置けないじやないか」

「年寄りはこれだからよ。ただの友達さ。<sup>ダチ</sup>俺の好みはもつとケツのでかい女だ」

「私、そこまで小ぶりという訳でもないですけどね」

女が自然に口を挟んだ。向き合つて、タカギは違和感を覚えた。女の服装。ジーンズにブラウスはそこまで奇抜ではないが、黒のタートルネックインナーが首もとを覆つていた。それから右手にだけ、これも黒の皮手袋をしている。

タカギの視線に気付いたのか、女がちよつと笑つてインナーを捲つた。変色した皮膚が覗いた。

「以前、火傷を負いまして。首から右手にかけて跡が見苦しいのこうやつて『いや、すまないね。職業柄、つい観察から入つてしまふ』

「気にはしません、タカギ警部」

「私を知っているのか。会つたことがあるかな」

「ゲームコーナーで。私が面接を受けに行つた時に、キヨウさんと一緒に見えられました」

「あの時の。結果は？」

「残念ながら。後の事件を思えば落ちて良かつたかもしません」

話しながら、タカギはちょっと身構えた。クリードの友人がゲームコーナーに縁のある人間だったのだ。偶然ということはないだろう。

タカギが警戒しても、女は自然体に微笑んだままだつた。女が相当な手練れらしいことに、タカギは初めて気付いた。

「君、ジムバッジは」

「一応全て。私というよりも、ポケモン達の力ですが」

「八つか。大したものだ。どんなポケモンを使うんだね？」

「サンドパンとペルシアンを。ペルシアンの方は、トレーナーと離れ離れになつてしまつたのを私が勝手に預かつている形ですけれど」

ペルシアンは、サカキが使つていたポケモンだ。そしてサンドパンも、タカギには覚えがあつた。オツキミ山での戦い。ただ、あのトレーナーはそこまでの遣い手ではな

かつた筈だ。

なにかがあつた。そうとしか思えなかつた。なにかが、あのトレーナーを大きく変えた。

「まあ、そういう訳でだ。変に気を遣つて貰う必要はないぜ、老いぼれ犬」  
クリードが前に出て、彼女の斜め後ろに控えた。さらに後ろの男達は既にタカギから目を切り、歩き出そうとしている。

「どこへ行くのか訊いても？」

「ジョウトへ行こうかと思つています。観光で」

「ジョウトか」

「予定もありますので、それでは」

女がタカギに背を向けようとした。口ケツト団残党。ほぼ間違いないだろう。それがジョウトへ行つて何をするのかも、多少は想像がついた。サカキが生きて身を隠しているとしたら、ジョウトのどこかだろう。

彼女達は、サカキを探すつもりなのか。既に夢破れたサカキを追おうというのだろうか。

「苦しむぞ、君は」

女が足を止め、振り返つた。その表情にはちよつとした驚きと、どこか納得している

感じがあつた。

「以前、同じ事を言わされました。恩人と言つていい人から」

「その人は、他には」

「なにも。やれとも、止めろとも言われませんでした」

「どうか。厳しい人だな」

「優しい人でもありました」

女がタカギを見つめた。止めるべきか。しばらく考えて、タカギは頭を振った。今止めるに足る理由はない。そして彼女達が何かを起こすとしたら、それはジョウトでだろう。ならば、ジョウトの人間が止めるべきだつた。カントーの事件で、レッドが戦つたように。

「もう一つ、その恩人から言われたことがあります。最後まで、勝負を見続けなさいと」

そう言つて女は頭を下げ、タカギに背を向けた。その背が視界から消えるまでタカギは見送り、それから煙草を取り出した。雨が降りそだつた。ライターを開き、フリンチホイールを擦る。火花は散るが、火は点かなかつた。

サカキそのものが夢。ゲームコーナーの店長がそう言つていたのが、タカギの脳裏に甦つた。

「サカキという、夢か」

擦る。火は点かない。ぽつりぽつりと、雨が肩を叩いた。

降りだした雨の中、通行人が走り去っていく。タカギはただひたすらに、ライターを擦つた。ホイールが、寂しげに空回つた。